

---

**魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃**

sufia

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃

### 【Nコード】

N8576P

### 【作者名】

S u f f i a

### 【あらすじ】

時空管理局陸士225部隊

管理局最強の男がいる部隊である

その部隊で日々訓練に明け暮れる一人の青年・天童綾人

そんな彼に新部隊への誘いが来る。

原作にオリジナル主人公を交えた二次小説ですので、苦手な方はリターンを推奨します。

後かかなりの駄文ですが、感想、意見を募集しています

## プロローグ（前書き）

始めまして！ あけましておめでとございます！  
初投稿ですが、温かい目で見守ってください！  
今回はプロローグになります。

## プロローグ

プロローグ 陸士部隊の新米陸士

新暦0075年 3月 時空管理局地上部隊陸士225隊にて・・・

「よし！今日はここまで！！ 明日は朝から模擬戦を行う。各自、それに備えておけ！」

225隊隊長兼指導官でもある男、マーク・グリードの声が響く

「はい！！」

その声に返事を返す数人の部隊員の声

「よし、解散！！」

その合図とともに隊舎へと引き上げていく隊員達

「ああ、綾人！！ 少し待て」

「はい？」

名前を呼ばれ振り向く一人の青年 てんどうあやと 天童綾人。225隊に配属して  
もうすぐ一年になる

「何でしょうか、隊長？」

「お前に大事な話がある、着替えたら隊長室まで来るように。以上だ」

「? 了解しました」

わけも分からないまま返事をする綾人

(何だろう・・・俺・・・何かしたか?)

突然の呼び出しに若干不安になる

その後シャワーを浴び、制服に着替えた後、綾人は隊長室にやってきた

「隊長、綾人ですが・・・」

ノックしながら呼びかける

「ああ、入れ」

中からマークが返事をする

「はい、失礼します」

部屋に入ると、そこにはマークと見慣れない女性がいた。

(うわぁ・・・綺麗な人だなぁ・・・)

思わず見惚れる綾人

「? どないしたん?」

女性が首を傾げながら聞く

「えっ！？ あっ……いえ……」

しどろもどろになりながら答える綾人

「初めまして、地上本部所属 八神<sup>やがみ</sup>はやて二等陸佐、言います」

ニツコリと笑いながら敬礼をするはやて

それが、天童綾人が歩む道の第一歩となる。

## プロローグ（後書き）

どうも！

さすがプロローグ、短い！

次回からは少し？長くなりますよ

では次回予告

はやてから聞かされたのは新部隊の設立。出向を決断した綾人ははやてからある人物達を紹介される・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第一話 「  
新部隊への誘い」

次回、あの人達が登場です！

## 第一話 新部隊への誘い（前書き）

早くも第一話です。

誤字・脱字等の指摘もお待ちしています。



## 第一話 新部隊への誘い

### 第一話 新部隊への誘い

「八神……はやて……?」

聞き覚えのある名前に首を傾げながらはやてを見つめる

「綾人、お前も自己紹介しないか」

「は！ し、失礼しました！！ 天童綾人二等陸士であります！！」

マークに注意され慌てて自己紹介し、敬礼する  
それを見てはやてはクスクスと笑っている

「さて、お互い自己紹介したところで本題に入ろうか」

マークが二人に座るように促す  
そして、はやてがここにいる理由を説明した

「私はずっと地上本部でロストロギア関連の捜査をしてたんやけど、本局の対応は遅くて取り返しのつかん事態も多々あってな、せやからロストロギア専任の部隊を作ろうと思って、今人材を集めてるんよ」

「はあ……」

はやての説明はよくわかった。しかし、同時にわからない部分もある。

「しかし、何故自分にその話を？」

綾人が当然の疑問をぶつける

「ああ、それはな？ 君にもウチの部隊に来てもらわれへんかなと思ってるな」

はやてがさらっと説明する

「じ、自分がですか！？」

思わず立ち上がる綾人

「そうや、私は、綾人君はいい人材になると思ってる。私、結構人を見る目あるんよ？」

はやてが自信満々に笑う

「こちらとしては綾人の抜けるのは惜しいが、お前の意見を聞いて判断したくてな」

マークが腕を組みながら説明する

(新しい部隊……)

考え込む綾人、それを見たはやては

「まあ、返事はすぐでなくてもええよ？ そうやな……再来週までに返事してくれたらええよ」

「再来週……」

壁のカレンダーを見る

(今月いっぱいか……)

「わかりました。それまでに答えを出します」

「うん、待ってるよ」

そのままマークに振り向き

「それじゃ部隊長、私はこれで失礼させていただきます」

「ああ、わざわざすまないな」

マークが右手を挙げながら言う

「いえいえ、私も話を聞いてもらえてよかったです。それじゃあ失礼します」

部屋を出て行くはやて

「ああ、お疲れ」

「お疲れ様です!!」

マークと綾人が敬礼で送る

はやてが出て行ったドアを見つめる綾人

「はあ〜緊張した〜」

うなだれる綾人

そんな綾人を少し笑いながら見つめるマーク

「ははは、で、どうする？行くか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

マークの質問に黙り込む綾人

「さつきも言ったが、判断はお前に任せる。どちらを選んでもそれを尊重しよう」

「隊長・・・・・・・・」

「部隊としては確かに惜しいが、私個人の意見としてはちょうどいいかもしれないと思っている」

「え・・・・・・・・？」

その言葉に驚く綾人

「息子を独り立ちさせるきっかけになるかもしれないからな」

そう言つて綾人を見つめるマーク

「自分の夢を見つけてこい」

「自分の・・・・・・・・夢・・・・・・・・」

「そうだ・・・・・・・・、まあ、後は自分で考えてみる。私からは以上だ、下がっていい」

「・・・・・・・・はい、・・・・・・・・失礼します・・・・・・・・父さん」

しばらくぶりに使う言葉とともに隊長室をあとにする綾人

部屋に戻り、一人考える綾人

(自分の夢・・・・・・・・・・か・・・・・・・・・・)

部屋の隅で座禅を組む

(毎日がむしやらで、あまり考えなかったな)

そんな綾人の手の中には、蒼い宝石が光っていた

・・・・・・・・数分後・・・・・・・・

(やって・・・・・・・・みるか・・・・・・・・)

そつと目を開く綾人

(よし!そつと決まれば!)

翌日、綾人は外出届を提出し地上本部へ向かった。自分の答えを伝えるために・・・

新暦0075年 4月某日 地上本部にて・・・・・・・・

「えっと・・・・・・・・第五会議室は・・・・・・・・と」

はやてに「紹介したい人達がいる」と聞き地上本部にやってきてい  
る綾人だったのだが

「うーん・・・・・・・・迷ったかな??」

認めたくない事実を口にする綾人、拳句

「本部、あんまり来ないからなあ・・・」

と、自分に言い訳する始末

「あれ？ どうしたのかな？」

うんうん唸っていると、ふいに後ろから話しかけられる

「はい？」

振り返るとそこには

白い制服にブルーのスカート、栗色の髪を片側で結ってサイドポニーにしている女性がなにやら不思議そうに立っていた

（美人だ・・・）

思わず見とれる綾人

「？ 何？」

女性が首をかしげる

「ああ・・・いえ・・・第五会議室に行きたいんですが・・・」

少し焦りながら目的地を言う

「第五会議室？ ああ、はやてちゃんに用かな？」

「はやてちゃん？」

聞き返す綾人だが

「第五会議室なら私も行くところだから一緒に行こうか、こっちはよ、着いてきて？」

そう言うと歩き出す女性

「あ……！ お願いします」

お礼を言いながら着いて行こうとする綾人に

「うん！！」

にっこりと笑顔を返す女性

そして案内されて来た部屋のプレートを見ると『第五会議室』と書かれていた自分のいた場所を思い出したのか

（見事に正反対だな）

と思った綾人

すると

「見事に正反対だったね？」

と、隣の女性は少し笑いながらそう言ってきた

綾人は心を読まれた気がして少し恥ずかしくなり、目を逸らした女性はフツツと笑うと部屋に入っただけだった

「あっ・・・今、いいかな？」

「今、説明が終わったところや」

中から聞き覚えのある声が聞こえる

「？ どうしたの？ 入っただけだよ？」

女性に呼びかけられる

「あ・・・はい・・・」

部屋に入るとそこには

短い青い髪の女の子とオレンジ色のツインテールの女の子が二人、  
そしてはやての隣には金髪のロングヘアーの女性と30cmほどの  
小さな女の子がいた

「ああ、綾人君か悪いけど少しだけ待っててもらえるかな？ すぐ  
終わるから、隣の部屋で待っていてくれるか？」

と、ドアを指差すはやて

「あ・・・はい・・・わかりました」

綾人は軽く会釈だけして隣の部屋に向かった

そして数分後

「いやいや、待たしてもうてごめんなあ」



はやてがやってくる

「いえ…大丈夫です」

綾人が答える、はやてのほかには、サイドポニーの女性と金髪の女性もいた

「さて！ 来てもらったのはこの二人に会ってもらおうと思てな」

女性二人が前に出る

はやては女性二人の間に立ち

「まず、ロストロギアの捜査全般の指揮にあたってもらおう『フェイト・テスタロッサ・ハラウン執務官』」

「よろしく」

前に出て挨拶をするフェイトと呼ばれた女性

「そして、綾人君含め前線メンバーの戦闘指導を担当してもらおう『高町なのは一等空尉』や」

「よろしくね！」

なのはと呼ばれた女性もニッコリと笑い挨拶する

「そんでこの子は、私の補佐官でもある『リインフォース？（ツヴアイ）曹長』」

「よろしくです〜！」

ふよふよ浮きながら手を挙げて挨拶するリインフォース？

そして綾人は二人の名前を自分の中で再確認していた

「『フェイト・テストロツサ・ハラオウン』…『高町なのは』…  
つて、本局のダブルエース!？」

驚きのあまり声を挙げる綾人

「そんな驚くこともないと思うけどなあ」

はやては苦笑いしながら言う

「いやいやいや!だって本局のダブルエースですよ!？普通驚きますよ!？」

焦り気味に言う綾人

そんな綾人をよそにはやては続ける

「フェイト執務官はずっとロストログリア関連の捜査をしているし、  
高町一等空尉は新人達に早く育ってもらおう思ったからな、どっち  
も適任やる?」

それを聞いた綾人は「はあ……」と、返すしかなかった

その後、はやてから機動六課についての詳しい詳細を聞いた

「綾人君の所属はフェイトちゃんが隊長を勤める『ライトニング分  
隊』や」

はやてがそう説明する

「フェイトさんの部隊…」

ちなみに、説明の前になのはから名前で呼んでいいと言われたので、『なのはさん』、『フェイトさん』、『はやてさん』と呼ぶようにした綾人

さらに、はやてからなのはとフェイトの二人は昔からの友達という話も聞いた

「君の戦闘スタイルはライトニング向けやからな」

はやてがそう続ける

「なるほど」

なんとなく納得する綾人

「ところで、自分以外にもいるんですよね？」

綾人がそう聞くと

「うん。私と、後副隊長と私が面倒を見てる二人の子の、合計5人だよ」

フェイトが答える

「あと、私が隊長を勤める『スターズ分隊』。こっちは私と副隊長、新人の子二人の計4人だよ」

なのはが説明する

「あと私が指揮を執る『ロングアーチ隊』やね」

はやても続ける

「後、綾人君たちは『フォワードチーム』として一緒に訓練していくから」

「わかりました」

なのはの説明に綾人も頷く

さらに、詳しく説明を受ける

そして数分後

「と、まあおおまかな説明はこんなところかな？」

はやてがなのはたちに聞く

「そうだね、どうかな？聞いた率直な感想は」

なのはが聞いてくる

「そうですね、すごくやりがいがあると思いました」

綾人も真っ直ぐに答える

「そっか」

なのはが嬉しそうに笑うフェイトとはやても同様に笑っていた

「えっと、まだ時間あるかな？」

時計を見ながらなのはが聞いてきた

「？ はあ、大丈夫ですけど」

後はマークに報告と引き継ぎ程度の仕事しかないのでそう答える

「じゃあ、後でデバイス持って、ここに来てくれるかな？」

そういつて目的地を書いた紙を渡してくるなのは

「？ わかりました」

自分のデバイス『バルムンク』を持って指定された場所に来た綾人

「何をするんだろう？」

周りには瓦礫の山、まさに廃墟だった

「おまたせ！」

声に振り返ると

「なのはさん……フェイトさん……」

二人が立っていた……

## 第一話 新部隊への誘い（後書き）

どうも！

第一話でした！長くなりましたね〜

今回、なのはさんとフェイトさんが登場し『あの二人』もちよこつと登場でした。

それでは次回予告

なのはは綾人を呼び出し、ある提案をする。綾人はその提案に・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第二話  
「  
エースとの模擬戦、真紅の瞳」

次回、初戦闘！綾人の実力の一端が現れる！？

**第二話 エースとの模擬戦、真紅の瞳（前書き）**

さあ、今回はタイトル通りなのはさんと模擬戦です！  
果たして結果は！？

## 第二話 エースとの模擬戦、真紅の瞳

### 第二話 エースとの模擬戦、真紅の瞳

「あの…ここで何を？」

なのはに聞く。そしてなのはは…

「ここで私と、模擬戦しようか？」

「も、模擬戦！…!?」

さらっと言っなのはに驚き聞き返す綾人

「そう、模擬戦。君の戦い方ちゃんと見ておきたくて。それを参考にして教導プランをたてるからね」

なのはがそう説明する

「はぁ…そういうことなら…わかりました」

了承する綾人

「うん！ じゃあフェイトちゃん？ 審判よろしくね！」

「うん、なのは」

フェイトが頷き離れる



バリアジャケットを展開するのは  
手には長年の相棒、杖型デバイスの『レイジングハート』  
綾人もバリアジャケットを展開する  
両手に二本の刀『バルムンク』が握られる

「それじゃあ・・・行くよお・・・!」

レイジングハートを構えるなのは

「はい!! よろしくお願ひします!!!」

綾人も構える

(『エース・オブ・エース』に適うはずないけど・・・やるからには全力を出す!! それが相手への礼儀!!)

綾人の目つきが変わり真っ直ぐなのはを見つめる  
その目を見たなのはとフェイトは

「へえ・・・」

「あ・・・」

<いい目だね>

なのはが念話でフェイトに語りかける

<うん・・・頼もしいね>

フェイトも笑顔で答える

「それじゃ、ルールは攻撃がヒットするか、五分が経過する。これ

でいい？」

フェイトが二人を見て確認する

「うん！」 「はい！」

二人同時に答える

そしてフェイトの手が拳がり・・・

「それじゃ・・・初め・・・！！！」

開始の言葉が拳がる！！

∪ Accel Shooter ∪

「アクセル・・・」

なのはの周りに無数のスフィアが形成される

「シューーーー！！！！」

スフィアが綾人に向かい飛んでいく

「はっ！」

綾人が駆け出す

「はあ！」

スフィアを叩き落しながら進んでいく

「やるね・・・でもまだまだ!」

なのはのスフィアが増える

(増えた! でもこれくらいなら!!)

なおも前進する綾人

そしてジリジリとなのはとの距離をつめる

(今だ!)

近くのビルの壁を蹴り駆け上がる綾人

「!!!」

なのはが右手を翳し構える

「はあ!!!!!」

刃を振り下ろす

しかし、なのはのバリアに弾かれバランスを崩す

「シューーート!!!」

弾いたと同時になのはのスフィアが綾人に飛んでいく

「うわぁ!?! くそ!!!」

綾人は体を回転させスフィアを叩き落しながら降下していく

「よく回避したね」

なのはが少し笑顔で話しかける

「まだまだですよ！　なのはさん！！」

綾人も笑顔を返す

その後も、なのはのシューターをすべて叩き落しながら隙を見つけては攻撃をする綾人だが、一向に決まらない

そして、そんな二人の模擬戦もあと一分を切った

「すごいね、想像以上だよ」

「はぁ・・・はぁ・・・どうも・・・」

肩で息をする綾人とまだまだ余裕なのはがそれを見て思わず綾人は

（この人は化け物か？）

なんて思ってしまった

「そろそろ、終わりにしようか？」

なのはが構える

（ヤバイな・・・これ以上は・・・さすがに・・・）

綾人は限界ギリギリだった

(それなら・・・)

目を閉じ、腕を交差させバルムンクを腰に据える

(?・・・動きが)

(・・・止まった?)

なのはとフェイトがそう思った瞬間

「・・・っ!!」

綾人が動き出したと思った瞬間

「・・・え?」

なのはの目の前にいた

「はあ!!!!」

「っ!?!?」

なのはが防御体制を取るより早く

「疾風!! 一閃!!!!」

綾人の攻撃が届く

「きゃあ!!!!」

シールドが間に合わず、レイジングハートで受け止めるがあまりの衝撃によるけるのは

「（今だ!!!）翔破・・・」

二刀を振り上げ

「蒼天斬!!!!!!」

一気に振り下ろす

しかし・・・

「Barrier Protection」

「えっ？」

綾人の攻撃はなのには届かなかった

「惜しかったね、あともう一步足りなかったね」

綾人の一撃をシールドで防いだなのは。そして

「Restrict Lock」

「っ!! バインド!？」

綾人の手をバインドで捕縛するなのは

綾人は剣を振り下ろした状態で止まっている

「君・・・強いね・・・鍛え甲斐があるよ・・・」

レイジングハートを構えるなのは

「だから・・・私も全力で・・・」

レイジングハートの前に魔力が収束されていく

☆Star Light Breaker

「スターライトお・・・」

収束された魔力の塊が膨れ上がる

「っ!!!!!?」

その様子に驚愕する綾人

「ブレイカーーーーーー!!!!!!!!!!!!」

桃色の砲撃が真っ直ぐ綾人に向かってくる

「うわぁーーーー!!!!!!」

回避できず、綾人は飲み込まれた・・・

時間は残り二秒だった・・・

「・・・ん・・・」

「あ・・・気がついた?」

「フェイト・・・さん・・・?」

目を開けるとフェイトの顔があった

「そうか・・・俺・・・なのはさんの砲撃で・・・」

徐々に記憶がはっきりしていく

「うん・・・威力は抑えてたから、怪我はないとおもっけど・・・  
よっぽど疲れたんだね、よく眠ってたよ？」

「えっと・・・どれくらいですか？」

外が少し暗くなっていたので聞いてみる

「二時間位・・・かな」

フェイトが自分の腕時計で確認して教える

「二時間・・・それで・・・ここは？」

辺りを見渡しながら聞く

「うん、医務室だよ」

そんな会話をしていると誰かが入ってきた

「ああ、気がついたんだ？」

「なのはさん・・・」

入ってきたのはなのはだった

「大丈夫？」



なのはが椅子に座りながら聞いてくる

「はい。大丈夫です」

起き上がりながら答える

「でも、すごいね、綾人君」

なのはが感心しながら言う

「うん、なのはを相手に五分間戦えるなんて、なかなかいいよ？」

フェイトも頷く

「そんな・・・たまたまですよ」

少し照れながら頬をポリポリと掻く綾人

「そんなことないよ？ 特に最後の攻撃なんかビックリしたもん」

「うん、私も」

「最後の・・・ああ・・・」

二人に言われて思い出す

「あれが君の能力スキル？」

「まあ・・・そうですね」

自分の能力について説明する綾人

自分のいる位置から目的の位置まで一直線に移動する能力  
その移動には魔力を使わずに移動できるため相手には軌道が見えない  
目視できる範囲なら空中にも移動できる

などの利点を挙げていく

「へえ・・・便利だね？」

なのはが感心しているとフェイトも「うん」と答える

「ただ、弱点もあるんです」

綾人が補足する

「「弱点？」」

二人同時に聞いてくる

軌道は見えなくても一直線であることは変わらない  
移動中はなんの行動も出来ない

目的地までに障害物があるときにそれらに当たると融合爆発を起こす  
などの弱点を挙げていく

「・・・」

「爆発・・・」

最後の弱点を聞いて少し顔の青い二人

「ええ。だから何処でも使えるわけじゃないんです」

その後、お互いに今回の模擬戦の感想を言い合つうちに時間が過ぎていった……

「あ……もうこんな時間だ……」

フェイトが時計を確認して言う

「ほんとだ、早いねえ」

なのはも時計を見る

「すみません、長々と」

頭を下げる綾人

「いいよ、こっちも話し込んだじゃったし」

「うん……気にしないで？」

二人が笑顔で答える

「じゃあ、俺はこれで」

立ち上がる綾人

「あ……大丈夫？」

フェイトが傍に寄る

「ええ、大丈夫です。丈夫に出来てますから」

それを手で制す

「それじゃ、今日はご苦労様！」

なのはが労う

「はい、こちらこそありがとうございます！」

二人に礼を言う

「これからよろしくね？」

「よろしく」

二人が笑顔で言う

「はい！ よろしくお願ひします！..！」

そう言つて綾人は部屋を出て行つた...

【なのはside】

綾人が出て行つたドアを見つめるなのはとフェイト

「頼もしい子・・・みたいだね？ なのは？」

なのはに話しかけるフェイト

「……………」

返事をしないのは

「……………なのは？」

肩に触れて再度呼びかけるフェイト

「え!?! あっ……………どうしたの? フェイトちゃん?」

弾かれるように返事をするなのは

「……………うん、綾人……………頼もしい子だねって……………どうかしたの?」

「う、ううん! なんでもないよ!? う、うん! 頼もしい子だよね!」

不自然な受け答えなのは

(……………変なのは……………)

首をかしげるフェイト

(……………最後の……………綾人君の……………攻撃)

目を閉じ、その一瞬を思い出すのは

(あのとときの綾人君の・・・目・・・)

戦う前の綾人の目は黒かった・・・はずだった

(確かに・・・紅かったな・・・)

最後の一撃の時の綾人の瞳は・・・真紅に輝いていた・・・

【綾人 side】

「うーん・・・すごい一日だったなあ・・・」

今日一日を振り返ってみる綾人

「まさか『エース・オブ・エース』と模擬戦出来るなんてなあ・・・」

不意に立ち止まる

「あと一步・・・届かなかったな・・・」

空に手を伸ばし、最後の一撃を放つ時のなのはの顔を思い出す

「キレイな笑顔だったな・・・」

思わず顔が赤くなる

(違う違う!!)

ブンブン頭を振る

「でも・・・」

拳を握り締める

「あの人の強さは・・・本物だ・・・あの強さなら・・・もっと強くなれるかもしれない！」

握った拳を突き上げる

「よし！！ 頑張ろう！！！」

綾人は決意を込めた目で誓った

## 第二話 エースとの模擬戦、真紅の瞳（後書き）

どうも！

結果はなのはさんの勝利でした！

まあ、いきなり勝っちゃうのもどうかとも思ったので・・・

でもまあ、主人公はなのはさんともまともにも戦える強さは持っているということ覚えておいて貰えると幸いです

にしても綾人君の瞬間移動・・・使い物になるのかな・・・？ 不安ですね・・・

では次回予告！

ついに始動する機動六課

集まる新人達

綾人達フォワード陣はその日のうちになのはの教導を受けることに・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第三話 「  
出会い、そして初訓練」

次回から本編に入ります！

あ、遊戯王デュエルモンスターズGXの連載も始めました！そちらもよければ呼んでくださいね？



**第三話 出会い、そして初訓練（前書き）**

いよいよ本編に突入です！

### 第三話 出会い、そして初訓練

第三話 出会い、そして初訓練

数日後・・・機動六課隊舎前にて

「ここか・・・」

入り口に立ち隊舎を見上げる綾人

「さて・・・行くか・・・」

隊舎内へ入っていく

(ん?・・・あの二人は・・・)

ドアをくぐりロビーに入ったところで小さな男の子と女の子が話していた

(子供?・・・もしかして・・・)

二人に近づき声をかける

「えっと・・・エリオ・モンディアル君と、キャロ・ル・ルシエさん?」

「えっ?」

二人が少し驚いて綾人を見る

「初めまして、今日から君たちと同じでライティング隊に配属される天童綾人二等陸士だ」

二人に自己紹介をする

二人も慌てたように

「あっ……エ、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「お、同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！」

と、自己紹介し、

「「よろしくお願いします!!」「」

二人揃って敬礼をする

「ああ、よろしく」

綾人も敬礼を返す

「あ、あの！ 天童陸士!!」

「『綾人』でいいよ、階級も言わなくていいし」

エリオに軽く注意する

「あ……じゃあ、綾人さん！」

「うん、何？」

「どうして、僕等の名前を？」

エリオが聞いてくる横でキャロも頷いている

「ああ・・・フェイトさんに聞いててね」  
「フェイトさんに？」

キャラが首をかしげる

「うん、少し前に、六課の説明受けてるときに二人のことも聞いたんだよ」

「へえ・・・」

二人が声を揃えて納得する

(なんか・・・かわいいな・・・)

そんな二人に少しだけ癒される綾人だった・・・

「まあ、とりあえず、これからよろしくな！二人とも！！」

二人に笑いかける

「はいつ！！」

二人が元気に返事をする

そして、三人はしばらく雑談をしていた

「あれ？ ねえ、ティア！ あの人・・・」

青髪の女の子がロビーで雑談している三人の一人を指差しながらパ  
ートナーに話しかける

「なによ、スバル？・・・あつ！」

突然何を言い出すのかと思いつながら指差す方を見、驚きの声を挙げ  
る橙色のツインテールの女の子

「ん？」

近くで驚きの声に気づき振り向いて見ると、そこには見覚えのある  
二人の女の子がいた

「確か、俺が地上本部に行ったときにはやてさんと一緒にいた？」

二人に確認する

「うん！ あなたも六課の人だったんだ！」

青髪の女の子が笑顔で答える

「ああ、天童綾人だ。よろしく！・・・えっと」

「あつ！あたし、スバル・ナカジマ！ よろしくね！ それで、こ  
つちが・・・」

スバルが隣の女の子を紹介しようとする

「ティアナ・ランスターよ、よろしく」

スバルの少し前に出て自己紹介をするティアナ

「ああ、よろしく」

その後、エリオとキャロの自己紹介を済ませた

「じゃあ、フォワードチームはこれで全員ってことかな？」

「そうね。じゃあお互いの経験とかの確認。やっときましようか」

ティアナの意見に全員が頷き、分隊・スキル・コールサイン等の確認をした

数分後・・・はやての開設の挨拶の後

「もう、それぞれ自己紹介はすんでるかな？」

なのはにつれられ歩いているところになのはが質問してくる

「えっと・・・」

「お互いの名前、経験、分隊、スキルの確認は済んでいます」

口ごもったスバルの代わりにティアナが答える

「そう、じゃあさっそく訓練に入りたいんだけど、いいかな？」

なのはが確認してくる

「・・・・はい！」「」「」

返事を返す五人

「じゃあ、それぞれ着替えてきてくれるかな？」

なのはに指定された更衣室でエリオと着替えている綾人

「なあ、エリオ？」

「はい？」

ふいにエリオに声をかける

「エリオって、近代ベルカ式だよな？」

「はい、そうですけど・・・それが、なにか？」

訳がわからなさそうな顔のエリオ

「よかったら、さ、今度模擬戦してみないか？」

「も、模擬戦・・・ですか？」

突然の提案に少し戸惑うエリオ

「ああ、前の部隊の人達も結構強かったんだけど、お前もなかなか強そうだからな、どうだ？」

「いえ！ 僕なんて・・・まだまだです！」

顔の前で手を振りながら否定するエリオ

「それは、俺も同じ！ だから、一緒に強くなる為にさ、いいだろ？」

少しニヤリと笑いながら言う綾人

「い、いいんですか？」

エリオが少し戸惑いながら聞いてくる

「聞いているの、俺なんだけどな・・・」

呆れながら頬をポリポリ搔く綾人

「えっと・・・じゃあ・・・お願いします！」

両手の拳を握り、澄んだ瞳で綾人をお願いするエリオ

「ああ！　こちらこそ！」

そう言いながら、右手を差し出す綾人

エリオもその手を握り二人で握手をかわす

「さて、着替えも済んだし、行くか？　エリオ」

「はい！」

エリオと二人並んで更衣室を出て行くと、外にはすでに女性陣が集まっていた

「おまたせ」

「おまたせしました！」

三人に声をかける男二人



「遅いわよ、何してたのよ？」

ジト目で睨むティアナ

「悪い悪い、ちょっとエリオと拳で友情を深めてた」

苦笑いで答える綾人

「拳？」

キャラが首をかしげる

「ああ、？まいった？って言うまで殴り合っただよ

「ええ！！」

綾人の嘘に本気で驚くキャラ  
なんて純真なんですよ・・・

「・・・冗談だよ」

さすがに罪悪感が出てきて正直に話す綾人

「何バカやってんのよ」

呆れながら見つめるティアナ

「まあまあティア、みんな揃ったし行こうよ？」

スバルが促す

「そうですね」

キャラロが賛成する

「キユクル〜」

キャラロの横から聞きなれない鳴き声が聞こえるので見てみると、そこには小さな竜が飛んでいた

「この竜は？」

キャラロに聞いてみる

「はい、私の友達の竜です！名前はフリードリヒ、フリードって呼んでください」

「キユクル〜」

キャラロに答えるように鳴くフリード

「わかった、よろしくな、フリード。俺の名前は天童綾人だ」

フリードに挨拶をする綾人

「キユクル〜」

フリードも答える

「ほら！挨拶が済んだらもう行くわよ！」

ティアナが急かす

「ああ、悪い。じゃあ行こうか！」

五人は走り出した

その後なのはのもとに集合し、各自のデバイスが返却された

「今返したデバイスには、データ記録用のチップが入ってるから、ちよつとだけ、大切に扱ってね？ それから、メカニックのシャーリーから、一言」

なのはに名前を呼ばれ、前に出る眼鏡の女性

「えー、メカニックデザイナー兼機動六課通信主任のシャリオ・フイニーノ一等陸士です。みんなは『シャーリー』って呼ぶので、よかったですそう呼んでね？」

笑顔で自己紹介するシャリオことシャーリー

「みんなのデバイスを改良したり調整したりもするので、時々訓練も見せてもらったりします。あつ、デバイスについての相談とかあったら、遠慮なく言ってね？」

「……はい」「」「」

シャーリーに返事を返す五人

「じゃあ、早速訓練に入るうか？」

なのはがそう言つと皆不思議そんな顔をする

「ここで・・・ですか？」

「見たところ何も無いんですけど？」

ティアナと綾人が見回しながら言う

「クスツ、シャーリー？」

「はい！」

なのはに呼ばれ返事を返しコンソールを展開するシャーリー

「機動六課自慢の訓練スペース、なのはさん完全監修の陸戦用空間  
シュミレーター、ステージセット！」

言い終り、パネルをタッチした瞬間、海に浮かんでいたタイルが光り、街が浮かび上がった

「すつ・・・げ・・・」

驚きでそれぐらいしか言えない

「にやはは、それじゃあ、移動しようか？」

なのはに連れられ訓練場へ移動する

「すごいな・・・本物だ・・・」

街を模したシュミレーターの中に入り、近くのビルに触れるとコン

クリートがしっかりと再現されていた

「本当ですね・・・」

「すごい!」

エリオ、スバルも同意する

「みんな、聞こえる?」

なのはの声が聞こえてくる

「早速ターゲット出していこうか。まずは、軽く10体から」

そっついながらシャーリーを見るなのは

「動作レベルC、攻撃制御Dってところですかね?」

「うん」

コンソールを叩きながらなのはに確認するシャーリーに頷いて返す  
なのは

「私たちの仕事は、搜索指定ロストログアの保守管理、その目的の  
為に私たちが戦う相手になるのは・・・これ!」

綾人たちの前に魔方陣が現れ、その中から大きいカプセルの形をし  
た青色の機械人形が現れた

「自立行動型の魔道機械、これは近づくと攻撃してくるタイプね。  
攻撃は結構鋭いよ?」

シャーリーがそう説明する

「それでは、第一回模擬戦訓練。ミッションの目的は逃走するターゲットの破壊または捕獲、十五分以内に！」

そのまま訓練に移行するのは

「「「「はい」「」「」」

五人がそれぞれに構える

「それでは……」

「ミッション……」

「「スタート!!」「」

なのはとシャーリーが同時に合図を出し、第一回模擬戦が始まった

「うおおおおおりやああああ!!」

スバルがスフィアをガジェットに向かって飛ばすが、ガジェットはいとも簡単に回避して行った

「なにこれ!? 動き早!!」

驚きながらガジェットを追うスバル

ガジェットの向かう先にはエリオがストラダを持って待ち構えていた

「はあああああ!!」

エリオがガジェットに向かって進む  
ガジェットもエリオを攻撃するがエリオはその攻撃を回避しながら  
近くのビルの壁を蹴りガジェットに斬撃を飛ばすが、またしてもガ  
ジエツトは攻撃を回避した

「ダメだ、フワフワ避けられて当たらない・・・」

エリオもすかさずガジエツトを追撃していった

「次は、俺か・・・」

近づいてくるガジエツトを見据える綾人

「行くぞ！」

ガジエツトに突っ込む綾人

ガジエツトは綾人に向かって攻撃を始めた

「うおおおおお！」

砲撃を叩き落しながら突撃する綾人

「はあ！！！」

ガジエツトに斬撃を繰り返すが、すべて回避されてしまった

「くそ！ 呼吸がつかめない！！！」

何時もは生き物相手に戦っているためガジエツトの機械特有の動作

に翻弄される綾人

<ちよつと！ 前衛三人、分散しすぎ！ 少しは後ろのことも考えて！>

ティアナが念話で怒鳴る

「ごめん！」「すみません！」「悪い！」

三人が同時に謝る

近くのビルの屋上にティアナとキャロがいた

ティアナはキャロに威力強化を施された状態でガジェットに照準を合わせ撃った

しかし、ガジェットに当たる瞬間スフィアが消滅した

「バリア!?!」

「違う。あれは、フィールド系？」

驚いてるスバルと分析する綾人

そこに、なのはからの追加説明が入る

「ガジェットドローンには、ちよつと厄介な性質があるの、攻撃魔力を打ち消す『AMF』アンチマジックフィールド。普通の射撃は通じないし……」

「ああ、もう！」

なのはの説明の最中にスバルが焦れてウイングロードを展開しガジェットに突っ込んでいく

「それにAMFを全開にされると……」



ガジェットのバリアが拡大しウイングロードが消えていった

「え!?! うわわわ! どうなって!?! あ、あああああ!?!」

加速したまま近くのビルに突っ込んでいったスバル

「飛翔や足場作り、移動系魔法の発動も困難になる」

「なんつー厄介な・・・」

「まあ、訓練所ではみんなのデバイスにちょっと工夫をして擬似的に再現してるだけなんだけどね。でも、現物からデータ取ってるから、かなり本物に近いよ?」

シャーリーがそう付け加える

「対抗する方法は、いくつかあるよ。どうすればいいか、すばやく考えて、すばやく動いて」

「さて・・・どうするか・・・」

なのはの説明が終わり綾人がそう考えていると

<エリオ、綾人、あいつら逃がさないように足止めできる?>

スバルから念話が入る

「えっと・・・?」

「出来なくはないが・・・」

少し戸惑いながらも答えるのエリオと綾人

<ティアが何か考えてるみたいだから、時間稼ぎ!>

「やってみます！」

「了解！」

スバルとティアナを信じ、走り出す二人

「エリオ！ 先行して待ってる！！」

エリオに指示を出す綾人

「はい！！」

頷き、ビルの連絡橋に待機するエリオ

「スバル！ 二人で後ろから追跡する！！」

「うん！」

スバルと並んでガジェットを追いかけ、ガジェットたちを誘導しながら追いかける

<エリオ！ 準備いいか？>

「はい！」

綾人の念話に答えるエリオ

「行くよ！ ストラダ！！ カートリッジロード！！」

ストラダにカートリッジが二発装填し、そのまま自分の立つ連絡橋を斬りつけその瓦礫がガジェット

に向かい落下していく

数機はそれを回避し上昇して行こうとしたが

「潰れてるお!!」

スバルがバリアごとガジェットを殴り落とした

「やっぱり、威力が出ないなあ」

そう言いながら後ろにいたガジェットをマウントポジションから一撃を加え破壊に成功した

「やった!」

拳を握りながら喜ぶスバル

「スバル! 何機か逃げた、追ってくれ!」

すかさず指示を出す綾人

「あ、うん!」

慌てて追いかけるスバル

綾人の前にガジェットが迫る

「今度は・・・斬る!」

そう言ってガジェットに向かう綾人

先ほどと同じく、ガジェットの攻撃をすべて叩き落しながら進んでいく

そして、そのままガジェットの脇を通り過ぎた

「あ、綾人さん!？」

綾人の行動に驚くエリオ

「大丈夫だ・・・」

綾人がそう言いバルムンクを突き立てた時、三機のガジェットはそれぞれ二つに分裂し爆発した

「すごい・・・」

目を見開いているエリオ

「少し、熱くなっちゃった・・・」

同時に残りのガジェットをティアナが多重弾核射撃で破壊していた  
それにより、最初の模擬戦は幕を閉じた

### 第三話 出会い、そして初訓練（後書き）

どうも！

第三話でした！

あっという間でした・・・

ガジェットの数なんです、五人いるので少し増やしました

そして、綾人君の剣術はすごいですね〜一度避けられてるのに二度目には当てる、主人公らしいですね〜

何気にエリオ君との模擬戦フラグを建設した綾人君

いつかこれも書かなくては・・・

では、次回予告！

60

初めての訓練を終え、小休憩を摂っている綾人達

最初の訓練から息の上がつている四人に比べ、少し余裕のある綾人  
そんな彼にある人物がとんでもない提案をする・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第四話 「

烈火の将、綾人の実力」

タイトルで何が起こるのか大体予測がついちゃいますね・・・

## 第四話 烈火の将、綾人の実力（前書き）

第四話にして、またしても模擬戦！

結構無理やりにしていますが、此処にきて改めて綾人の実力を再確認してみてください。

## 第四話 烈火の将、綾人の実力

第四話 烈火の将、綾人の実力

「お疲れ様。皆、どうだったかな？」

フォワード陣を集めて質問するのは

「すごく、疲れました・・・」

「同じく・・・」

「僕も・・・」

「私も・・・」

四人ともかなり息が上がっていたが綾人だけは

「まだまだ、いけそうです」

平然と言っただけ

「・・・えっ!??」「・・・」

他の四人が絶句する

「おっ、体力あるね？」

なのはが感心しながら言う

「なのはさんとの模擬戦に比べたら楽勝ですよ」

「じゃはは、なるほどね」

綾人の言葉になんとなく納得するなのは

「なのはさんと・・・」

「模擬戦・・・？」

綾人の言葉を反覆するスバルとティアナ

「綾人さん、なのはさんと模擬戦したことあるんですか？」

「ああ、負けちゃったけどな」

数日前のなのはとの模擬戦について軽く皆に説明する綾人

「だから、そんな時と比べりゃだいぶ楽なわけで」

「そりゃ、エースとの模擬戦に比べたらそうでしょうけど」

綾人の言葉に半ば呆れながら言うティアナ

「まあ、後はそれなりに鍛えてるってのもあるかな」

「ほお、なら私とも手合わせ願おうか？」

「え？」

ふいに、聞き覚えのない声に振り向く五人

そこには、桃色の髪をポニーテールにしている女性と、朱色の三つ編みの女の子がいた

「あ、シグナムさん、ヴィータちゃん」

「おお」



なのはに名前を言われ三つ編みの少女のみ返事を返し、桃色ポニテールは真つ直ぐ綾人に近づいていく

「なのはさん、この方たちは？」

ティアナがなのはに聞く

「スターズの副隊長のヴィータちゃんと、ライトニングの副隊長のシグナムさんだよ」

「ヴィータだ」

「……よろしくお願いします!!」「」「」

なのはに紹介され簡単に自己紹介を終わらせるヴィータに敬礼する  
フォワード四人

「見たところなかなかの腕がありそうだな」

なのはの紹介を聞いていないのか綾人をじっくり観察するシグナム

「はあ、どうも……」

少し、引き気味に答える綾人

「高町と模擬戦して、時間いっぱい耐えたそうだな？」

「え？ああ、はい……」

シグナムの問いに首を傾げながら肯定する綾人

「どうだ、私とも模擬戦をしてみないか？」

「は？」

突然の提案に訳が分からなくなった綾人  
おもむろになのはの方に顔を向けると

「にゃはは……」

苦笑いしていた

「悪いな、シグナムは戦闘バトルマニア狂なんだよ」

なのはの代わりにヴィータが説明する

「強そうな奴にはすぐに模擬戦申し込むんだ」

「……そうなんですか」

それを聞きシグナムを見ると少し目が光っていた

「高町、構わないか？」

なのはの方に振り向き確認をとるシグナム

「うーん、綾人君はどうする？ 受ける？」

少し考え、綾人の意見を聞くなのは

「俺は別に、構いませんけど……」

「うん、ならいいかな。シグナムさんいいですよ」

綾人の答えを聞き許可を出すなのは

「よし、ならばすぐに始めよう」

「ほかの奴らは別のところで見学だ」

ヴィータに連れられビルの屋上に移動するスバル達

「じゃあ、ルールは有効打を与えるか、五分経過でいいですか？」

審判を勤めるなのが二人に確認をとる

「ああ」「はい」

互いに頷き、構える

(ほお、いい目をしている)

綾人の目に思わず顔が綻ぶシグナム

(さすが副隊長・・・なのはさんもそうだったけど、オーラがすごい・・・)

綾人も思わず口の端を吊り上げる

「それじゃ・・・始め!!」

なのはの合図とともに互いに接近する

「はあ!!」

「でえい!!」

ギリギリと互いの刃がぶつかり合う

(っ!! 重い!!)

レヴァンティンを二刀で何とか受け止めた綾人  
そしてそのままはじき返した

「甘い! レヴァンティン!!」

↳ Schlangeform

弾かれながらもレヴァンティンに指示を出し、刀状から連結刃へと  
変形させるシグナム

「飛竜、一閃!!」

そのまま、綾人へと振るった

「なっ!? うわあ!!」

体をそらし紙一重で回避する

「もらった!!」

突っ込みながらレヴァンティンをシュベルトフォームに戻し炎を纏  
わせるシグナム

↳ Explosion

「紫電、一閃!!」

体制を崩している綾人へと振り下ろす

「っ!?!」

爆炎が広がり、辺りに土煙が舞う

【見学者 s i d e】

「ふむ、決まったな」

近くのビルの屋上で模擬戦を観戦しているヴィータ達

シグナムの攻撃は綾人に間違はなくヒットしたとそこにいる全員が思った

だんだんと煙が晴れていき、二人のいた場所が見えてくる

「なっ!?!」

ヴィータを含む全員が驚愕した

そこには、地面に倒れながらシグナムの刃を受け止めている綾人の姿があった

【綾人 s i d e】

「ぐっ! くう!?!?!」

シグナムの剛撃を受け止めた衝撃により綾人の顔が苦悶に歪む

「まさか、受け止めるとはな」

シグナムも驚いていた

綾人は受け止める直前にカートリッジをロードし強度を上げ、背中に魔力を集中し、倒れながら受け止めていたのだ

「回避できないなら、受け止めるだけです・・・よ！」

そう言いながら、シグナムを弾き飛ばす

「思った通りだ・・・お前は、強い」

「いえいえ、副隊長には敵いませんよ」

互いに少しだけフツと笑う

「ならば・・・来い！」

「行きます!!」

そう言うのと互いに再び駆け出し、鏖迫り合いを繰り返す

【見学者 side】

綾人はシグナムの攻撃を見切り、確実に受け止め、攻撃をするが、シグナムも同様に受け止めたり避けたりして、決着はなかなか着かなかった

「すごい・・・」

「あのシグナムと・・・戦えてる？」

シャーリーとヴィータの二人が息を呑む

「綾人・・・すごい・・・」

「あれで・・・私たちと同じBランク？」

スバルとティアナも驚きを隠せなかった

「すごいね・・・エリオ君・・・」

「キユクくくく」

「うん・・・」

キャロの呼びかけに振り向かずに答えるエリオ

二人の模擬戦を空からモニターで見ているのはモ

（やっぱり・・・魔力量は確かにBランクだけど・・・戦闘のセンスはAAクラスかも・・・）

と分析していると同時に、綾人の目に集中していた綾人の目は開始からずっと黒いままだった

（うーん・・・気のせいだったのかな？）

その後、互いに一進一退の攻防が続き、四分が経過した・・・

【綾人 side】

「天童・・・と言ったか？ お前」

シグナムがそう質問する

「はあ・・・はあ・・・はい・・・はあ・・・」

綾人は息があがっていた

「まさか、ここまでやるとは思わなかったが、もう限界だろう？  
次で終わりにしよう」

そういつてレヴァンティンのカートリッジをロードし刀身に炎を纏  
わせた

「・・・・・・わかりました」

そう頷き片方の刀を地面に刺し、カートリッジをロードし腰に据え、  
姿勢を低くする綾人

「居合いか・・・」

「ええ、これが、俺の最も得意とする剣術です」

そう答えるとしばらくの静寂が辺りを包む・・・

そして、近くの瓦礫がわずかに崩れる音を合図に、ほぼ同時に駆け  
出した

「うおおおおおお！！！！」

「はああああああ！！！！」

同時に攻撃を繰り出した

「紫電、一閃！！！！」



「鉄、豪閃くろがね!!」

刃がぶつかり、再び爆発が起こり二人の姿が土煙に隠れた

【見学者 side】

「どっちが勝った!？」

ヴィータが鉄柵から身を乗り出しながら確認する。

他のなのはを含む全員が注目し土煙が晴れるのを待つ

「煙が・・・」

「晴れてきました・・・」

ティアナとキャラロが言い終わると同時に二人の影が見えてきた

【綾人 side】

「やっぱ・・・勝てないか・・・」

膝を付けながら後ろを見る綾人

「いや・・・お前の闘志、確かに届いた・・・」

振り向かずに語るシグナム

「はは・・・あり・・・がとう・・・じゃ・・・いまし・・・た・・・」

「

そのまま倒れこむ綾人

「勝負あり！」

なのはの終了の音が響く

「「綾人（さん）！！」」

倒れた綾人に駆け寄るスバル、エリオ、キャロ  
綾人からの返事はない

「・・・寝てる？」

綾人の様子を見ながら確認するティアナ  
綾人は小さく寝息を立てていた

「お疲れ様です、シグナムさん」  
「お疲れ」

シグナムのほうに近寄るなのはとヴィータ

「ああ」

短く返事を返すシグナム

「どうでした？ 綾人君」

「まさかシグナムとあそこまで戦える奴だなんてな、あたしもビツクリだ」

「・・・・・・・・」

なのはの質問とヴィータの感想が聞こえていないのか、黙り込むシグナム

「シグナムさん？」

再度呼びかけるのは

「ん？ ああ、すまん」

「どうしたんだよ？ ボーっとしやがって」

「どうかしましたか？」

首を傾げるのはとヴィータ

「いや、なんでもない。あまりにも清々しくてな」

そう言うと、立ち去っていくシグナム

「シグナム、なんか変だ・・・」

「うん・・・」

ヴィータの言葉に頷くのはだが、すぐに気を取り直しフォワードのほうに振り返り

「それじゃ、訓練の続き、始めようか？」

そう告げた

【シグナム side】

「……まさか……これほどは……」

訓練場を出、脇腹を押さえるシグナム

ジャケットを解き、制服のシャツを捲り上げると、そこはすこし赤く滲んでいて痣になっていた

最後の攻撃、綾人の攻撃もシグナムには浅くだが入っていた

そのときバルムンクの刀身から放出された魔力がかすり痣になったのだ

「凄まじい覇気だった……そして……あの目は……」

最後の攻撃の一瞬、綾人の瞳を見たとき……なのはの時と同様に紅く輝いていた……

(あの目は……一体……?)

そんなシグナムの疑問に答えられるものは誰もいなかった……

【綾人 side】

「う……ん……?」

五分後、目を覚ました綾人

「おう、起きたか?」

「えっと、ヴィータ副隊長?」

そこは、シュミレータのビルの屋上でそばにはヴィータが訓練を見

ていた

「今、残りのやつらが訓練の続きやってる。ひと段落着いたらお前も合流しな」

「はい」

ヴィータの指示に頷く綾人

「しかし、お前強えな？」

少し苦笑いしながら綾人に尋ねるヴィータ

「なのはとかシグナム相手に時間いっぱい戦えるなんてよ」

「それ、フェイトさんにも言われました」

なのはとの模擬戦のときのことを簡単にヴィータに説明した

しばらくして、訓練の間の小休止に入ったようなので、なのはたちの元へ向かう綾人

「なのはさん！」

「あ、綾人君！ もう大丈夫なの？」

振り向き、綾人の体調の確認をするなのは

「はい！ これから、参加してもいいですか？」

「うん！ じゃあ、次の訓練から参加してね」

「わかりました！」

そう答え、スバルたちの所へ向かう

「お疲れ！ 皆！」

「あ、綾人！」

「綾人さん！！！」

綾人の登場に少々驚きの四人

「もういいの？」

「ああ。悪いな、初日から」

心配してるスバルを安心させながら謝罪する綾人

「ホントね、いきなり居眠りだものね？」

「ははは・・・」

ティアナの皮肉に苦笑いしか出来ない綾人だった

その後、復帰した綾人も加わり夜遅くまで訓練が続いた  
そして現在、隊舎のロビーにて綾人を除くフォワード陣は完全にグ  
ロッキーになっていた

「つ、疲れた〜」

「まったく・・・」

ソファに座り、背もたれに体を預けているスバルとティアナ

「ZZZ・・・ZZZ・・・」

「スー・・・スー・・・」

反対側のソファで静かに寝息を立てているエリオとキャラ

「もう寝るか？ 明日も訓練あるし、二人も部屋に運ばなきゃな」

眠っている子供二人を見ながら、反対側の二人に提案する綾人

「そうね・・・そうしましょ」

ティアナはその提案に頷き

「うん・・・よいしょ！」

スバルは眠ってしまったているキャラを抱え、綾人もエリオを背負い、寮へと向かい歩いていく

途中でエリオとキャラが目を覚まし慌てて謝っていたが「気にするな」といつて許した

男子寮と女子寮への分かれ道にて・・・

エリオはキャラと同室の為女子寮で寝るということで、男子寮に向かうのは綾人一人だけである

「いいなあエリオ、俺もエリオぐらいの歳だったらなあ」

「えっと・・・いや・・・ぼくは・・・その・・・」

綾人が少し意地悪そうに言うと案の定顔を赤くしながら慌てだすエリオ

「あんだ・・・それ、セクハラ」

「最低だよ・・・綾人」

ティアナとスバルが冷たい目で綾人を睨む  
キャラはよく分かっている様子で首を傾げている

「男として、当然の反応だ。俺じゃなくてもそう思う」

二人の視線を気にせずに答える綾人

機動六課には部隊長のはやてを筆頭になのは、フェイトなどの美人が多い

そんな美女、美少女が集まる六課の女子寮はまさに男には夢の楽園なのだ

「さて、エリオも弄ったし、そろそろ寝るわ。また明日な」

そういつて男子寮へ向かう綾人

「ええ、それじゃね」

「おやすみ」

「「おやすみなさい」」

挨拶を返すティアナ達に後ろ手を振りながら寮に入っていく綾人  
それを見届け、ティアナたちも寮に入っていく

こうして、機動六課での最初の一日が終了した。



## 第四話 烈火の将、綾人の実力（後書き）

どうも！

やっぱり負けましたね・・・

戦闘描写つてむずかしいですね

今回はやたらと視点変更が多いですね・・・基本的にはその人達の  
周辺を第三者視点で見えています

今回の綾人君の技・鉄豪閃くろがねしうせんですが、これは「無限のフロンティア  
xceed」の「片那かたな」の技、銀豪閃しろがねしうせんの名前だけを参考に行っている  
ため、攻撃方法はまるで違います

では次回予告！

初日の訓練から、毎日繰り返される訓練  
だが、厳しい訓練にスバルとティアナのデバイスが悲鳴をあげる  
それを考えたなのは新デバイスを渡すことを決める

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第五話 「  
相棒、そして初出動・前編」

次回、いよいよ初出動です！そして綾人君が少しずつズレていきま  
す

## 第五話 相棒、そして初出勤・前編（前書き）

今回はスバルとティアナの新デバイス受理から初出勤までです！  
そして、綾人の強さの秘密がほんのちよっと明らかになっ！？

## 第五話 相棒、そして初出勤・前編

第五話 相棒、そして初出勤・前編

最初の模擬戦から早数日、訓練漬けの毎日が過ぎていく  
そして、それは突然に始まった……

訓練場にて……

「はい！ せいれーっ!!」

バリアジャケットを装着したなのはに呼ばれ、ボロボロになりながら集まる五人

「じゃあ、本日の訓練ラストの一本。みんな、まだがんばれる？」

「……はい!!」「……」

なのはの問いに答えるフォワード陣

「じゃあ、シュートイベーションをやるよ？ レイジングハート？」

「All right. Acceler Shooter」

レイジングハートから十五個のスフィアが展開される

フォワード陣の顔が引き締まる

「私の攻撃を五分間回避しきるか、私にクリーンヒットできればクリア。誰か一人でも被弾したら、最初からやり直したよ？ 頑張っ  
ていこう!!」

「「「「はい!!」「「「「

そう返事すると同時にティアナがみんなに確認する

「このボロボロの状態で五分間、なのはさんの攻撃を捌ききる自信、ある?」

「ない!」

「同じくです!」

ティアナの質問に即答するスバルとエリオ

「三分ぐらいなら!」

以前の経験で語る綾人

「じゃあ、何とか一発入れよう!」

「はい!」

それを無視して湯を入れるティアナと返事を返すキャロ

「.....」

少し落ち込む綾人、スバルとエリオは苦笑い

「あはは.....よ、ようし! 行くよエリオ! 綾人!」

「はい! スバルさん!!」

「.....ああ」

スバルの掛け声に答え構えるエリオと、肩を落としたため息と一緒に答える綾人

「準備はOKだね?・・・綾人君も大丈夫?」

少し心配になりながら綾人に確認するのは

「はい・・・大丈夫です・・・」

そう言うと改めて構える綾人

「にはは・・・それじゃあ、READY・・・」

苦笑いとともに右手を振り上げ

「GO!」

振り下ろすと同時になのははシューターを放つ

「全員、絶対回避! 二分以内に決めるわよ!」

開始と同時に全員に指示を出すティアナ

「」「」「おっ!」「」「」

着弾直前、それぞれが散開する

それを確認するのはの周りにウイングロードが展開される

「っ!」

それに気付き振り向くのは

その上にはウイングロードを駆けてなのはに突撃するスバル、近く

のビルにはスフィアを形成するティアナ、そしてビルを駆け上り壁を蹴って斬りかかる綾人がいた

「っ！ アクセル！！」

「Snipe Shot」

三人に気付き自分の周囲のシューターをスバルとティアナ、綾人に一発ずつ放つのは  
三つのシューターは三人に当たることなくすり抜けていき、姿が掻き消えた

「・・・シルエット・・・やるねティアナ」

ティアナの作戦に少しうれしそうにするのは  
それと同時に再びウイングロードがなのはの後ろに現れる

(上!?)

なのはが顔を上げると、ティアナのオプティックハイドで姿を消していたスバルがなのはに殴りかかる

「うおおおおおおお！！！！」

「くっ！！」

シールドを張り防御するのは

「ぐぬぬぬぬぬ」

シールドを破るためにナックルを押し続けるスバル  
防御したまま別のところを飛んでいるシューターを操作しそれをス

バルに向かわせるのは

「!?!? くっ!」

気付きローラーを逆回転させ、間一髪で回避するスバル

「うん! いい反応!」

それを見てまたもうれしそうなのは

「つと、あ、あああああ!?!?!?」

回避したスバルはそのままバランスを崩し、ウイングロードの上を転がっていくが何とか体勢を立て直したが、スバルの後をシューターが追跡し、なのはもそれを見ていたその時

「選手交代!!!」

「え?」

なのはが振り向くと反対側のウイングロードから綾人が駆けてきた

「はあああああ!?!?!」

そのままなのはに斬りかかる

「くう!?!」

なのはもシールドで防ぎ、綾人の攻撃を受け止める

「はあ!?! せりゃ!?!」

何度も刃をぶつける綾人

(そろそろか・・・)

攻撃しながらタイミングを図る  
しかし、なかなかその時が来ない

<ティアナ！ まだか！？>

念話でティアナを呼ぶ綾人

<分かってるから少し待って！！>

焦りながら答えるティアナ

ティアナはスバルと綾人の二人の援護用のスフィアを形成し打とう  
としていたが、引き金を引いたとたん弾が詰まっていた

「この、肝心なときに！！！」

ティアナは急いで弾を装填しなおし、即座に四発撃つ

「来たか！」

ティアナの援護射撃を確認したのはと距離をとるため、ウイングロ  
ードから飛び降り降下していく綾人

そして、入れ替わるようになるのはティアナのスフィアが向かう  
それを見ているのはの後ろでキャロがエリオにブーストを駆けて  
いる



「？我が請うは疾風の翼、若き槍騎士に駆け抜ける力を！？」  
「Boost Up・Acceleration」

ストラーダが桃色の光を纏う、そしてストラーダからブースターが噴射される

「あの！ かなり加速がついちゃうから、気をつけて！！」

「大丈夫！ スピードだけが取り柄だから！！」

申し訳なさそうに言うキャロを安心させるように答えるエリオ

「行くよ！ ストラーダ！！」

そう言うのとさらに出力を上げる

ティアナの誘導弾とフリードの炎を回避しチャージ中のエリオに気付くのは

「はあああああ！！！！」

「えっ！？」

突如、横からの声に振り向くと、綾人が飛び出してきていた

「くっ！！」

綾人の攻撃をシールドで防御するなのは  
そして綾人に向かってシューターが迫る

「ふん！！」

なのはのシールドを利用して後ろに飛び、向かってくるシューター

を叩き落していく綾人

<エリオ！ 今だ！！>

降下しながらエリオに指示を出す綾人

「行っけー！！！！！！！！！！」

☆Speerrangriff☆

綾人の指示を聞き、突撃するエリオ

そして、なのはと接触し爆発が起きる

「うわあああ！！ くら！！」

「よつと」

煙の中からエリオが飛び出し近くのビルにいた綾人が受け止める

「大丈夫だな？ エリオ？」

「綾人さん、はい！」

エリオが綾人に返事をした直後、煙の中からはなのはの姿が浮かび上がる

☆Mission complete☆

「おみごと、ミッションコンプリートだよ！」

「ホントですか！？」

なのはの言葉に驚くエリオ

「ホラ、ちゃんとバリアを抜いてジャケットまで届いたよ？」

よく見るとなのはの左胸の辺りが黒く汚れていた  
それを見たエリオとキャラコが笑顔になる

「じゃあ、今朝はここまで！ 一端集合しよう？」  
「……………はい！」「……………」

笑顔で召集するなのはと答える五人  
なのはは着地すると同時にジャケットを解除し制服姿になる

「さて、皆もチーム戦にだいぶ慣れてきたね？」  
「……………」ありがとうございます！」「……………」

笑顔になつて礼を言う五人

「ティアナの指示も筋が通ってきたよ？ 指揮官訓練、受けてみる  
？」

「え、いやあの、戦闘訓練だけでいっぱいはいいです！」

なのはの提案に遠慮がちに答えるティアナ

「綾人君も、みんなのフォローが上手かったね？」

「はは、225隊でもそんな立ち回りでしたからね」

綾人もなのはの評価に笑顔で答える

「キュク？ キュクル」  
「どうしたのフリード？」

突然、そわそわしだしたフリード

「なんか、焦げ臭いような・・・?」

エリオの言葉を聞き、おもむろにスバルの足元をみるティアナ

「ああ、スバル! あんたのローラー!!」

「え?」

ティアナに言われてローラーを見るスバル  
すると、ローラーから漏電していた

「うわあ!!! やっぱ!!! あっちゃ〜」

そっぴいながらローラーを脱ぐスバル

「しまった〜無茶させちゃった〜」

「オーバーヒートかな? 後で、メンテナンスに見てもらおう?」

「はい・・・」

なのはの提案に落ち込みながら答えるスバル

「ティアナのアンカーガンも結構厳しい?」

「はい・・・だましました・・・」

「よく、もってるほうだよな?」

なのははティアナの返事と綾人の言葉に少し考えながら

「皆・・・訓練にも慣れてきたし、そろそろ実践用の新デバイスに  
切り換えかなあ・・・?」

そう呟いた

「新・・・？」

「デバイス・・・？」

不思議そうに聞き返すスバルとティアナ

「うん・・・とりあえず、隊舎に戻ろっか？」

そういつて歩き出すなのは

隊舎前にて・・・

「じゃあ、一旦寮でシャワー使って、着替えてロビーに集まるっか？」

「くくくくはい！」「くくくく」

なのはの指示に答える五人  
するとそこに

「？ あの車って・・・」

ティアナの言葉に振り向くなのは達  
見ると黒いスポーツカーが近づき、車のロフト部分が開きオープン  
カー状態になった

「フェイトさん！ 八神部隊長！」

運転席にフェイト、助手席にはやてが乗っていた

「うん!」「うん」

キャラに笑顔を返すフェイトとのんびり返すはやて

「すごい! これ、フェイト隊長の車だったんですか?」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

スバルの質問に答えるフェイト

その横では

「フェイトさん、かっこいいですね」

真顔で言う綾人

「そ、そうかな?」

「はい」

少し顔が赤いフェイト

「やっぱ、黒って渋くっていいですよね?」

「え? あ・・・うん、そうだね・・・」

車のことを言っていた綾人と自分のことだと思ってしまうていたフェイト

「紛らわしいわよ、綾人」

「ん? 何が?」

ティアナの指摘に気付かない綾人

「何がって、はあ・・・もういいわ」

諦めた様子のティアナ

スバルやなのは達も苦笑いし、エリオとキャラは首を傾げている

「ふふ。みんな練習の方はどないや？」

話を切り替えるはやて

「あゝ・・・ははは」

「頑張ってます」

またしても苦笑いのスバルの変わりに答えるティアナ

「エリオ、キャラ、ごめんね？ 私は二人の隊長なのにあんまり見てあげられなくて」

申し訳なさそうに言うフェイト

「あ・・・いえ、そんな」

「大丈夫です！ 綾人さんも居てくれますから」

笑顔で答えるエリオとキャラ

「綾人、二人のことお願いね？」

「ええ、わかってます。任しといてください」

フェイトの頼みに頷く綾人

「五人ともいい感じに慣れてきてるよ？ 何時出勤があっても大丈夫！」

なのはが評価を言う

「そうか、それは頼もしいな！」

はやても満足する

「二人はどこかにお出かけ？」

「うん、ちよつと六番ポートまで」

「教会本部でカリムと対談や。夕方には戻るよ」

なのはの質問に答えるフェイトとはやて

「私は昼前には戻るから、お昼は一緒に食べようか？」

「……………はい！」「……………」

フェイトの提案に元気よく返事をする五人

「ほんならな〜」

そのまま走り出していく車

五人は敬礼で送り出した

隊舎、ロビーにて

シャワーを浴び終えロビーに入る綾人

そこにはすでにエリオが階段に座っていた



「よおエリオ、早いな。一人か？」

「あ、綾人さん！ はい、皆さんまだシャワーだと思えます。あと、フリードも居ます」

「キョクル」

見ると確かにエリオのそばにフリードが居た

「そっか。隣、いいか？」

「はい！ どうぞ！」

エリオの返事を聞き隣に座る綾人

「そういえば綾人さんのデバイスってご自分で作ったんですか？」

「いや、俺のは父さんから貰ったんだよ」

エリオの質問に答える綾人

「管理局に入局したときに、記念だつて言つて」

「へえ……」

思い出を語る綾人は穏やかな表情をしていた

「嬉しかったなあ、何せ父さんと同じ型のデバイスだし」

「そうなんですか？」

「ああ、俺の父さんも剣型のデバイスなんだ、俺のは二刀で父さんののは一刀だけど」

補足の説明を忘れない綾人

「じゃあ、お父さんも同員なんですか？」  
「ああ、陸士隊の部隊長やってる。四年ぐらい前までは教導隊にいたらしいけど」

入局する前のことなのでよく知らない綾人

「へえ・・・じゃあ、綾人さんの剣術もお父さんから？」

「ああ。昔から結構扱かれてな。おかげで、スタミナと筋肉だけは付いた」

「あはは・・・」

綾人の言葉に苦笑いするエリオ

(どんな扱かれ方をしたらこうなるんだろう?)

なのはの訓練を受けても息を切らさない綾人を見てそう思っていた

その後、女性陣三人が合流し、なのはの代わりにシャーリーが来、五人はデバイスルームへと連れて行かれた。

デバイスルームにて・・・

「うわあ、これが・・・」

「私達の新デバイス・・・ですか？」

スバルとティアナが目の前にあるものを見ながらそう漏らす  
二人の前には青いクリスタルの付いたペンダントとカード型のデバイスが浮いていた

「そうです！ 設計主任、私！ 協力、なのはさん、フェイトさ

ん、レイジングハートさんとリイン曹長！」

「はあ……」

シャーリーの説明に生返事しか返せないティアナ

反対側の机にはエリオとキャロ、綾人のデバイス、ストラーダとケリユケイオン、そしてバルムンクが同じく浮いていた

「ストラーダとケリユケイオンは変化なしかな？」

「そうなのかな？」

「俺のバルムンクもな」

見た目があまり変わらないので変化がわからない三人

「違いまゝす！」

そう言いながら綾人の頭に降りるリイン

「変化なしは外見だけですよ？」

「リインさん！」

「はいです〜！」

「どこ乗ってんですか……」

突然の登場に少し呆れ気味の綾人

「むう……いいじゃないですか！」

綾人の言葉に少しむくれるリイン

「はあ、せめて頭は止めてください。肩ならいいですから

「はいです！ わかりました！」

返事をしながら肩に移動するリイン  
そのまま説明を続ける

「エリオとキャロはちゃんとしたデバイスの使用経験がなかったですから、感触に慣れてもらうために基礎フレームと最低限の機能だけで渡してたです！」

「あ、あれで、最低限!？」  
「ホントに？」

リインの説明に驚愕する二人

「綾人以外の四人が扱うことになる四機は、六課の前線メンバーとメカニックススタッフが技術と経験の粋を集めて完成させた最新型！」

そういうと綾人の肩から離れ五人の中心に移動し説明を続けるリイン

「部隊の目的に合わせて、そしてエリオやキャロ、スバルにティアナ。個性に合わせて作られた文句なしに最高の機体です！」

そう説明し、デバイス達を自分の下へ移動させる

「皆、まだ生まれたばかりですが、いろんな人の思いや願いが籠められてて、いっぱい時間かけてやっと完成したです！」

そう言つて五人の下へと移動させる

「ただの道具や武器と思わないで大切に、だけど性能の限界まで思いつきり全開で使つてあげてほしいです！」

「うん、この子達も、きつとそれを望んでるから」

ラインの言葉を継いでシャーリーが言う

「ライン曹長、バルムンクもですか？」

フォワード陣のなかでは一番デバイスの使用経験がある綾人が説明を聞き終わった後に質問する

「バルムンクには少し手を加えさせてもらったよ？」

「どうのことですか？」

そう聞こうとした所に

「ごめんごめん！ おまたせ」

「なのはさくん！」

なのはが入ってきた

「ナイスタイミングです！ 丁度これから、機能説明をしようかと」

「そう。もう、すぐに使える状態なんだよね？」

「はい！」

なのはの質問に元気よく答えるライン

パネルを展開しながら説明を始めるシャーリー

「まず、その子たちはみんな何段階かに分けて出力リミッターをかけてるのね？ 一番最初の段階だと、そんなにびっくりするようなパワーが出るわけじゃないから、まずはそれで扱いを覚えていって」  
「で、各自が今の出力を扱いきれるようになったら、私やフェイト隊長、ラインやシャーリーの判断で解除していくから」

「丁度、一緒にレベルアップしていくような感じですね」

シャーリー、なのは、ラインと順に説明が続く

「なるほど・・・」

『手を加えた』というシャーリーの言葉をそう受け止めた綾人その後、なのはは出力リミッターが隊長陣にはデバイスだけじゃなく自身にも掛かっていることなどを話したその説明を受けた後、ティアナはふと思いつき

「じゃあ、シグナム副隊長はあの時リミッターが掛かってたんですよ？」

「綾人君との模擬戦のとき？ うん、そうだよ？」

ティアナのつぶやきに答えるのは

「なんだ、だから戦えてたんだ」

少し安心した様子ティアナ

確かにシグナムに魔力制限が掛かっていたのなら綾人が渡り合えたのも頷ける

互角に戦えるかといわれれば判らないが・・・

「そりゃそうだろう。でなきゃ、俺はあの時瞬殺だぞ？ ねえ、なのはさん？」

肩を竦めながらなのはに言う綾人だったが

「あ・・・うん、そうだね・・・」

少し曖昧な返事が返ってきた

「？　なのはさん？　どうかしました？」

「ううん！　なんでもないよ！」

綾人が首を傾げるとそう答えるのは

「それに、なのはさんだってあの時リミッターかけてたんですよ  
？」

「あの時？」

何時のことか分からないのは

「最初に模擬戦した日ですよ」

「ああ、えっと」

「そうじゃなかったらギリギリまで戦えるなんて無理ですからね？」

なのはが答える前に納得する綾人

実はなのはがリミッターを掛けられA Aランクになったのは六課に来てからで、綾人との模擬戦の時にはまだS+ランク・・つまり、綾人はS+ランクのなのはと戦い、尚且つ時間いっぱい耐えたことになる

そのことをなぜか言い出せなかったなのはだった

「新型も、皆の訓練データを基準に調整してるから、いきなり使っても違和感はないと思うんだけどね」

パネルを操作しながら説明するシャーリー

「午後の訓練の時にでもテストして、微調整しようか」

「遠隔調整も出来ますから手間もほとんど掛からないと思いますよ？」

「はあ、便利だよねえ最近は」

「便利です！」

シャーリーの説明に対するなのはの感想を聞いて思わず綾人は

（なんか、十九歳っぽくない発言だよな）

と行ってしまった

すると、なのはが笑顔で綾人に近づき

「綾人君？ 何か失礼なこと、考えなかった？」

「い、いえ！！ 考えてませんよ！！」

また心を読まれ、必死に弁解する綾人

「本当に？」

「はい！ 勿論です！！」

詰め寄られてタジタジの綾人

「あはは・・・スバルの方はリボルバーナックルとのシンクロ機能も上手く設定できてるからね？」

なのはと綾人のやり取りを苦笑いでスルーしながら説明するシャーリー

「ホントですか！？」



「持ち運びが楽になるように、収納と瞬間装着の機能も付けといた」  
「ありがとうございます！！」

シャーリーの気前のよさに笑顔で礼を言うスバル

その時、部屋にアラート音が響いた

「このアラートって!？」

「一級警戒態勢!？」

アラートに驚いているスバルとエリオ

「グリフィス君!！」

なのはは副部隊長でもあるグリフィス・ロウランを呼び出す

『はい！ 教会本部から出動要請です!！」』

『なのは隊長！ フェイト隊長！ グリフィス君！ こちらははやて  
!！」』

グリフィスとはべつのモニタからはやてからの通信が入る

「うん!！」

『状況は?』

車で移動中のフェイトの声が聞こえる

『教会騎士団の調査部で追ってた、レリックらしきものが見つかった。場所はエイリム山岳丘陵地区、対象は山岳リニアールで移動

中!』

「移動中!?!」

『まさか!?!』

隊長二人が驚愕する

『そのまさかや。内部に侵入したガジェットのせいで、列車の制御が奪われてる。リニアレール車内のガジェットは少なくとも三十体。大型や飛行型の未確認タイプも出てるかも知れへん。いきなりハドな初出勤や、なのはちゃん、フェイトちゃん、いけるか?』

説明後親友二人に確認するはやて

「私はいつでも!」

『私も!』

二人が答える

『スバル、ティアナ、エリオ、キャロ、それに綾人君も、皆オツケーか?』

「『『『『はい!』』』』」

答える五人

はやても感心しながら

『よっし、いいお返事や! シフトはA-3! グリフィス君は隊舎での指揮、リインは現場管制!』

「『『はい!』』」

『なのはちゃん、フェイトちゃんは現場指揮!』

「『うん!』」

次々と指示を飛ばすはやて

『ほんなら・・・機動六課フォワード部隊、出動!』  
「『うん!』」

はやての号令に全員が返事をする

『了解! 皆は先行して、私もすぐに追いかける!』  
「うん!」

フェイトの言葉に頷き、通信をきるなのは  
綾人たちはなのはと共にヴァイス・グランセニツクの操縦するヘリ  
に乗り込み現場へ向かう

## 第五話 相棒、そして初出動・前編（後書き）

どうも！

というわけで初出動の前半です！

といっても出て行く直前までですが・・・最初の模擬戦、ちよつと伝わり辛いかも・・・？

そして、綾人君の鈍感スキルが開花し始めております  
この先、どんどん開いていくことでしょう！

では今回はこの辺で次回予告！

新しいデバイスを受け取った直後の出動、各自の思いを秘めたまま、  
フォワードチームはレリックの確保のため、暴走するリニアレール  
に突入する！

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第六話 「  
相棒、そして初出動・後編」

次回、綾人君があるキャラとのフラグをちらつかせる！？

第六話 相棒、そして初出勤・後編（前書き）

さて！早くも後編投入です！  
綾人君が力の一部を見せます！

## 第六話 相棒、そして初出勤・後編

第六話 相棒、そして初出勤・後編

へり内にて・・・

「新デバイスでぶっつけ本番になっちゃったけど、練習どおり大丈夫だからね？」

「はい！」

「頑張ります！」

なのはの言葉にはつきりと返事をするティアナとスバル

「エリオとキャロ、それにフリードもしっかりですよ！」

両手を握って激励するリイン

「「はい!!」」

「キョクル〜！」

二人と一頭もしっかりと返事をする

「リイン曹長、俺には？」

一人だけ激励されていない綾人

「綾人はもうしっかりしていると思つたので必要ありません！」

きっぱりと宣言するリイン  
ちっこい体で言うことが少々エグい

「え〜」

落ち込む綾人

「にははは・・・綾人君も、しっかりね？」

苦笑いしながらも綾人を激励してみるなのは

「無理に激励しなくてもいいですよ？　なのはさん」

それでも激励してもらって内心ではうれしい綾人  
しっかりしているというよりちやっかりしている

「と、とにかく危なくなったら私やフェイト隊長、リインがフォロ  
ーするから、おっかなびっくりじゃなくて思いっきりやってみよう  
？」

そう提案するのは五人は

「「「「はい！」「」「」」

はっきりと返事をする

しばらくすると、フリードが不安そうにキャロを見ていた

「？」

気になりキャラロを見る綾人  
すると、キャラロの顔色が少し悪かった

「大丈夫か？ キャロ？」

「う、ごめんなさい・・・大丈夫です」

小声でキャラロに話しかけると、すこし、上擦った声で帰ってきた

(緊張してるな・・・さて・・・)

どうするか目を閉じて考え始める綾人

その時だった

オペレーターでもあるルキノの声がへりに響く

ガジェットの飛行型が出現し、なのは達のへりを捕捉したのだ  
フェイトが現地に飛んでくることを聞いたなのはは

「ヴァイス君、私も出るよ！ フェイト隊長と二人で空を抑える！」

「ウツス！なのはさん、お願いします！」

「Main hatch open」

そう返事をしハッチを開けるヴァイス

「じゃあ、ちょっと出てくるけど、皆もがんばってズバツとやっつけちゃおう！」

「はい！」

「はい！」

「・・・」

すぐに返事を返すスバル・ティアナ・エリオと少し遅れて返事をす



るキャラ

そして目を閉じたまま黙っている綾人

「綾人君？ どうしたの？」

「……………」

なのはの呼び声にも答えない綾人

眠っていると思っ手て手を伸ばしたときだった

「……………よし！ これだ！！」

「ひゃう！？」

突然声を発したため、思わず手を引っ込めるなのは

「どうしたんですか？ なのはさん？」

「それはこっちの台詞だよ！ さっきの話、聞いてた？」

「……………えっと……………何の話ですか？」

考え込んでいてガジェットのことを聞いていない綾人

なのはが少しあきれながら綾人に説明する

「もう、ちゃんと聞いてないとだめだよ？」

「すみませんでした……………」

素直に謝る綾人

「で？ 何を考えてたの？」

「ああ、そうだ、キャラ？」

なのはの言葉に先ほどまで考えていたことを実行に移す綾人

「は、はい？」

綾人に呼ばれ、驚き振り向くキヤロ

「よっ！」

「ふえ？」

突然キヤロを抱き寄せる綾人

「「「「「なっ！？」」「」「」」」」」

綾人の行動にへり内の時間が止まった

「あ、あの！ 綾人さん！？ なにを？」

顔を赤くして軽くテンパっているキヤロ

しかし放そうとしない綾人

「大丈夫だ、そんなに緊張しなくても」

「え？」

綾人の言葉に落ち着きを取り戻すキヤロ

「俺の心臓の鼓動、聞こえるか？」

そう聞く綾人

綾人の胸に耳を当ててしつかりと鼓動を聞くキヤロ

「あれ？」

聞いてみると不思議に思ったキャラ

「早いだろ？」

「はい、すごく・・・」

「結構、落ち着いてる様に見られるんだけどな。内心では、俺もかなり緊張してるんだよ」

キャラだけでなくほかのメンバーも驚いていた

普段から落ち着いている雰囲気綾人が緊張しているのだから

「でもな？ 不安はないんだ、これっぽっちもな」

「え？」

綾人の言葉に顔を上げるキャラ

そんなキャラに綾人は微笑みかけながら

「だって、俺には信頼できる仲間がいるからな」

「あ・・・」

そういうと、キャラを開放し、続ける

「スバルにティアナにエリオ、更にはなのはさんにフェイトさんにはやてさん。他にも六課のメンバー皆、俺が信じる仲間だからな」

キャラの頭をなでながら

「当然、キャラとフリードもな？」

少しずつ、心をほぐしていく

「仲間だから全力で助けられるし、守ってやれる。繋がっていら  
る」

懐からある物を取り出しキャラ口に手渡す

「これは？」

「俺とキャラ口の絆の証明にな」

渡したのはガラスで作られた勾玉まがたまだった

キャラ口をイメージしたような薄いピンク色をしていた

「俺がキャラ口を信じているってことを分かりやすくしたものだな」

そう説明し、キャラ口の肩を両手で掴み、まっすぐに見つめ

「キャラ口も自分を信じろ」

「え？」

「自分の魔法を、キャラ口の魔法は皆を守れる優しくて強い魔法なん  
だつて。な？」

キャラ口は目を見開いて綾人を見、そして力強く頷く

それを見た綾人は立ち上がりなのはの方を向き

「なのはさん、そろそろ行ったほうがいいんじゃないんですか？」

そう語りかける

「あ、うん。それじゃあ、行って来るからしつかりね？」

「「「「はい！」「」「」「」

返事を聞き終えてハッチから飛び出し空中でデバイスの起動を行い、ガジェットの前へ向かっていくのは

残ったフォワード五人はラインから作戦の確認を受けていた

「任務は二つ。ガジェットを逃走させずに全機破壊すること、そしてレリックを安全に確保すること」

そういいながら五人の前にパネルを展開する

「ですから、スターズ分隊とライトニング分隊、それぞれ車両前後からガジェットを破壊しながら中央に向かうです。レリックはここ！七両目の重要貨物室！」

モニターが切り替わる

「スターズがライトニング、先に到着したほうがレリックを確保するですよ！」

「「「「はい！」「」「」「」

ラインの指示に返事をする五人

「「「でえー！」

そう言いながら回転し、バリアジャケットを展開するライン

「私も現場に降りて管制を担当します！」

数分後、ヘリガリニアレールに近づくと

「さーて新人共、隊長さん達が空を抑えてくれてるおかげで、安全無事に降下ポイントに到着だ。準備はいいか!!」

「はい!!」

ヴァイスの激に返事を返し、降下準備に入るスターズの二人

「スターズ03、スバル・ナカジマ!!」

「スターズ04、ティアナ・ランスター!!」

「行きます!!」

二人がハッチから飛び降り、空中でデバイス起動を行った

「次! ライトニング! チビ共、気をつけてな! 綾人もしっかりやれよ!!」

「はい!!」

「了解! ん?」

ハッチに立って準備しているとまだ少し表情の硬いキャロに気付く綾人

「キャロ」

「え?」

呼ばれて見上げると少し笑いながら綾人が

「高いところ、少し苦手なんでな、一緒に降りてくれ」

そう言つて手を差し出す綾人

「はい！」

顔が明るくなり笑顔で綾人の手を握るキャロ

「エリオもな？」

反対側の手をエリオに差し出す

「はい！」

エリオもしつかりと握り返す

「ライトニング03、エリオ・モンディアル！」

「ライトニング04、キャロ・ル・ルシエとフリードリヒ！」

「キュクル〜！」

「ライトニング05、天童綾人！」

「『『行きます！』』』」

そう言つて三人で飛び出す

「ストラーダ！」

「ケリユケイオン！」

「バルムンク！」

「『『セットアップ！』』』」

掛け声と同時にクリスタルコアが光り三人もジャケットを着用、スターズはリアール前部、ライトニングは後部に降り立つ  
すると、綾人以外の四人が自分の姿に驚いていた

「このジャケットって……?」

「もしかして……」

「デザインと性能は、各分隊の隊長さんのを参考にしてるですよ。ちよつと癖はありますが、高性能です!」

スバルとエリオの疑問に答えるリイン

「俺のは、あんまり変わってないな。上着着ただけで……」  
「そんなことはないのです!」

綾人の感想に怒りながら抗議するリイン

「綾人のバリアジャケットだって、性能も強度もパワーアップしてるです!」

「はあ……えつと……すみません……」

リインの迫力に思わず引きながら謝ってしまう綾人

「マスター、そんなことより作戦開始を」

「ああ、そうだな……ってバルムンク!? お前……」

突然しゃべりだした相棒に驚く綾人

「はいです! バルムンクにも人格AIを搭載したです!」

笑顔で語るリイン

「改めて、よろしく願います。マスター」

「まったく……『手を加えた』ってこういうことか……ま、いいか。こちらこそだ、相棒!」



呆れながらも少し嬉しそうな綾人

「よし、二人とも！　いくか！！」

「はい！！」

エリオとキャロに呼びかけ列車内に突入するライトニング隊

突入と同時に大量のガジェットが出迎えた

「いきなり大歓迎だな・・・エリオ！　前衛頼む、突っ込むぞ！」

「はい！」

「キャロとフリードは後ろからの援護を頼む！」

「はい！」　「キュクル〜！」

それぞれに指示を出し攻撃を開始する綾人

狭い車内を縦横無尽に駆け、次々とガジェットを破壊するエリオ、ブースト魔法で補助しながら追うキャロ

綾人は基本的にはエリオとキャロの間に居てフォローする形をとる

「この車両のガジェットは全滅、次の車両にはガジェットの反応はありません！」

「よし、なら上から行こう」

そう言って天井を円形に切り穴を開ける綾人

「二人とも、行くぞ！」

「はい！！！！」

返事を返し、車両の上を走る三人  
九両目を過ぎ、八両目に到着した直後

「!!! 下がれ! エリオ!!!」  
「えっ? うわ!!!」

そのままエリオの襟を引き下がらせるとエリオが居た足元に凹みが出来、巨大な黒いケーブルのようなものが出てきた  
出来た穴から下を覗き込むとさっきまでのガジェットよりも大型の機械兵器がいた

「あれは!?!」  
「新型か!?!」

三人が対峙すると、ガジェットの上部から先ほどのケーブルが飛び出してきた

「散開!!!」

綾人が指示をだし、回避するエリオとキャロ  
着地したキャロにガジェットのケーブルが迫る

「フリード、ブラストフレア!!!」

口元に炎を形成するフリード、その間にもケーブルが近づく

「ファイア!!!」

キャロの合図とともに炎を打ち出す  
だがその炎はケーブルに弾かれ、崖で爆発した

「いくぞ！ エリオ！！」  
「はい！！」

それぞれブーストを施し、ガジェットに突っ込む綾人とエリオ

「おおおおりやああああ！！！！」  
「はあ！！」

同時に振り下ろすが、ガジェットの装甲の硬さに阻まれる

「か、硬い・・・！！」  
「くっ！！」

直後、ガジェットがAMFを展開し、二人のデバイスに掛かっている魔法を打ち消した

「AMF！？」  
「こんな遠くまで！？」

後方にいたキャロにも影響が出ていた

「エリオ！！」  
「え！？ うわあ！！」

突然の綾人の声に驚いた瞬間、横に飛ばされたエリオ

「あ、綾人さん！！」  
「くっ！！！！」

エリオの目の前にはガジエットのケーブルを抑えている綾人の姿があった

ケーブルに殴られる前に綾人に蹴り飛ばされたのだ

「あ、あの・・・!!」

天井からキャロの音がする

「大丈夫だ!! 任せとけ!!」

足を踏ん張りながら耐える綾人

その時、ガジエットの攻撃に気付き飛び越える

直後、ガジエットからビームが放たれた

着地と同時にガジエットが振り向き追撃をかける

「なっ!! くっ!!!!」

その攻撃を弾きながら後退する綾人

攻撃しながらケーブルで殴りかかるガジエット

「綾人さん!!」

「!? ぐあ!!!!」

エリオが叫ぶが、回避しきれずに殴り飛ばされ壁に激突する綾人

「綾人さん!! くそ!!」

ガジエットに突っ込んでいくエリオだが、ガジエットの猛攻に遭い壁に押さえ込まれる

「ぐあー！」

そのまま巻きつかれ、車両外へと放り出されるエリオ

「エリオー！」

エリオが窓の外から落ちていく、それを見ているしかなかった綾人

「てめえ……！！！！！」

怒り、ガジェットを睨みつける綾人

その目は真紅に輝いていた

ガジェットのケーブルが綾人に迫る

「邪魔だー！！！」

綾人は目にも留まらぬ速度でケーブルをバラバラに切り裂いた

それと同時にガジェットに突っ込む

「ふんー！！！」

渾身の力でガジェットを車外へと蹴り飛ばし自身も天井に上がると、蹴られた箇所が少し凹んでいたがまだまだ動ける様子のガジェットがいた

「無駄に硬い装甲しやがって」

そのまま近づこうとする綾人

「綾人さん！ 下がってくださいー！！！」

突然した声のほうを向くと竜召喚を成功させたキャロとキャロに助けられたエリオがいた

「エリオ、キャロ！？ その竜は・・・フリードか？」

「はい！！ 綾人さん、フリードで攻撃しますから、下がっててください！！！」

「あ、ああ」

キャロのはつきりとした言葉に少し驚きながら従い止る綾人目も元に戻っている

「フリード、ブラストレイ！！！」

「ギューオーーーーー！！！」

口元に先ほどとは段違いの炎を集めるフリード

「ファイア！！！」

フリードの口から火炎が吐き出され、ガジェットを襲うしかし、ガジェットはAMFとその装甲により無事だった

「あれで、無事かよ・・・」

「綾人さん、僕とストラダが行きます！！！」

イラつく綾人にエリオから念話が入る

<エリオ？ 分かった。同時にやるぞ？>

<はい！！>

エリオの返事を聞き構える綾人

「バルムンク、カートリッジロード」

「Load cartridge」

三発ロードし、片方を突き刺し、もう片方を腰に据えて魔力を刀身に集中させる

「はぁーーーーー!!!」

キャロの補助を受け、ガジェットのケーブルをなぎ払いながら車両に降り立つエリオ

「エリオ!」

「はい!!!」

綾人に返事を返しカートリッジを二発ロードし構えなおすエリオ

「一閃、必中!!!」

「鉄、豪閃!!!」

「はぁーーーーー!!!」

まず綾人が後ろから横に切り裂く、そしてエリオが正面からストラ  
ーダを突き立て、そのまま縦に斬る

「でええりゃぁぁーーーーー!!!」

ガジェットはそのまま爆発した

「やった!」

フリードの上で見ていたキャラコが安堵の声を出す

「はぁ・・・はぁ・・・や、やった・・・」

「お疲れ、エリオ」

肩で息をするエリオに声をかける綾人

「綾人さん！」

綾人の顔を見て嬉しそうなエリオの頭を掻きながら

「まったく、心配したぞ？」

「す、すいません・・・」

謝るエリオを見た綾人は

「・・・悪いな、謝るのは俺の方だな」

「え？」

エリオが顔を上げると少し暗い顔の綾人がいた

「俺がもつとしっかりとっかしてたら、お前もあんな目に遭わなかった・・・  
・本当にすまん・・・」

そう言っつて頭を下げる綾人

「そんな！ あの時綾人さんが助けてくれなかったら僕、どうなっ  
てたか・・・」



そういいながら俯いてしまふエリオ、だがすぐに顔を上げ

「だから、二人で、いや、キャラやスバルさん達とも一緒に、皆で強くなりましょう!!」

そう提案するエリオ

それを聞き目を見開いた綾人は少し笑い

「皆で一緒に、か。そうだな」

「はい!!」

二人で笑いあう

そこにキャラがフリードを降りて駆け寄る

「綾人さん!! エリオ君!!」

「キャラ!!」

「キャラ、それがフリードの本来の姿か？」

大きくなったフリードを見ながらキャラに聞く綾人

「はい!!」

「そうか・・・頑張ったなキャラ」

頭を撫でながら褒める綾人

キャラも顔を赤くしながら撫でられる

「えつと・・・綾人さんのおかげです」

「俺の？」

首を傾げる綾人にキャラはずっと握っていたものを見せる

「この勾玉から、力を貰った気がするんです。綾人さんの力を・・・」

「そうか・・・」

そんな効力は無いはずと思っていたが、キャロの自信につながると  
思い短い返事をするだけの綾人

その後、ガジエットの全機破壊、スターズによるレリックの確保、  
車両のコントロールの奪還などの報告を受け、スターズはラインと  
共にヘリで中央ラボまでのレリックの護送、ライトニングは現地の  
局員に引き継ぐまで現場待機となった

こうして、機動六課の初出動は終了した・・・

## 第六話 相棒、そして初出動・後編（後書き）

どうも！

さ、後編でした！

綾人君は集中すると周りの音などを遮断してしまいます

そして、バルムンクに人格AIが搭載されました

今まで無かったのかって？実は無かったんですね・・・  
といってもこの小説のデバイスはあまりしゃべりません

今回、綾人君が軽い無双を起こすところでしたが、何とかエリオ復  
帰とキャラの龍召喚で阻止されました

自分の無力さを痛感しながらも強くなる決意を固める大事な話にな  
ったと思います

ここで、綾人君のバリアジャケットについて・・・  
綾人君は「上着を着ただけ」とっていましたが、前の225隊に  
いたときのジャケットは黒いインナーに黒ズボンと軽装でしたが、  
今回の改良ではスバルのジャケットに似ている、長ズボンを履いて  
いるものと考えてください

そして、綾人君がキャラに渡していた勾玉ですが、本編に書いてあ  
った通りこれにはなんの力もありません  
ただのフラグ用と捉えてください

この先、六課の前線メンバーに折を見て各自に渡していく予定です

貰った人はヒロイン候補だ！！

だからって、ハーレムの予定はありませんけどね・・・

では次回予告です！

初出勤から数日、訓練も新しくなり、メンバーも少しずつレベルを上げていく・・・

そんな日の昼食時に綾人は自分の家族について話すことに・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第七話  
新しい訓練、家族について

今回は日常編のため、少し短いです！

第七話 新たな訓練、家族について（前書き）

日常編その？です！

日常編は合間合間にちよくちよく入れていく予定です

## 第七話 新たな訓練、家族について

### 第七話 新たな訓練、家族について

初出勤から数日、訓練も集団訓練から個人訓練にステップアップしたスバルはヴィータと、ティアナはなのはと、そしてエリオ、キャロ、綾人はフェイトと各ポジションに合わせた訓練を行う

訓練場にて・・・

「エリオやキャロは、スバルやヴィータみたいに頑丈じゃないし、綾人みたいに攻撃を捌くことも出来ない、だから反応と回避がまず最重要。例えば・・・」

エリオとキャロに説明しながらスフィアに目配せするフェイトすると、スフィアから魔力弾がゆっくり放たれ、それを回避してみせる

「こつやって、こんなふうに」

説明しながら駆け出す

「まずは動き回って、狙わせない」

フェイトが動き回りことによりスフィアのロックが定まらずに、フラフラとしている

「攻撃のあたる位置に・・・」

障害物の近くに停止する  
その直後スフィアが攻撃をする

「長居しない！」

再び駆け出し、攻撃が障害物に当たる

「ね？」

「「はい！」」

フェイトの説明にすっかり返事を返すエリオとキャラ

「これを低速で確実に出来るようになったら・・・」

そう言って、再び駆け出すフェイト

「スピードを上げていく！」

先ほどよりも鋭くなった攻撃を回避していく  
一度立ち止まりスフィアたちを見る、そしてスフィアたちから一斉  
に攻撃が放たれ、フェイトがいた位置に砂煙が舞う

「「ああ！」」・・・

驚いているエリオとキャラ、無言で後ろを向く綾人

「「こんな感じにね」

「「え！？」」

突然後ろからした声に驚き振り向くエリオとキャラ

そこにはフェイトが笑顔で立っていた

「二人とも、フェイトさんがいた所見てみな」

綾人が指を差しながら二人に言う

そこには地面を削りながら自分達のところに戻り込んだ跡が残っていた

「す、す……」

「今のも、ゆつくりやれば誰でも出来る基礎アクションを、早回しにしてるだけなんだよ？」

「は、はい……」

驚き続きなエリオとキャロ

二人の間を通りながら説明を続けるフェイト

「スピードが上がれば上がる程、勘やセンスに頼って動くのはかえって危ないの」

振り向きながらしゃがみ二人と視線を合わせる

ガードウイング  
フルバック「GWのエリオは、どの位置からも攻撃やサポートが出来るように、

FBのキャロは素早く動いて仲間の支援をしてあげられるように、  
確実に、有効な回避アクションの基礎、しっかり覚えて行こう？」

子供二人の肩に手を置き、丁寧に説明するフェイト

「はい！」

「キョクッ！」



二人と一頭もしつかりと返事を返す

「それじゃあ、まずは低速からやってみようか？」

「はい！」

「フェイトさん、俺は？」

手を挙げながら質問する綾人

「うん、綾人はちょっと違うことをして貰おうかなって  
「違うこと？」

首を傾げる綾人

「『ソニックムーブ』の練習だよ」

エリオとキャラロが訓練している場所からひらけた場所に移動した綾人とフェイト

「綾人の使っていた瞬間移動なんだけど、『能力はすごくいいんだけどやっぱり欠点の部分で問題があるかも』って言うのが私となのはの協同意見」

「『融合爆発』……ですか？」

自分でも一番の欠点を挙げる

「うん……だからそれに代わるものを用意したほうがいいと思う  
だから、バルムンクに人格AIと一緒にソニックムーブを組み込んだんだ」

「へえ……」

説明を受け、バルムンクを見つめる綾人

「ソニックムーブは瞬間移動と違って魔力を使うし速度も落ちるけど、その分瞬間移動の欠点は補えると思うんだ」

フェイトの説明を受けて俯き考え込む綾人

- ・瞬間は障害物が無いことを確認してから初めて使うことが出来る
- ・しかし戦うときはスバル達も敵も常に動いているため使用することは非常に困難になる
- ・それに比べソニックムーブは障害物があっても使用でき、移動中もアクションを起こせるし魔力に余裕があれば連続使用も出来るなどの利点もある

「そこまで考えて下さって、すごくうれいす」

そう言つて頭を下げる綾人

「ううん、私はアドバイスしただけだよ。お礼ならなのはとシャリーに言つてね？」

「わかりました」

「それじゃ、早速始めようか？」

「はい！ お願いします！！」

綾人とフェイトの練習がスタートした

開始から数十分後・・・

基礎からスタートし、簡単な応用を含めた練習が行われ、綾人はそれを一つ一つクリアしていった

「うん、綾人は呑み込みが早いね。少し教えただけでそれだけできるのはすごいよ?」

「はぁ・・・はぁ・・・そう・・・ですか・・・?」

綾人の成長に驚きながらも褒めるフェイトと肩で息をしている綾人。綾人は軽い運動程度なら息を切らさないが、魔力の消費となると話は別である。

今までの訓練でも全身に魔力を流して、ある程度の制御をしていたので疲れるほどの消費はしていない。

しかし使用経験の無い魔法を使った為、魔力の配分がうまく出来ず過度の魔力を消費したのである。

「それじゃ、集合の時間だから行くこうか?」

そう提案するフェイトに従いついていく。

その後、エリオ・キャロと合流し、集合場所へ向かった。

笛の音と共に午前の訓練が終了した。

綾人を含んだフォワード陣全員がぼろぼろに汚れ、荒い息をしていた。

「はい、お疲れ! 個別スキルに入ると、ちよつときついでしょう?」

「ちよつと・・・と言うか・・・」

「その・・・かなり・・・」

なのはの言葉に弱弱しく答えるティアナとエリオ。

「フェイト隊長は忙しいからそうしょつちゅう付き合えねえけど、あたしは当分お前らに付き合っつてやるからな?」

「あ、ありがとうございます」

アイゼンを突きつけながらそういうヴィータに苦笑いしながら答えるスバル

「それから、エリオとキャロは特にだけど、スターズの二人もまだまだ体が成長してる最中なんだからくれぐれも無茶はしないように」  
「……はい」「」

フエイトの忠告に返事をする四人

「成長……」  
「ん？」

じつとヴィータを見つめている綾人

「なんだよ、綾人？」  
「いえ、成長……って……痛って！」

全て言い終わる前にアイゼンが振り下ろされ、頭を押さえる綾人にこぶが出来ていた

「余計なお世話だ!!」

顔を赤くしながら立ち去るヴィータ

「……綾人（君）（さん）……」「」

全員が呆れながら綾人を見ている

「もう、だめだよ？ あんなこと言っちゃあ」

「はい、謝ってきます……」

「あ、綾人君!？」

なのはに咎められ、すぐに立ち上がりヴィータの後を追う綾人  
行動が早い

「にやはは……それじゃあ、お昼にしようか？」

「……はい!」「」「」

なのは、フェイトと共に隊舎へ向かうスバル達

ちなみに、綾人とヴィータとは訓練場を出たところで合流し、ヴィータには今度なにかご馳走する約束で許してもらったと説明した

「あ、みんなお疲れさんや!」

隊舎の前に着くとはやて、ラインが車で出かけるところだった

「はやてとラインは外回り?」

普段と少し違う声色で話すヴィータ

「はいです! ヴィータちゃん!」

「うん、ちよお108隊と225隊にな。スバル?」

ヴィータに答えた後スバルに視線を移すはやて

「お父さんやお姉さんに何か伝言とかあるか?」

「あ、いえ、大丈夫です」

「綾人君は？　なんかあるか？」

手を小さく振りながら答えるスバルからはやては綾人に目をむける

「俺も、特には無いですね。ちよくちよくメールしてるんで」

少し考えながら答える綾人にはやても「そうか」と頷き車に乗り込み、エンジンをかける

「じゃあはやてちゃん、リイン、いつてらっしやい」

「ナカジマ三佐とギンガによく伝えてね？」

「うん」

はやてを送り出す親友二人

リインの元気な声と共に車が出発していった

六課食堂食堂の一角・・・

他のテーブルとは段違いのスパゲティが積み上げられたテーブルで  
フォワード五人とシャーリーが食事をしていた

配置はシャーリーから時計回りに、エリオ、スバル、ティアナ、綾人、キャラの順である

「なるほど、スバルさんのお父さんとお姉さんも、綾人さんのお父さん  
さんも陸士部隊の方なんですネ？」

「うん、八神部隊長も一時期、父さんの部隊で研修してたんだって  
「うちの部隊にも来てたらしいな」

キャラの質問に食べながら答えるスバルと綾人

キャラも「へえ」と納得していた

「しかし、うちの部隊って関係者つながりが多いですよ？ 隊長たちも幼馴染同士なんでしたっけ？」

ティアナが向かいに座っているシャーリーに質問する

「そうだよ。なのはさんと八神部隊長は同じ世界出身で、フェイトさんも子供の頃はその世界で暮らしてたとか」

パンを食べながら答えるシャーリー

「えっと、たしか管理外世界の97番・・・」

「そう」

隣で食べていたエリオに頷き返す

「97番ってうちのお父さんのご先祖様がいた世界なんだよね」

スパゲティを皿に盛りながら言うスバル

「俺と俺の母さんの生まれもそうだよ」

綾人も反対側から盛っていく

「そうなんですか？」

スバルがエリオの皿にも盛りながら「うん」と頷く

「そういえば、名前の響きとかなんとなく似てますもんね？ なのはさん達と」

「そつちの世界には、私もお父さんも行ったことないし、よくわかんないんだけどね」

「結構、いいところだぞ？」

そんな会話をしている中スバルが何か思い出したように

「そつえば、エリオはどこ出身だっけ？」

と質問した

「あ、僕は本局育ちなんで」

「管理局本局？ 住宅エリアってこと？」

「「「！！」「」」」

エリオの回答にティアナ、キャロ、シャーリーの三人が何かに気付いたような顔になり、それに気付き頭に疑問符を浮かべる綾人

「本局の特別保護施設育ちなんです。八歳までそこにいました」

エリオの言葉をスバルが理解した頃に

<バカ！>

ジト目で睨みながら念話をとばすティアナを困った顔で見つめるスバル

それを見たエリオは慌てながら

「あ、あの・・・気にしないで下さい。優しくしてもらってましたし、全然普通に幸せに暮らしてましたんで」

「あ、そうそう。その頃からずっと、フェイトさんがエリオの保護



責任者なんだもんね？」

暗い雰囲気を拭い去ろうと少し明るく話すシャーリー

「はい！ もう物心着いた頃から、いろいろよくしてもらって、魔法も僕が勉強を始めた頃から時々教えてもらって、本当に何時も優しくしてくれて、僕は今も、フェイトさんに育ててもらって思ってます」

思い出を語るように話し出すエリオ

「フェイトさん、子供の頃に家庭のことでちょっとだけ淋しい思いをしたことがあるって、だから、淋しい子供や悲しい子供のこと、ほっとけないんだそうです。自分も『優しくしてくれる暖かい手に救ってもらったから』って」

話し終えるエリオ

それを聞いた綾人は

「母親・・・か」

とつぶやいた

「あの・・・綾人さんのお母さんってどんな人なんですか？」

先ほどの会話の中でほんの一瞬出てきていた単語をきいていたキヤ口が聞いてくる

「俺の母さん？」

「あ、私も気になる〜！」

「私も」

「僕も」

「私もかな」

スバルたちも聞いてくる

「写真データあるけど・・・見る？」

綾人の言葉に全員が頷き、綾人は自分の端末を操作し、一枚の写真データを展開した

「ほい、この人が俺の母さん。『天童 渚』」

テーブルの真ん中に置きながら写真に写っている女性の紹介をする  
綾人

そこには長い黒髪に黒い瞳、小さな子供を胸に抱えながら柔らかく微笑む女性が写っていた

「うわあ〜」

「綺麗・・・」

スバルとティアナの素直な感想

「この男の子、綾人さんですか？」

「ああ、俺が四歳ぐらいの時だな」

キャラが一緒に写っている子供を指しながら綾人に確認する

「ということは、十二、三年前？」

「はい、それぐらいになります」

シャーリーに答える綾人

「ずいぶん前の写真なのね・・・最近のは無いの？」

ティアナの何気ない質問

「これが、一番最新の写真だよ」

綾人はそのまま爆弾を投下する

「母さん、もういないし」

周囲の時間が止まった

綾人は気にせずに続ける

「俺が五歳のときに、病気で死んじまってな」

再び空気が重くなった

ティアナは申し訳なさそうに俯いてしまっている

「ティアナ、気にしなくてもいいぞ？ キャロも」

苦笑いしながら綾人はそう言うがティアナは俯いたまま

キャロも少し泣きそうな顔をしている

自分からふった話なので責任を感じているようだ

「聞かれて困るなら最初から言わない。気持ちの整理はとっくにしている、淋しいと感じることもない。だから気にすんな。いいな？」

そう言いながら隣に座るキャラコの頭を撫でる綾人  
キャラコもコクンと小さく頷く

「ティアナもな？」

そっぴいなながらキャラコとは反対側に座るティアナの頭に手を置く綾人  
ティアナはその手を反射的に払った

「な、なにすんのよ!？」

「なにつて、頭撫でてやろつかなくて」

顔を赤くしながら抗議するティアナに表情を変えずに答える綾人

「いらぬわよ!」

「ティ、ティア・・・落ち着いて。声、大きいよ?」

勢いよく立ち上がるがスバルの言葉に我にかえるティアナ  
周りを見ると他の局員からの視線が集まっていた。会話自体は聞か  
れていないようで、皆「何事か?」といった顔をしている

「うっ!!」

状況を理解したティアナは誤りながら慌てて座りなおす  
それをみた他の局員達も各々食事を再開した

「さて、それじゃ今日の午前の訓練の話でもしよつか?」

何事も無かったかのように話題を変える綾人  
スバル達もこれ以上地雷を踏むまいと賛同した

その後は、各自の訓練内容、感想、反省点などを話し合っ  
て昼食の時間が過ぎていった

午後の訓練は全員でフォーメーションの訓練、そして模擬戦を夜遅くまで行いその日は終了した

## 第七話 新たな訓練、家族について（後書き）

どうも！

というわけで初の日常編でした！

綾人君が紛らわしい行動や発言をするのはもはやデフォです。

さて！ もう一方の小説でもやった企画をやりましょう！ さあ、  
召喚！！

「いや、こっちの小説でその台詞はどうかと・・・」

もう君もノリが悪いな

「ええ！？ 俺のせい！？ えと・・・この小説の主人公、天童綾  
人です。よろしく！」

まったく・・・ウチの主人公達はノリが悪すぎる！！ そんなこと  
じゃコラボなんて出来ないぞ！！

「ええ！？ コラボする気での！？ 身の程もわきまえずに・・・」

いいじゃん！！ 作者のやってみたいことの一つなんだよ！！ ま  
あ、実現は遙か先だと思うけど

「まあな・・・始まったばかりだしな」

それだけじゃない。君はまだまだなのはさんやシグナムさんと模擬戦

しても時間いっぱい戦える程度にしか魅力が無いから。あの時どっ  
ちかにでも勝ててたってもう少し違ってただろうけど・・・

「負けさせるように書いたのあんただろう!? 勝たせりゃよかつ  
たじゃん!」

勝っちゃったら「主人公最強もの」になっちゃうだろ!!

「一応すごいのがあるだろ!? 瞬間移動とかさ!」

瞬間移動は制約が大きい。「当たたら死ぬ」というトンデモ設定だ  
からおいそれとは使えない。

でもま、「使う」「使わない」は君の意思次第なんだけど

「そうなの?」

そう、君が「此処からあそこまで行くために使う」と思うと使える。  
でも、そこに障害物なんかがあると・・・

「ぶつかって死ぬ・・・と。確かにトンデモ設定だな、死と隣り合  
わせの能  
力か・・・」

だからそれを補うための「ソニックムーヴ」なんだよ

「まあ、使えないならそれに代わるものってことか・・・」

この構想は最初からあったんだけどね・・・でも、絶対に使わない  
わけじゃないよ? こういうのは「此処だ!!」って時に使うのが  
いいんだよ

「おお！　なんか主人公っぽい！」

見せ場は大切だからね・・・

さて、話を変えるけど今回、君の出身と家族の話になったね

「突然だな・・・ま、いいか・・・そうだな、って言うか俺、地球出身だったんだ・・・」

そ、まあ名前で気付く人もいただろうけどね。ちなみに海鳴出身ね？でも、君はなのはさんやフェイトさんとかとは子供の頃には出会ってないからね？

「そうなのか？」

そう、ネタバレかもしれないけど君がミッドに渡ったのはなのはさんが魔法に出会う前だから、でも、墓参りとかでちよくちよく海鳴に帰ってたりするけど奇跡的に会うことなく十年過ぎたわけだ

「へー確かに奇跡的だな・・・」

・・・というか、出会ってたら其処から書かなくちゃいけなかったし・・・

「なんか言った？」

いや！！　なんでもないよ！？



ところで、君のお母さんの描写だけど……

「長い黒髪に黒い瞳か……まさに「大和撫子」という奴か？」

まあ……作者的に長い黒髪が好みっていうのもあるけどね……

「ぶっちゃけたな……」

ツインテールならばなお良し!!

「やかましい!! しかし、最後のほうは随分端折ったな……」

まあね……原作でもその時の訓練風景は見れなかったし……その分君とフェイトさんとの訓練と昼食の会話で何とかなったんじゃないかと……

「まあ、それは読者さん次第ということだ」

そうだね……さて！ それじゃあ長々としてしまいましたけどそろそろ次回予告を！

戦闘訓練と事務仕事にも慣れてきた機動六課の新人達

そんななか、隊長陣から出張任務の話が来る

その場所なのはや綾人達の故郷、地球だった……

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第八話 出

張任務?・いざ、海鳴へ!

今回はサウンドステージ01の話になります!

「感想、意見等をお待ちしております！」

主人公、デバイス設定（前書き）

海鳴出張の前に綾人君のプロフィールを公開します！

5月8日、更新しました

7月5日、デバイス設定追加しました

## 主人公、デバイス設定

てんどう  
天童 綾人 あやと

年齢：17歳 身長：175cm

出身：第97管理外世界 地球 日本 海鳴市

六課出向前の所属：陸士225隊

階級：二等陸士

役職：ライトニング分隊ガードウィング

コールサイン：ライトニング05

魔法術式：近代ベルカ式・陸戦Bランク

所持資格：バイク免許、調理師免許

イメージCV：下野紘

フォワードチームサブリーダーを務め、戦闘では他のメンバーのフォローもこなす

幼い頃から厳しい訓練という名の扱きに耐えてきたため、体力と筋力は一級品

母親は綾人が五歳のときに病死、以後父・マークに連れられミッド

へ渡り生活する

戦闘スタイルは完全近接型、その為にミドルレンジ以上の射程は苦手  
髪は黒の短髪で瞳の色も黒（時折紅くなる）

仲間への信頼はかなりのもので、一度信じた相手は絶対に疑わない  
父親から学んだ剣術のほかに、母親の実家である道場の流派の体術  
を扱える

趣味は体を動かすことと読書

歴史小説をよく読み、なかでも『武王』の登場する物語を好む  
武王に対し異常な執着があり、語りだすと止まらない

たまに、誤解を招く発言と行動を取り、考えてることが顔に出やすい  
バリアジャケットはスバルのジャケットを男用にしたようなもの  
父親は管理局最強といわれていて、自慢の父親でもある

デバイス設定

名称：バルムンク

形式：アームドデバイス

待機モード：ネックレス

形態：二刀形態・「ディマカエリDimachairi Form」

対になった二本の刀の形態

基本はこの形態になり、ここから各形態に変形していく  
常に二本の状態で、手放しても消えない

カトリッジは左手の刀に付属

語源は古代ローマの剣闘士「ディマカエリ」

籠手形態・「ヘラクレスHercules Form」

バルムンクの2ndフォルムで

格闘を主に扱うフォルム

リーチは落ちるが、その分の一撃が増している

カトリッジは左手に付属

語源は古代ローマの英雄「ヘラクレス」

綾人の管理局入局時に、マークから受け取った相棒

当初、AIは乗せていなかったが、後に人格AIを搭載され、綾人  
とのコミュニケーションが取れるようになった

六連装オートマチック型カトリッジシステムを使用する

マガジンの色は黒で、常に五つ所持し、綾人の腰にマウントされて  
いる

## 主人公、デバイス設定（後書き）

とりあえずこんなところでしょうか・・・？  
おかしなところがあれば感想などに書いてください

この設定は今後更新予定です

**第八話 出張任務？・いざ、海鳴へ！（前書き）**

今回からサウンドステージ01の話になります  
長いので各ブロックに分けて投稿します



第八話 出張任務？・いざ、海鳴へ！

第八話 出張任務？・いざ、海鳴へ！

フォワード達の訓練がレベルアップし、毎日訓練や事務仕事をする日々が続いていたある日のこと

「異世界に派遣任務・・・ですか・・・？」

事務仕事の報告後、フェイトからそう告げられた綾人

「うん、何も無ければ二時間後に出発するから、準備して屋上へリポートに集合してね？」

「はい、分かりました」

そう返事をして寮の部屋に戻る綾人

「異世界での任務なんて、225隊でも結構行ったな」

準備しながらしみじみする綾人

「マスター、派遣場所は何処なのですか？」

「そういえば、聞いてなかったな・・・ま、後で聞けばいいか」

バルムンクの質問も少し考えただけで思考をやめる

「よし、準備完了！ 行くか」

私服に着替え、手荷物の入ったバッグを持ち部屋を出る

綾人の私服は基本的に黒で固められている

白いTシャツに黒い長ズボン、そして黒いジャケットを羽織る黒ずくめである

へりポートにて・・・

「まだ誰も来ていない・・・と」

へりポートへ到着しあたりを見渡す綾人

「あ、綾人！」

「ん？」

呼ばれて振り向くと私服姿のスバルとティアナがやってきた

「早いわね？」

「そうか？ 大体こんなもんだろ？」

指定された時間の30分前に到着していた

「ふむ・・・」

「な、何よ？」

じつと、ティアナを見つめる

「いや、私服姿が新鮮だな・・・と。似合ってるぞ？」

「あ、ありがと・・・」

普通に褒める綾人に顔を赤くしながらティアナは礼を言う

「綾人！ あたしは？」

「ああ、動きやすそうだし、スバルらしくていいんじゃないか？」

「ふふ〜ん！ ありがとう！」

褒められて上機嫌になるスバル

「あんたはまた、黒一色ね・・・」

「黒はいいぞ、落ち着く」

ティアナの感想につこりと返す綾人  
とそこに

「あ、エリオ〜！ キャロ〜！」

「スバルさん！ ティアさん！ 綾人さん！」

「すみません、お待たせしました」

同じく私服姿のエリオ、キャロが到着した

「まだ時間あるわよ」

「なのはさん達もまだ来てないしな」

「ふう」

ティアナと綾人の言葉に少し安心したように息を吐くエリオ

「お〜、みんなおそろいやね〜」

「あれ？ 八神部隊長に、ヴィータ副隊長」

「おう」

「シグナム副隊長にシャマル先生も」

「ああ」

「は〜い！」

「私もいるですよ〜！」

「リイン曹長も」

声のしたほうに振り向くとなのはやフェイトそしてはやてをはじめとした（ザフィーラを除く）ヴォルケンリッターが勢揃いしていた

「まさか、この全員で出動ですか？」

「えらく大所帯ですね」

エリオと綾人の疑問に頷くはやて

「うん、部隊はグリフィス君が指揮を執って、ザフィーラがしっかりと留守を守ってくれる」

「詳細不明とはいえロスログリア相手だし、所要メンバーは全員で出撃ってことで」

「あと、行き先も・・・ちょっとね」

なのはとフェイトも続けると

「行き先・・・どこなんですか？」

ティアナが質問する

「第97管理外世界、現地惑星名称・・・『地球』」

「「「「！！」「」「」」

「地球・・・ですか・・・」

綾人を含みフォワード全員が驚く

「その星の小さな島国の小さな町、『日本・海鳴市』・・・ロスト  
ロギアはそこに出現したそうや」

そのまま説明を続けるはやて

「地球つてフェイトさんが昔住んでた？」

「うん」

キャロの確認に頷くフェイト

「私とはやて隊長はその生まれ」

「そうや」

なのはの言葉に笑顔で頷くはやて

「私達も六年ほど過ごしたな」

「うん・・・向こうに帰るの、久しぶり！」

シグナムの言葉にしみじみと語るシャマル

「まあ、ある程度の広域捜査になるから、司令部も必要やしな」

はやての追加説明

「つーことで出発だ、準備はいいか？」

「・・・・はい！！」「」「」

ヴィータの確認に返事を返す五人

「それじゃ・・・出発!!」

なのはの掛け声と共にへりに乗り込み出発する

へり内にて・・・

「ちょうどこの間、皆の故郷の話をしたばかりで、なんだか不思議なタイミングですね？」

「あはは！ほんと!!」

エリオの言葉に上機嫌なスバル

キャラやティアナは行き先について調べていた

「えつと・・・第97管理外世界、文化レベル・・・B」

「魔法文化なし・・・次元移動手段なし・・・って、魔法文化無いの!？」

資料をみて声を挙げるティアナ

「ないぞ、魔法なんてゲームや漫画の中のもんだと思ってる世界だしな」

横で聞いていた綾人がそう説明する

「いや・・・なんでそんな世界からなのはさんとか八神部隊長みたいなオーバーSランク魔導師が？」

「突然変異というか・・・たまたま・・・な、感じかな？」

突如会話に入ってくるはやて

「あ……す、すみません!!」

慌てて頭を下げるティアナにはやては「ええよ」と返す

「私もはやて隊長も、魔法と出会ったのは偶然だしね?」

「な?」

なのははやての会話に「へえ」と口を開く綾人を除くフオワード陣

「そういえば、綾人君?」

「はい?」

思い出したようになのはが綾人に声をかける

「綾人君も地球出身だったっけ?」

「はい。もつと細かく言うと海鳴出身です。母が日本人なんですよ」「そうなんか?」

綾人の回答にはやても驚く

『母』という単語が出たときにスバル達の表情が少し変わったが誰も気付かなかった

「お父さんは?」

「父はミッドの出身で、管理局員ですよ。陸士部隊の部隊長やっつます」

「へ……どこの部隊?」

「俺が前にいた、陸士225隊です」

なのは、フェイトの質問に順に答える

「あれ？225の部隊長の名前は・・・確か」

「マーク・グリードですよ」

綾人が父親の名前を公開する

「マーク・・・グリード・・・？」

なのはの顔色が変わる

周りを見るとフェイト、ヴィータ、シグナム、シャマル、リイン、ティアナの六人も固まっていた

「あれ？どうしたんですか、皆さん？」

「おまえ、？あの？マーク・グリードの息子なのか！？」

不思議そうにたずねる綾人に詰め寄るヴィータ

「あの・・・『剣王』と言われている」

「現管理局・・・最強の魔導師・・・」

シグナム、フェイトの二人も驚きながら確認する

「あの綾人さんのお父さんってそんなにすごい人なんですか？」

エリオがよく分からないという風に尋ねる

スバルとキャロの二人も同じ気持ちのようすで横で頷いていた

「とんでもなく有名よ・・・それこそ、『伝説の三提督』並にね・・・」



「そんなに有名なんだな・・・うちの父さん・・・」

周りの様子に苦笑いする綾人

「あれ・・・？でも『グリード』って・・・」

綾人の父親の姓に疑問を覚えるスバル

「ああ、父さん局では旧姓名乗ってるんだよ」

「旧姓？」

「そう、うちの父さん、母さんの家に婿養子ではいって今の本名は『マーク・天童』」

局内ではあまり知られていない情報を普通にカミングアウト

「綾人君が・・・マーク先生の・・・」

「先生？」

しばらく黙っていたなのは眩きを聞きとる綾人

「うん、四年ぐらい前、教導隊での先生だったんだ・・・」

「へえ」

不思議な縁もあるものだと思った綾人

「まあ、父さんのことは気にしないで今までどおりをお願いします」

綾人の言葉に頷くのは達

あくまでもマークはマーク、綾人は綾人であるという意思表示をしっかりと汲み取ったようだ

その後、はやて、ヴィータ、シグナム、シャマルの四人は寄り添うことがあるとこのことで別の転送ポートへ向かった

海鳴市・バニングス家別荘内・湖畔

「はい！ 到着です！！！」

リインの言葉に目を開くフォワード陣

「うわぁ・・・」

「ここが・・・」

「なのはさん達の・・・故郷」

キャロ、ティアナ、スバルの三人が周りを見渡しながら言う

「そっだよ」

「にははは、ミッドとほとんど変わらないでしょ？」

フェイト、なのはもどこかうれしそうに尋ねる

「空も青いし・・・太陽も一つだし・・・」

「山と水と・・・自然のにおいもそっくりです！！」

「キュクル〜！！」

「湖・・・綺麗です！！」

ティアナ、キャロ、エリオの感想に満足そうに頷くなのは

「というか、ここは具体的にはどこでしょう？　なんか、湖畔の」

「テージって感じですが・・・」

「現地の住人の方がお持ちの別荘なんです。捜査員の待機所としての使用を快く許諾していただけたですよ！」

「現地の人・・・ですか・・・ん？」

そこに、一台の車がやってきた

「自動車？ こっちの世界にもあるんだ・・・」

「ティアナ・・・どんな世界を想像したんだ、お前は・・・？」

「あつはは・・・」

綾人の突っ込みに苦笑いのティアナ

そんな会話をしていると車からショートカットの女性がこちらに向かってきていた

「なのは！ フェイト！」

「アリサちゃん！」

「アリサ！！！」

隊長二人がその女性にうれしそうに駆け寄る

「なによもご無沙汰だったじゃない」

「にははは・・・ごめんごめん」

「いろいろ、忙しくて・・・」

「私だって忙しいわよ、大学生なんだから」

「アリサさん！ お久しぶりです〜！」

「ライン！！ 久しぶり〜」

「はいです〜！」

などとなのは、フェイト、ライン、そしてアリサと呼ばれた女性四

人が会話に夢中になり綾人たち新人が軽く空気になりかけているとフェイトが思い出したように

「あ、紹介するね。私やなのは、はやての友達で・・・幼馴染」

「アリサ・バニングスです！ よろしく！」

「……………よろしくお願いします！」「……………」

アリサが軽く自己紹介をすませ、五人も挨拶をする

「そつえば、はやてたちは？」

頷きながらなのはたちに確認するアリサ

「別行動です、違う転送ポートから来ると思っているので……………」

「たぶん、すずかの所に……………」

リンとフェイトの言葉に「そつか」と短く答えるアリサ

「すずかさん……………って？」

「私やフェイトちゃんのもう一人の幼馴染だよ。たぶんまた後で会えると思うから、そのときに紹介するね？」

綾人の質問に軽く答えるなのは

「さて、じゃあ改めて今回の任務を簡単に説明するよ？」

「……………はい！」「……………」

なのはの言葉に全員が仕事モードへ移行する。なのはが海鳴の簡易地図を展開しながら説明を始める

「搜索地域はここ、海鳴市の市内全域。反応があったのは……」  
こと、こと、こと」

地図に印がついていく

「移動してますね？」

「自立型か……誰かが持って移動しているか……」

ティアナと綾人が印を見ながら確認する

「うん、それはまだ分からないけど……」

「対象ロストロギアの危険性は今のところ確認されてない」

「仮にレリックだったとしても、この世界には魔力保有者が滅多にいないから暴走の危険はかなり薄いね」

「とはいえ、やっぱり相手はロストロギア……何が起こるかわからないし、場所も市街地……油断せずにしつかり搜索して行こう？」

「では、副隊長達には後で合流してもらおうので……」

「先行して、出発しちゃおう！」

「……はい！」「……」

なのはの合図で出発する機動六課フォワード陣

出張任務、スタートである

## 第八話 出張任務？・いざ、海鳴へ！（後書き）

どうも！

というわけで、海鳴に出発して捜査を開始するところまでをお送りしました！

地球の車を見た時のティアナの発言はやはり誰もが思ったことでしょう

マークさんが教導隊にいたのは綾人君も第五話あたりで言っています  
マークさんとなのはさんの意外なつながりとマークのすごさをそれ  
なりにお伝えしました

マークさんは「剣王」の呼び名のほかには「魔王」とも呼ばれます・  
・あれ？ 魔王が二人・・・？

最強なのに婿養子・・・ww

旧姓を使うのは公私のけじめのつもりです

では次回予告！！

海鳴での捜索が始まり、綾人達ライトニングは車で捜索をすることに・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第九話  
出張任務？・市街地での捜索

次回、綾人君とある人物との意外な出会いが判明

第九話 出張任務？・市街地での搜索（前書き）

というわけで海鳴編第二段です！

今回、綾人君とあるキャラたちとの繋がりが明らかに！！

## 第九話 出張任務？・市街地での搜索

第九話 出張任務？・市街地での搜索

海鳴での出張任務、スターズは中距離探査、ライトニングはサーチャーとセンサーの設置と二手に別れての搜索をすることになった

『隊長、こちらシグナムだ』

「シグナム？どうしたんですか？」

打ち合わせ中にシグナムからの通信が入る  
シグナム、ウィータは今回ロングアーチの指示で行動するということで、ライトニングはフェイト、エリオ、キャロ、そして綾人の四人でまわることになった

「わかりました、それではこちらにも出発します」

『すまん』

「いえ、それじゃあ、また後で」

そういつて通信を切るフェイト

「それじゃあ、搜索開始だよ？」

「「「はい！」「」」

ライトニング隊の作業は結構広範囲になるため、車で移動していくことだ

「ミッドの町並みとほとんど変わらないですね？」



「ああ、おかげでミッドに行ったときにカルチャーショックをほとんど受けずに済んだな」

海鳴の町並みを眺めながら会話するエリオと地図で設置場所を確認している綾人

「魔法技術以外の分野では他の世界よりも少し進んでるくらいかな」

「へ〜」

綾人の説明を聞きながらもものんびりしている町並みを見ているキャラ

「綾人は、こっちに帰って来たりしてるの？」

運転席のフェイトがそう切り出した

「ええ、年に一度、二度は帰るようになっていますね・・・」

「へえ、主に何してるの？」

フェイトはいつかティアナが踏んだ地雷に足をかけた

「母の墓参りとか・・・ですね・・・」

地図を見ながらも綾人はしつかりと爆発させた

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・」

沈黙、後部座席にいるエリオとキャラの顔も若干暗い

(どろじょうぶ・・・余計なこと聞いちゃった・・・!!)

顔には出ていないが運転しながら頭の中で軽くパニックになっているフェイト

(このまま話を続けるわけにもいかないし・・・でも、ここで別の話題に変えるのも不自然だし・・・)

そんな考えが頭の中でグルグル回っている  
そんなフェイトを現実に引き戻すのは

「・・・トさん、フェイトさん!!」

「は!! な、なに、綾人？」

爆破させた本人だった

「そろそろ昼ですから、どこかで昼食にしませんか？」

「あ、ああ。うん、そうだね、そうしようか」

時計を見ると正午になるところだった

「何処の店もいっぱいですね・・・」

「まあ、昼食時なのは誰も同じだからな」

昼食を摂るため店を探すがなかなかは入れそうな店が無い

「どろじょうぶか・・・」

「うん」と、うなっているフェイトに綾人が

「なら、俺の知ってる店にしましょうか？」

と、提案してきた

「どこかあるの？」

「ええ、でも駐車場がないから近くのパーキングに止めましょう」

近くの集合駐車場に車を止め、綾人の案内で移動していくフェイトたち

気がつけば少し奥まった道になっていた

「こんなところにお店があるんですか？」

「ああ、結構な穴場だ・・・と、ここだよ」

綾人が指をさすとそこには味のある暖簾の掛かっている店があった

「お蕎麦屋さん？」

「はい、俺のお勧めです。エリオには少ないかもしれないけど」

そっぴいながら店に入っていく綾人  
フェイトたちもそれに続く

「こんちわ〜」

「いらっしや〜い！！ ってなんだ、綾か」

「なんだは無いでしょう、なんだは」

暖簾をくぐった途端にそんな会話を始める綾人と店主らしき男性

「ははは！ ところでそちらのお嬢さん方は？」

目線をフェイト達に向ける店主

「俺の仕事場の上司のフェイトさんと、その親戚のエリオとキャロ」  
「」「え?」「」

綾人の紹介に目を合わせるフェイト達

<フェイトさん、話を合わせてください。エリオ達も>

<う、うん>

<<は、はい>>

綾人が念話で話しかけると三人も頷きながら

「はじめまして、フェイト・T・ハラオウンです」

「エリオ・モンディアルです!」

「キャロ・ル・ルシエです」

「おう、そうかいそうかい! 俺はこの店の店主をやってるもんだ。  
よろしくな!」

互いに自己紹介を終え、カウンター席に座る

「おやっさん、いつもの頼むよ、四人分」

「はいよ!」

そう言って蕎麦をゆで始め、付け合せの準備をする店主

「このお店は、お一人で?」

「ああ、俺でまだ二代目だがな」

料理をしながらフェイトの質問に答える

「まあ、この店はついでにやってるもんで、本業はまた別なんだがな」

「へえ……」

店主はそこで思い出したように

「それにしても綾、今日はなんだ、お袋さんの墓参りかい？」

そう聞いてきた。フェイト達の顔色が少し暗くなる

「違うよ、仕事」

「そうかい……ん？」

店主がフェイト達の様子に気づき、綾人も気付いた

「はあ……フェイトさん？」

「え？」

ため息を吐きながら語りかける綾人

「これだけは言っておきます。俺は、聞かれたくないことには答えませんし、言いたくないことは言いません。母さんのことも気持ちの整理はついてますから、そんなに気にしないで下さい。いいですね？」

「……うん……」

フェイトも頷く

「エリオ達も前にそう言ったろ？ 気にするなって」

「は、はい……」

「ふむ……余計なことを喋っちまったかな……」

そんな会話を聞いていた店主が頭を掻きながらそう呟く

「さあ、湿っぽいのは終わりです！ せっかくだから堪能してください？ おやつさん？」

「はいよ、おまたせ！」

綾人の言葉を合図に料理が四人の前に並ぶ

腰の入ったざる蕎麦、薬味、お吸い物、漬物とどれも鮮やかな彩を飾り、三人も目を輝かせていた

「さ、食べましょう！」

「うん！」「はい……」

しっかり手を合わせて

「……いただきます……」

味は、綾人がお勧めするほどでみんなどんどん箸が進み、あっという間に完食してしまった

「……ご馳走様でした……」

「はい、お粗末さん！」

店主も嬉しそうに答える

やはり自分の料理を喜んでもらえるのが何よりの喜びのようだ

「それじゃ、仕事を再開しましょうか？」

「そうだね」

「「はい!!」」

「おやつさん、お勘定」

「はいよ」

綾人が財布を取り出す

「あ、綾人、お代なら私が・・・」

「大丈夫ですよ、たいした金額じゃないので・・・はい」

「おう、確かに！」

「・・・でも・・・」

「男らしいことさせてくださいよ、たまには・・・ね？」

なおも食い下がるフェイトに笑いかける

「・・・うん、じゃあ、お言葉に甘えちゃおうかな」

フェイトも笑いながら頷く

「はい、それじゃ午後からも頑張りましょう！」

綾人の言葉に頷き、店を出て行くフェイトたち

「ふむ・・・綾もいい顔するね～。さて、仕込み仕込みっ」と

店主がそつつぶやきながら店の準備を始める

昼食後、サーチャーとセンサーの設置を終えると日も沈みかけ、空

が紅くなっていた  
ロングアーチからの連絡で搜索指定ロストロギアの所持者が判明し  
運搬中の紛失で事件性はなしという情報が入った  
綾人たちはなのは達と合流するためにある場所へと向かっている

「喫茶店？」

「うん、喫茶『翠屋』。この辺では結構有名なんだけど・・・綾人は知らないの？」

「いえ、翠屋は知ってますよ？ こっち帰ってきたときにはよくお土産に買っていくんで・・・ってなのはさんの実家って翠屋ですか？」

「そうだよ？」

移動中フェイトとそんな会話をしている綾人  
そうこうしている内に、翠屋に到着した

「うわぁ！」

「きれいなお店ですね！」

外観でもう感動しているエリキヤロ

「なのはさん達はもう来てるんですか？」

「うん、そのはずだよ。じゃ、行こうか」

店に入っていくライトニング

店内には甘いケーキの匂いが広がっていた

「こんにちは〜」

「いらっしやいませ！ ああ、フェイトちゃん！ 久しぶり〜」

「お、来たね？」



「待ってたよ〜」

「桃子さん・・・土郎さん・・・美由紀さん・・・お久しぶりです」

フエイトが店の人たちに挨拶をし、エリオたちの方を向く

「えっと、この子達が私の部隊の子達です・・・」

「エリオ・モンディアルです！」

「キャロ・ル・ルシエです！」

「どうも、天童綾人です」

三人が自己紹介をする

「おお、君は！」

「あら、久しぶりね〜！」

「はは、どうも・・・」

近くの席に座っていたなのは達は土郎と桃子の様子に驚いた

「えっと・・・お父さん、お母さん、綾人君と知り合いなの？」

「ああ、たまにうちにケーキを買いに来てくれる子だよ」

「それに、恭ちゃんと試合したこともあるしね」

「お兄ちゃんど〜!?」

「ああ、三年ぐらい前にな」

「そうなんだ・・・」

なのはは意外な繋がりには驚いていた

綾人はというと

「このミルクティーとクッキー、おいしいよ！」

「まあ、喫茶店だからな。うまくて当然だろ」

「あんたもしょっちゅう来るぐらいだもんね？」

「しょっちゅうじゃない・・・帰ってきたときだけだ・・・」

スバル、ティアナとそんな話をしていた

「はい！　なのは、包み終わったよ」

「あ、お姉ちゃん、ありがとう！」

美由紀がケーキの入った箱と紅茶やコーヒーの入ったポットを持ってきた

「それじゃ、お父さん、お母さん、お姉ちゃん。いってきま〜す！  
！」

「ああ、いってらっしゃい」

「いってらっしゃい！！！」

「綾人君も、また来るといい。恭也も楽しみにしていると思うからね？」

「はい、そのときはまたお願いします」

高町家に挨拶を済ませ、コテージに戻る途中

「綾人君、うちの家族と顔なじみだったんだね？」

「そうですね、美由紀さんからは妹が一人外国にいるとは聞いていたんですが・・・なのはさんのことなんですね・・・」

「そうだね・・・魔法のこと言うわけにいかないからそういうことにしてるみたい」

「なんか、知らないうちにその人の家族と知り合いなんですね」

「にゃはは・・・そうだね」

なのは綾人の知らないところでマークと、綾人はなのはの知らないところで高町家とそれぞれ出会い、交流を持っているというおかしな共通点に思わず二人で笑いあっていた

数分後、コテージ到着した

「運転お疲れ！ フェイトちゃん！」  
「うん」

ずっと運転していた親友を労うのは

「あ、お帰り〜！」  
「なのはちゃん！ フェイトちゃん！！！」

コテージの所有者のアリサとともに青紫色のロングヘアの女性が駆けてきた

「すずかちゃん！」  
「すずか！」

なのはとフェイトも出迎えてくれた幼馴染に駆け寄る

「久しぶり〜」  
「すずか・・・元気だった？」  
「写真とメールばかりで、声、聞けてなかったもんね？」  
「だよ〜」  
「大学の方・・・相変わらず？」  
「勉強大変・・・」

と幼馴染達の再会を見ていたフォワード陣は

<ティア、綾人・・・やっぱり隊長たちが普通の女の子だよ？>

<同感・・・どうよ？ちびっ子達的には>

<えっと・・・僕的には、なのはさんもフェイトさんも普通の女性  
ですの・・・>

<そっか、エリオ君は私達の中だと一番昔からなのはさんたちのこ  
と知ってるんだもんね？>

<うん>

<あの人は・・・確か・・・>

<綾人？ どうしたのよ？>

綾人はすずかを見て唖っていた

「？・・・ああ!!」

すずかも綾人を見て声を荒げ、駆け寄って来た

「あなたは!」

「はは・・・どうも・・・」

「すずか？ この子のこと、知ってるの?」

アリサやなのは達も近づくと

「うん! 私の恩人さんだよ!」

「恩人?」

「いや、そんな大したもんじゃ・・・」

「そんなことないよ〜!」

上機嫌のすずか

なのは達ですらなかなかお目にかかれない風景

「すずかちゃん、説明してくれる？」

なのはの要求に頷き語りだすすずか

ここからすずかのナレーションでお楽しみ下さい・・・

あれは去年の八月で、夏休みの真ん中あたりの日・・・私はアリサちゃんと一緒に夕方近くまで遊んでいたの。その日はちょっと遅くまで外にいて、ちょっと急いで家に帰るところだったんだ  
その帰り道、公園を通過して帰ろうとしたら柄の悪い人たちにナンパされたの・・・

「いいじゃねえか、姉ちゃん！俺達と遊ぼうぜ！」

「そうそう、後悔させないからさ！」

「あの、私急いでるんです。通してください！」

その人たちはすごくしつこくて、私もずっと断ってたら

「ああもう、面倒くせえ！いいから連いて来い！」

「いや！放して！！」

「こんな時間にこの辺を通る奴なんかいないんだよ諦めな！」

私の手をつかんで無理やり公園の奥に連れて行こうとしたの・・・

私は怖くなって目を瞑ったそのとき

「あんたら、何やってんだ？」

後ろから声が聞こえて、目を開けて振り向いたら・・・

「綾人がいた・・・と・・・？」

「うん！」

「それからどうなったんですか!？」

「なんだこのガキ! 邪魔すんじゃねえよ!」

「女の人に酷いことしてるくせにでかい顔すんなよ」

「なんだとこの!!」

男の一人が彼に殴りかかると・・・

「ふっ!」

「なに!?! ぐえ!!」

いとも簡単に避けてそのまま顔面を蹴り飛ばしたの・・・

「おい! 大丈夫か!？」

もう一人が呼びかけるけど反応が無かったの  
気絶したみたいだった・・・

「くそ！！ この！！」

もう一人は私から手を離し彼に向かっていったけど

「はっ！！」

「ぐふう！！」

彼はそれよりも早く鳩尾に正拳突きをいれたの

「今ならまだ許してやるから、そいつ連れて消えろ！」

倒れてる男をあごで差してそう告げると

「くそ！！ 覚えてやがれ！！」

そう吐き捨てて去っていった

「名前言わなきゃ覚えられないっての・・・大丈夫ですか？」

彼は冷静に突っ込みを入れた後に私の所に来たの

「はい・・・ありがとうございます！」

「いえ、それよりもこのあたりは物騒ですから、もっと人通りのあ  
るところを歩いたほうがいいですよ？」

「はい・・・気をつけます・・・」

「それじゃ、俺はこれで・・・」

「あ、あの・・・せめてお礼を！」

「結構ですよ・・・それに、これから約束があるんで。じゃー！」

彼はそう言っただけで走り去ってしまった・・・

また会えるんじゃないかって思ってたけど、何回かまた行ってみただけで会えなかった。まるで幻のような人だった・・・

「くくくくくくくくへえ〜」  
「くくくくくくくく」

なのは達はすこしニヤつきながら綾人を見る

綾人は少し顔を赤くして顔を逸らしていた

「あのときは、本当にありがとう！」

「いえ・・・」

満面の笑みで礼を言うすこにすこし小さく答える綾人

「綾人がね〜」

「まさに、王子様だよね〜」

「ロマンチックですよ〜！」

いまだにニヤけながら綾人を見ているティアナ、スバル、リイン

「そ、それよりはやてさん達は？」



強引に話を逸らす綾人

「ああ、はやてたちなら今食事の準備を始めてる頃のはずよ・・・ん？」

アリスがそう説明していると一台の車が入り、中から二人の女性と女の子が降りてきた

「はい！」

「みんな～お仕事してるか？」

「お姉ちゃんズ、参上～！」

なのはの姉・美由紀と後の二人が手を振りながら近づいてくる

「エイミーさん」

「アルフ！」

エリオとキャラロがその二人の名前を呼ぶ

「それに、美由紀さん!？」

「さっき別れたばかりなのに」

「いや～エイミーがなのは達に合流するって言うから。わたしも丁度シフトの合間だったし」

「そうだったんですか・・・」

美由紀の説明に頷く綾人

「エリオ、キャラロ、元気だった？」

「はい!」「」

エイミイとアルフはちびっ子二人と会話をしていた

「二人とも、ちょっと背伸びたか？」

自分の頭とエリオ達との差を見ながら問うアルフ

「どうだろ？」

「少し、伸びたかも・・・」

うれしそうに答えるエリオとキヤロ

<うーん・・・誰かの使い魔かな？>

<エイミイさんじゃないのか？>

<犬耳と尻尾・・・わんこ素体？>

<見た目十歳ぐらい？ ちっちゃくてかわいい！>

スバルとティアナ、そして綾人が念話でそんな会話をしていると

「アルフ～～！」

「フェイト！ フェイト～～！！」

フェイトが遠くからアルフを呼んでいて、アルフも大喜びで走っていった

「元気そうだね？」

「元気！！」

<すぐに分かったな・・・>

<<うん・・・>>

アルフの豹変振りをみてすぐにご主人様が判明された

「ちよつ!?! シヤマル!? それ違つ!?!」

「え? ああ!?!」

「うわ!?! やつちまつた・・・」

「なんだ?」

「この声は・・・はやてちゃんとヴィータちゃんにシヤマル先生?」

「行くわよ!?!」

アリサの合図に全員が声のしたほうに走る

「あゝ皆お疲れやゝ」

苦笑しながら迎えるはやて、シグナム、ヴィータ。その近くではシヤマルが肩を落としていた

「八神部隊長? 何を?」

「いやなゝ夕食の準備をしてたんやけどな?」

「シヤマルが・・・その・・・少しな・・・」

言いよんどんでいるはやてとシグナム

「調味料間違えたんだよ・・・」

ヴィータがはつきりといってしまう

「何と何を?」

「・・・ラー油と醤油・・・」

「何故に!?! 『油』しかあってないし! しかも全然違つし!」

綾人の突込みが更にシャマルを追い詰めていく

「う~~~~ごめんなさい・・・!!」

泣きそうな顔をして謝るシャマル

「ま、まあ被害に遭ったんは一人分だけやから、そのほかは何とか無事や」

何気に決るはやて

「それじゃ、パパつと作るから、待つててな？」

「部隊長自らですか？」

ティアナも驚いているそういうことは自分達の仕事と思っているのだが、はやても料理が趣味だと言った

「はやて隊長の料理はギガウマだからな・・・有難く頂け」

「~~~~はい!」

ヴィータの死語を気にせず満面の笑みで楽しみにしているフォワード四人

「はやてさん、他に何か作るんですか？」

「そうやなあ・・・これ作るだけでも結構時間掛かるしな〜あとはバーベキューするし・・・」

綾人の質問に考え込むはやて  
ちなみにメニューは鉄板焼き

「材料は？」

「まだ少しあるな」

「じゃあ……」

言いながら羽織っていた上着を脱ぎ

「俺が作ってもいいですか？」

そう聞いた

「綾人君が？」

「お前、料理作れんのか？」

綾人の言葉にヴィータは訝しげな視線を送る

「ええ、結構得意です」

「ほんなら、なんか一品お願いしようかな？」

「了解です！」

はやてから許可がおりて少しうれしそうな綾人だった

## 第九話 出張任務？・市街地での搜索（後書き）

どうも！

第二段でした！

高町家とは三年前から、すずかさんとは一年前から出会っていた綾人君でした

しかし、昔の恋愛モノっぽい綾人君とすずかさんの出会いですね・・・試験的に導入したキャラのナレーションによる過去語り・・・どうですかね？

お蕎麦屋さんの店主の綾人君の呼び名は「綾」であっています  
脱字ではありません。

なのはさんの知らないところで綾人君が恭也さんと試合していたり、すずかさんを助けてたり・・・どんだけ裏設定があるんだ！？・・・しかもアリサさんとは出会っていないという始末・・・

蕎麦屋の店主の本業についてはまた別の機会に・・・書いたら良いな・・・

ウチのシャマル先生の料理の腕は崩壊気味です・・・普通に考えたらありえませんか？ ラー油と醤油間違えるなんて・・・

こんなところでしょうか？・・・では次回予告

搜索を終え、一時の休息に入る六課前線メンバーたち・・・

食事の後、皆でお風呂に入ること・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十話  
出張任務？・食事とお風呂と」

！ 次回はサウンドステージ01の目玉？ドキドキお風呂シーンです！

第十話 出張任務？・食事とお風呂と（前書き）

海鳴編その3です！

綾人君の隠れた才能が発揮されます



## 第十話 出張任務？・食事とお風呂と

第十話 出張任務？・食事とお風呂と

「おんなかなか見事な包丁さばきやね〜」  
「どうもです」

はやてが鉄板焼きを作っている横で野菜を切っていく綾人  
その手さばきはかなりの熟練者だとおもったはやてだった

「しかも、M Y包丁・・・」

そう、綾人は荷物の中にM Y包丁のセットを持ち込んでいたのだ

「よくもまあ、もって来れたな・・・」

「出張は初めてじゃないんで・・・」

ヴィータがあきれながら言うも綾人は軽く流した

225隊にいた頃にはいろいろな世界への出張があり、そのたびに  
持参していた

「センサーとかに引っかからないのかな？」

フェイトが少し心配そうだったが

「カモフラージュは完璧ですから」

なぜか自慢気な綾人だった

「ふむ・・・見事な刃だな・・・」

シグナムが一本取りだし、包丁を吟味している

「よく使うものですからね。手入れは何時も丁寧にやっています」  
「へえ」

なのはもシグナムの後ろから覗き込む  
刃はどれも新品のように光っていた

「さて、後は焼くだけですな」

会話をしながらも野菜を切り終え焼く準備に入る綾人

「こつちも終わりました!!」

スバルたちもバーベキュー用の串に野菜や肉を刺す作業をしていた

「それじゃあ、調理開始!!」

アリスの声を合図に熱した網に次々と串を乗せる新人達

「こつちももう少しやね」

「ええ」

はやてと綾人も仕上げに入る

ちなみに綾人のメニューは焼きそばである

少し離れた鉄板ではシャマルが少し不穏な動きをしていたが誰も気付かなかった・・・

「さて、大体の食事と飲み物は行き届いたかな？」  
「うーんと・・・うん、大丈夫！」

はやての言葉にすずかが確認する

「さて、では皆さん！ 任務中にもかかわらず、なんだか休暇みたいになってますが・・・」

「丁度、サーチャーの反応と広域探査の結果待ちということで、少しの間休憩できますし・・・」

「六課メンバーは食事で英気を養って、引き続き任務をがんばりましょう！ー！」

「・・・はい！」「・・・」

隊長陣の言葉に返事を返すフォワード陣

「現地の皆さんはどうぞごゆっくりー！」

「・・・はい！」「・・・」

現地メンバーもスタンバイが完了していた

「で！ せっかくの機会なので、協力者の皆さんと六課メンバー、初対面組みの各自の自己紹介などを・・・」

「では、そっちの端っこから、どうぞ？」

「はいー！」

なのはに促され立ち上がり自己紹介を始めるアリサ

その後、すずか、アルフ、エイミィ、美由紀の順で現地メンバーの自己紹介がされ、フォワード陣の番となり、スバル、ティアナ、エリオ、キャロの四人が済ませ、綾人の番となった

「それじゃ、最後は綾人君ね？」

「はい（大トリか・・・）」

立ち上がりながらいらんことを考えている綾人

「ええと、ライトニング分隊05、エリオと同じくガードウイングの天童綾人です。名前からもお分かりかと思いますが、自分も地球の生まれです。今日任務とはいえこの町に帰ってきて、美由紀さんをはじめとしたなのはさんのご家族やすずかさんと、知り合いが多くて人の縁ってすごいなと思いました」

そう言っって苦笑いする綾人

すずかやなのは、美由紀も少し苦笑い

「父も同じ局員で、自分もいつか父のようになりたいと思って今の仕事に就きました。一応、フォワードメンバーの中では一番年上なのですが、自分は人を指揮するのは苦手なので自分よりも頼れるティアナにその役目を押し付けています」

「そんなことないですよ！」

「そうです！ 綾人さんも頼りになります！！」

エリオとキャロが慌ててフォローしている

「ありがとうな、でもやっぱり戦術のバリエーションもティアナのほうが抱負だ、チームだとサポートのほうが俺の性に合ってるんだよ」

「だが、戦闘力や体力などは断トツでお前が一番だろう？」

「そうだね・・・私やシグナムさんと模擬戦して倒れてもその日のうちにもう回復してたもんね？」

綾人と模擬戦経験者二人の感想他のメンバーも頷いている

「まあ、体力の回復力は異常だとよく言われましたけど・・・と、なぜか自己紹介から脱線してしまいましたね・・・これで終わりにします!」

話を中断し、席に着く綾人

「それじゃ、自己紹介もひと段落ということだ」

「そろそろ、始めましょうか?」

「では皆さんグラスを持つてください!」

「それじゃあ・・・かんぱい!」

「かんぱい!」「かんぱい!」「かんぱい!」「かんぱい!」「かんぱい!」

グラスを掲げる一同食事開始である

「八神部隊長の鉄板焼き美味しい〜!!」

「本当!」

「綾人さんの焼きそばも!!」

「美味しいです!」

「おう、どんどん食べよ!」

フオワード陣は始めて食べるはやてと綾人の料理に舌鼓を打っている

「はい! すずか」

「ありがとうアリサちゃん。あ、エイミィさんそのお肉焼けてます

よ?」

「うん、ほら！ アルフも」

「やつぱ肉だよな〜！」

「これ、お父さん達にもって帰ろうかな？」

現地メンバーも楽しんでいるようだ

「な！？ ヴイータ、それは私が・・・」

「早え者勝ちだ！ 鉄板の上は戦場だからな！！」

「にははは・・・ヴィータちゃん大袈裟だよ？」

「シグナム・・・こつちのお肉、食べますか？」

「ほい、リイン？ 焼けたよ」

「わあ〜ありがとうございます〜はやてちゃん！！」

隊長陣たちは軽く修羅場つていた

そして、綾人たちに怪しい影が近づいていく

「みんな！ これも食べてみて？」

「あ、シヤマルせんせ・・・！！？」

スバルが振り向きながらその声の主を見て固まった

「これ・・・さっきの・・・？」

「ええ、もつたいないから焼いてみたの」

ティアナが指差す『ソレ』は、先ほどシヤマルがラー油と醤油を間違えたありえない料理（？）だった

先ほど何かやっていたのはどうやらこれを焼いていたようだ

しかし、調味料が一種類違っているだけなのになぜかはやてと同じ料理には見えなかった

他の全員がソレを見て驚いていた

「えつと……」

「その……」

エリオとキャロも軽く引いていると

「じゃあ、いただきます」

綾人が皿を受け取り、口に入れる

「おい、綾人!!!」

「早まるな!!!」

ヴィータとシグナムが慌てて駆け寄る

綾人は気にせず咀嚼を続け、飲み込んだ

「……」

「あ、綾人……?」

「大丈夫……なのか……?」

リアクションしない綾人を見て二人は死んだのかと思っている

フォワード陣、現地メンバー、隊長陣も固唾を飲んで見守っている

「ふむ……マズいですね……かなり」

綾人は真顔で感想を言った

「お前……」

「なんともないのか?」

「? ええ、まあマズいですが毒が入ってるわけじゃないですから・

・それに、食べ物を粗末にしたくないですから」

天童家の家訓の一つ

(こいつは・・・大物だ!!)

ヴィータは心の中でそう評価した

おそらくこの場の全員がそう思ったことだろう

シヤマルは真正面から不味いと言われ、膝から崩れ落ちていた  
そんな感じで食事が続いていく・・・

「あれ？ ジュースがもうないかなあ？」

「まだ、5、6本ボトルがあるわよ？」

「湖の水で冷やしてるの」

はやて達の会話をそばで聞いていたティアナが

「あ、じゃあ私達が・・・」

「エリオ、キャロ手伝って？」

「はい!!」

「じゃ、行くか？」

湖に歩いていくフォワード陣たち

「は〜なんか賑やかだね〜」

「本当です」

歩きながら話し始めるスバルとキャロ



「リイン曹長とか、ヴィータ副隊長とかなんか普通にアリサさんたちに可愛がられてるし……」

「ですね」

「でも本当、ああいう賑やかな家族や友達なら、全身全霊で守りたいって思いますよね……」

「そうだな……」

「でしょうね……」

「あの、ですね……その……」

「……ん？」「」「」

不意に立ち止まるキャロ

「私も最近、機動六課も家族みたいだなって思うんです」

「そう？」

「私前にいた自然保護隊も隊員同士は仲良しでしたけど、六課のはソレとはちょっと違って……」

「うん……隊長達が仲いいし、シャーリーさんやリイン曹長とかも気さくな感じだしね」

キャロの感想に自分なりの考えを言うスバル

「アルトさんとかルキノさん……メンテスタッフの皆も優しいです」

「ヴァイスさんなんか、頼れる兄貴みたいなものだし、グリフィスさんもいい人だしな」

エリオと綾人も名前を挙げていく

「もちろん、スバルさんとティアさん、綾人さんも……」

「うふふ……」

「うん、ありがとう」

「サンキューな」

三人も満更でもなさそうに笑う

「あ、ジュースこれですね？」

「たくさ〜ん・・・わぁ！ 水冷た〜い！」

ボトルの入っている袋を掴もうと湖に手を入れるエリオとキヤロ

「ちよつと二人とも、落つこちたりしないですよ？」

「ティアナ、それは振りだな？」

いらん突つ込みを入れる綾人

「ふふ！ 大丈夫です・・・きゃ!？」

「キヤロ!!!」

バランスを崩し落ちそうになるキヤロ

「・・・ふう、間一髪」

落ちる前に引き寄せることに成功した綾人

「あ、ありがとうございます・・・」

「気にすんな、振りのせいだ」

何気に引っ張る

「もう！ それ持って先行ってなさい！ 残りは綾人が持って行く

から！」

ティアナは少し怒りながら指示を出し、綾人に袋を持たせる

「つて、俺一人かよ！」

「男でしょ？ グチグチ言わない！」

綾人の抗議も一蹴りするティアナ

「わかったよ……」

渋々ながらも了承する綾人

「エリオ、キャロ、お前等の袋も貸しな？」

「いえ、大丈夫です！」

「そうか？ 遠慮しなくてもいいぞ？」

「本当に大丈夫ですから」

キャロもエリオも譲らない

責任感の強さは親譲りか……

「なら、二人で一つ持ちな。結構重いだろ？」

少しふらついているキャロにそう進める綾人

「は、はい……」

「エリオ、反対側持ってやんな？」

「はい……ほら、キャロ？」

「うん……ありがとう」

そう言つて会場に戻るライティング隊

「二人も早く来いよ？」

「うん！」

「わかつてるわよ」

そういつて湖にまだ残っているジューズを引き上げているスバルとティアナ

戻ってくる途中スバルがティアナに締め上げられていた

「……なにしてんだ？ あいつら……」

「さあ……？」

「ま、仲がいいのはいいことか……」

「そうですね」

三人は見なかったことにした

「……………ちそうさまー！」「……………」

それから数分、鉄板の上の料理が綺麗さっぱりなくなった  
シャマルが創った料理も綾人が処理を終わらせた

「さて、サーチャーの反応を監視しつつ、お風呂済ませとこか？」

「……………はい！」「……………」

はやての提案に嬉しそうにしている一部の女性陣

「まあ、監視と言ってもデバイスを身につけていれば、そのまま監

視できるし」

「最近はホント便利だよね」

「技術の進歩です!!」

なのはのこの言葉に少し離れていた綾人はまた

「やっぱり発言がオバ・・・」

「綾人君？ 何か言った？」

距離は開いていたはずなのに一気に距離をつめ綾人に笑顔で聞いてくるのは

「い、いえいえ!! 何でもありませんよ!!?」

綾人も少し恐怖を覚えた

他の皆も「黙ってればいいのに・・・」と呆れていた

「あゝでも、ここお風呂ないし、湖で水浴びって季節でもないし・・・」

「・」

「そうするとやっぱり・・・」

「あそこですかね？」

「あそこでしょう!!」

現地のメンバーが何を言いたいのかなのは達も気付き

「それでは、六課一同、着替えを用意して出発準備！」

「これより、市内のスーパー銭湯に向かいます！」

なのはとフェイトの言葉を聞いたスバルとティアナは首をかしげていた

「スーパー？」

「せんとう？」

「ああ、あそこか・・・」

綾人も気付き手を打った

「綾人さん、スーパー銭湯ってなんですか？」

「まあ、大きな風呂屋だな。簡単に言えば」

「へえ〜お風呂ですか〜」

エリオとキャロにも説明する

「とりあえず、着替え用意してきな。スバル達もな」

そう言われ、四人は着替えを取りに行き、なのは達に連れられ目的地へと向かった

「いらつしゃいませ〜！ 海鳴スパクーアツ〜へようこ・・・団体様ですか〜？」

店に入ると受付の人が珍しい団体客をみて一瞬ひるんだがすぐに接客を再開した

「えっと、大人十三人と・・・」

「子供四人です」

はやくフェイトが人数を受付に言う

ティアナとスバルは子供の数を確認する

「エリオとキャロと・・・」

「私とアルフです！」

「うん！！」

リインが手を挙げて言う

アルフもうれしそうに頷いている

「ヴィータ副隊長は？」

「私は大人だ！！」

綾人を睨みつけるヴィータ

「あ、はい！ では、こちらにどうぞ！！」

「あ、お会計しとくから、先行つといてな？」

はやての言葉に全員が「はい」と遠足に来た小学生と引率者みた  
いな会話に綾人は少し苦笑いしていた

しばらく進むと脱衣所の前に到着し目の前には「男」「女」とかか  
れた暖簾がありそれを見たエリオは

「よかった・・・ちゃんと男女別だ・・・」

「まあそりゃな・・・でなきゃ俺が困る」

綾人とエリオがそんな会話をしているとキャロが

「広いお風呂だって、楽しみだね？ エリオ君！」

すぐくうれしそうにしていた

「あ……うん、そうだね。スバルさん達と一緒に楽しんできて？」  
「え……エリオ君は？」

なぜか泣きそうになっているキャラ

「ぼ、僕はホラ！ 一応、男の子だし……」

「うん……あ、ホラ！ アレ！」

キャラがある一点を指差しその方向を見るエリオと綾人

「注意書き？」

「えっと、“女湯への男子入浴は十一歳以下のお子様のみでお願いします”？」

「ふふ！ エリオ君十歳！！」

「なるほど」

「あ！！ えっと！！」

嬉しそうにしているキャラとなぜか納得している綾人

「せっかくだし、一緒に入ろうよ？」

「フェイトさん！！」

キャラに援護しようとして現れたのは二人の保護者でもあるフェイトだった

「い……いえ……あの……ですね……！ それはやっぱり……スバルさん達とか、隊長達とか、アリサさんたちもいますし……」

必死に逃げ道を模索しているエリオだが



「別に私は構わないけど？」

「て言うか、前から頭とか洗ってあげようか？って言ってるじゃない」

「うっ！！」

ティアナとスバルからの入浴許可が下りた

二人もエリオを男として見ていない様だ

「私等もいいわよ？ ねえ？」

「うん！」

「いいんじゃない？ 仲良く入れば？」

アリス、さすが、そしてなのはからもOKが出た

ヴィータやシグナムも気にしないようでエリオはだんだん追い詰められている

「そうだよ、エリオとお風呂は久しぶりだし・・・入りたいなあ？」

フェイトがトドメといわんばかりに甘えた声で言っている

（無意識ですごい技を・・・恐ろしい人だな・・・）

傍で見ていた綾人は苦笑いしていた

「あ・・・あの・・・お、お気持ちは非常に・・・なんですけど・・・えっと・・・あ、ほら！ 綾人さんが一人になっちゃいますし！！」

最後の手段とばかりに隣で傍観している綾人を引き合いに出したエリオ

「嫌味か？ エリオ」

「え！？」

「俺は入りたくても入れないのに、それを棒にするなんて・・・お前にはがっかりだよ！」

「ええ！？」

「俺のことはいいから行って来い！ 勉強して来い！ そして見たことを俺に包み隠さず報告しろ！」

変な力説をしている綾人

というか最後のは非常に危ない

「綾人君・・・？」

「は！？」

呼びかけられゆっくりと振り返る綾人

後ろにはとても怖い顔で睨んでいる女性陣がいた

「エリオ、一緒に入ろう。二人で背中流しっこしよう！」

「え？ うわ！！」

「それじゃ！ また後で！！」

エリオの抱え男湯へかけていく

「あ・・・エリオも行っちゃった・・・」

少し残念そうなフェイトとキャラ口だったが、キャラ口は注意書きを見て何か計画を練っていた

「それで、ここをこうして・・・閉める。開けるときは・・・こう。わかったか？」

「はい！」

エリオにロツカーの開閉方法をレクチャーし服を脱いでいく

「うわぁ・・・綾人さん、何時も思っんですけど、すごい筋肉ですね？」

「ん？ ああ、まあな」

「僕って、やっぱり貧弱なんですかね・・・」

「十歳のクセに何言ってるんだ？ 俺が十歳の頃もそれぐらいだったよ」

「そうなんですか？」

「ああ、筋肉はゆつくりと出来上がっていくから、大丈夫だよ。さて、それじゃ入りますか？」

「はい！」

二人で浴場へと入っていく

「うわぁ・・・広いです」

「エリオ、そこに座りな？」

「え？」

「さっき言っただろ？ 背中流しっこしようって・・・先に洗ってやるよ」

「い、いいですよ！ そんな・・・」

「なんだ、やっぱりスバルたちのほうがいいのか」

落ち込んでみせる綾人にエリオも慌てて

「そ、そんなことないですよー！」

「じゃあ座れ。後で俺の背中も流してもらうつからな？」  
「は、はい!!」

少し照れながら綾人に背中を見せて座るエリオ  
綾人は力をこめてエリオの背中を洗い出す

「い、痛いです!」

「我慢しろ! これも醍醐味の一つだ!」

なんて会話をしている二人は周りから兄弟のように見えたことだろう  
エリオに桶に汲んだ湯をかけ、泡を洗い落とす

「よし、それじゃ交代な?」

「はい!」

今度は綾人がエリオに背中を洗ってもらおう

「こんな感じですか?」

「ああ、いい感じいい感じ」

さっきのお返しのつもりなのか力を込めて綾人の背中を洗っている  
が、綾人には丁度いい力加減だった

「綾人さんって・・・本当のお兄さんみたいです・・・」

背中を洗いながらそう呟いたエリオ

「ん?」

「あ、いえ!! なんでもないです!!」

綾人が振り向くと慌ててごまかす

「……………別にいいぞ？」

「え？」

「俺でよかつたら……………お前の兄ちゃんになってやるよ？」

そう言つて首だけ振り返る綾人

「なんなら試しに呼んでみ？」

「えつと……………に、兄さん……………」

綾人に言われ小さくそう言つた

「ふ……………ああ、いい感じだ」

綾人も少し嬉しそうにしているそんな時だった

「あ、エリオくん!!!」

男湯には似合わない声が響いた

「「え!?!」」

二人同時に声のいたほうに向く

「キャ……………!」

「キャロ!?!」

「えへへ、来ちゃつた」

「キャ……………キャロ……………ふ……………服!?!」

「うん! 女性用更衣室のほうで脱いできたよ? だから……………ホ

ラ！」

「止めなさい」

タオルを取ろうとしているキャロの手を押さえる綾人  
この子はなんてことをするんでしょう

「えへへ・・・」

そしてなぜかにはかむキャロ

「ところでキャロ、こっち男湯だけどどっから来た？」

「女の子も十一歳以下なら男性用のお風呂に入っていって・・・」  
「そういえばそうだったな・・・」

ある種の裏技

「あ、綾人さんの背中流してあげてたの？」

「ああ、交代だな」

「私も一緒にいいですか？」

キャロがそう提案してきた

「ああ、なら二人で頼む」

綾人も快諾した

「に、兄さん！？」

「兄さん？」

エリオが慌ててそう呼んだことに首を傾げるキャロ

「ああ、エリオにそう呼んでもいいぞって言ったんだ」  
「だったら、私も・・・お兄ちゃんって呼んでも・・・いいですか？」

顔を少し赤らめて小さく聞いてくる

「ああ、構わないよ」

綾人も笑顔で承諾する

「ありがとうございます！ お兄ちゃん！」

キャラも飛び切りの笑顔になる

その後、エリオとキャラを子供用の露天風呂に入らせ、一人でのんびりしていたらエリオからのSOSが入った

<に、兄さん！！ 助けてください！！>

<どうした？>

<フェイトさんとアルフが・・・僕を女湯のほうに！！>

二人で入っていたところにフェイトとアルフがやって来てキャラと三人でエリオを連れて行くこととしているらしい

<諦める、俺はそこにいけないからな・・・>

<そんな！？>

<あ、あとで報告よろしく>

そう言って一方的に念話をきる綾人

「はあくいい湯だねえ」

客も少なく、平和そのものという感じの男湯だった



第十話 出張任務？・食事とお風呂と（後書き）

どうも！

エリオ・キャロの兄になる綾人君

そして、シヤマル先生の料理で気絶することなく完食を果たす強靱な胃袋を発揮しました

ラストは少し適当ですね・・・

出張によくMy包丁を持参している綾人君

転送ポートなんかでは危険物を察知するセンサーなどがあると思いますが、裏技の使用により持込を成功させている綾人君・・・ご都合主義万歳！

お風呂での六課メンバーやアリサさん達の発言を聞くと、どれだけ男に対する認識が薄いのかと思われます・・・十歳でも男は男ですよ？

綾人君も健全な男です

というか、あの場面では誰もがエリオの代わりに入りたいと思うはずですよ！！ 思わない奴は野郎じゃねえ！！・・・すいません、取り乱しました・・・

キャロやフェイトさんの行動力にも驚かされますね・・・

綾人君は故あらばエリオをからかいますが、これも一種の愛情表現みたいなものです

綾人君はある程度お笑いの知識があります

というかその時のティアナの発言はどう考えてもフリですね・・・

では次回予告！

お風呂に入り、身も心もリフレッシュした六課前線。

目的のロストロギアが発見され、海鳴での戦闘が始まる・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第十一話

「出張任務？・銭湯から戦闘へ、そして帰還」

次回で海鳴編はラストになります！ というかサブタイトルがダジャレ仕様になってしまいました・・・

**P V 20000件突破記念(前書き)**

皆様のおかげでこの特別編がお送りできました！

## PV 20000件突破記念

信念の刃 PV20000突破記念

どうも！

さあ、なんだかんだでPVが20000件を突破しました！！  
それに伴い、今回特別編として、あとかぎの座談会をロングバー  
ジョンでお送りしたいと思います！

では、召喚！！

「その掛け声、こっちの小説用になんか考えたらどうだ？」

「私たちまでモンスターみたいだね？」

「作者さん、どうにかならんか？」

無理だね！！

「即答だね・・・」

この掛け声をウチの小説の定番にしようと思っている・・・」「どうも！」っていう挨拶並みに

「あとかぎでは欠かしてないもんな・・・流行らないのに・・・」

そんなことは本人が一番わかってんだよ！！

「逆ギレだね・・・」

「ドン引きや・・・」

もういいよ!!とりあえず、各自自己紹介せんかい!!

「しょうがないな・・・あゝ、主人公の天童綾人です」

「教導官でスターズの隊長の高町なのはです」

「執務官でライトニングの隊長のフェイト・テストロッサ・ハラオウンです」

「部隊長の八神はやてです」

というわけで、今回は主人公の綾人君に隊長陣三人でお送りします!

綾人

「しかし、どうするんだ?いきなり始めたけど、テーマなんかあるのか?」

あるよ?それは・・・

綾人・なのは・フェイト・はやて

「「「それは?」「」「」

この小説の没ネタについてです!

フェイト

「没ネタ?」

うん、この「信念の刃」を作るにあたっていろんな設定を最初は作っていました

しかし、作品との矛盾点や作者の文才の都合により没になった設定の一部を紹介しようかと・・・

なのは

「わく面白そうだね！」

はやて

「そやな・・・それじゃ作者さん、早速やるや！！」

了解。では最初の没ネタ

当初、綾人君にはバルムンクのほかに武器を複数持たせるつもりでした

綾人

「ずいぶん突拍子も無い設定だな。なんで没になった？」

いや〜・・・この作品を考えていた頃、作者は「テイルズオブグレイセス」にハマってまして・・・そのパーティキャラたちの武器を使わせたいな〜と

フエイト

「えっと、確かそのキャラたちの武器は」

剣、双銃を仕込んだ両剣、リスレット、ナイフ、曲刀、杖と見せかけた長銃・・・この中の剣と両剣とナイフとリスレットを使わせようかなと・・・

綾人

「欲張りすぎだろ・・・」

うん、さすがに無理があるから没。それで、二刀流にした

なのは

「なんでこっから二刀流になったの？」

一応、個性を出そうかと・・・それに、これは完全に没になったわけじゃないよ？

フエイト

「どういふことかな？」

それは、まだ隠しておきますが・・・ヒントとしてはバルムンクにあります！

これ以上は本編で少しずつ明らかにしていきます！

なのは

「それなら、ここで聞くわけには行かないよね・・・それじゃ作者さん、他の没ネタは？」

次は・・・

綾人君は当初スターズで、もう一人オリジナルキャラを出そうと思っていました！

なのは

「もう一人？」

はい、人数的に綾人君ともう一人いたほうがバランスがいいかと思

ったんですが・・・よくよく考えたら大変なことが！！

フェイト

「なに？」

中盤で一人増えるんですよ・・・スターズって

綾人・なのは・フェイト・はやて

「「「「あ・・・」」」」

だから、そこでバランスがおかしくなるなと思い、もう一人を登場させずに綾人君はライトニングに行って貰いました  
ノリで考えてたらこうなっただんですね・・・

フェイト

「計画性って大切だね・・・」

はやて

「そっちな・・・」

反省してます・・・ついでにそのもう一人は女の子の予定でした  
はいそれじゃ次！

綾人

「ちょっと待て！！さらっと流したな！？」

なのは

「女の子だったの！？てつきり男の子だと思ってたんけど！？」

ええ、ついでにヒロインの一角を担ってもらった予定でしたけど・・・



物語にかませるのが難しかったんです・・・

フェイト

「設定だけでも書いてみたら？」

そうですか？

それじゃ、当初のヒロイン設定です

名前、クリスティ・グラムゼル

出身、ミッドチルダ

年齢、15歳

地上本部に勤務していたが八神はやてのスカウトにより六課に出向  
貴族の家に育ちプライドが高い

その性格も相まって他の前線メンバーとはたびたび衝突している  
髪の色はブロンドで長さは腰まである

使用デバイスは杖型のストレージデバイス「ケルディム」

フォワードポジションはフルバック、戦闘スタイルは広域殲滅型

と、こんな感じでしょうか・・・

綾人

「高飛車系か・・・」

そう、またの名をツンデレという

はやて

「広域殲滅って・・・ウチと同じタイプか・・・」

ええ、なかなかない設定と思ったので・・・

なのは

「どうにか別の形で出せないのかな？せっかくなんだから出してあげなよ」

そうですね・・・出すからには設定とかも少し変わりますが、なんとか考えてみます。無理だったらごめんなさい

綾人

「さて、作者。他には？」

そうだな・・・ついでだから君の初期設定でも見る？

綾人

「俺？」

なのは

「あ！気になる！..!」

フェイト

「私も・・・」

はやて

「ウチもや！」

それでは、綾人君の初期設定です！

天童綾人

出身 地球・日本海鳴市

年齢 16歳

母親は6歳のときに病死、以来父親と共にミッドで暮らす父親の一家は管理局で働くが、綾人は魔力制御がうまく出来ずに父の家族に虐げられる

十二歳のときに母親の墓参りのため海鳴に帰省する際、転送ポートへ行くために立ち寄った空港で火災に巻き込まれ、その際フェイト・テスタロツサ・ハラオウンに救助される

その後、管理局に入局し、父親の部隊に所属していたところに、八神はやての協力のために人材集めをしていたフェイトと再会し、彼女のスカウトにより六課に出向する

フォワードポジションはガードウィングで、戦闘スタイルは接近戦型使用デバイスは二本の刀型のアームデバイス「バルムンク」

と、簡単に纏めるところなるかな・・・

なのは

「あの空港火災に巻き込まれてるね・・・」

はやて

「しかも、ウチやのうてフェイトちゃんからスカウトされとる・・・」

「

フェイト

「年齢も一つ下だったんだね」

なのは

「この父親って・・・あの？」

いえ、マークさんじゃありません

実を言うとマークさんの設定は綾人君の設定が固まってから出来たので・・・このときの父親は名前がちよろつと出るだけの予定でした

綾人

「今では考えられないな・・・フェイトさんとは本部が初対面だったからこんな出会い方してたかもしれないのか・・・」

そうだよ？

なのは

「でも、バルムンクとか、二刀流ってところとかは一緒なんだね？」

ええ、その設定だけはなんとしても残したかったです

あと、地球出身ってところも

まあ、とりあえず今回はこんなところかな？各々、言い残したことはあるかな？

なのは

「うーん私は特に無いかな・・・」

フェイト

「私も・・・」

はやて

「ウチもないな」

綾人

「俺も・・・というかもうネタがないだろ？」

最後の最後でメタ発言するんじゃない！

くそう・・・次回から性格を変えてやるうか！？

綾人

「読者が混乱するから止める！！」

なのは

「もう、ケンカしないの！」

フェイト

「そうだよ、もう終わりなんだから・・・ね？」

むう・・・お二人がそう言うなら・・・

はやて

「そんなら、最後は綾人君に締めてもらおうか？」

綾人

「俺ですか？」

はやて

「そっや、主人公なんやから」

綾人

「わかりました・・・この小説を呼んでくださっている読者の皆様、早くもこの小説のPVが20000件を突破できたのもひとえに皆様のおかげです。今後も作者も一層の努力を重ねてまいりますので、応援のほどをお願いします！」

感想、意見等もどしどしお待ちしております

本編は現在サウンドステージ編の真っ最中ですが、これからもお楽しみ下さい！

それではまた次回！！

綾人・なのは・フェイト・はやて

「「「さよなら」」」

**P V 20000件突破記念（後書き）**

どうも！

いかがでしたでしょうか？

次は50000件あたりで出来たらいいなと思います！

これからもよろしく願います！

第十一話 出張任務？・銭湯から戦闘へ、そして帰還（前書き）

さあ、出張編も最後です！

そして最後にあの男と新たなキーワードが出てきます！



第十一話 出張任務？・銭湯から戦闘へ、そして帰還

第十一話 出張任務？・銭湯から戦闘へ、そして帰還

「ふい〜！！ すっかり堪能してしまいました〜」

「日ごろの訓練の疲れも、ちよつと取れたでしょ？」

「はい……」

スターズがそんな会話をしているときに綾人は

「エリオ、どうだった？」

「え？ なにがですか？」

「女湯……堪能したか？」

意地悪くエリオに耳打ちする

「あ、あの……！ その！」

「あとで報告書作って俺のところに来るように」

そういつて、エリオに牛乳を渡す

「うっ……はい……」

顔を赤くしながら頷くエリオだった

「ほれ、キャラも飲むか？ 牛乳」

「ありがとうございます！ お兄ちゃん……」

笑顔で差し出された牛乳を受け取るキャラ  
そして何気なく放った単語にフェイトが反応した

「キャラ？ お兄ちゃんって？」

「綾人さんのことです！」

「綾人・・・どういうことかな？」

静かに質問するフェイト・・・ちよつと怖い

「いや、呼んでもいいですか？って聞かれたから、いいよって言う  
ただですけど・・・エリオもな？」

「あ、はい。兄さん」

普通に答える綾人とエリオ

「そつなんだ・・・」

それを聞いて安心した様子のフェイト  
そんな時だった

「!!! ケリケイオンが・・・!!」

「クラールヴィントにも反応！ リインちゃん!!!」

「エリアスキャン！・・・ロストロギア、反応キャッチ!!!」

シヤマルとリインも迅速に対応する

「お、お仕事だね？」

「皆、がんばってきて？」

「フェイト、エリオ、キャラ、気をつけてな？」

お姉ちゃんズがそれぞれ声をかける

「私達は先にコテージに戻ってるね？」

「皆、しっかりね！」

「「「「「はい！」「」「」「」

アリサやすすかも車に乗って離れていく

「ティアナ、シャル先生とリイン、それにはやて隊長にオプティックハイド！」

「はい！」

「空が上がって結界内に閉じ込めるわ、中で捕まえて！」

「ほんなら・・・スターズ&ライトニング・・・出動や！！」

「「「「「了解！！」「」「」「」「」

海鳴での任務がスタートする

河川敷の結界内にて・・・

結界内に閉じ込められたロストロギアと対峙しているフォワード陣

「なにこれ！？」

「プヨプヨスライム！？」

「ちよつと・・・かわいいかも・・・」

「キャラはあんなのがかわいいのか・・・」

「兄さん、突っ込むトコそこじゃないですよ！？」

それぞれの感想を言っているが、綾人だけ観点がズレている

「わかってるよ。はやてさん、これ全部本体なんですか？」

『危険を感じると、複数のダミー体を増殖する・・・せやけど、本体は一つや!』

「本体を封印すれば、ダミーも消えるです!」

『ほうつておくと町中に広がりがねん・・・』

『空戦チームは広がったダミーを回収する。そっちはお前等がやれ!』

『すばやく考えてすばやく動く!』

『練習通りで行ける筈だよ!』

「「「「はい!」「「「「「

隊長陣に後押しされて構えるフォワード陣

「それじゃあ、いくわよ!」

「「「「おう!」「「「「

戦闘が開始された

「うおおおりやああああ!」

スバルがナツクルで殴るが効果がなく、少しつぶれただけでだった

「はあああああ!」

「ふん!」

エリオと綾人が切りかかるも表面を撫でただけで傷一つ付かない

「打撃無効!」

「斬撃も無効です!」

「やっかいな・・・」

別のところではティアナとフリードが攻撃していたが効果がない

「こっちの火炎と通常魔力弾も効果なし・・・」

「さすが・・・ロストロギア・・・見た目は可愛いですが・・・侮れません!!」

少し観点が違うキャロだった

「エリオ、アレいけない？ ストラードを地面に刺して電気ビリビリ〜!!って奴」

「やってみますか？」

「いや、効果があるか分からない上に無傷でって指示だ、ダメージコントロールできない攻撃は控えた方がいい」

スバルの提案に乗ろうとしているエリオを止める

「ティアナ、キャロ、俺達でダミーの広がりを止める、本体の特定と封印を頼む！」

「わかったわ！」 「はい！」

「スバル、エリオ！ 分散させないように足止めするぞ！」

「うん！」 「はい！」

各自に指示を出す綾人それをみていたティアナは

「・・・苦手な割にはちゃんと指示できるじゃない・・・」

少し怪訝な目をして呟いた

「ティアナさん？」

「あ、ううん！ なんでもないわ！ キャロ、行くわよ！！」  
「あ、はい！」

雑念を振りほどいて本体特定を始めるティアナとキャロ  
綾人達もそれぞれバラバラにダミーを足止めする

ティアナがダミーに向かって攻撃中、一体のスライムが違った動き  
を見せた

「動きが違う……これが本体！？」

「捕まえます……錬鉄召喚！ アルケミックチェーン！！」

キャロの召喚魔法でスライムを捕まえようとするが弾かれる

「バリア展開！？」

「意外と……出力が……！」

それを見ていた綾人は

「スバル、エリオ！」

「了解！！」

二人に合図し、攻撃を仕掛ける

「エリオ！ アサルトコンビネーション、いくよ！！」

「はい！ スバルさん！」

∩Explosion∪

ストラーダから薬莢が排出される

「マツハキヤリバー！」

┌ Load cartridge ┘

マツハキヤリバーからも排出される

「うおりゃああああ！！！」

二人が同時に攻撃をする

「ストライク、ドライバー！！！」

スライムを覆っていたバリアに罅が入る

「バルムンク・・・久しぶりの二刀奥義・・・行くぞ！！！」

┌ Load cartridge ┘

カートリッジを三発ロードし二刀を振り上げ飛び上がる綾人

「翔破！ 蒼天斬！！！」

そのまま縦一直線に振り下ろし、バリアが粉々に碎ける

「バリア破壊！！ クロスミラーージュ、バレルS！」

┌ Load cartridge ┘

「我が乞うは捕縛の檻、流星の射手の弾丸に封印の力を！」

┌ Get set ┘

ケリユケイオンからのブーストでティアナの封印用の弾丸の色が変わる

「シーリング・・・」  
「「シユート!」!」

スライムに向かって真っ直ぐに向かい動きを止める

「封印成功!」

「ダミーも止まったな」

周辺のダミー体の活動も停止していた

『よし、動作停止確認、完全封印処理しよか。シャマル?』

『はい!』

「あの、すみません! 八神部隊長、シャマル先生」

はやてとシャマルに話しかけるキャロ

「完全封印、私がやってみていいですか? 練習しておきたいんです!」

「うん! いい心がけです!」

キャロの提案に嬉しそうなリンや隊長陣

『じゃあ、ここから見てるから。やってみて?』

「はい!」

そついつてロストログアの封印を始めるキャロ

「・・・えっと、出来ました!」

「じゃあ私が確認するですね?」

「お願いします!」



リインの確認後しっかりと封印が出来ていることを確認された

「キャラロ！」

「あ、お兄ちゃん！」

「やったな？ ちゃんと出来たじゃないか」

そう言つて頭を撫でる

「えへへ……」

キャラロも嬉しそうである

『おし、これにて出張任務終了や！』

「「「「はい！」「」「」」」

はやての言葉を合図にコテージに戻る六課メンバー達

コテージにて

なのはとフェイトはずるか達に帰ることを話し故郷の家族に挨拶を済ませていた時、フォワード陣は後片付けをしていた

「エリオ、それはこっちに入れてくれ？ キャロ、それはそこな」

「「はい！」」

ごみの分別をしっかりと指示している綾人

「あの、お兄ちゃん……その……」

「ん？ どうした？」

片付けも一段落着いた頃にキャラが話しかける

「えっと・・・寄りたいところとか・・・ないんですか？」

「寄りたいところ？」

「今日、お昼にお蕎麦屋さんの店長さんが言った・・・お墓参り・・・とか・・・」

意を決して聞いてみる

エリオも少し不安そうな顔をしている

「・・・」

綾人も黙ってしまふ

「う、ごめんなさい！ 私・・・」

泣きそうな顔になるキャラ

「いいよ、気にしなくても・・・それに、俺だけ勝手なことでも出来ないだろ？」

「でも・・・」

エリオも近づいてくる

「また、別の日に休み貰って改めてくるつもりだし・・・急いで行くところでもない。ありがとうな？ エリオ、キャラ・・・」

二人の頭を撫でる、二人とも顔を伏せてしまっている

「まあ、確かに報告しなきゃいけないこともあるよな・・・可愛い弟と妹が出来ました・・・てさ」

綾人の言葉に顔を上げる二人

綾人はそんな二人に微笑みかける

「あ、みんな、片付け終わったね？」

なのはとヴィータが扉を開けて入ってくる

「掃除も・・・うん！ 綺麗にしてあるな！」

「…………はい！」「…………」

ヴィータの評価も上々のようだ

「今日の連携はいい感じだったよ？」

「まだ甘いところも多いがな・・・」

「でも、しっかりやれてた。この調子！！」

褒めるなのはと厳しいヴィータ

バランスは取れている

「明日も朝から練習だからね？ がんばっていいじゃん。」

「…………はい！」「…………」

しっかりと返事を返すフォワード陣

地球側、転送ポートにて

「それじゃ、お姉ちゃん、アリサちゃん、すずかちゃん」

「うん、がんばってね？　なのは！」

「またメールするからね！」

「気をつけてね？・・・綾人君も、また来てね？　そのときは改めて御礼がしたいから・・・」

「はい、ありがとうございます。すずかさん」

最後の挨拶を済ましたのは達

こうして、海鳴出張任務は終了し、六課メンバーは帰還した

【?????Side】

ミッドチルダの郊外にある森の中、一つの穴があいている一角がある  
その中は、機械で覆われた通路、少し進んだところには裸の人間が  
培養液が入ったシリンダーがあり更に奥の行き止まりになっている  
場所で一人の白衣の男がモニターを眺めていた・・・

「ウーノ、解析は終わったかな？」

男が呼びかけると小さなモニターにスーツを着た女性が映し出される

『はい、ドクター。データはこちらになります』

ドクターと呼ばれた男の下に画面が現れ、あるデータを表示する

「ふむ・・・やはり特筆すべきところはなさそうだね・・・ん？」

データはグラフの画面になったときに男の様子が変わる

「ウーノ、このデータは確かかな？」

『はい、その青年の魔力値を正確に測定した結果になります』

グラフはある程度平均値であるが、ある一点から急激に上がっていた

「丁度、？型を攻撃したあたりからかな・・・？」

『はい、それぐらいになります』

「その時の映像は？」

『こちらです』

男の前に大きなモニターが展開され映像が映し出される

それは、機動六課の初出勤時、綾人がガジェットと戦闘をしている映像だった

モニターには先ほどのグラフが小さく表示され、そのグラフに点が表示された

そのグラフは綾人の魔力値を表しており時間の経過と共に点が動きその瞬間の魔力値を表している

そして、映像はエリオが車外に放り出される辺りに差し掛かる

<エリオ！！！！！！てめえ！！！>

綾人の言葉を合図にグラフも上昇した辺りに指しかかった

「これは……………」

男は映像を止め、綾人に注目する

正確には綾人の瞳を見ていた

「ほう……………これは面白い……………」

綾人の真紅の瞳を見てそう呟いた

「まさか、“この瞳”を持つ者がこの世にまだ存在しているとはね  
！」

そう言うと狂気を孕んだ顔で笑い出す

「はっはっはっは！！ いいな！ 欲しいな！ 彼は！！！」

他のモニターに、なのはやフェイトなどのほかの前線メンバーの映像も映される

「この、『プロジェクトF』の残滓も興味深いが、それ以上に欲しい存在だ！！！」

二つの映像を見ながら言う、フェイトとエリオの映像である

『ドクター？ この青年、それほどの存在なのですか？』

女性・ウーノが少し怪訝そうに聞く

「もちろんだともウーノ！ 何せ彼は……」

芝居がかった動作で言葉を続ける男

「『武王』の力を持っているかもしれないのだからね！！！」

嬉しそうにしながらその名を言い再び高らかに笑い出した

白衣の男、名前を『ジェイル・スカリエッティ』彼の目にはもう綾人しか映っていないかった

【綾人Side】

出張から戻って二日後、その日も午前の訓練を終えた綾人はロビーで読書をしてくつろいでいた

「あれ？ 兄さん？」

「ん？ ああ、エリオ」

「それは？」

エリオが綾人が持っている本を指差し聞く

「これか？ 歴史小説だよ」

「歴史小説？」

「ああ。これは、昔のベルカに本当にいたって言われる一人の男のことを綴ったもので、所謂、伝記物だな」

本を見せながらそう説明する

「へえ……どういう人なんですか？」

「何でも、かつての聖王や霸王でも勝てなかった伝説の存在らしいな。その男の通り名が気に入ってな」

「なんていうんですか？」

気になる言い方をされ先を促すエリオ

「『武王』……って呼ばれたらしい」

綾人はそのまま簡単に解説していく

## 『武王』

・ 古代ベルカ最強の男。『王』の名を持っているが国を治めていたわけではなく、本人は放浪の身だった

・ 己の武を最大限に活かし、あらゆる武器を扱い、あらゆる戦い方をこなしたといわれるその武は、聖王・オリヴィエ・ゼーゲブレヒト、霸王・クラウス・G・S・イングヴァルトをはじめ、ベルカを代表する王達ですら敵わず、彼女らの生涯の目標だったといわれる

・ 名前、年齢は、どんな書物にも残っていないため特定することが出来ず、人によっては老人だったり、青年だったり、さらには年端も行かない子供だったりいわれている

・ その実、どの文献も一貫して武王は義に厚く、強い信念を持っていると記されている

・ 決して卑怯な戦い方をせず、常に正々堂々と真正面からの戦いをする

・ ベルカが戦乱の世に入る少し前にベルカを去り、後の足取りを知るものはいない

・ 他の世界に行ったのか、旅の途中で命を落としたのか、実はベルカに残っていて正体を隠し戦乱の世を戦った等、こちらもたくさん  
の仮説がある

・ 一説では、かの『アルハザード』へも渡った事があるのでは？と  
推測されている

「と、こんな感じだな」

「へえ・・・」

「俺、こういう人って憧れるんだよ。まさに『漢』って感じがして格好良くてさ」



何時もとは少し違う様子の綾人

「なんていうか、この文面からも伝わってくる存在感がいいんだよ」

一人で語りだしている綾人

それほどにこの『武王』に惚れ込んでいるのだろう

エリオも若干引いている

「あ……つと兄さん、そろそろ時間ですよ？」

「ん？ ああ、本当だな。それじゃ、オフィスに向かいますか」

エリオが時計を確認したところ午後の仕事が始まるところだったので二人でオフィスへ向かう

しかし、綾人は歩きながら「武王はここがいい」だの「ここはあまり……」といった話をティアナ達と合流するまで延々と続け、エリオは仕事前にぐったりしてしまった

余談だが、別の日にティアナが、さらに別の日にはスバルやキヤロが同じように読書している綾人を見かけ、綾人の武王談義に付き合わされ、「綾人の前で武王の話は禁止！」と、スバルの一言にティアナ達は深く頷いた……

第十一話 出張任務？・銭湯から戦闘へ、そして帰還（後書き）

どうも！

長かった出張任務もこれで最後です！

最後にすずかとの絡みが短いかな？・・・まあ、今後はあまり絡まないで・・・いいか！！

今回、黒幕であるジェル・スカリエツィが短くですが登場しました

彼の言う武王の力と綾人君の眼の関係とは？

武王というキーワードが、今後どう影響してくるのか？お楽しみに！

ついでに綾人君は武王について語りだすと半日は止まりません

では次回予告！

次なる任務のため、ホテル・アグスタへと向かう綾人達

その途中、事件の黒幕の名前を告げられる

そしてアグスタでの防衛戦、その途中、ティアナの行動に綾人は・

・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十二話

「明かされる敵、ティアナの焦り」

今回はホテル・アグスタで、物語の前半の見せ場です！

## 第十二話 明かされる敵、ティアナの焦り（前書き）

今回は、ホテル・アグスタの話になります

綾人君のイメージＣＶが決まったので、主人公設定を更新しました

## 第十二話 明かされる敵、ティアナの焦り

第十二話 明かされる敵、ティアナの焦り

ミッドチルダ 首都南東地区上空・・・

出張任務から一週間が過ぎ、現在機動六課前線メンバーは新たな任務のために、ヘリにて移動中

そしてはやてから今回の任務等についての説明がされる

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや。これまで謎やったガジェット・ドローンの製作者、及びレリックの収集者は現状ではこの男・・・」

そついうとモニターが展開され男の顔が出る

「違法研究で広域指名手配中の次元犯罪者、『ジェイル・スカリエツティ』の線を中心に捜査を進めてる」

「こつちの捜査は主に私が中心になって進めてるけど、一応皆も覚えておいてね？」

「「「「はい！」「」「」」」

フェイトの追加説明に返事をするフォワード陣

ちなみに、ヘリの中はフォワード五人、隊長陣三人、そしてシャマルとザフィーラ、ラインの十一人とかなりの人数になり、綾人以外のフォワード四人とシャマルは座席に座り、隊長陣三人と綾人は機内の手摺を持って立っている状態で、ザフィーラは狼形態で座席の間に座っている

綾人の肩の辺りにいたラインがはやての近くにより任務の説明に入る

「で、今日これから向かう先はここ。『ホテル・アグスタ』」

画面がある建物に切り替わる

「骨董美術品オークションの会場警備と人員警護。これが今回のお仕事ね？」

なのはが大まかな任務内容を言う

「取引許可の出ているロストロギアがいくつも出品されるので、その反応をレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い」との事で、私達が警備に呼ばれたです！」

「それ以外にも、油断できないこともありますね・・・」

説明を聞いていた綾人がそう告げる

「どんなこと？」

「この手のオークションだと、密輸取引の隠れ蓑になったりするんだよ。他の客がオークションに夢中になってる間に取引が行われたりな。似たような任務が225でもあったんだ」

大物議員ばかりが集まる会議場の警備などをした経験がある綾人  
そのときにある大物議員が裏取引をしているのを発見したことがある

「へえ・・・」

ザフィーラの頭を撫でながら聞いているスバル

「私達は建物の中の警備に回るから、前線は副隊長たちの指示に従ってね？」

「……はい!」「……」

「ああ、それと綾人君?」

「はい?」

返事を聞いた後に綾人に向くのは

「こつという任務経験、あるんだよね?」

「ええ、何度か」

「それなら、出来るだけ皆に指示をしてあげてね? 経験者の意見  
つて結構大事だから」

「わかりました」

「皆も、聞くようにしてね?」

「……はい!」「……」

フォワード陣は返事を返すがティアナだけは複雑な表情をしていた

「ところでシャマル先生? その荷物はなんなんですか?」

「ああ、これ? フフ!! 隊長達のお仕事着!」

綾人の質問にどこかうれしそうに答えるシャマル

その後現地に到着し、隊長陣が着替えるために他のメンバーは早々にヘリを出て集合場所に向かいシグナム、ヴィータと合流した

ヴィータ、シグナムはホテル内、ティアナは正面入り口、スバル、  
リインはエントランス、エリオ、キャロ、ザフィーラは地下駐車場、  
そして、綾人は裏口の見回りをしている

「こちらライトニング05。異常は無い、そつちは?」

『こちらライトニング03、及び04。こちらにも異常ありません』

「スターズはどうだ？」

『こちらスターズ04、こっちも異常なし』

『こっちもリーダーに反応無いみたい』

ティアナに続いてスバルも答える

「オークション開始まで後三時間くらいか・・・」

『このまま何もないと良いんですが・・・』

「まあな・・・でも、さつきも言ったけど油断せずにな、キャロ？」

『はい！』

「エリオもしつかりな？」

『はい！』

<エリオ。ここでキャロに良いトコ見せれば、ポイント高いぞ？>

<に、兄さん！！>

念話で弟に要らんことを吹き込む兄

<ま、良い感じにリラックスしとけよ？>

<うう・・・はい・・・>

念話越しでも顔が赤くなってるのが想像できる綾人だった

「・・・ん？」

何かの気配を感じ、周りを見渡す

「・・・気のせい・・・か？」

すぐに気配が消えたため、気にしないようにしたとき

『ガジェット来ます！ 陸戦？型、機影30、35！』  
『陸戦？型、2 / 3 / 4！！』

アルト、ルキノの報告が入る

『綾人！ 聞こえるな！？』

「シグナム副隊長！」

ロングアーチからの連絡の後すぐにシグナムから通信が入る

『今すぐ防衛ラインを設置する、ティアナ達と合流しろ！ 私とザ  
フィーラ、ヴィータの三人で迎撃に出る！』

『守りの要はお前たちだ。しっかりな』

「了解！！」

返事をした後すぐに正面入り口に駆け出す綾人

『前線各員へ、状況は広域防衛線です。ロングアーチ01の総合観  
戦にあわせて、私、シャマルが現場指揮を行います！』

『スターズ03、了解！』

『ライトニング03、及び04、了解！』

『スターズ04、了解！』

『ライトニング05、了解！』

綾人はエリオ、キャロの二人と合流し、スバル達の下へ向かう

「副隊長たちはもう行ったか・・・」

「そうみたいですな・・・」

「ティアナとスバルが状況を見てみたいだから、俺達はこの防  
衛ラインを張るぞ？」



「「はい！」」

それぞれ配置につくと、爆発音が響いた

「始まったな……」

綾人達の防衛戦が始まる……

始まってすぐ、ケリユケイオンにもクロスミラージユ同様前線の映像が送られ、ライトニングもそれを観戦していた

「すごいな、副隊長たち……」

「はい……」

「この分だと、こつちまで来ることはなさそうですね？」

「だいたい……警戒は緩めないようにな？」

「「はい！」」

気を張りながら注意する綾人

「ん？ ガジエットの動きが変わった……？」

映像に目を戻すと、ガジエットたちが副隊長たちの攻撃を避け始めた

「機械の動きじゃない……有人操作？」

「そんなことが……」

「ティアナ、スバル！ 合流しよう！！」

「ええ！」「了解！」

状況が変わったと判断し、スターズと合流を図る

すぐに合流しラインを作り直した時

「!?!? 遠隔召喚、来ます!!!」

「?????!?!?!」

キャラロが言い終わると紫色の魔方陣が数個展開し、ガジエットの?  
型と?型が現れた

「召喚魔法陣!?!」

「召喚つてあんなことも出来るの!?!」

「優れた召喚士は、転送魔法のエキスパートでもあるんです……」

驚いているスバルとエリオに説明するキャラロ

「なんでもいいわ……迎撃、行くわよ!」

「????おう!?!?!」

ティアナの言葉に気合を入れるフォワード陣  
その中で綾人は

(ティアナ……様子がおかしい……?)

ティアナの微妙な変化に気付いたが、聞けずに戦闘が開始された

「シューーン!!」

ティアナが魔力弾を撃つも?型は悠々とかわす

そして?型がティアナに向かってミサイルを放つがティアナはそれ  
らを迎撃する

「ティアナ!!」

「!?!」

綾人の声に振り向くと三機の?型がティアナをロックしていた

「はあ!!」

放たれた攻撃を叩き落す綾人

「大丈夫か?」

「余計なお世話!」

「な!?!」

声をかける綾人に礼も言わずに駆け出し、攻撃を再開するティアナ

「くっ!!」

しかし、?型は少し傷がついただけで、ティアナも舌打ちをする

『防衛ライン、もう少し持ち堪えててね? ヴィータ副隊長がすぐに戻ってくるから!』

「了解!!」

「守ってばっかじゃ行き詰まります! ちゃんと全機落とします!」

シヤマルの指示を聞いたティアナがそう言い返す

「ティアナ! 今回の目的は防衛だぞ! 無茶するな!」

「大丈夫よ! あんなに毎朝毎晩、練習してんだから!」

綾人の言葉にも耳を貸さない

「エリオ、綾人はセンターに下がって！ 私とスバルのツートップで行く！」

「は、はい！」

「おい、待ってっ！！」

「スバル！ クロスシフトA、行くわよ！！」

「おう！！」

綾人に構わず駆け出すティアナ

「くそっ！！」

「兄さん……」

エリオが心配そうに駆け寄るが綾人はティアナを少し睨んでいた

【ティアナSide】

スバルがウインググロッドでガジェットを引き付けている間にティアナはカートリッジを二発ずつ、計四発ロードし複数のスフィアを展開した

「クロスファイア……」

両手を挙げ、発射体勢に入る

スバルも、それを確認し離れていく

「シューーート！！」

ティアナが腕を振り下ろすとスフィアがガジェットたちに一斉に向かっ  
ていく

「あああああああ！！！！」

さらに追撃をかけ、ガジェットを打ち抜いていくティアナ  
しかし、ガジェットの一機は攻撃をかわし、そのスフィアが先を走  
っているスバルに向かっていく

「！！ スバル！！」

慌てて叫ぶティアナ、スバルも振り返るともう目の前に迫っていた

【スバルSIDE】

(当たる！！)

そう思い目を瞑るが、いつまで経っても痛みが来ない  
恐る恐る目を開けると

「ティアナ！！ お前、何考えてんだ！！」

綾人が目の前でティアナに向かって怒鳴っていた

【綾人Side】

ティアナの指示で渋々下がり、二人の戦いを見ていた綾人

「四発ロードなんて、今のティアナじゃ無理だ！」

ティアナがロードしたのを見てそう叫ぶが、ティアナはそのまま攻撃を開始する

「このままじゃまずい・・・エリオー！」

「は、はい!？」

急に呼ばれ驚くエリオ

「ここ頼む!!！」

「え、あ、兄さん!!！」

短く指示を出しティアナ達の下へ向かう

(間に合え!!！)

綾人が賢明に走る中、ティアナの攻撃は止まらない  
そしてついに、攻撃が外れる

「ちっ!! バルムンク!!！」

☆Sonic Move☆

ソニックムーヴで一気に加速しスバルとスフィアの間割り込み、  
そのまま真つ二つに切り落とす

分離したスフィアの一つはガジェットにあたり爆発する

(どんだけ魔力込めてんだ・・・)

そう思うと同時に怒りがこみ上げていく  
そしてそのまま怒鳴った

「ティアナ！！ お前、何考えてんだ！！」

綾人の目の前には呆然と立っているティアナがいた

「無茶した拳句に、仲間撃つてどうすんだ！！」

スバルもティアナも、おそらかなのは達も聞いたことも無い綾人の怒号が響く

ティアナは何も言えず立ち尽くす

「あ、あの・・・綾人！ 今のはコンビネーションの一つで・・・」

弁解しようとするスバル

綾人はそのままふりかえり怒鳴る

「バカ！ 今の何処がコンビネーションだ！！ 直撃コースだろ！！」

「違うよ！ 今のは私がいけなくて・・・」

なおも食い下がるスバル

「もういい！ お前等二人とも下がれ！！ 味方撃つバカセンターも！ それを庇おうとするバカフロントも！ 必要ない！！」

綾人の言葉にとうとう言葉を失うスバル  
そこに丁度ヴィータが到着した

「綾人！ どうした！？」

「ヴィータ副隊長・・・いえ、バカが二人・・・バカをしただけです・・・」

そう言うとウイングロードを降りる

「お、おい!! どういう・・・」

「詳しいことは、そこに突っ立ってるバカと、目の前にいるバカに聞いてください・・・エリオたちの所に行かないといけないので・・・失礼します」

二人に振り返ることなく走り去る綾人

その後、ライティング三人とヴィータの四人でガジェットを迎撃したが、その間綾人が終始不機嫌顔だったため、エリオとキャロも少し怯えていた

「おし、全機撃墜・・・」

『こちらもだ、召喚士は追いきれなかったがな・・・』

『だが、いると判れば対策も練りやすい』

「だな・・・ん？ ティアナはどうした？」

シグナムたちと連絡しているヴィータがティアナがいないことに気が付き見回す

「はい、裏手の警備に・・・」

「スバルさんも一緒に・・・」

「あそこなら邪魔になりませんしね」

エリオ達が報告するが綾人は不機嫌なままだった

「綾人・・・報告はさっき聞いた・・・まあ、お前が怒るのも判る



けどよ・・・その・・・」

頭を掻きながら綾人に言うヴィータ

綾人の纏っているオーラに若干押されている

「わかってます・・・スー・・・ハー・・・」

深呼吸するとあたりの空気が軽くなり綾人も少し表情を柔らかくした

「すみません・・・落ち着きました」

「あ、ああ・・・」

「二人も、悪かったな・・・」

「いえ・・・」

「大丈夫です・・・」

三人に謝る綾人

自分が周りの雰囲気悪くしている自覚はある

その後、裏手にいたスバルと少し遅れてティアナも合流したが、綾人と目を合わせなかった

数分後に六課の調査班となのは達がやって来て報告をした

「えっと、報告は以上かな？ 現場検証は調査班がやってくれるけど、皆も協力してあげてね？ しばらく待機して何も無いようなら撤退だから」

「・・・はい！」「・・・」

なのはの連絡に返事を返すティアナ以外のフォワード陣

「で・・・ティアナは・・・」

ティアナを見るのは

当然ミスシヨットのことも綾人が報告した

スバル達も心配そうに見守る

「・・・少し、私とお散歩しようか？」

「あ・・・はい・・・」

なのはの提案に少し遅れて返事をするティアナ  
その後二人は森の中に入っていった

「さて、それじゃあ検証の手伝いするか」

何事も無いかのように歩き出す綾人

「あ・・・」

「えっと・・・でも・・・」

エリオとキャロも困惑している

「ほっとけよ・・・」

振り返ることなくそう告げる

「まあ・・・ティアナのことはなのはに任せて・・・皆はお手伝い  
してあげて？」

「・・・はい・・・」

フェイトがそういうと小さく返事を返す三人

「綾人!!」

「ん？」

スバルが綾人に追いつく

「さっきは・・・その、ありがとう・・・」

「ああ・・・」

助けられたことへの礼を言いに来たようで、綾人も短く答える

「でも、さっきのは私が・・・」

「ああん!？」

蒸し返してきたスバルを睨む

「まだそんな事言ってるのか？」

「だって・・・」

「お前がいくら庇っても、ティアナがミスしたのは変わらない。お前が怪我しかけたのは変わらないんだぞ？」

「それは・・・」

綾人の言葉に黙り込んでしまう

「じゃあな・・・」

会話を強制終了させる綾人

「あ、綾人君!!」

「シャマル先生？」

現場検証しているとシャマルが一人の男性を連れてきていた

「紹介するわね？　こちら、時空管理局のデータベース『無限書庫』の司書長の『ユーノ・スクライア先生』」

「はじめまして」

「はぁ……」

唐突に紹介されて、間の抜けた返事しか出来ない

「実は、お連れの方が戻られるまでの間、護衛をしてるんだけど」

「はい……」

「私も現場検証に行かなきゃいけないの。だから、しばらくの間ユ  
ーノ先生の護衛、お願いできる？」

顔の前で手を合わせて聞いてくるシャマル

「はぁ……判りました」

「ありがとう！！　じゃあ、よろしくね？」

「了解です」

お礼を言うと現場検証に戻るシャマル

「改めて、ユーノ・スクライア。よろしくね？」

「はい。天童綾人二等陸士であります！」

互いに自己紹介をする

「君もなのはやフェイトの生徒なんだよね？」

「ええ、そうですが・・・あの・・・」

二人を呼び捨てにしていることに驚いている

「ああ、なのはやフェイト、それにはやてとは幼馴染でね・・・十年前からの」

「ああ、なるほど・・・それで・・・」

綾人の聞きたいことを察し、説明するユーノ

「あ、ユーノ！」

後ろから声がしたので振り返ると

「フェイトさん」

「フェイト！ 久しぶり！」

フェイトがいた

「うん、久しぶりだね・・・ユーノ」

どこかうれしそうにしているフェイト

「ユーノ先生のお連れの方が戻られるまでの間、護衛を頼まれました」

とりあえず説明する綾人

「そうなんだ・・・なら、それは私が代わるから、綾人は手伝いに戻ってくれるかな？」

「了解です。それじゃユーノ先生、自分はこれで」

「ああ、助かったよ。綾人君」

一礼し二人から立ち去る綾人

その後、現場検証は滞りなく終わり、帰還したところには日も暮れかけていた

「皆お疲れ様！　じゃあ午後の訓練はお休みね？」

「明日に備えてご飯食べて、お風呂でも入ってゆっくりしてね？」

「……はい!!」「……」

なのは、フェイトの二人と隊舎入り口で別れ、寮へと向かう途中でイアナが立ち止まる

「スバル……私、今日これからちよつと一人で練習してくるから・

……」

「自主練？　私も付き合おうよ!」

「あ、じゃあ僕も……」

「私も……」

「……」

スバルに続き、エリオとキヤロも参加を表明するがティアナはため息を吐きながら振り返る

「『ゆっくりしてね?』って言われたでしょ?　あんた達はゆっくりしてなさい?　それにスバルも……悪いけど、一人でやりたいから……」

そういつと歩き出すティアナ  
スバル達も見守るしかなかった

「……………それじゃ、また明日な？」

気にすることなく帰っていく綾人

その日の夜……

日も落ち、辺りには月明かりしかない時間、隊舎の傍にある林の中に光の玉が浮かんでいた

「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」

その光の中心には訓練着を着、疲労したティアナがいた

「まだ……まだよ……」

夜遅くまで、一人での自主練をしていた  
そんなティアナに一つの影が近づいていた

「こんな時間までよくやるな……」

「え……?」

不意に声をかけられ振り向く

「綾人……?」

「あぁ……」

そこには綾人が呆れ顔で立っていた

「なに・・・しにきたのよ・・・？」

「そうだな・・・」

ティアナの質問に少し考え込みだした答えは

「バカに説教しに来た・・・かな？」



## 第十二話 明かされる敵、ティアナの焦り（後書き）

どうも！

ティアナのミスショットとそれに対する綾人君の怒りでした・・・  
本来ならヴィータが止めるはずの流れ弾を綾人君に処理してもらいました・・・二次小説では結構ありがちな・・・？

綾人君は怒ることはありませんが、怒鳴ることは基本ありません・・・  
ティアナの独断先行にも、最初は後でしかる程度だったのですが、スバルを危険にしたということ、さらにはそのスバルがティアナを庇ったことについてキレてしまいました  
そして、1度怒ると長時間その怒りを引っ張り、さらには「バカ」を連呼します

ヴィータさんも本編で言ってますよ？「普段おとなしい奴が怒るとすごい」って

綾人君はザファイラさんが喋れることを知っています

原因としては一人で読書をしていたところ、突然狼形態のザファイラさんに声をかけられ最初は驚いたが、すぐに打ち解け、ザファイラさんに軽く二時間ほど武王について語りました

ここで綾人君がユーノ先生に会っているのには意味があります

今後の展開次第ですが・・・

綾人君は、基本的に年上にはたとえ相手が良いと言っても「さん」

をつけます

では次回予告！！

度重なる無茶を続けるティアナ

それに危機感を覚えた綾人の説教とは・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第十三話

「ティアナの思い、なのはの思い」

次回、綾人君の過去が少しだけ出ます！

第十三話 ティアナの思い、なのはの思い（前書き）

大変長らくお待たせしました！

今回はある種の見せ場です！

## 第十三話 ティアナの思い、なのはの思い

第十三話 ティアナの思い、なのはの思い

「説教・・・？」

「ああ・・・説教だ」

訝しげに見るティアナを鼻で笑いながら答える綾人

「上官の指示もまともに聞けないバカには、必要だろ？」

「!?!」

ティアナの目が変わる

「昼間、命令を無視して危険な戦い方したのに、その日のうちにまた命令無視か？」

「・・・あんた達には迷惑はかけないわよ・・・」

「すでに迷惑だっと思って思わないのか？」

小さく答えるティアナに少し大きな声で返す綾人

「お前一人の行動が、俺達にどんな形で返ってくるのか・・・わかっ  
つてんのか？」

「それは・・・わかってるわよ・・・」

「わかっ  
てないよな？」

ティアナの言葉を即座に否定する

「わかっ  
てんなら、こんなことしない筈だしな」

「わかってるって言ってんでしょ!!」

綾人の言葉を遮るように叫ぶ

「私は自分が許せないの！ 才能の無い自分が！！ そのせいでスバルを危険にした自分が!!」

「才能を言い訳にするな・・・」

「あなたに分かるの!? 才能の無い奴の・・・凡人の気持ちか!!」

「・・・」

「凡人の私は、このぐらいやらなきゃ、強くなんなれないのよ!!」

「少なくとも・・・」

ティアナの叫びをかき消すように喋りだす綾人

「今、力を得ても・・・お前には使いこなせない・・・」

「え・・・?」

「必要以上の力は、お前自身を滅ぼす。断言できる」

「そんなの、やってみなくちゃわからない!!」

「俺にも経験がある・・・」

綾人が言うつとティアナもハツという表情になる

「昔、お前みたいに強くなりたいてって思って・・・無茶をやって・・・暴走したんだ・・・」

綾人から語られる自身の過去

「今のお前からは、昔の俺と同じものを感じた・・・」

「……………」

「だから、止めに来た……そうなる前に……」

少しずつ近づく綾人

「……………のよ……………」

「ん？」

「私は……………どうしたらいいのよ!?!?」

目に涙を溜めながら叫ぶティアナ

「……………簡単だろ……………」

そつとティアナの頭に手を置き撫でる

「話せばいいだろ？」

「誰に……………」

「誰でも良いんだよ……………なのはさんやフェイトさんや副隊長達……………」

そついいながらも撫でるのをやめない綾人

ティアナも今回はされるがままである

「それが言いづらいならスバルやエリオにキャラ……………俺だっ  
ている……………」

ティアナが顔を上げると綾人も少し笑いながら続ける

「誰かに頼るのは、恥ずかしくないぞ？ むしろ、頼れ」

「頼る……………?」

「ああ、仲間なんだからな？」

「仲間……」

ティアナは綾人の言葉を一つ一つ噛み締めていく

「ティアナに出来ないことは、俺や他の皆がやる。逆に俺達で出来ないことは、ティアナに任せる……それがチームなんじゃないのか？」

ティアナを真つ直ぐに見つめる綾人

「お前は一人で戦ってるわけじゃない……お前の前も後ろも……俺達で守るんだからな？」

ティアナも綾人をみつめる

それと同時になのはに言われたことを思い出す

(団体戦での私のポジションは、前後左右、全部が味方……)  
「ティアナはさ……」

ティアナを座らせ、自分も座りながら言葉を続ける綾人

「自分のこと『凡人』とか言うけど……それ、間違ってるぞ？」

「え……？」

「俺もティアナも他の皆も、今はまだ原石なんだよ……」

「原石……」

「そう。凸凹だらけで、価値も見出せない……だけど、磨いてく内に輝く部分が見えていくんだ。それが、そいつの価値、そいつにしかない『才能』だ」

「才能……」

「俺にも、エリオにも、キャロにも、スバルにも、そしてティアナにもそれがある・・・皆それぞれ違うからこそ、必要だと思っただから・・・」

そう言うと再びティアナをみつめる

「俺達には、このフォワードチームはティアナがいなきゃいけないんだ」

「綾人・・・」

ティアナの目に光が戻る

「そうね・・・自分に無いものを他人と比べても、意味無いんだものね・・・」

そう言い立ち上がる

「どうするんだ？」

「なのはさんに・・・相談してみる・・・強くなりたいのは・・・確かだから・・・」

「そっか・・・」

綾人も同様に立ち上がる

「でも、それは明日にしな？ もう遅いし」

「ええ・・・そうね・・・」

振り返るティアナはどこかすつきりした顔になっていた

「遅刻すんなよ？」



「あんだこそね？」

軽口を叩けるほどに回復したようだ  
そのまま歩き出す二人

「あ、そうだ・・・ティアナ、これ・・・」

綾人は不意に立ち止まり、ティアナにあるものを渡す

「これって・・・キャロにあげてた・・・」

「そ、勾玉。お前の分」

ティアナの手に橙色の勾玉が乗せられた

「昨日出来てな、渡すタイミングが無かった。いらなきゃ捨てる」

「これ・・・あんたの手作り？」

「ん？ ああ、削って、色塗って、乾かすだけなんだけどな」

「ふーん・・・」

説明を聞きながら勾玉をみつめる

曲線をしっかりと出し、細部にまで拘っていた

「訓練の後、何時も削ってたの？」

「ああ、暇つぶしに」

「暇つぶしって・・・」

綾人の言葉に少し呆れ気味のティアナ

「ま、ありがと・・・」

「ん」

その後、ティアナを寮に送った綾人

次の日

ティアナはなのはと話し合い、なのはもティアナの思いを受け止め、特別メニューを組んだ

内容は通常の訓練や仕事に差し支えない程度のもを用意し、ティアナもそれを確実にこなしていた

それからというものの、ティアナの動きが確実に良くなっていき、スバルだけじゃなくエリオやキャロとの連携もこなせてきた

どこか吹っ切れた様子のティアナを見たスバルも大変喜んだが、それ以上に驚いたのは綾人がティアナと普通に会話をしていたことだった

アレだけ怒鳴ったり無視したりしていたのに何事も無かったかのようには談笑しているのを見、少し複雑な気持ちになったのだった

さらにその翌日、午後の訓練が少し早く終わりなのはがフォワード陣を集めた

「皆、悪いんだけどこれから少しだけ時間いいかな？ 話があるんだ……」

「話……ですか？」

「うん……着替えて、ロビーに集合ね？」

そう言うと、なのはは立ち去る

「なんだろ？」

「さあ……」

首を傾げるエリオとキャロ

「ま、とりあえず着替えようか？」

「そうね……」

綾人とティアナの提案に更衣室で着替え、ロビーに向かった

ロビーにて……

「あ、皆お疲れや」

「お疲れ様……」

「はやてさんに、フェイトさん……それに副隊長たちに、シャマル先生にシャーリーさん？」

ロビーに入るとなのはの他にはやてやフェイト、さらにヴィータ、シグナム、シャマル、シャーリーがいた

「あの、なのはさん……話って？」

「うん……私の昔の話を……少しね……」

少し暗い顔をしているなのは

「なのはさんの……」

「昔の話……」

スバルとティアナが顔を見合わせる

なのははそのまま話し始める

「昔ね、一人の女の子がいたの・・・その子は本当に普通の女の子で、魔法なんて知りもしなかったし、戦いなんてするような子じゃなかった・・・」

モニターに映像が映し出される

そこには友達と学校に通い、普通に授業を受ける、ごく普通の女の子がいた

「これ・・・」

「なのはさん・・・ですか？」

「そう・・・友達と一緒に学校に通って、家族と一緒に幸せに暮らして・・・そういう一生を送るはずだったの・・・だけど、事件が起こったの・・・」

スバルとティアナにシャーリーが答え画面を切り替える

そこにはレイジングハートをかざし、とてつもない魔力を放出しているのはがいた

「魔法学校に通ってたわけでもないし、特別なスキルがあつたわけでもない・・・偶然魔法に出会って、たまたま魔力が大きかった・・・それだけで、たった九歳の女の子が魔法に出会って僅か数ヶ月で、命がけの実戦を繰り返したの・・・」

映像には特大砲撃をしている映像ともうひとりの女の子と戦ってる映像になった

「フェイトさん・・・？」

「うん・・・私は当時、家庭環境が複雑でね・・・なのはとも、あるロストロギアを巡って、敵同士だったんだ・・・」

綾人に語るフェイトの目はどこか淋しげだった  
映像にはフェイトが吊るされ、女性に鞭で叩かれていた

「この事件の中心人物は、私の本当の母さん……その名前から、  
プレシア・テストロッサ  
『PT事件』もしくは『ジュエルシード事件』って呼ばれてる……」

「  
そう説明すると今度はなのはがフェイトに向かってスターライトブ  
レイカーを放つ映像になる」

「収束砲！？　こんな大きな！」

「九歳の……女の子が？」

「ただでさえ大威力砲撃は体にすごい負担が掛かるのに……」

エリオ、スバル、キャロも驚いている

ティアナと綾人は声も出せずに啞然としている

「その後もね……そんなに時間がたたずに、事件が起こった……」

映像が切り替わり、なのはが攻撃を防いでいる後ろからヴィータが  
攻撃をしている映像になる

「私達が深くかかわった……『闇の書事件』……」

はやてが小さく説明する

映像はヴィータの攻撃でなのはのバリアジャケットが破壊されていた  
後ろにいたヴィータも顔を伏せていた

「襲撃戦での撃墜未遂と、敗北・・・それに打ち勝つために私達が選んだのが・・・」

「当時はまだ安全性が危うかった、『カートリッジシステム』の使用・・・」

なのはに続くように説明するフェイト

「体への負担を無視して、自身の限界値を超えた出力を無理やり引き出す……フルドライブ『エクセリオンモード』」

なのはが黒い騎士甲冑を纏った女性と戦っていた

五人は驚きで口が塞がらない

「誰かを守るため、自分の思いを通す為の無茶を高町は続けた・・・」

「そんな事を続けてたら体に・・・」

「ああ、負担が生じないわけが無かった・・・」

綾人の言葉をそのまま続けるシグナム

「それは、私達が入局して二年目の冬・・・異世界で捜査任務があつて、私とヴィータちゃん、それに部隊の仲間達と出かけて、その帰り道・・・」

「そこに現れた未確認体・・・普段のなのはなら、何の問題も無く落とせた相手・・・だけど・・・」

「溜まつた疲労と、続けてた無茶が・・・なのはちゃんの動きを一瞬鈍らせた・・・」

なのは、フェイト、はやてが説明するが顔を伏せてしまい先が続かない

「その結果が・・・これ・・・」

シャマルが映像を切り替える

そこには全身に包帯が巻かれ、眠っているのがいた

「このとき、私は『もう飛べないかも、最悪歩けないかも』って言われて・・・すごく怖かった・・・」

なのはが俯きながら語りだす

「私が無茶したから・・・皆に迷惑かけて・・・心配させて・・・」

顔を上げるなのは目には少し涙が溜まっている

「だから・・・皆にも、同じ思いして欲しくないんだ・・・『絶対に、皆が元気に帰ってこられるように』それが・・・私の教導の理由・・・」

「なのはさん・・・」

全員がなのはをみつめている

「それを、皆に知っていて欲しかったんだ・・・」

なのはの話聞いた後、綾人は一人寮近くで海を見ていた

「あ・・・綾人君・・・？」

「ん？ああ、なのはさん・・・」

綾人が振り返るとなのはが立っていた

「何してるの？・・・こんなところで・・・」

「まあ、眠れなくて・・・」

「そう・・・隣、いいかな？」

「ええ、どうぞ」

そう言っつて場所を開けるとなのははそこに座る

「なのはさんに・・・あんな過去があつたなんて・・・驚きました」  
「うん・・・」

それだけ言っつと黙っつてしまふ二人

「ティアナが、私のところに相談に来たときに聞いたんだけど・・・綾人君が、ティアナを止めてくれたんだよね？」

「はい・・・昔の俺と被る部分があつたので・・・」  
「昔つて・・・？」

「局に入局して、225隊に配属してた頃、その時の俺ももっと強くなりたいつて思つて、いろいろと勉強をして、自己ブーストを試したんです・・・」

休みの日にマークに黙つて挑んだ自己ブースト

自身の限界を超えた魔力を制御できず、その結果の暴走

マークが気絶させることで大惨事を免れ、その日、綾人は初めてマークに本気で怒られた。

「『お前の望む力は、何も守れない。むしろ全てを失うことになる』つて言われました・・・正直、堪えましたね・・・だから、あのとときのティアナが、俺みたいな答えに行き着かないように・・・『全てを失わないように』つて思つたんです・・・」  
「うん・・・」



なのはも静かに頷く

「綾人君も同じなんだよね・・・自分の失敗を他の人にさせないよ  
うに・・・って」

「そうですね・・・」

「マーク先生が言ってた・・・『失敗を後悔せずに、それを糧に前  
に進め』って・・・私が無茶をして大怪我をしたこと、その失敗を  
繰り返さないために、そして、他の誰にも同じことを起こさせない  
ように育てるのが、私の教導なんだって・・・」

一言一言を噛み締めるように言うのは

「あの・・・どうして、俺にその話を？」

何気なく聞いてみる綾人になのはは

「どうしてかな・・・？ 同じ先生に習ったもの同士・・・だから  
かな・・・？」

と、少しからかうように笑う

「あの・・・父さんから他に何か教わりました？」

「うん！ 色々教わったよ・・・」

失敗してものすごく怒られた事、難関をクリアして褒められたこと、  
なのはから聞かされるマークは綾人の知らない部分もあり、それを  
知り嬉しいと思った反面、少しだけ淋しく感じた綾人だった

「あ・・・結構話し込んだね・・・？」

時間を確認するともう遅い時間になっている

「本当ですね・・・送って行きますよ？」

「にははは！ 大丈夫だよ？ すぐそこだし・・・」

「それでも、女性を一人で帰すのは忍びないので・・・」

実際、寮まではものの数分で到着するのだが、綾人はあくまで譲らないと思ったのはお願いすることに

「あ、そうだ。なのはさん」

「なに？」

何かを思い出し、ポケットを漁りだす綾人

「これを・・・」

『ソレ』を取り出し、なのはに差し出す

「勾玉・・・？ キャロにあげてたやつだね・・・？」

なのはの手にはキャロのものよりも少しだけ濃い桃色の勾玉が乗せられている

「はい、この間ティアナにも渡しまして・・・なのはさんの分が今日できたので、よかつたらどうぞ・・・いらなかつたら捨ててもらって構いませんので」

「そんなことしないよ・・・ありがとう、綾人君！」

笑顔で礼を言うのははすごく嬉しそうで、その理由を聞いてみると

「えへへ……男の子からの手渡しでのプレゼントって……初めてだから……」

「そうなんですか……」

はにかみながら言うのは

ユ一ノからもそうだったプレゼントの類は受け取っていないようだ

「それじゃ、行きましようか？」

「うん！」

そして、なのはを数メートルという短い距離でもしっかりと寮の入り口まで送り届け、自分の部屋に戻った綾人

次の日

「おはようございます、フェイトさん」

「うん、おはよう。綾人」

着替えて隊舎の前に着くとすでにフェイトがいた

「早いですね？」

「そうだね……何時もより早く目が覚めちゃって……なのはももう準備してるから」

「そうなんですか……」

そう言って二人で他の皆を待つ

しばらくした後、他のフォワード陣が合流し、訓練場に向かう途中

フェイトが話し出す

「技術が優れてて、華麗で優秀に戦える魔導師を『エース』って呼ぶでしょ？」

「なのはさんとかフェイトさんのことですね」

「私は・・・それほどでもないんだけどね・・・」

少し照れながら言うフェイト

「それはともかくとして。そのほかにも優秀な魔導師を表す呼び名があるって知ってる？」

「・・・え？」「・・・」

顔を見合わせる五人

「『その人がいれば、困難な状況も打破できる。どんな厳しい状況でも突破できる』そういう信頼を持って呼ばれる名前・・・『ストライカー』」

そう言って立ち止まり空を見上げるフェイト

五人も同様に立ち止まる

「なのは、訓練を始めてすぐの頃から言ってた。『ウチの五人は全員、一流のストライカーになれるはずだ』って・・・『だからうんと厳しく、だけど大切に、丁寧に育てるんだ』って」

どこか嬉しそうに言うフェイト

「フェイトさん・・・」

「そろそろ時間だね・・・」

時計を確認すると早朝練の時間が迫っていた

「走るか？」

「うん！」「ええ！」「はい！！！」

綾人の提案に即答し横一列に並ぶ四人。フェイトも隣で笑っている

「じゃあ・・・よい・・・」

「ドン！」

フェイトと綾人の合図に走り出し、なのはのもとへ走る

「ちよっ！？ 綾人早過ぎ！！」

「ははは！！ 追いつけるもんなら追いついてみる！！」

スタートと同時に俊足を披露する綾人

他の全員が驚いている

「あ！ 綾人君！ おは・・・」

近づいてくる綾人に挨拶しようとするのはとヴィータの横を通り過ぎていく

「え！？ あ、綾人君！？」

「何処行くんだよ！！！」

あまりの速さに驚くふたり

「あれ？ なのは、綾人は？」

フェイトやティアナ達も遅れて到着した

「あそこだ……」

ヴィータが指をさす方向を見ると遠くから「止まらねー!!」と叫ぶ声がした

「すみません……張り切りすぎました……」

しばらく進んだところで止まり、戻ってきて開口一番にそう言った

「まあ、元気があるのはいいことだよ」

なのはも一応フォローする

「それじゃ、今日も元気にいってみようか!」

「「「「はい!お願いします!!」」」」

なのはの言葉に返事を返すフォワード陣

本日も大変でいて、充実した一日が始まる……

### 第十三話 ティアナの思い、なのはの思い（後書き）

どうも！！

なんか最終回みたいな終わり方ですね・・・そんなことないか！！

ティアナの説得となのはの過去についてをお送りしました！

説教とか言いながら説教になっていない気が・・・

ティアナの説得に成功したため、かの『魔王』が登場することはありませんでしたので、それにあわせてなのはの過去を当人達に語ってもらう形をとりました

一話にして二人とのフラグを立てる綾人君なのでした  
スバルも少しだけ立ったかな？

今回、綾人君の過去についてほんの少し触れてみました。

強さへの願望は人並みに持ち合わせていたため、昔は無茶をした綾人君

それを経て同じように無茶をしようとしていたティアナが自分の二の舞にならないように必死なのでした・・・

当初、終盤の綾人となのはの会話を綾人とティアナの会話にしようと思ったんですが、ティアナのフラグは前半で立てたため、なのはさんのフラグを立てるチャンスを作ってみました・・・これ以降だと少しきついと思ったので・・・

何はともあれ、これにて第一部は終了・・・ではなく！この次に一本オリジナルの話を入れようと思います！

では次回予告！！

いつものように訓練を終え、オフシフトに入るフォワード陣  
そんななか、綾人にある怪しげな影が迫る・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十四話

「人間誰しも純真だった頃がある」

思わせぶりな予告ですが、日常編です！

ところで・・・『魔王降臨』の話もただいま考案中なのですが・・・  
あったほうが良いでしょうか・・・？



第十四話 人間誰しも純真だった頃がある（前書き）

久しぶりの日常編です！

今回は少しキャラが崩壊を起こしています

## 第十四話 人間誰しも純真だった頃がある

第十四話 人間誰しも純真だった頃がある

それは、ある日の訓練終了から始まった・・・

「みんな、お疲れ様！」

ハードな訓練を終えた、フォワード五人に声をかけるのは

「……お……お疲れ様です……」「……」

「お疲れ様です、なのはさん」

息切れしているスバル・ティアナ・エリオ・キャロと相変わらず余裕の様子の人

「皆、午後からはオフだから、ゆっくりするといいよ」

「明日は朝から集合だ、遅れんなよ」

フェイトからの救いの一言と、ヴィータからの地獄の宣告が下される

【?????side】

ところ変わって医務室……

「ふっふっふっふっふ……」

「くっくっくっくっく……」

医務室の奥で、怪しげな実験をしている二つの影

「これで・・・完成や・・・」

最後の薬品をビンにおとし液体の色がピンク色になる

「成功です・・・はやてちゃん・・・」

そこにいたのは医務室の主シヤマルと、機動六課部隊長八神はやてだった

「ついに出来た・・・後は実験するだけや・・・」

「そうですね、誰で行いますか？」

液体を見つめながら思案するはやてとシヤマル

「そんなん、彼に決まってるやん！」

そういうはやての脳内には一人の男の顔が浮かんでいた・・・

【綾人 side】

午前の訓練を終えて、フォワード五人はなのは、フェイト、ヴィー  
タの三人と昼食をとっていた

隊長陣のテーブルには各自の適量の昼食が置いてあるのだが、フォ  
ワード陣のテーブルにはありえない量のスパゲティが中央に鎮座し  
ていた・・・

量にして9人前、それをハイペースで平らげている三人、残り二人  
は各々のペースで食べている

分量としてはスバル・エリオで4・5人前、綾人が3人前、ティアナが1人前、キャロが0・5人前である。なのはたちも最初は驚いていたが、今ではすっかりその光景が当たり前になっていた

「さて、午後からどうする？」

昼食が一段落してきたところで、ティアナが他の四人を見ながら聞く

「特に予定はないな・・・エリオ、キャッチボールでもするか？」

「はい！ やりましょう！！」

綾人の誘いに生き生きと返事をするエリオ

「キャッチボール？」

「あんたたち、せつかくのオフに体動かすの？」

綾人の言葉に首を傾げるスバルと少しあきれ気味のティアナ

「運動と訓練は別だしな、それに初めてじゃないし」

「そうなの？ エリオ？」

隣のテーブルで話を聞いていたフェイトがエリオに聞く

「はい！ オフのときはたまに・・・」

「へえ・・・」

エリオの楽しそうな返事を聞いたのははその光景を想像してみる・・・なるほど、楽しそうにボールを投げる兄弟の様子が頭に浮かんでくる

「結構楽しいですよ？ お互いに剛速球を投げあったり・・・」  
「・・・え？」

想像していた光景とは違う状況を語る綾人

「上に向かって思いっきり放り投げて、それをキャッチしたり・・・」

「エリオの口からも信じられない言葉が飛び出してきていた」

「あれはかなり落下速度が速くて、ちょっと重くなってたな」

腕を組みうんうん頷きながらしみじみと語る綾人

「それ・・・楽しいか？」

ごく自然に語る男二人にヴィータが恐る恐る聞いてみる、すると二人は

「はい！」「かなり！」

すごくいい笑顔で返してきた

「・・・」

綾人とエリオを除く全員が呆気に取られていた

そんな皆の状態を気にも留めず、本日のテーマを決めている男が二人  
その表情はとても子供っぽかった・・・

そして、そんな食堂の光景を入り口から伺っている視線が二つ・・・

二時間後・・・

「いやあ、いい汗掻いた〜！」

「はい！」

キャッチボールを終えて、隊舎に戻っていく綾人とエリオ  
ちなみに、本日のテーマは『500メートルの遠投キャッチボール』  
である

「お！綾人君にエリオ、お疲れや！」

「お疲れ様！」

隊舎に入ると同時にはやてとシャマルに声を掛けられる

「あ、はやてさんにシャマル先生！お疲れ様です！」

「お疲れ様です！」

返事を返す二人

「疲れとるやる？これ、飲むか？」

そういつてスポーツドリンクらしきものを差し出す

「・・・えらくタイミングいいですね？」

不思議に思う綾人

「フェイトちゃんに聞いたのよ」

シャルルがそう説明する

「なるほど……」

納得するエリオ

「まあ、せっかくやから飲んでな？」

そういつて綾人に突きつけるはやて

「エリオ君も」

シャルルもエリオに差し出す

「わかりました、いただきます」

「僕も、いただきます！」

それぞれから受け取る綾人とエリオ

「ほんなら、うちはこれで！」

「私も、仕事に戻るわね」

そういつとそそくさと去っていくはやてとシャルル

「？ なんだつたんだ？」

「さあ……？」

二人のよく分からない行動に首を捻る綾人とエリオ

「ま、いいか。さつさと飲んでシャワー浴びに行くか？」  
「そうですね」

綾人の提案に頷くエリオ

もらったドリンクを飲みながらグローブを置きに部屋へと帰っていく

【はやてside】

「くつくつくつく・・・成功や！」

小さくガッツポーズをとるはやて

さつき綾人に渡したジュースには医務室で精製された薬が仕込んであった（エリオのほうには何も入っていない）

怪しげな薬品ならにおいて判別できる綾人だが、その薬は無味無臭、飲み物に混ぜてしまえばいかに綾人であろうと気付かないのだった

「後は、結果待ちだな！」

そういうと部隊長室に戻るはやて

お尻から狸の尻尾が見えたような気がした・・・

【綾人side】

「う・・・！ なんだ・・・！？ 急に・・・頭が！！！」

部屋に戻った直後、急に頭痛がしてきた綾人



そして、そのまま倒れてしまった・・・

「兄さん？ どうしたんですか？」

綾人がなかなか来ないので部屋にやってきたエリオ

しかし、部屋から返事がしない

すれ違ったのかと思いつながら綾人の部屋のドアを開ける

「失礼しますね？」

そう言いながら部屋に足を踏み入れるエリオ

しかし、綾人の姿が見えない・・・よく見ると部屋の中央辺りに誰かが倒れていた

「に、兄さん!？」

綾人と思われる人物に近づく

そして、綾人を起こそうと持ち上げる

だが、その時妙な違和感があった

綾人があまりにも軽かったのだ、しかも、よく見ると顔も若干幼い・・・

恐る恐る綾人の全身を見てみるエリオ

「うわああああ!!??？」

見た瞬間、悲鳴をあげていた、綾人の体が縮んでいたのだ

「シャ、シャマルせんせーい!!!」

綾人をベッドに寝かせ医務室にソニックムーブで全力疾走して行った

綾人の部屋には、シャマルと途中で話を聞きつけたなのは、フェイト、スバル、ティアナ、キャロが集まっていた

「本当に縮んでる・・・」

ベッドで眠っている綾人を見て驚きを隠せないティアナ

「エリオ、なにがあつたの？」

なのはがエリオに聞く

「それが、僕にもよく分かりません・・・キャッチボールの後、一緒にシャワー浴びようと兄さんを待ってたんですけど、なかなか来ないから様子を見に部屋に入ったら・・・」

「もう縮んでたんだ」

フェイトが簡潔丁寧なエリオの説明の最後を汲み取った

エリオも「はい」と小さく答えるしかなかった

「スー・・・スー・・・」

小さな寝息を立てながら眠る綾人、その寝顔を覗き込む女性陣

(( (か・・・かわいい!!?) )) (( ))

無防備な綾人の寝顔に女性陣全員の顔が真っ赤になった

「ん~~~~んん~~~~」

少し苦しそうに寝返りを打つ綾人  
その仕草になのは達は

（は、反則だよぉ・・・綾人君！）

（何で・・・こんなに・・・あう）

（なんか・・・こう・・・じゅる！）

（お、おっ持ちかえ・・・っ！！ 落ち着け！ 落ち着け私！！）

すっかり虜になっていた

綾人は控えめに見てもなかなか端正な顔をしていて、一般には”そこそこイケメン”の部類に入る

そんな顔をした綾人も小さいときは女の子のような顔だったので  
そんな綾人のギャップに女性陣は魅入られてしまったのだ

「あの、皆さん・・・どうしたんですか？」

「~~~~な、なんでもない（よ）（わよ）！！~~~~」

エリオが心配そうに声をかけると全員が顔を赤くしながら答えた  
そのときだった

「う・・・ん・・・？」

綾人が目を覚ました

起き上がり、目をこすり、寝ぼけ眼で辺りを見渡す  
そしてなのは達を発見し首をかしげながら

「おねえちゃんたち・・・だれ・・・？」

そう聞いてきた・・・

部隊長室にて・・・

「どういう事か、説明してくれるかな？ はやてちゃん？」

「うん、説明する。するからその目は止めてな？ なのはちゃん？」

とても冷たい目で見るなのは、正座し冷や汗を流しながら答えるはやて

綾人は子供になってしまい（推定5歳）、記憶も退行していた服も、青年時の制服と私服しかないの、エリオの服を着ている（それも大きい）

どうするか悩んでいたが、エリオがキャッチボールの後にはやてとシヤマルからジュースをもらったことを話し、その場でシヤマルと『お話し』し、主犯ははやてであると知ったのは達は部隊長室に乗り込んだ

「いやあ、前に無限書庫行った時に『若返りの薬の精製法』って本見つけてな？ 面白そうやからシヤマルに頼んで作らせてもらったんや。で、どんなもんなのか実験しよう思て、子供のころの綾人君ってどんなんやっ たんかなあつて、それで・・・」

「・・・人体実験したの？」

少し楽しそうに語るはやてをジト目で睨むフェイト

はやては「うっ！」とうめき声を上げ小さくなってしまっ

「で、元には戻るんですか？」

ティアナがそう質問する

「それはもちろんや。明日の朝には戻るはずや」

それを聞き、ひとまず安心する一同

「ねえ、フェイトおねえさん？」

フェイトの袖をクイクイと引っ張りながら呼ぶ綾人

「？ どうしたの？」

腰を落とし綾人と視線を合わせながら聞くフェイト

「おなかすいた・・・」

そういうと綾人のお腹がグウと鳴った

「フフ・・・じゃあ、ご飯食べようか？」

「うん！」

フェイトの提案に満面の笑みで頷く綾人

(( (( (はうっ!!)) )) ))

その笑顔にまたも魅入られるのは達

そのまま(顔を真っ赤にした)フェイトに手を引かれ、食堂に向かう綾人は何故かフェイトに懐いた。部隊長室に向かう途中もずっとフェイトの手を離さなかった

フェイトも子供のことは好きなので綾人にも自然に接していて、どこか楽しげだった

その様子になのは達も温かい目で見守っていた

「ティア、私達も行こっか？」

「そうね、あんたたちも行くでしょ？」

スバルの提案に頷き、後ろのちびっ子達に確認を取るティアナ

「はい！」

そう答えると四人で仲良く食堂に向かう

「なのはちゃん・・・私たちも・・・行かへん？」

正座したまま提案してみるはやて

「そうだね・・・行こっか」

なのはの返事を聞き、立ち上がるはやて（正座のしすぎで若干痺れている）

「ほな、行こっ」

「・・・ちゃんと反省してね？」

「・・・はい」

ボソツと呟き、釘を刺すなのはの言葉にまたしても小さくなってしまふはやてであった

食堂は妙な空気に包まれていた・・・

フェイトと綾人が入ってきたとき、小さくなった綾人を見てヴィー

夕、シグナム、ザフィーラ、リインが驚愕した

ことの巻末を説明し、綾人と食事始めるフェイト

その後、フォワード陣となのは、はやてもやっけて来てみんなで食事を取っているが、周囲の視線は主に小さくなった綾人に向けられている

普段は、スバルやエリオと共にかなりの食量なのだが、現在の綾人の食量は、キャラ並みである

「おいしい？」

「うん！」

フェイトの言葉に満面の笑顔で頷く綾人

（はうっ！！！）

食堂にいた（キャラ、リインを除く）女性局員達の顔が一気に赤くなった

綾人が六課の（キャラ、リインを除く）女性局員達の心を奪った瞬間である

当の綾人はそんなことには気付かず食事を続けていた

「ごちそうさまでした」

手を合わせ食事を終える綾人

他の皆の食事もひと段落しようというとき、綾人がキャラの皿の上に残っている食材を目ざとく見つけた

「キャラおねえちゃん、にんじんのこしちゃだめだよ？」

「うっ！」

(今の状態では)年下の男の子に注意され、萎縮するキャラ  
隣のエリオ達も苦笑い・・・  
その後、綾人に応援されながらにんじんを完食したキャラ(食べ終  
わる頃にはぐったりしていた)

食事を終え、ロビーにて・・・

みんなでトランプをしながら遊んでいた

なかなか白熱する大人たちに混じって綾人も終始はしゃいでいて  
笑顔が耐えなかった

それから約二時間・・・

「ねむい・・・」

目を擦りながら言う綾人

時間は午後10時、子供が寝るには丁度いい時間である

「じゃあ、お部屋行こうか？」

「・・・うん」

フエイトの言葉に眠そうな顔で頷く

「おやすみなさい・・・」

ロビーのなのはたちに向かって就寝の挨拶をする綾人

「うん、おやすみなさい」



なのはも笑顔で返す  
ほかのみんなも一人ずつ返す

フェイトに連れられ綾人の部屋に着き、（エリオの）パジャマに着  
替えベッドで横になる綾人

「おねえさんは・・・寝ないの？」

ベッドの横に座っているフェイトに聞く綾人

「綾人が寝たら・・・私も寝るよ」

そういつて綾人の頭を撫でるフェイト

「さぁ・・・目を瞑って？」

「う・・・ん・・・」

安心したのか、すぐに眠りについた綾人

（フフ・・・）

その寝顔をしばらく眺めるフェイト・・・

そして、朝

「う・・・ん・・・？」

目を覚ます綾人



さらには腕に食い込むフェイトの柔らかな感触が綾人の理性を蝕んでいく

「うううううう!!」

なんとか懇親の精神力で保っていたがそのとき

「う……ん……?」

不意に、フェイトの目が開き、綾人と目が合う

「おはようございます……フェイトさん……」

冷や汗を掻き、顔を真っ赤にしながら挨拶をする綾人

「うん……おはよ……あや……と……?」

挨拶を返しながら、だんだん覚醒していくフェイト

そして、服装、綾人の体、綾人の体に巻きついていて自分の手足、それらすべてを順番に確認し起き上がる、拘束が解けた綾人も起き上がる

そして数秒後……小刻みに肩を震わせながら

「き……」

「き?」

「きゃあああああ!!!!!!!!」

「があ!!」

フェイトの悲鳴と強烈な右ストレートが綺麗に顔面に入りぶっ飛ぶ綾人

そのときのフェイトの拳は光を超えたもので、綾人も避けられなかった……

その後、平静を取り戻し服を着たフェイトから、昨日のことを聞いた（服も自分のものを着ている）

チビ綾人の寝顔を見ているうちに自分も眠ってしまい、気が付かずに添い寝までしてしまったらしい

「ご、ごめんね？」

顔を真っ赤にしながら謝るフェイト

「いえ、いいですよ、これくらい……」

そう言う綾人の顔は赤く腫れ上がっていて氷嚢で冷やしていた

「こちらこそ、昨日は心配とご迷惑を掛けたみたいですし……」

綾人はしばらく考えた後、フェイトに向かって

「昨日は、ありがとうございました」

そう礼を言っていた

「えっ？」

わけが分からず首を傾げるフェイト

「小さくなった俺の面倒見てくれて、ありがとうございました」

頭を下げる綾人

「い、いいよ！ 私が勝手にやったんだし！！」

「それでもです」

フェイトの目を見ながら言う綾人

「う、うん……どういたし……まして……？」  
「はい」

フェイトの言葉に満足気に頷く綾人

「さて、そろそろ早朝練の時間ですね」

時間を確認しながら言う綾人

「ほんとだ、じゃあ、行こっか？」

「はい！」

笑顔で答える綾人にフェイトは

(はう！！)

真っ赤になってしまった。元に戻っても笑顔だけは変わらない綾人  
だった

その後、部屋を出て訓練場へ向かう

フェイトは途中で忘れ物と言って部屋に戻った

更衣室に向かう途中・・・

「あ！ 綾人！！」

「綾人！！」

「兄さん！！」「お兄ちゃん！！」

スバル、ティアナ、エリオ、キャラが近づいてくる

「おはよう、皆、昨日は悪かったな？」

「いいよそんなの！ 元に戻ってよかったあ！」

「ほんとよ、そのほうがやっぱしっくりくるわ」

「はい！！！！」

四人も喜んでいた

「ありがとな、さて！ それじゃあ、行きますか？」

綾人の提案に頷き歩き出す五人

そしてあることを思い出した綾人は徐にエリオに近づき

「エリオ悪い、お前のパジャマ、一着だめにしちまった・・・」

そう謝った

「い、いえ！ また買えばいいですから！！」

両手を顔の前で振りながら答えるエリオに皆がクスクスと笑う  
そんなことを話しながら更衣室に向かい、着替える  
その途中で

「ところで・・・あんたその顔どうしたの？」

「すごく赤いけど・・・」

「ああ・・・ちよつとな・・・」

ティアナとスバルに顔を指摘され、濁しながら答える綾人  
本当のことは言えるはずも無いのだった

訓練場にて・・・

「あ、綾人君！」

なのはが綾人に気付き手を振る

「なのはさん！ えっと、昨日はご迷惑をおかけしました」  
「にははは！ 別にいいよ？」

頭を下げる綾人に笑って言うなのは  
その後、ヴィータにもお礼と謝罪をした綾人  
その少し後にフェイトがやってきた

「さて、みんな揃ったし、さっそく始めようか？」

「ああ」

「うん」

「「「「「よろしくお願いします!!」「」「」「」

そして今日も、新たな一日が始まる・・・

その後、六課内で『子供綾人の笑顔プロマイド』が販売され女性局  
員の間で大人気となったが、それを知った綾人が製造元（部隊長

室)に乗り込み画像データを没収、そして販売済みのプロマイドの  
一斉回収を行い、その全てを闇に葬った  
そして、販売主(主犯)であるはやてには小さくなった件とプロ  
マイドの件について、綾人からの説教がされた



第十四話 人間誰しも純真だった頃がある（後書き）

どうも！！

今回は、綾人君に幼児退行してもらいました！！

小さい綾人君の台詞の漢字部分はすべてひらがなにしてみました

それでは、日常編をお送りしたので早速この企画！ 召喚！！

綾人

「諦めないんだな・・・それ・・・」

当然！！ やるならとことんまでやる！

綾人

「まあ、勝手にしてくれ・・・えっと、主人公の綾人です・・・つてここ俺しか来ないんじゃないの？」

そうだね・・・オリジナルのキャラが今のところ君とマークさんしかいないしね・・・なんか、ゲストを呼びたいところではあるね・・・

綾人

「予定は？」

あるわけ無いじゃん！！

綾人

「だろぅな・・・ところで、今回はひどい目にあっただな・・・」

幼児退行のこと？

綾人

「他に何かあるんだ？」

元に戻ったところにフェイトさんの・・・

綾人

「あ、ああ・・・あれな・・・確かに・・・」

まあ、変なことは起きないよ？ 一応この小説は18禁じゃないから

綾人

「わかってるんだけどな・・・あれは色々やばかった・・・」

まあ、鉄拳一発で示談が成立したからいいんじゃない？

綾人

「そうかな・・・ま、俺も小さくなったときに世話になったし・・・

」

そうそう・・・

綾人

「しかし、昼食を五人で九人前って・・・傍から見るとすごいよな

・・・」

そうだね、スバルやエリオがよく食べるからね・・・でも、一番食べてるのは君なんだよ？

よく読むと分かるけど、「二人で」4・5人前、でも君は「一人で」3人前だから

綾人

「あ、本当だ・・・あと、俺とエリオがキャッチボールしてる設定なんてあつたんだな」

うん、仲のいい兄弟ってこんな感じかと思って・・・やってること  
はかなり異常だけど・・・

綾人

「まあな」

ところで、話は変わるんだけど。この話は最初番外編の予定だった  
んだよね

綾人

「そうなのか・・・まあ、少し話が続かないところはあるかもな。  
何気にフェイトさんがメインヒロインになってる感じがするし・・・

」

うん、最初の設定ではこの番外編のヒロインはフェイトさんなんだ  
けどね  
本来の十四話の構想中に、この話は丁度間になると思って入れたん  
だよ

綾人

「なるほどな・・・時間稼ぎというわけではないと・・・」

……うん！ その通り！！

綾人

「なんだよ今の間は！！ 凶星か！！」

しょうがないじゃん！ 調子に乗って投稿したらプロットが切れかけてたんだもん！！

綾人

「可愛く言っただつもりか！！」

大丈夫だよ！ これが投稿されたってことは、とりあえず次の話は出来てるってことだから！

綾人

「どうしてそういえる？」

次回予告が出来ないじゃん！！

綾人

「ああ……」

では、主人公も納得したところで次回予告！！

機動六課に起こった小さな事件から数日、訓練を終えたフォワード陣に一日のお休みが与えられる

綾人も一人で休みを満喫することに……しかし、新たな影が綾人に迫る……

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十五話

「休日・最凶との邂逅」

次回から第二部！そして、オリジナルの敵が登場！！

ここでお知らせです

遊戯王の方でも書きましたが、プロットの方が切れかけてきていますので、しばらく執筆作業に専念するため、今後の更新はかなり遅くなります

なるべく早く投稿できるようにがんばりますので、これからもお願いいたします！！

P V 50000件突破記念(前書き)

皆様、ありがとうございます！

執筆に専念するといっておきながらの投稿・・・記念だからいいじゃない！

ではございませー！

## PV 50000件突破記念

信念の刃 PV50000突破記念

どうも！

さあ、いつの間にかPVが50000件を突破しました！！  
今回も座談会をロングバージョンでお送りしたいと思います！

では、召喚！！

「ああ」

「うん」

「ええ」

「「はい」」

短！？ ちょっとちょっと！ なんなの！？ どうしたの？

「いや、どうせ突っ込んで一緒かと・・・」

「そっだよ・・・」

「記念なのにな」

酷くない！？ 君達二人は？ そんな事思ってないよね！？

「えっと・・・」

「その・・・」

いいよもう！！ ほら！ 自己紹介！！

「すねんなよ・・・主人公でガードウィングの綾人です」

「フロントアタッカーのスバル・ナカジマです！」

「センターガードのティアナ・ランスターです」

「兄さんと同じくガードウィングのエリオ・モンディアルです！」

「フルバツクのキャロ・ル・ルシエです！」

さ、と言っわけで今回フォワードチーム全員集合ってことだ！

綾人

「さて、それで今回も没ネタか？」

うん．．．それもいいけど．．．今回は違うことしよっか？

ティアナ

「何を？」

そうだね．．．第一部が終わったところだから、これまでの話を大々的に振り返ってみようか

スバル

「それって、一話から回想ってこと？」

正解！ そんなわけで、早速第一話から！

綾人

「第一話は、俺がはやてさんにスカウト受けて、そのあと地上本部でなのはさん達を紹介してもらったんだよな．．．」

スバル

「あたし達も少し出てたよね？ ティア？」



ティアナ

「そうね・・・名前も出ずに髪形の説明だけだったけど・・・」

あの時は、二人のＢランク試験の結果発表のときだったんだよ

綾人

「そうなのか・・・知らなかったな」

まあ、綾人君が知らないのは無理ないよね？

エリオ

「その後に、なのはさんとフェイトさんとリン曹長を紹介してもらって、六課についての説明と・・・僕等のことはそのときに？」

綾人

「ああ、そのときだ・・・作者がだいぶ省いたけどな」

まあ、ずっと説明だと読者も飽きるだろうし・・・作者的にもしん  
どいので・・・

綾人

「本音が漏れてるぞ・・・」

おっと・・・

それで第二話だけど・・・なのはさんとの模擬戦だね

綾人

「第二話でいきなりの戦闘って・・・いきなりだよな・・・」

まあね、この展開は最初から考えてたんだよ

最初、君を仕留める技はデイベインバスターの予定だったんだけど

キヤロ

「でも、実際にはスターライトでしたよね？」

やるからには徹底的にやっちゃえ！って思って全力でぶっ放しても  
らいました！

綾人

「とんでもない理由での変更だな・・・そして、俺の能力の一つが  
出てきた回でもあるな」

うん、瞬動と『瞳』だね

ティアナ

「私達は本編ではこれ見てないけど・・・結局この眼はなんなの？」

それを言っちゃうとこの先が面白くないよ・・・だから、その説明  
は本編でってことで・・・

スバル

「此処まで見てると、綾人って結構ほれやすいのかな？」

綾人

「どういう意味だ？」

スバル

「だって、八神部隊長とかなのはさんに見惚れてたんでしょ？」

綾人

「美人に見惚れない奴は男じゃないな」

綾人君は美人は美人だと、真っ向から言ってしまうフラグメイカーですからね

スバル・ティアナ・キヤロ

「「「あゝ」」」

綾人

「本人いるところでそういうこと言つな！！」

エリオ

「に、兄さん・・・落ち着いてください・・・」

さて、気を取り直して第三話と第四話・・・

ティアナ

「初訓練と、綾人とシグナム副隊長の模擬戦・・・一話飛んですぐにまた模擬戦つて・・・」

うん・・・まあ、シグナムさんの性格考えるとね・・・なのはさん若しくはフェイトさん辺りが綾人君の話はするだろうし、それ聞いてシグナムさんがああなるのは最早当たり前・・・むしろ、必然でしょう・・・

綾人

「結果は、俺の負け・・・でも、最後の最後で痣は残したんだな・・・」

うん・・・一応、君は隊長陣に届く可能性がある力を秘めているってことだね・・・

そして、その回から綾人君のエリオ君弄りが始まったわけだけど・・・

綾人

「だから、それは男として当然の反応だって・・・女子寮に寝泊りしてる男に対する礼儀だろう?」

ティアナ

「真顔でそんな事言うな!!」

キヤロ

「お兄ちゃん、それなら、今度遊びに来ますか? 私とエリオ君の部屋」

綾人

「え? いいのか?」

キヤロ

「はい!!」

綾人

「エリオも?」

エリオ

「はい! もちろんです!!」

そのときにはティアナやスバルとかとの一悶着も作ってあげるからね!! 着替え中に突撃とか・・・

綾人

「いらん!!」

もう・・・わがままだなあ・・・

それじゃ、次は第五話と第六話・・・初出動だね

ティアナ

「私のクロスミラージュとスバルのマツハキャリバーが出てきた回ね」

綾人

「俺のバルムンクに人格AIが搭載された回でもある・・・ところで、なんで此処で付けられたんだ？」

エリオ

「最初から付いててもよかつたんじゃないですか？」

うん、ネタバレかもしれないけど、バルムンクは綾人君のお父さんのマークさんが技術開発部に依頼して製作したものでね？

このときに、綾人君の戦い方に合わせてアームドデバイスで形態は二刀つてところまではすぐに出来ただけど、手違いで完成が少し遅れて、綾人君の入局に合わせるために、とりあえず使用できるところまで組み上げて綾人君に渡した・・・

つまり、綾人君が貰った時点ではほとんど未完成に近かったわけ

綾人

「なんとまあ、また変な裏設定を・・・」

それで、人格A Iが完成して六課に送った、それをシャーリーさんが組み込んだ・・・と、これが一応のバルムンクにA Iが無かった理由になるかな？

綾人

「なるほどな・・・未完成だったのか・・・」

キャロ

「じゃあ、この時にバルムンクは完成したんですか？」

いや、組み込まれていないのは人格A Iだけじゃないんだよ・・・他にもあるんだ・・・

スバル

「なになに？」

それはまあ、本編で・・・丁度、次の話に出てきますので・・・

綾人

「もったいぶるなよ・・・」

いいじゃない！ あと少しで投稿するかもしれないんだから！

ティアナ

「じゃあ、その話はまた本編ですとして・・・私とスバルの戦闘シーンが無いのは何でなの？」

ああ、基本的に綾人君の周辺を第三者の視点で書いてるからだね・  
・  
それに、スターズの二人の戦闘はアニメ本編とまったく同じだから  
特に書く必要は無いと思ったんだ

エリオ

「僕達のほうは違うんですか？」

うん、逆にライティングは戦闘シーンがガジェット？型の時しか  
なかったから苦労したよ・・・とりあえず、繋がるように展開してみた

綾人

「この時にまた、俺の瞳が紅くなったな・・・」

スバル

「それに、『邪魔だ』の一言でケーブルズタズタって・・・綾人す  
ごすぎない？」

綾人君が怒ったらこれくらいは余裕だよ？

綾人

「目の前で仲間が死にそうになってて、何も出来ない自分にも怒っ  
てたからな・・・無事だって分かって本気で安心した」

キヤロ

「ありがとうございます、お兄ちゃん！」

エリオ

「ありがとうございます、兄さん!!」

それはそうと、ヘリの中で綾人君がキャロに抱きつくっていう犯罪紛いのことをしたわけだけど・・・

ティアナ

「そういえば・・・そうだったわね」

スバル

「あの時は驚いたよ」

キャロ

「はい・・・」

綾人

「まあ、安心させる方法が他になくてさ・・・心臓の鼓動って結構落ち着くんだけぞ？」

心臓は丁度いいリズムを刻んでるからね・・・そして、通称『フラグの素』の勾玉が出てきたね

キャロ

「これって、本当に特別な力は無いですか？」

うん、あくまで綾人君の仲間との絆の証として自分で加工しているものだから・・・まあ、綾人君の気持ちはたつぷりだよ？

さ、それじゃあ、第七話・・・初の日常編だね・・・

綾人

「バルムンクの新機能『ソニックムーヴ』の練習だな・・・これも？」



いいや、これは本編でも言ってるようになるのはさんとフェイトさんがシャーリーさんに言ってる組み込んだので、シャーリーさんの「手を加えた」って部分は実は人格A Iじゃなくて此処になるんだよ

エリオ

「へ〜・・・」

そして、昼食時の会話

ティアナ・キャロ

「「うっ・・・!!」」

綾人

「ん？ ティアナ、キャロ、どうした？」

キャロ

「えつと・・・」

ティアナ

「だって・・・この時は・・・」

綾人君のお母さんについての話でしたね・・・  
まあ、二人には少しキツイ話だね・・・話題振ったり、何気に地雷に足かけてたり

綾人

「まあ、俺は気にしないが・・・それにしても、最後に端折りすぎだろ・・・」

このときのあとがきでも言ってるじゃん！ 本編でその描写が無かったって！ 作者の引き出しじゃ無理だったんだよ！ 君の地雷の事で手一杯だったんだから！

綾人

「俺のせいか!？」

そうだよね・・・作者が悪いんですよね・・・わかってますよ・・・そうだ・・・どうせ・・・

綾人

「おい!?!?・・・まったく・・・それじゃ、次は第八話から第十一話まで・・・地球への出張任務の話だな？」

スバル

「なのはさんや八神部隊長の故郷なんだよね？」

エリオ

「兄さんもですね」

キャラコ

「また行きたいです!」

綾人

「ああ、大型の休みがもらえたら考えておいてやる」

ティアナ

「それはいいから、さっさと振り返るわよ!・・・あんたもいつまでもいじけない!..!」

はい・・・八話は海鳴までのへりの中のことを書いて、そのときにマークさんがとんでもない大物であったことがわかったわけだね

綾人

「ついでに、なのはさんとの設定とかな」

これは、結構重要な設定のつもりなんだけど・・・

そして、海鳴到着から搜索開始までで八話は終わりだね

綾人

「ティアナ・・・改めて聞くが、お前地球をどんな世界だと思ってたんだ？」

ティアナ

「えっ！？・・・それは・・・その・・・」

作者もCD聞いててそこが気になったんだよね・・・怒らないから言ってみて？

ティアナ

「そ・・・そんなことはもういいでしょ！？ さ、次は九話で、市街地の搜索だけど！！」

綾人

「ごまかしたな・・・」

うん・・・

エリオ

「僕たちとフェイトさんが中心なんですわね」

スバル

「あたし達がまったく出てこなかったのはなんで？」

これも、スターズは何も変わらない行動をしているからだよ？

アイス屋見つけて喜んだり、なのはさんの実家が喫茶店なのに驚いたり・・・

でも、ライトニングに関してはまったく出てこないから、オリジナルな話になってしまったね・・・

ティアナ

「何気に、綾人がなのはさんのご家族やすずかさんと面識があったりね・・・」

海鳴に家があれば絶対に出会うはずだしね・・・それに、翠屋はかなり人気の店なので、綾人君が来ないはず無いんですよ・・・

スバル

「この時に言ってた恭也さんって誰？」

綾人

「なのはさんのお兄さんだな・・・かなり強い人だった・・・せつかくだから会いたかったな・・・」

いつか、その時のことを書いたら良いなと思ってる・・・さて、その後のすずかさんによる過去語りだけど・・・

スバル

「綾人、いい感じに王子様だよね？」

ティアナ

「そうね〜」

綾人

「女性が絡まれてたら助けないか!？」

助け方がかつこよすぎたね・・・すずかさんもこのときの綾人君が  
年下と思っ  
てないので余計にね・・・

綾人

「もういいだろ!! それで、十話で夕食と銭湯での話だな・・・」

この話が一番書きたかった部分でもあったね!!

エリオ

「うう・・・」

キヤロ

「? エリオ君? どうしたの・・・?」

おやおや・・・思い出したようだね? この幸せ者め!!

綾人

「羨ましい限りだな・・・」

エリオ

「ううううう!!!!」

あんまりいじめるとフェイトさんが怖いからこれくらいにとどま  
るか?

綾人

「ああ……」

この回から、エリオ君とキャロちゃんが綾人君を兄として接し始めるんだよね……

綾人

「ああ、そうだな……」

なんか嬉しそうだね？

綾人

「まあな、俺兄弟いないしな……二人みたいな弟や妹なら、十分に嬉しいさ」

一応、年齢的にはフォワード陣の中で一番年上だしね……

綾人

「そうか……そう言う意味ではティアナやスバルも妹か……」

二人的にはどう？ 綾人君がお兄さんっていうのは

綾人

「うん……お兄ちゃんって感じはしないかな？」

ティアナ

「そうね……私の場合は兄さんが実際にいたから……そっちと比べちゃうと……違うわね」

だって・・・よかつたね！ 綾人君！！

綾人

「それはよかつたのか？」

だって、兄として見れないって事は、ちゃんと男として見てくれる  
かもしれないんだよ？

脈が無いわけじゃないんだよ？ 恋愛対象になりえるんだよ？ 恋  
人になれるかもしれないんだよ？

スバル・ティアナ

「「！！！」」

綾人

「あ、なるほど・・・確かに・・・」

スバル

「ちよつと！？ 作者さん！！？」

ティアナ

「なに勝手なこと言ってるのよ！！ そんなこと無いわよ！！」

綾人

「そんなに否定されると、さすがに傷つくな・・・そんなに俺って  
魅力無いのか？」

エリオ

「そんなことないです！！」

キャラ

「お兄ちゃんはかつこいいです!!」

それに、二人の反応は満更でもなさそうだね・・・

ティアナ

「そんなこと無いって言うてんでしょ!!」

はいはい・・・

それじゃ、最後に十一話

海鳴での戦闘と六課に帰ってから少したった後の話

綾人

「戦闘はえらく早く終わったよな・・・」

まあね、実際もそんなに長くなかったしね・・・どちらかというとその後のほうに集中したかったし

エリオ

「その後って？」

まずは、スカリエツティを登場させることと、綾人君の瞳の事を少し、そして『武王』という存在について・・・

キャラ

「結構たくさんありますね？」

うん

特にスカリエツティは登場が少し遅いかな？とも思ったけど、このタイミングしか残ってなかったからね



綾人

「武王について、今猛烈に説明したいんだが・・・？」

やめてくれる？ それだけで今回終わっちゃうから

綾人

「・・・・・・・・」

スバル

「お、落ち込んだ・・・」

ティアナ

「膝抱えて・・・座り込んだ・・・」

さて、海鳴出張はこんなところかな？

それじゃ次は、第十二話と第十三話！ アグスタでの話だね

ティアナ

「この話は・・・忘れられないわね・・・」

綾人君にほれたから？

ティアナ

「違うわよ！！」

おお怖・・・それじゃまずは十二話、他のみんなとの違いに焦り、  
無茶をしたティアナを綾人君が本気で怒鳴っていたね

綾人

「仲間の無茶のせいで、仲間が怪我するなんて許されないからな・・・」

スバル

「あ、復活した・・・」

ティアナ

「あのときのことは・・・今でも反省してる・・・」

その後に、綾人君がユーノ先生に会っているね

綾人

「この展開は必要だったのか？ 別段、出会わなくてもよかったんじゃないのか」

うん、必要だったんだよ・・・今後のために・・・

ティアナ

「今後？」

まあ、それは今のところ関係ないから多くは語らない・・・

そして十三話

エリオ

「兄さんがティアさんを説得して・・・」

キャラ

「なのはさんが昔のことを話してくれたとき・・・」

この展開はアニメとはかなり違う展開になったね・・・原作ブレイクしてしまった・・・

綾人

「まあ、俺の存在がすでに原作ブレイクなんだが・・・」

そういうこと言わないの！ 他の作品のオリジナル主人公さん達まで同じ目で見られるだろ！！

綾人

「ああ、それはすまない」

スバル

「ところで、なんで違う展開にしたの？原作どおりでもよかったんじゃないの？」

うん、この話の完成後にその展開でも考えてたんだけど・・・

ティアナ

「だけど？」

なのはさんにぶつける綾人君の言葉がなかなか思いつかなくて・・・一応結末は考えてるんだけどね・・・そこに行く過程に躓いてるんだよね

綾人

「それで、それは投稿するのか？」

うん・・・要望があれば完成させて投稿するかも・・・番外編と

して

スバル

「それで、なのはさんの昔のこと聞いた後に綾人が自分の昔のことを話すところがあったよね？」

うん、自分の昔の失敗を知っているから、仲間と同じことをさせないように・・・

なのはさんも同じように自分の失敗を繰り返させないように・・・二人はある意味での似たもの同士であることを書きたかったんだ

エリオ

「兄さんってそんな失敗したことないって思ってたんですけど・・・」

キヤロ

「私も・・・」

人間誰にでもそんな過去が一つや二つあるものだよ？

機動六課にいる人はそんな人が多いからね・・・

なのはさんもフェイトさんもはやてさんも・・・それに君達もね？  
そう言う意味でも、綾人君にもそういつた過去があったほうがいいなって思ってたね

綾人

「でも、最後の最後でふざけたな・・・」

出来るだけ明るく締めたかったんだよね・・・一区切りつけるつもりだったから・・・

スバル

「無理やりギャグにした感じが見えるね・・・」

その点は反省だね・・・

それじゃ、最後に第十四話！ 綾人君の幼児退行の回！！

綾人

「俺からしたら黒歴史になりかねないが・・・」

君はもしかしたら救われてるほうかもよ？ 結構見るシチュエーションだけど、記憶が完全に消えてるって少ないし

ティアナ

「そうね・・・意識が大人のまま小さくなってたら、別の問題も起きたかもね・・・」

綾人

「だが・・・知らないままに戻って・・・大変なことになったんだけどな・・・」

翌朝、フェイトさんのドキドキ寝顔に遭遇だもんね！！ しかも抱き枕にまでされて・・・けしからん！！

綾人

「だから、書いたのお前だろうが！！」

まあ、しっかり制裁は受けてもらったけどね

ティアナ

「あの顔はこのときのものだったのね……」

スバル

「綾人が避けられない速度での右ストレート……」

綾人

「まあ、俺も混乱してたしな……」

その後には、ブロマイドまで販売されてね？

綾人

「思い出させるな！！ 全部回収するの大変だったんだからな！！  
なんかスバルとかティアナまで持ってたし！！」

スバル

「だ、だって……」

ティアナ

「ねえ？」

なのはさんに1度『お話』されてるのにこんな行動を取るはやてさんの度胸に敬意を払いたいと思います

綾人

「払わんでいい！！ そんなもん！！」

スバル、ティアナ……ちょっといい？

スバル

「何？」

見て欲しいものが・・・

ティアナ

「何よ・・・写真・・・？・・・！？」  
「こ、これは・・・！！！」

そう、チビ綾人のプロマイド

これが最後の一枚だからね・・・二人のうちどっちなかに挙げよう！  
じゃんけんするか、話し合ってる？

スバル

「ティア・・・」

ティアナ

「スバル・・・」

おお、二人の後ろに炎が見えるぜ・・・

綾人

「おい・・・作者・・・」

は！？

綾人

「そういうことは・・・本人のいないところでやることを薦めておく」

そ・・・そうだね・・・ちよっ！？  
バルムンク仕舞って！？

綾人

「それを差し出したら・・・考えてやる」

は・・・はい！！ どうぞ！！

綾人

「・・・他には・・・無いんだな？」

はい！！ もちろんです！！

綾人

「よし・・・せい！！」

ああ！？ 写真が・・・木っ端微塵に・・・

綾人

「ふう・・・これで・・・黒歴史も閉じた・・・」

スバル・ティアナ

「綾人・・・」

綾人

「ん？ ど、どうした！？ 二人とも・・・まで！？ デバイス仕舞え！！」

スバル・ティアナ

「まああてええ！！」

綾人



「待てるかー！ー！！」

おお、二人の本編で見せたことが無い顔を見て恐怖を覚えて逃げ出した綾人君をもものすごい形相で追いかけていった・・・

エリオ

「三人とも・・・行っちゃいましたね・・・」

キヤロ

「いいんでしょうか・・・」

まあ、すぐに戻ってくるでしょう・・・

とりあえず、第一話から最新の十四話までの回想が終わったね

綾人

「はあ・・・はあ・・・酷い目にあった・・・」

エリオ

「だ、大丈夫なんですか！？兄さん・・・」

綾人

「ああ、飯作る約束で何とか治まった・・・」

食べ物で懐柔したか・・・さすがMY包丁を平気で出張任務で持参するほどの料理マニア・・・

ところで、話は変わりますが・・・綾人君？

綾人

「なんだ？」

君・・・出張に行く気はあるかな？

綾人

「また出張？ どこに？」

それは・・・他のリリなの小説だ！！

綾人

「はあ！？」

エリオ

「それって・・・」

キヤロ

「コラボ？」

スバル

「要望がついに来たの！？」

いいえ、来てません！

綾人

「おい！」

ティアナ

「それならなんでそんな事言うのよ？」

ええ、第一部も終わったことだし、そろそろいいかな？と思ったので……

キヤロ

「でも、お兄ちゃんの事って、あんまり語られてないですよね？昔に無茶をしたってだけで……」

エリオ

「うん……大丈夫なのかな？」

まあ、そのへんは他の作者さんが好きに解釈してくればいいです  
一応、コラボ時の設定確認はさせてもらいたいけど……

まあ、記念なので募集をこの場を借りて行いたいと思います！！  
綾人君を出演させてくれる心優しい作者の方

感想欄に書き込んだり、メッセージを送ってもらえば結構です！  
こういう設定にしたいという要望があれば、その設定も一緒に書いて下さい、検討いたします！

逆に、こちらに出演してくださる方も大歓迎です！

あとがきやこういう記念などでの出演ゲストも募集いたします！  
よろしく願います！！

それでは、今回はこの辺で……

綾人

「次は……10万件ぐらいか？」

そうだね・・・それくらい行くといいな・・・

ティアナ

「ま、それは今後の展開しだいじゃない？」

うん・・・一応、本編に沿っていきながらオリジナルの展開を予定してるしね・・・

エリオ

「兄さん用の敵も出るんですよね？」

その通り！ 始まってからずっと考えていた綾人君の相手・・・や  
つと出来たしね！ なるべく早く投稿できたらいいな！

綾人

「その辺は、作者の腕だな・・・」

キヤロ

「がんばってくださいー！」

ありがとう・・・

それでは、長くなってしまいましたでしたが今回はここまでです！

読者の皆様のおかげで、この小説のPVも50000件を突破できました！  
これから不定期更新ながらもしっかりと続けてまいりますので、よろしく願います！！

感想、意見、指摘、そしてコラボの要望もお待ちしております！！

ではまた次回お会いしましょう！！

綾人・スバル・ティアナ・エリオ・キャロ  
「さよなら」！！！！！！

## P V 50000件突破記念（後書き）

どうも！

本文でも書きましたが、コラボしたいとお思いの心優しい作者の方、感想欄やメッセージをお待ちしています！

後、あとがきなどに出演してくれるキャラも募集いたします！

次の目標は10万件突破です！

それでは！

第十五話 休日・最凶との邂逅（前書き）

お待たせしました！！

第二部のスタートです！！

今回から、本文にタイトルを載せずに行きます

## 第十五話 休日・最凶との邂逅

なのはの過去話を聞いてから二週間、綾人をはじめ他のフォワードメンバーはいっそう訓練に励み、確実にレベルを上げていた

そして、この日の午前の訓練が終わり、なのはが全員を集めるその日の訓練と模擬戦は、いつもの訓練よりも少々厳しいと感じ、フォワード達は疲れて座り込んでいた

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了！ お疲れ様！！」

なのはがすっかり疲れきっているフォワード陣を労う

「でね？ 実は何気に今日の模擬戦が、第二段階クリアの見極めテストだったんだけど・・・」

さらっと教えるなのは、フォワード達も啞然としている

「どうでした？」

「合格」

「「はやー！！」」

なのはに振られて即答するフェイトにすかさず突っ込むスバルとテイアナ

「ま、こんだけみっちりやってて、問題あるようなら大変だったった」

「「はは・・・」」



ヴィータの言葉に苦笑いを浮かべるエリオとキャロ

「私も、みんないい線いってると思うし……じゃ、これにて二段階終了!!」

「……やった〜!!」「……」

立ち上がり喜ぶフォワード達

「デバイスリミッターも一段解除するから……後でシャーリーのところに行ってきてね?」

「明日つから2ndモードを基本形にやってくからな……」

「……はい!」「……」

「……え? 明日……?」

ヴィータの指示に返事をした後、疑問が浮かんだキャロ

「ああ、訓練再開は明日からだ」

ヴィータも当たり前のように答える

「今日は私達も、隊舎に待機する予定だし……」

「みんな、入隊日からずっと訓練漬けだったしね……」

なのはとフェイトの会話を今ひとつ理解できていないフォワード達

「ま、そんなわけで……」

「今日はみんな、一日お休みです! 町にでも出かけて、遊んでくるといいよ!!」

なのはの口から出た「休み」の単語に大喜びのフォワード達

「あ、ティアナ？」

「はい？　なんででしょうか・・・？」

なのはは思い出したようにティアナに呼びかける

「お休みのこと・・・綾人君にも連絡しておいてくれる？・・・たぶんはやてちゃんからもいくと思うけど・・・」

「あ・・・はい、わかりました！」

なのはの言葉に頷き了承するティアナ

お気づきだろうが、今この場に綾人はいない・・・なのはの訓練を受けずに何処にいるのかというと・・・

【綾人Side】

「待たせたな、綾人。仕上がったぞ」

「ありがとう、父さん・・・」

「お待ちかねのシステム、導入しておいたぞ」

そう言つて綾人にバルムンクを返すマーク

綾人はバルムンクの改良用のプログラムを受け取りに225隊にいるマークの許を訪れていた

もちろん、そのことはなのははやてに許可を貰っている

「一応申請通りにしてある、残りは六課でやってもらえ」

「はい」

返事を返し、プログラムのディスクを貰ったところに、綾人に通信

が入る

「通信？・・・ティアナからか・・・はい？　こちら、ライトニング05・・・」

『あ、綾人？・・・今、大丈夫・・・？』

「ああ、こっちの用事は終わったけど・・・どうした？」

『うん・・・今日は早朝練だけで、一日休みになったの・・・だから、そのことを教えようと思って・・・部隊長から連絡来てない？』  
「いや・・・来てないけど・・・」

そう言つてマークに視線を送る綾人

マークも聞いていないようで、首を横に振る

『そう・・・ま、もしかしたら遅れてくるかもしれないけど・・・』

一応、教えとくわ』

「ああ、ありがとうな・・・それじゃ」

『ええ・・・』

そう言つて通信を切る綾人

同時にまた通信が入る、今度ははやてからだつた

「はい、こちらライトニング05」

『ああ、綾人君？　今、大丈夫か？』

「ええ、大丈夫ですよ？」

『そうか・・・今日は綾人君含め、フォワード陣全員お休みや！  
ゆっくり羽伸ばして、明日に備えてな？』

「はい、了解です」

そう言つと通信を切る

後ろではマークが面白そうに笑っていた

「フフ・・・なかなか面白かったな・・・」

「本当・・・それじゃ、俺は1度着替えに戻るよ」

「ああ、ゆっくり休めよ？」

「はい」

マークに返事を返し、225隊の隊舎を出て六課へと戻る綾人

六課に戻ると、丁度朝食の時間が終わっているところだった

「あ、綾人君！ お帰りなさい！！」

「あ、なのはさん。はい、ただいま戻りました！」

「プログラムは貰ってきた？」

「はい、ここに」

そういつてカバンからディスクを取り出す

「うん、じゃあシャーリーに渡しといてくれる？ お休みはその後

からってことで・・・」

「はい、わかりました」

なのはと別れ、デバイスルームに向かいシャーリーにディスクを渡した

「あ、綾人」

着替えてガレージでバイクの準備をしていると、私服に着替えたティアナが入ってきた

「ああ、ティアナ。こんなところでどうした？」

「ヴァイス陸曹にバイク借りてスバルと一緒に街に行こうかな……  
つて。それ、あんたのバイク？」

「ああ、管理局に入った後で買った……中古だったけど、色も形  
も気に入ったから……」

「ふん……」

どこか楽しそうな綾人の言葉にバイクを見るティアナ  
少し型が古いバイクで、色も綾人が好む黒色だった

「バイクも真つ黒なのね……」

「ああ、俺のパーソナルカラーと思ってくれていい」

何処までの黒色主義の綾人であった……

「お？ 悪いなティアナ。遅くなっちゃった」

「あ、いえ……こつちこそ、無理言っちゃって……」

二人でそんな会話をしているとヴァイスが入ってきた

「いや、キーが見つからなくてな……ほれ！」

「あ……はい！」

頭をかきながらバイクのキーを投げ、ソレをキャッチするティアナ

「調整はすんでっから、すぐ出せるからな」

「ありがとうございます！」

礼を言い発進するティアナ

ヴァイスと後ろで綾人も見送っている

「しかし、あいつも随分と動きが変わったな・・・」

「そうですか・・・？」

「ああ、今まではシングルでもチームでもコンビでも、動きが全部同じだったけど、最近は臨機応変になってきている感じがするな・・・だいぶセンターらしい動きになってると思うしな・・・なにがあったのかね？」

からかうように綾人を見るヴァイスだが

「・・・まあ、なのはさんに相談して、気持ち的にもだいぶ楽になったんじゃないですか？」

綾人は普通に返してきた

「よし・・・それじゃヴァイスさん、俺も行って来ます」

「あ、ああ。気いつけてな・・・」

メットを被り、発進していく綾人を呆然と見送るヴァイスは

「ありや・・・自覚無しか・・・」

と、誰にも聞こえないように呟いた・・・

隊舎の入り口まで来ると、なのはが立っていた

「あれ、なのはさん・・・どうしたんですか？ こんな所で・・・」

「あ、綾人君。さっきティアナ達が出発した所だよ？」

「そうなんですか・・・」

「綾人君もバイクでお出かけ？」

「ええ、ちよつとブラブラと・・・」

二人でそんな会話をしていると、フェイト、エリオ、キャラの三人が出てきた

「ライトニング隊も一緒にお出かけ？」

「行って来ます！」

「はい、行ってらっしゃい！」

元気に挨拶する子供に笑顔で答えるのは

「キャラ、その服可愛いぞ？」

「ありがとうございます！ お兄ちゃん！」

褒められて顔を赤くしながら一回転するキャラ

「エリオ、しっかりキャラのことエスコートしろよ？」

「は、はい！」

綾人の言葉に同じく顔を赤くしながら答えるエリオ。綾人も満足気に頷く

「さて、それじゃ俺は先に行かせてもらうかな・・・じゃあな！

二人とも！」

「「はい！」」

「行ってらっしゃい！」

「気をつけてね？」

四人に見送られ、発進する綾人

ミッド首都郊外・・・

「ふう・・・結構遠くまで来たな・・・」

数時間のツーリングを終え、海の見える所で停車し一息ついている  
綾人

「もう少しで昼だな・・・あそこ・・・行くか・・・」

そう呟いたとき、通信が入る

「?・・・はい、こちらライトニング05」

「やつほく綾人くこちらスターズ03」

通信の相手はスバルだった。なにかテンションが高い

「どうした? なんかあったのか?」

「いや、そっちはどうかなくって・・・一人なの?」

「ああ、残念ながら、一人つきりだ」

スバルが通信越しに綾人の周りを見ている

『じゃあさ、いまから合流しない?』

「合流?」

『そ、どう?』

「そうだな・・・」



スバルの誘いに少し悩む綾人

『せっかく女の子から誘ってんだから、二つ返事でよこしたら？』  
痺れをきらしたのかティアナも通信に入ってくる

「せっかくのデートのお誘いだけど・・・悪い・・・行くところがあつてな・・・」  
『デ、デデデデデート!?』

綾人の一言に、通信の向こうでスバルがひどく慌てている

『な、何言ってるのよ!!!?』

ティアナも慌てていた

「違うのか？」

素で返す綾人にティアナも少し怒る

『デートなわけ無いでしょう!?!? なんであんななんと!?!』  
「なんかってひどいんじゃないか？」

ティアナの言葉に少し落ち込む綾人

『とにかく! 無理なら別にいいから! それじゃね!?!』

怒りながらティアナが通信を切る

「ふう・・・さて、それじゃあ行きますか・・・!?!?」

バイクに跨り発進しようとした瞬間、あたりの空気が変わる

「これは……結界!? バルムンク!」

「通信妨害……近くに魔力反応……大きいです!」

「くっ!」

バイクから降り付近を見渡すと、一つの足音が近づいてくる

「クツクツクツクツク!」

「あんたは……」

「ようやく見つけたぞ……俺の……獲物をあ!」

「な!」

男は叫ぶと共に手に持っていた斧のようなもので綾人に切りかかり、その一撃を間一髪でかわす綾人

「なにを!」

「貴様が……俺の渴きを満たすのだ……さあ……俺と戦えい

!」

「くそ!」

バリアジャケットを展開し、バルムンクを構える

(殺気が……尋常じゃない……!)

男からあふれる殺気に冷や汗を流す綾人

その間も相手の観察を続ける

長い青の髪、青い服を纏い膨れ上がった筋肉が男の存在感を現している

手には、男の得物であろう大型の斧・・・綾人でも両手で持つのが  
やっとな大きさの斧を片手で軽々と持っている

「クツクツクツク！！ 感じるぞ・・・貴様の中にある・・・力を  
お！！！」

（俺の中の・・・力・・・？）

喋っただけで空気が震えている・・・そんな中でも、相手の言葉を  
聞き漏らさないようにする

「あんだ・・・何が目的だ！！！」

「目的？・・・決まっている！！ 強者との戦いだあ！！！」

咆哮と共に駆け出し、斧を振り下ろす男

綾人は咄嗟に受け止める

「ぐ！？ くう！！！」

（なんつー重さだ！！！）

「ぶるああああああ！！！！！」

「なっ！？ があ！！！」

男は今度は回転しながら斧を振り綾人を吹き飛ばす

綾人は近くの建物の壁に衝突した

「くっ！！ 馬鹿力が・・・！！！」

瓦礫の中から這い出し、構えなおす

「ほお・・・やはりただでは死なんか・・・」

「悪いけど・・・意味も分からないまま・・・死ねないんだよ！！！」

今度は綾人から仕掛け、刃を振り下ろすが

「なっ!?!」

空いている手で受け止められる

「ふん・・・その程度か・・・? 温いわ!!」  
「うわああ!?!」

掴んだ刃ごと反対側に投げ飛ばされ、地面に叩きつけられる綾人

「がはっ!?!」

あまりの衝撃に視界が揺れている

「いつまで寝ていやがる!!」  
「!?!?!」

揺れる視界の中、迫る男の足の裏が見え、咄嗟に体を転がし回避し、立ち上がる綾人  
まだ少し視界が揺れているためふらついている

(強すぎる・・・!!)

相手との力量の差に苦悶の表情を浮かべる綾人

(こうなったら・・・一か八か!!)  
「バルムンク! 『アレ』をやる!!」  
「了解!」

「フン！・・・何をブツブツ言ってる？」

男が近づいてくる

「バルムンク！ フォルム2nd!!」

{ Hercules Form }

カートリッジを一発ロードし、刀身から光が放たれそのまま綾人の腕を肘まで包む

光が収まると、綾人の腕には籠手が装着されていた

「これが・・・バルムンクの第二形態・・・『ヘラクレスフォルム』  
・・・」

小さく言いながら腰を落とし、左手を腰に沿えて右手を緩く開いて前を出す

「馬鹿め!! 武器を捨てたか・・・？」

「違う・・・武器は・・・俺の体全部だ!!」

叫ぶと共に瞬動で男との距離をつめる綾人

「なに!？」

「はあ!!」

男の腹に渾身の正拳を叩き込む

男の体が少し浮き、そのまま後ろへと吹っ飛んでいく

「ぐおおおおおお!!」

今度は男が壁に衝突する

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・やったか・・・？」

男が飛んでいった先を見つめる

ロードなしで込めるだけの力を込めて放った正拳だが、手ごたえは十分だった

「うるあああああああ！！！」

咆哮と共に瓦礫を吹き飛ばし立ち上がる男

「クツクツクツク！！ そうだ・・・そうこなくては・・・面白くない！！！」

高らかに笑っている男

正拳を打ち込んだ箇所が少し汚れているだけだった

「くそ！！！」

綾人も舌打ちしながら駆け出す

すばやく動き、相手を翻弄しながら拳を一撃ずつ入れていくが

「効かんな！！！」

「くっ！！！」

一喝し、斧を振り回す

綾人も咄嗟に体を捻り回避し、そのまま距離をとる

「遊びは終わりだ・・・」

そう言いながら、男は斧を突き出す  
すると、斧に魔力が収束していく

（収束砲！？）

「死ねい！！ チープエリミネイトお！！！！！」

極太の収束砲が真っ直ぐに向かってくる

（速い！？）

回避できず飲み込まれ、吹っ飛ばされてビルに突っ込む綾人

「ふん！！ 他愛もない！！！」

そう吐き捨て、立ち去ろうとする男  
その瞬間だった

「ああああああ！！！！！」

綾人が咆哮と共に飛び出してきた  
瞳が真紅に変わっている

「だあああ！！！」

「ぐおお！？！」

その勢いで男の顔面に一撃を入れた  
先ほどは威力が格段に上がっていたのか、男はさきほどよりも遠  
くに飛んだ

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

肩で息をしながら男を見つめる綾人

収束砲の威力と壁への激突のせいでふらふらである

「ぐう・・・これが・・・貴様の・・・ぬう!?!」

「だああああ!!」

よろめきながら立ち上がる男に突っ込んでいく綾人

「バルムンク!!」

☆Load Cartridge☆

カートリッジを二発排出し、魔力を全身に巡らせる

「打ち抜け! 荒れ狂う殺劇の宴!!」

魔力による身体強化を施し、突きと蹴りを絶え間なく繰り出していく綾人

「はあああああ!! 殺劇・・・舞荒拳!!」

「ぐおおおおお!!」

最後の左の拳を腹に叩き込み、男を三度ビルに吹き飛ばした  
三度目の衝撃でとうとうビルが倒壊した

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・はあ・・・ぐう!!」

体力の限界が近づき、膝を付いてしまう綾人  
だが・・・



「うらあああああ!!!」

「なっ!?!」

またも咆哮と共に立ち上がってくる男

しかし、さすがにダメージが大きかったのか、ふらつき、口からは血が流れていた

「まさか・・・ここまでとはな・・・クッククック・・・いいだろう・・・ならば・・・ぬう!?!」

突然、男の様子が変わり黙って目を瞑ってしまう

(?)

「・・・チツ!! 今日ここまでだ・・・運が良かったな・・・小僧・・・」

首を傾げる綾人をよそに、魔方陣を展開し転移しようとする男

「ま、待て!!!」

「名乗るのを忘れていた・・・我が名は・・・ゲイル・トーティス・・・次は容赦せんぞ・・・天童綾人・・・」

叫ぶ綾人にそれだけ言うと、男・ゲイルは姿を消す

「・・・見逃された・・・?・・・はっ・・・情けねえ・・・な・・・」

そのまま、前のめりに倒れる綾人  
結界も消滅し、辺りも元に戻った

「あつ！！ 通信妨害解除！！ 綾人君、そこに・・・！？」  
「ア・・・ルト・・・？」

結界の解除により通信が回復し、六課の通信士であるアルト・クラエッタからの通信が入る

「あ、綾人君！？ どうしたの！！？」  
「変なのに・・・襲われた・・・」

それだけ報告すると、綾人は意識を手放した

「あ、綾人君！？ 綾人君！！」

アルトが懸命に呼びかけるが、綾人は答えることはなかった・・・

## 第十五話 休日・最凶との邂逅（後書き）

どうも！！

今回はオリジナルの敵キャラ、ゲイルが登場しましたが・・・  
誰がどう見ても、キャライメージはバルトス・・・CVも当然、  
若○だ！！  
使用する技もしっかりと引用しています

『チープエリミネイト』はイメージ基が楽な戦いをしようとするといきなり使ってくる最強技です・・・喰らうと、普通即死です・・・

今回から、バルムンクはフォルムチェンジを使用可能になりました！

名前は『ヘラクレスフォルム』で、形態は籠手・・・カートリッジは左手首の辺りになります

そのフォルム最初の技が『殺劇舞荒拳』・・・やってみたかったです・・・ごめんなさい！！

ちなみに、最初の二刀の形態は『ディマカエリDimachaeri』といえます

では次回予告！！

ゲイルとの戦いの後、六課の医務室で目を覚ます綾人  
シャマルから自分が戦っている間の出来事を聞き、スバル達が助けた少女に興味を持つ

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十六話  
少女との出会い・綾人の隠れた才能

今回は重要キャラとの出会い  
そして、綾人君が才能を發揮します!!

## バレンタイン記念(前書き)

バレンタインの記念小説です!!

内容としてはJS事件が終わった後と考えてください

## バレンタイン記念

閃光の思いをチョコに乗せて

新暦75年 2月14日 機動六課・食堂一角

「さて！ それじゃ、始めよか！」

「うん！！！」

「……………うん……………」

エプロンをつけ、腕まくりをしたはやての掛け声に、同じくエプロンをつけたなのはとフェイトがそれぞれ返事を返す

「なんやなんやフェイトちゃん！ テンション低いで！！！」

「はやてが高すぎるんだよ……………まだ、朝の5時だよ？」

早朝からハイテンションの幼馴染に時計を指しながら言うフェイト

「何言ってるんねん！ 今日は2月14日や！ 地球ではバレンタインや！ ミッドには無いけど、地球出身のうちらが広めんでどうすんねん！！！」

「私、地球出身じゃないんだけど……………」

「まあまあフェイトちゃん……………」

小さく突っ込むフェイトを抑えるのは

「事件も終わったし、はやてちゃんもたまに息抜きしないとイケな

「いんだよ？」

レリック事件が終結し、隊舎も元通りになり、各々が通常勤務に勤しむ日々が続いており、部隊長のはやてに掛かるプレッシャーなども相当なもので、こういう日には思いっきり楽しむことにしているはやてである

「まあ、それは分かるけど・・・」

一人で盛り上がっているはやてを見ながら呟くと、はやてが突然振り向き

「それに、これはフェイトちゃんのためでもあるんやで!？」

「うう・・・」

はやての言葉に顔を赤くして俯くフェイト

「フェイトちゃんがあの子にアタックするための一つの手段なんや!」

「は、はやて・・・声が大きい・・・」

早朝とはいえ誰が聞いているか分からない状況に慌てるフェイト

「フェイトちゃんが手作りしたチョコを渡して、その勢いで告白! 王道かも知れんけど、その分確実のはずや!」

拳を握って力説するはやて

「こんなシチュエーションで告白されたら、さすがの綾人君もなかりアクシオンあるやろ」

「そうだね・・・綾人君、かなり鈍いもん・・・」

はやての言葉になのはが頷く

フェイトがアタックする相手はこの物語の主人公、天童綾人  
ある出来事から、綾人に惹かれていたフェイト

普段から何気にアプローチしているのだが、綾人はそれに気付かず、  
華麗にスルーし続けていて、それを傍から見ているのはやはやて、  
さらにはフォワード陣も呆れるほどである  
そんな日々が数ヶ月続いてしまっていた

二月に入った頃にははやてがバレンタインを利用して告白させようと  
色々と根回しをしていた

なのはやフォワード陣も協力し、その結果のこの当日なのである

「フェイトちゃん、もうこれは最後のチャンスかもだよ!!」

「そうや、これで駄目だったら・・・綾人君は○○と言うことに・・・」

「!?!?」

はやての一言にフェイトの顔色が変わる

フェイトという美人にアプローチ（かなり控えめだが）を受けているにもかかわらず、なんのリアクションも無い綾人は“そう”思われても致し方ないだろう・・・

「うん・・・がんばる!!」

胸の前で拳を強く握り、やる気を出すフェイト  
目には炎が見える



「そんじゃ、チョコレート作ってこか？」

「うん、ティアナ達ももうすぐ来ると思うよ？」

バレンタインの風習を聞き、チョコ作りに参加を表明したフォワードの女性陣

誰に渡すのかを聞くと、スバルはギンガに渡すと嬉しそうに言っていた（ティアナとキャロは顔を赤くして顔を逸らしていた）

「すみません、遅れました！！」

「すいませ〜ん！！」

そうこうしてる内に、やってきたフォワードの三人

「よし、全員揃ったところで・・・早速始めよか！！」

「くくくくおー！！」「くくくく」

はやての一言に答え、それぞれのチョコの創作に入った

数時間後

「くくくく出来た〜！！」「くくくく」

食堂に五人の声が響く

「なんか感動〜！！」

「はい！！」

出来上がったチョコを見て、スバルとキャロは初めて、自分で作ったチョコに感動していた

横に居たティアナも口には出さないが内心ではかなり感動している

「あ、部隊長！ 私、早速外出したいんですけど！！」  
「うん、ええよ。行つてき？」

スバルのお願いに二つ返事で許可を出すはやて  
スバルはチヨコを大事そうに抱えてスキップしながら出て行った

「キャラはこれからエリオのところか？」  
「えっと……はい……」

顔を真っ赤にしながら頷くキャラ  
とんでもなく初心である

「がんばつてね！ キャラ！！」  
「は……はい！！」

なのはの激励に元気よく駆け出すキャラ

「なのはさんは、そのチヨコどうするんですか？」  
「え？ ああ、ユーノ君に持っていこうかなって……」  
「おお！！？」

ティアナの質問に普通に返すなのはにはやてが身を乗り出して反応  
する

「いつも疲れてるだろうし……疲れてるときは甘いものが良いし  
ね！！」  
「あ……」

そんな理由でチョコを作ってたなのは

ユーノもまさか、手作りの義理チョコを渡されるなど思わないだろう

「ティアナは誰に渡すの？」

「えっと・・・その・・・」

なのはの質問返しに目を泳がせるティアナ

はやてがいい獲物を見つけたようにニヤニヤしている

「まあまあ、なのはちゃん。そんなこと聞くんは野暮やで？ な、

ティアナ？」

「うう・・・」

はやての言葉に顔を赤くするティアナ

「まあ、頑張りや？」

「はい！！」

ティアナにエールを送るはやてはそのまま、ずっと黙っているこの人へ視線を送る

「えっと・・・フェイトちゃん？・・・大丈夫か？」

「う・・・うん・・・だい・・・じょうぶ・・・」

緊張でがちがちになっているフェイト

「落ち着いて、フェイトちゃん・・・ホラ！ 深呼吸！！」

「うん・・・スー・・・ハー・・・スー・・・ハー・・・」

なのはに促され、何度か深呼吸を繰り返すフェイト

そして、だんだんと落ち着いてきた

「ありがとう、なのは……それじゃ……いつてくる……」

「うん!! 頑張つて! フェイトちゃん!!」

「ファイトや!!」

「頑張つてください!」

親友達と後輩に送りだされ、思い人・綾人の下へと向かうフェイト  
そして、食堂を出たところで

「あ、フェイトさん。おはようございます!」

「!?!?」

綾人に出会った、出会ってしまった

「ひゃあ~~~~!!!!」

奇声を上げ、首まで真っ赤にして猛スピードで逃げ出すフェイト

「え!?!? フェイトさん!?!?」

突然のフェイトの行動に訳の分からない綾人

【なのはSIDE】

「あらら……失敗か……」

「いきなりすぎたね……」

フェイトの様子を影から見守ろうと付いていこうとしたのはとはやて

「でも、まだ始まったばかりや！ チャンスはまだあるはずや！！」  
「そうだね！！」

そう言って、フェイトを探し始める二人

【綾人SIDE】

「うん・・・フェイトさん・・・何処かな・・・？」

逃げ出したフェイトを探している綾人

「俺・・・フェイトさんに何かしたかな・・・？ いや、何もしてないよな・・・うん」

腕を組み唸りながら考える綾人

「あ！ 綾人君！ ここにいた！」

「え、シャーリーさん、フェイトさん見ませんでした？」

後ろからしたシャーリーの声に振り向き、フェイトの所在を尋ねる

「フェイトさん？ 見てないけど・・・それより！ はい、これ！！」

そう言って、小さな包みを綾人に渡す

「これって・・・チョコレートですか？」

「うん！ 八神部隊長から聞いたけど、綾人君たちの故郷の星だと、今日って女の人が男の人にチョコあげるんでしょ？」

「ああ、そういえば今日はバレンタインですね・・・」

手渡されたチョコを見ながら呟く綾人

市販のものに丁寧にラッピングしただけのいかにもな義理である

「ありがとうございます」

「ううん！ それじゃ、これからグリフィス君とかにも渡しに行くから、それじゃね！」

そう言つて、立ち去るシャーリー

男性局員全員に配るのだろうか

「そっか、今日ってバレンタインだったんだな・・・」

シャーリーに貰ったチョコを見ながら呟き、そのままフェイト探しに戻る

【フェイトSIDE】

「う~~~~!!!!」

綾人が探しているのを木陰で見っていたフェイト  
もちろんシャーリーがチョコを渡すのを見ていた

「先越された・・・どうしよう・・・」

「あ！ フェイトちゃん居た！！」

「ひゃう！？・・・な、なのは・・・」

突然の声に驚き振り返るとなのはがいた

「こんなところで・・・綾人君に渡さないの？」

「それが・・・その」

フェイトはなのはに先ほどのことを説明すると、なのははため息を吐きながら

「フェイトちゃん・・・そんなこと気にしちゃ駄目！！ シャーリィのは義理なの！ でも、フェイトちゃんのは本命だよ！？ 自信持たなきゃ！！」

自分は手作りの義理を渡そうとしているのだが、そんなこと関係ないとばかりにフェイトを励ますのは

「そう・・・だよね・・・うん！」

フェイトのやる気も回復したようだ

そして、改めて綾人の下へ行こうとしたとき

「あれ？ 綾人は？」

「あ・・・もう行っちゃったみたいだね・・・」

そのやる気は少々空周り気味のようだ

【綾人SIDE】

「何処に行ったのかな・・・フェイトさん・・・」

フェイトを探し、隊舎を彷徨う綾人

それほど狭くない隊舎で見つけられないのは、ある種の奇跡かご都合主義しか考えられない

「お兄ちゃん！」

「ん？ おっと！」

声に振り向くと同時に誰かに飛びかかれ、それを受け止めた

「ヴィヴィオ・・・危ないだろ？」

「えへへ！！！」

飛びついてきたヴィヴィオを叱るが、当の本人は嬉しそうに綾人に抱きついている

「お兄ちゃん！ はいこれ！！！」

「ん？ これは・・・チヨコか・・・」

ポケットから小さく包まれたチヨコを渡される

「うん！！ ほんめーだよ！！！」

「お前、意味分かってないだろ？」

笑顔で“市販”の本命チヨコを渡すヴィヴィオに苦笑いの綾人



「うん!! 嬉しくないの?」  
「いや・・・ありがとうな?」  
「うん!!」

礼を言っていると、ヴィヴィオは再び力を込めて抱きつく

「そういえば・・・ヴィヴィオ、フェイトさん見なかったか?」  
「フェイトママ? ん・・・見てないよ?」  
「そっか・・・」

ヴィヴィオも知らないのです、まさに打つ手無しの状態になってしまった綾人

そんな二人を物陰で見ている視線が二つ・・・

### 【フェイトSIDE】

「本命まで・・・」  
「にははは・・・だ、大丈夫だよ! ヴィヴィオも意味よく分かってないと思うし・・・」

ようやく見つけ、声をかけようとしたところにヴィヴィオが飛びつき、出て行けなくなり陰から見ていたフェイトとなのは  
そして、ヴィヴィオが綾人に“本命”をあげていたことに驚きショックを受けていた

ヴィヴィオにバレンタインの話をしたのは当然なのは  
バレンタインを“大好きな人にチョコをあげる日”と思いこんだので、綾人にチョコをあげたヴィヴィオ

この後、なのはやフェイト、フォワードの皆にも“本命”をあげる予定である

「でも、綾人も満更じゃなさそうだし・・・」  
「それは・・・まあ・・・」

綾人の様子を見てみるなのは  
確かに、少し嬉しそうにしていた

実は、綾人はバレンタインにチョコを貰ったことが無い  
そのため、貰ったチョコに感激しているのだが、傍から見るとそう  
見えないのが難点である

「やっぱり・・・私に興味ないのかな・・・？」  
「フェイトちゃん!!」

落ち込むフェイトの肩を思いつきり掴んで向かい合わせる

「人は人!! フェイトちゃんはフェイトちゃん!!」  
「なのは・・・」  
「そうやって、自分を卑下するようなら、綾人君だって見てくれな  
いよ!! もっと自信持って!!」

なのはの言葉に目を見開き、大きく頷くフェイト

「なのは・・・ごめん・・・私」  
「いいよ・・・フェイトちゃんのためだもん」  
「私・・・がんばってみる!!」  
「うん!!」

フェイトの決意に頷き送り出すなのは  
フェイトは真っ直ぐ綾人を見据え、歩いていく

【綾人SIDE】

他のフォワードメンバーやなのはを探すヴィヴィオと別れ、フェイト探しを再開した綾人

「あ、綾人!!」

「え？ あ・・・フェイトさん」

呼ばれて振り向くと、探していた人物、フェイトが居た

「さつきはごめん・・・」

「いえ、いいですよ？ でも、どうしたんですか？」

「えっと・・・」

少し不安げに目を泳がせ、おもむろに包みを渡す

「きよ、今日って・・・その、バレンタインじゃない？ だから・・・これ・・・」

「あ、ありがとうございます」

差し出されたチョコを受け取る綾人

「あ、あの・・・ね・・・？」

「はい？」

何かを言いかけては黙ってしまふフェイト

綾人も訳の分からないまま首をかしげている

意を決し、大きく息を吸い込むフェイト

そして・・・

「わ、私は！ 綾人が、好きです！！」

はっきりと告白し、綾人は

「・・・・・・・・」

呆然と立っていた

「・・・・・・・・フェイトさん・・・」

「な・・・なにな・・・？」

静かに話し出す綾人

「俺も好きですよ？・・・フェイトさんのこと」

「！！！」

急に返された返事に顔を真っ赤にするフェイト

「もちろん、なのはさんも、はやてさんも、スバル達も・・・」

「え・・・？」

綾人の言葉の続きに正気に戻る

「大切な仲間ですからね」

綾人がそう言ってフェイトに笑いかける

綾人はフェイトの告白を勘違いしていた

フェイトの「好き」という言葉をLOVEではなくLIKEで受け止めたのだ  
なんという鈍感さ・・・それを聞いたとたん、フェイトは俯いてしまっ

「・・・・・・・・」

「あれ・・・フェイトさん？」

肩を叩こうとすると、フェイトは思い切り顔を上げ、綾人からチョコをひったくり

「綾人のばかー！ー！！」

叫びながら走り去った

「フェイトさん!？」

訳も分からず立ち尽くす綾人

【フェイトSIDE】

「はぁ・・・どうしようかな・・・このチョコ・・・」

屋上まで走り、手摺に寄りかかりながら綾人から取り上げたチョコを見つめるフェイト

「もう・・・食べられないね・・・」

思い切り握り締めていたため、チョコを入れた箱がへこみ、中のハート型のチョコもぐしゃぐしゃになり原型をとどめていなかった

「もつたないけど・・・捨てようかな・・・」  
「そんなことしちゃ駄目ですよ・・・」  
「え・・・？」

突然の声に振り返ると苦笑いしながら立っている綾人がいた

【綾人SIDE】

「あ・・・綾人・・・」  
「探しました・・・フェイトさん・・・」

ゆっくりと近付いていく綾人

そして、箱からチョコをつまみ、口に入れる

「あ・・・」  
「ふむ・・・少し、苦いですね・・・でも・・・おいしいですよ・・・」  
「？」

飲み込み、感想を言う

「フェイトさんの気持ちが籠ってるからですね・・・」  
「あの・・・綾人・・・」

何か言おうと言葉を探すフェイトだが、その前に綾人が口を開く

「さつきはすいませんでした・・・」  
「え・・・？」  
「俺・・・フェイトさんの気持ち考えないで・・・無神経なこと言

つて……」  
「……」

頭を下げる綾人を驚いた表情で見つめるフェイト

「俺……人に好かれるのが少し怖いんです……」

顔を上げながら続きを続ける

「誰かを好きになって……好きになってもらって……それを失うのが怖くて……だから……常に一定の間隔を保とうとしてたんです……」

そのままフェイトを見つめる綾人

「俺は……臆病者なんです……」

「そんなこと……」

「だから……」

フェイトの言葉を遮るように続ける

「フェイトさんの勇気……少し、下さい……」

「え……?」

そう言って、ゆっくり深呼吸する

「俺も……フェイトさんのことが……好きです……」  
「!!!?!」

綾人の告白に頭が真っ白になるフェイト

「あ．．．綾．．．人．．．？」

「こんな俺でもいいなら．．．フェイトさんの隣を．．．歩かせてください．．．」

顔を赤くしながら言う綾人

「綾人!!」

「うわつと!!」

思わず飛びつくフェイトをしっかりと抱きとめる

「好き．．．大好き!!」

「俺も．．．大好きです．．．フェイトさん．．．」

綾人の胸で泣きながら「好き」と繰り返すフェイト

綾人は納まるまで抱きしめ続けた

数分後、顔をまだ赤くしながら離れるフェイト

「ごめんね．．．？ その．．．」

「かまいません．．．これぐらい．．．」

濡れた胸元を見ながら話すフェイトと綾人

「これからよろしくね?．．．綾人．．．」

「はい．．．フェイトさん．．．」

「『フェイト』」

「え?」

「私のこと．．．『フェイト』って呼んで．．．? 敬語も無しで．．．」



「ね……?」

「分かった……フェイト……」

見つめながらフェイトの名前を呼ぶ綾人  
フェイトも笑顔で頷く

「さ、戻ろう?」

「ああ、そうだな……それに……」

言いながらフェイトの持っている箱を見る綾人

「これ……まだ一口しか食べてないしな……」

「あれ……? シャーリーやヴィヴィオからも貰ったんじゃないの?」

「まあな……でも、手作りのチョコは……フェイトからしかもらってないよ……」

「そっか……」

綾人の言葉に嬉しそうに答えるフェイト

「それじゃ、今から来月の予定考えないとな……」

「来月……?」

「ああ、ホワイトデーって言って、バレンタインにチョコを貰ったお礼に、今度は男から女性に何かを返す日があるんだよ」

「へえ……」

バレンタインの印象が強いため、あまりその辺は考えていなかったフェイト

「せっかくだし……どこか行こうか?」

「それって・・・デート・・・？」

「まあ・・・な・・・どう？」

「うん!!! 約束だよ!!!」

顔を赤くしながら聞く綾人に満面の笑顔で答え、腕に抱きつくフェイト

そのまま、二人で中に戻っていく

その後、フェイトと交際を始めたとなのは、はやて、スバル、テイアナに報告し、なのはやはやはフェイトを祝福し、「幸せにしないと許さない」と綾人に圧力をかけていた

それから、フェイトは何か吹っ切れたのか、綾人にやたらとスキンシップを求め、綾人もそれに答えた

その結果、六課内部に桃色空間を構築させ、大量の局員が砂糖を吐き出す大惨事が起こり、それを知ったはやてに「自重しろ!」と釘を刺されたのは、また別の話・・・

## バレンタイン記念（後書き）

どうも！！

日にちが変わる前に投稿できました！！

一時期考えた綾人とフェイトのカップリングです

何気に超急展開が目立つ内容ですね・・・

まあ、綾人君が恋愛したらこんな感じじゃないでしょうか・・・？  
少し、ギャルゲーの主人公みたいですが・・・まあ、それも綾人君らしさということ・・・

なのはさんはえぐいことをしますね・・・手作りの義理チョコ・・・  
コーノさんドンマイ！！

それでは・・・ホワイトデーでの内容をのんびり考えつつ、本編を執筆していきたいと思います

ではでは！！

**第十六話 少女との出会い、綾人の隠れた才能（前書き）**

こちらにも久しぶりですね・・・

今回は重要キャラのあの子と出会います

## 第十六話 少女との出会い、綾人の隠れた才能

### 機動六課医務室

「う．．．ん．．．?」

ベッドの上で目を覚ます綾人

「こ．．．こは．．．?」

「あ、綾人君！ 気が付いたのね!？」

綾人の声に反応し駆け寄ってくるシャマル

「シャマル先生．．．?．．．ここは．．．隊舎の医務室ですか．．．」

「ええ、そうよ。よかったわ．．．気が付いて．．．よく眠ってたわ．．．」

「えつと．．．どれくらいですか．．．?」

「そうね．．．発見して、ここに運んで簡単に治療を終えて．．．そこに発見までの時間も入れて．．．約五時間ぐらいかしら?」

指折り数えながら計算し、そう教えるシャマル

「五時間．．．それじゃあもう．．．夕方ですね．．．」

「ええ」

医務室の窓から空を見ると、空は赤く染まっていた

「あ、そうだ。はやてちゃんに報告しなきゃ！ ちょっと待ってて

ね？」

「あ……はい……」

シヤマルは立ち上がり、はやてに通信を行う

「あ、シヤマルです！ 綾人君が目を覚めました……はい……はい、お待ちしてます！」

通信を終え、ベッドに戻ってくるシヤマル

「はやてちゃんが、詳しく情報を聞きたいそうだから……」

「分かりました……それじゃ、部隊長室へ……」

そう言つて、立ち上がるとする綾人

「あ、駄目よ！！ まだ動いちゃ……」

「大丈夫ですよ……これくらい……」

「駄目です！ ここでは、先生の言うことを聞いてもらいます！ はやてちゃんがこつちに来るから、おとなしく待つてなさい！」

腰に手をあてながら叱るシヤマル

綾人も渋々ながら頷く

数分後、はやてがやってくる

「綾人君？ 大丈夫か？」

「はい、ご迷惑をおかけしました」

「ええよ、無事やっただけで……十分や」

笑顔で答えるはやて  
だが、すぐに真剣な表情になる

「それで・・・何があったか・・・話してくれるか？」  
「はい・・・」

綾人も真剣な表情になり、結界内での戦いのことを話した

突然結界内に閉じ込められたこと

そこで、ゲイルに襲われたこと

彼の容姿、所持していたデバイス、行使していた魔法、言った言葉

一通り話し終えてはやてが神妙な顔になる

「綾人君が目的やったってことか・・・」

「はい・・・よく分かりませんが・・・それは間違いなさそうですね・・・」

ゲイルは綾人の名前を知っていたことから、そう推測する二人

「とりあえず、詳細を明日にでももう一度纏めて、報告してな？」

「はい。了解です」

情報をもう一度纏めるため、そして、綾人を休ませる意味で話を終わらせるはやて

「そんなら、今日はもうゆっくり休みな？ シャマル、後、よろしくな？」

「はい！」

はやての言葉に手を挙げて答えるシヤマル

そして、はやては部隊長室へと戻っていった後

「それにしても・・・今日は一日大変だったわ・・・」

不意にため息を吐きながら言うシヤマル

「どうかしたんですか？」

「ええ・・・綾人君が結界内にいたときに、エリオとキャロから通信があつて・・・レリックが出たの・・・」

「レリックが・・・？」

シヤマルは簡単にあらましを教える

綾人が結界内に閉じ込められた数分後

キャロからの全体通信によりレリックケースと鎖でつながれていた女の子を保護

鎖の状況から、レリックが二つあることが判明しティアナ達フォワード陣はレリックの回収のため地下水路に、なのはやフェイト達は空に現れたガジェットから、ヘリの護送にそれぞれ就いた

レリックはフォワード陣の機転により回収に成功、女の子も無事に聖王病院へと搬送された

その間、綾人にだけ通信が繋がらず、市外郊外に通信障害系の結果があり、アルトがずっと呼びかけていたそうだ

「そんなことが・・・その女の子・・・大丈夫なんですか？」

「ええ、今は聖王病院で簡易的な検査が行われていると思うわ」

「そうですか・・・よかった・・・」



ほっとため息をつく綾人

「さ、お話はこちらまで！ 今日はこのベッド使っていていいから、もう眠りなさい？」

「はい・・・それじゃ、失礼します・・・」

綾人はそのまま眠りについた

次の日

早くに目を覚ました綾人は医務室を抜け出し、隊舎の中を歩いていた

「あれ？　なのはさん・・・？」

入り口で車に乗り込もうとしているなのはに声をかける

「ん？　あ、綾人君！？」

「お前・・・大丈夫なのか？」

なのはと運転席に座っていたシグナムも驚く

「はい・・・もう大丈夫です・・・こんな朝早くにお出かけですか？」

「うん・・・ちょっと聖王病院まで・・・」

少し、俯きながら言うのは

「昨日保護したって言う女の子のところですか？」

「そうだが・・・誰に聞いた？」

「シャマル先生です」

綾人の答えにシグナムは「そうか・・・」と短く言う

「そう言うわけだから、今日の訓練もお休みで良いからね？」

「はあ・・・あ、それじゃあ・・・」

なのはが謝りながらそう言うと、綾人は何かを思いつきそれを二人に聞いてみる

移動中の車にて・・・

「すみません、シグナムさん・・・車、出してもらっちゃって・・・」

「車はテストロッサからの借り物だし、向こうにはシスター・シャツハがいらっしやる・・・私が仲介をしたほうがいいだろう・・・」

「はい・・・」

「しかし・・・お前まで来るとわな・・・綾人・・・？」

「あはは・・・」

車のバックミラーから後部座席を見るシグナム

そこには、苦笑いしている綾人がいた

「いやあ、どんな子なのか会ってみたくって・・・」

「にははは・・・」

頭をかきながら言う綾人になのはも苦笑いしてしまう

「まあ、会うだけなら問題あるまい・・・しかし、検査が終わって

なにかしらの白黒がついたとして・・・あの子はどうなるのだろう  
な・・・？」

シグナムの言葉に顔を引き締めるなのはと綾人

「・・・当面は、六課か教会で預かるしかないでしょうね・・・受け入れ先を探すにしても・・・長期の安全が取れてから出ないと・・・」  
「難しいですね・・・」

なのはと綾人がそう言うと、通信が入る

『騎士シグナム！ 聖王教会シャツハ・又エラです！』

「どうされました？」

『すみません！ こちらの不手際がありまして・・・検査の合間にあの子が姿を消してしまいました！』

「！！？」

「本当ですか！？」

『はい・・・』

「とにかく、急ぎそちらに向かいます！」

『は、はい！ お待ちしております！』

通信が切れ、なのは達は急いで病院へと向かった

到着後、入り口からシャツハがかけてくる

「申し訳ありません！！」

「状況はどうなってますか？」

到着と同時に謝罪してくるシャツハに確認をとるなのは

「はい・・・特別病棟とその周辺の封鎖と非難は済んでいます。今のところ飛行や転移、侵入者の反応は見つかっておりません・・・」  
「外には出てないみたいですね・・・」  
「ええ・・・」

綾人の確認に頷くシャツハ

「では、手分けして探しましょう・・・シゲナム副隊長」

「はい」

「シスターと一緒に建物の中を」

「了解」

「天童二等陸士」

「はい」

「私と一緒に外を」

「了解です！」

そう指示を出し、二手に分かれるのは達

病院内中庭

「うん・・・いないね・・・」

「そうですね・・・」

あたりを見渡しながら確認していく綾人となのは

「なのはさん、俺、もうちょっと向こうを見てきます」

「うん。お願いね？」

中庭の端のほうを指差しながら言う綾人に許可を出すのは  
綾人は左右を見渡しながら駆けていく

「やつぱ．．．いないか．．．」

そう呟いたとき、草むらから音が聞こえた

「ん？」

音のほうに目をやると、ウサギのぬいぐるみを抱いた女の子がいた

(もしかして．．．この子が．．．?)

<なのはさん．．．?>

<居た?>

<はい、それっぽい子がいますが．．．確認してもらえます?>

<あ、そっか．．．顔知らないんだっけ．．．? うん、すぐに行

くから待っててね?>

<はい、お願いします>

念話を終え、女の子に近づこうとすると

後ろ．．．建物の窓から大きな音と共にバリアジャケットに身を包  
み、戦闘体勢のシャツハが居た

「あ．．．ああ．．．」

女の子は驚き、腰を抜かしてしまった

「あ．．．」

泣きそうになる女の子を見て、シャツハも動揺してしまう

「シスターシャツハ・・・少し、よろしいでしょうか？」  
「あ、なのはさん・・・」

綾人からの報告を受けてやってきたなのはがそのまま女の子に向か  
つていく

「ごめんね・・・びっくりしたよね？・・・大丈夫・・・？」

女の子が落したぬいぐるみの土を払い、手渡しながら聞くなのは

「あ・・・」  
「立てる？」

なのはにそう聞かれて、ゆっくりと立ち上がる女の子  
なのはは服についた土を払ってやる

「とりあえず、緊急の危険はなさそうですね・・・」  
「そうみたいですわ・・・」

綾人の言葉に戦闘体勢をとくシャツハ  
なのはは女の子と会話を始める

「初めまして・・・高町なのはって言います。お名前・・・言える  
？」

「ヴィヴィオ・・・」

なのはの質問に小さいながらも答える女の子、ヴィヴィオ

「ヴィヴィオ・・・いいね・・・可愛い名前だ・・・ヴィヴィオ、

どこか行きたかった？」

「ママ……いないの……」

「!?!」

ヴィヴィオの答えに目を見開くのはだが、すぐに表情を元に戻す

「ああ、それは大変……じゃあ、一緒に探そうか？」

「……うん……」

笑顔で言うのはに頷き返すヴィヴィオ

なのはに手を握られながら、綾人やシグナムの下へと来る  
シヤツハは綾人の提案で席をはずしている

「初めまして、ヴィヴィオ……天童綾人です」

腰を落とし、ヴィヴィオと同じ目線になって自己紹介する綾人

「……うん……」

綾人にも涙目のまま頷くヴィヴィオ

「はは……で、なのはさん……この子、どうするんですか？」

「うん……とりあえず、六課に連れて行こうか……」

「そうだな……あそこなら安心だろう……」

なのはの提案に頷き、車のところへ戻る綾人達  
シヤツハはしばらくの間ずっと頭を下げていた

隊舎に到着し、とりあえずなのはは自分の部屋にヴィヴィオを連れて行くことにした

綾人はというと・・・

「もう！勝手に抜け出して・・・駄目でしょ!？」

「はい・・・すみません・・・」

「はやくちゃんやスバル達も心配してたんだから!！」

「本当にすみません・・・」

戻ってすぐにシャルルに見つかり、医務室でお説教されていた

数分後・・・シャルルのお説教から開放された綾人

「さて・・・報告書作らなきゃな・・・」

そう呟き、オフィスに向かおうとする綾人だが

「あ！綾人！」

「フェイトさんに・・・はやくさん・・・？」

「どうやら、シャルルのお説教も終わったみたいやね？」

「はい・・・すみません勝手に・・・」

「本当だよ・・・もう、こんなことしちや駄目だよ？」

「はい・・・ところで、どうしたんですか？こんなところで」

「ああ、うん・・・実はね？」

なのはとフェイトの部屋

「行っちゃだー!！」



部屋の中でヴィヴィオがなのはにしがみついて大泣きしていた

「あ〜ん、もう、ヴィヴィオ。泣かないで〜」

「ほ・・・ホラ！ お姉ちゃん達と一緒にあそぼ!？」

なのはやスバル、キャラが必死で宥めている

「フフ！ 『エース・オブ・エース』にも勝てへん相手はおるもんやね？」

「八神部隊長・・・フェイトさん」

はやてとフェイトが入ってくる。その後ろには

「よ、ティアナ、エリオ」

「綾人!？」

「兄さん!!」

「心配かけたな？」

「別に・・・大丈夫そうね？」

「ああ」

ティアナに答えながら泣き叫ぶヴィヴィオを見る綾人

「ふむ・・・」

<スバル、キャラ?>

<え? あ、綾人!??>

<お兄ちゃん!??>

突然の念話に後ろを見ると綾人が立っていて驚く二人

< いったん離れる >

< < え? . . . > >

< 俺がやってみるから、離れてくれるか? >

< うん . . . > < はい . . . >

綾人の指示に渋々頷き、離れるスバルとキャラ

綾人はそのままヴィヴィオに近付いていく

「ヴィヴィオ? どうした?」

「あ . . . .」

綾人を見つけ、泣き止むヴィヴィオ

「ほらこれ、ヴィヴィオのお友達だろ?」

ウサギのぬいぐるみをちらつかせながらそう聞く

ヴィヴィオはぬいぐるみを目で追っている

< なんか . . . 離れてくれなくて . . . >

< なるほど . . . 懐かれましたか . . . >

ヴィヴィオの気を引きながら念話で会話するのはと綾人

「ヴィヴィオは、なのはさんと一緒に居たいのか?」

「 . . . . . うん . . . . . 」

なのはにしがみつきながら頷くヴィヴィオ

「でもなのはさん大事な用があるのに、ヴィヴィオがわがまま言うから困っちゃうだろ?」

ウサギのぬいぐるみを操りながらそう言う綾人  
ヴィヴィオがまた泣きそうな顔になる

「ヴィヴィオは、なのはさんを困らせたいわけじゃないんだよね？」  
「うん……」

<なんか……綾人……達人並み……>  
<すごいですね……>

<手馴れた感じが……>

<どこで培ったのかしらね……？>

<私よりうまいかも……>

<思わぬ才能をもってるもんやね……>

ヴィヴィオをあやしている綾人の後ろ、念話でそんな会話をしているスバル達

なのはも驚いていた

「なのはさんが帰ってくるまで、俺と一緒に居てあげるから……だから、いい子で待ってような？」

そう言いながらぬいぐるみを手渡す綾人  
ヴィヴィオも頷きながら受け取る

「ありがとう、綾人君。ヴィヴィオ、ちょっとお出かけしてくるだけだから……」

「……うん……」

謝るなのはに泣きそうになりながら頷くヴィヴィオ

六課ヘリポート

「それじゃあ、綾人君・・・悪いんだけど・・・」

「はい、お任せ下さい」

「エリオとキャラもお願いな?」

「はい!」

仕事のため外に出るなのは達を見送る綾人達  
ヴィヴィオは綾人に手を繋がれている

「ヴィヴィオ? それじゃ、行ってくるね?」

「うん・・・」

そう言って、ヘリは飛び立っていく

「ヴィヴィオ・・・ほうら!」

「ひゃあ!?!」

おもむろにヴィヴィオを肩に担ぐ綾人  
ヴィヴィオは驚きのあまり目を閉じる

「どうだ?」

「?・・・うわあ!!高い!!」

綾人に聞かれ、恐る恐る目を開けると、  
少しだけ視線が高くなり明  
るくなるヴィヴィオ

「楽しいか?」

「うん!!」

綾人の質問に笑顔で答えるヴィヴィオ  
なのはの前でも見せなかつた笑顔だ

「それじゃ部屋に戻るか、二人とも？」

「はい！」

二人と共になのはの部屋に戻る綾人

スターズの二人は先日の戦闘の報告書の作成を行い、綾人達ライト  
ニングはヴィヴィオの相手をする事になった

一応、最初は綾人一人で子守りをする予定だったが、エリオとキャ  
ロも手伝う事になった

それを二人に頼むなのはの顔はとても真剣で、後ろに立っていたフ  
イトも真剣に頷いていた

## 第十六話 少女との出会い、綾人の隠れた才能（後書き）

どうも！！

今回は綾人君の子供のあやしスキルをごらんいただきました！

ヴィヴィオの性格がほんのちょっぴり変わってしまいましたが・・・  
ご容赦下さい

では次回予告

なのは達が聖王教会に言っている中、綾人達ライトニングはヴィヴィオと一緒に遊ぶことに・・・

その中で、エリオの様子のおかしいことに気付いた綾人は・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十七話

「命の価値、”兄”として」

次回、綾人君の例の病気が再び・・・

第十七話 命の価値、“兄”として（前書き）

しばらくぶりの投稿です

今回は綾人君とヴィヴィオ達の様子を、そして、綾人君の病気が再発します

## 第十七話 命の価値、“兄”として

【なのはSIDE】

ヴィヴィオを綾人に任せ、なのははフェイト、はやてとともに聖王教会に向かっていた

「ごめんね？お騒がせして・・・」

「いや、え えもん見せて貰ったよ？」

謝りながら席に着くのはに笑いながら答えるはやて

「しかし・・・あの子はどうしよか？ なんなら、教会に預けとくんでもええけど・・・」

「平気。帰ったら私がもう少し話して、なんとかするよ」

「そうか・・・」

「今は、周りに頼れる人がいなくて・・・不安なだけだと思うから・・・」

ヴィヴィオの心情を考えて言うのは

「そやな・・・それに、綾人君にも懐いとるみたいやしな？」

「うん・・・ヴィヴィオをあやすの、すごい上手だった・・・」

綾人がヴィヴィオを説得していたときを思い出しているフェイト

「そういえばなのはちゃん？ 出発の前にエリオとキャロに何言ってたん？」

「ああ・・・えつと・・・」



はやての質問に少し顔を赤くしながら答えるのは

「ヴィヴィオを私達の部屋で見ているらうんだけど・・・綾人君も男の子だから・・・その・・・」

「・・・綾人君がヴィヴィオの目え盗んで、下着とか盗むかも・・・つて？」

いいにくそうなのはを見てそう推理するはやて  
ばつちり正解だったのか、なのはの顔はますます赤くなる

「うう・・・うん・・・無いとは言えないって・・・ティアナが・・・」

ティアナは出発の前になのはにそつと吹き込み、それを聞いたなのははさりげなく監視をつけようとエリオとキャラに頼んだのだ

「なるほどな・・・まあ、綾人君にそんな度胸あるとは思わへんけどな！」

はやてはそう言いながら笑う

「そうだよね・・・綾人がそんな事するはず無いよね・・・？」

「うん・・・」

フェイトとなのはも信じようと必死に頷いている

「しかし、綾人君はどうやってヴィヴィオの相手するんやるか？」

「ああ、そういえば・・・少し気になるかも・・・」

はやてが不意にそう呟き、フェイトも考えてみる

「うん……何か遊び道具とか用意するのかな？」

「いやいや……ここはあえて、絵本とか読んだり？」

「もしかしたら……」

と、二人で勝手に想像している

その後、なのはも加わり移動中はそんな会話に華を咲かせていた

しかし、なのはは知っておくべきだった……綾人の趣味を……

### 【綾人SIDE】

なのは達がへりで出発した後、綾人はヴィヴィオ、エリオ、キャラの三人となのはの部屋で過ごすことになった

そして、何をしようかと考えていたときに、ヴィヴィオが「お話が聞きたい！」とリクエストしてきたので、絵本が何か用意しようとしたキャラを止め、自分の持っている本を持ってきて読み出した綾人その本の内容を聞いた途端、エリオとキャラの顔色が変わった……綾人が持ってきた本とは……

「そのとき、武王はこういいました……」

武王の本である

子供相手にチョイスする本ではないと思われるだろうが

この男、武王に関する本は様々持っている

それこそ小説やら文献、果ては子供向けの絵本まで持っているのだそして、その中の一冊を抜粋し、ヴィヴィオに読み聞かせているのだ

エリオとキャラもすぐにヴィヴィオが飽きるだろうと思い、別の絵本を探してきたのだが、なんとヴィヴィオは綾人の膝の上で夢中になっただけ聞いていた

それこそ、すごく面白そうに聞いているので、二人は

( (毒された!?) )

などと失礼なことを思っていた

数時間後・・・

綾人の長い武王談義の後、四人で色々遊んでいた最中、ヴィヴィオが眠ってしまったので、ベッドに寝かしつけた綾人達

「ふう・・・よく眠ってますね・・・」

「うん・・・」

「そうだな・・・」

ヴィヴィオの寝顔を見ながら小声で話す三人

「でも、本当に普通の子供だよね・・・?」

「うん・・・」

キャラの質問に少し暗い顔で答えるエリオ

綾人はその変化に気付いた

「・・・キャラ?」

「はい?」

「少しの間、ヴィヴィオを頼む・・・コップ洗ってくる・・・エリ

才、手伝ってくれ？」

「は、はい……」

「じゃあ、頼むな？ キャロ」

「分かりました」

そう言つて、エリオと二人きりになる綾人

ジューズの入ったコップを洗い場にもって行く途中、綾人がきりだす

「なあ、エリオ？」

「なんですか？」

「何か、気になることでもあるのか？」

「え……？」

突然の質問で訳の分かっていないエリオ

綾人はそれに構わず続ける

「ヴィヴィオを見て……少し、顔が暗かったぞ？」

「あ……」

指摘され、目を見開くエリオ

「俺でよかつたら、聞くぞ？」

「えつと……」

言いよんどんてしまうエリオに綾人は

「お前が話せることなら、言ってくれればいい。話せないなら、無理に聞く気は無い」

そう言って頭を撫でる

「ぼく……は……」

別室に移動した二人、そこでエリオは重い口を開いた

「僕は……特殊クローン……なんです……」

俯き、そして、静かに話し出す

「クローン？」

「はい……本当の『エリオ・モンディアル』は、もう随分前に死んでいきます。僕は……あるプロジェクトによって創られたんです」

「プロジェクト？」

そのまま、エリオは『プロジェクトF』について語り出す

プロジェクトF

記憶転写型クローンを作り出す研究

その研究を用いて生み出された人間は、基になった人物の記憶を引き継いで生まれてくる

しかし、魔力資質、利き手、性格等は完全にコピーされることは無い

そして、クローン技術は違法である

それをかぎつけた施設の局員によりエリオは両親と離れ離れになったエリオの両親は最初抵抗していたが、事実を突きつけられたと同時に抵抗を止めた

その後、エリオは施設で育てられ、任務で訪れたフェイトにより保護された

それらを語った後、エリオはヴィヴィオについても話し出す

「ヴィヴィオは、人造魔道師素体にしては知識や言語が、はつきりしすぎていると思うんです。人工授精児なら、ああはなりません・多分、基になった人物の記憶があるんだと思います・」

「基になった人物・」

「プロジェクトFは・・・まだどこかで・・・続いているんだと思います」

エリオ話し終えた後、二人の間にはしばらく沈黙が続いた

「あの子・・・兄さん・・・それで・」

「ん？」

「僕のこと・・・どう・・・思いますか・」

沈黙を破り、おずおずと聞いてくるエリオ

「どうって・」

「気持ち悪いとか・・・そんな風に・・・あう!」

全部言い終わる前に頭を殴られるエリオ

「そんな事で、お前のご気持ち悪いとか、嫌いになったりするわけないだろ？」

呆れながら怒る綾人、そのままエリオの肩を掴む

「いいか？ お前がクローンだってな、そんなことどうだっていいんだよ。俺が、俺達が出会った“エリオ・モンディアル”はお前だ

けなんだ」

真っ直ぐにエリオを見つめそう言う

エリオは頭を押さえながら目を見開き、やがて、目に涙が溜まっていく

「にい……さん……」

「自信持て……お前は俺の“弟”だろ？」

「う……つく……うう……」

しっかりとエリオを抱き寄せ、頭を撫でる

エリオは綾人の胸の中で、声押し殺して静かに泣いた

「誰かに何か言われたら言え……そいつ、ぶん殴ってやるから……」

綾人は泣き止むまで“弟”に胸を貸した

「……落ち着いたか？」

「はい……」

数秒後、エリオの嗚咽が小さくなってきたので話しかける綾人  
顔を離し、頷くエリオの顔はぐしゃぐしゃになっていた

「まったく……そんな顔でキャ口のところ行く気か？」

「あう……」

顔を赤くし俯くエリオ

「とりあえず、コップ洗うついでに顔も洗え。いい加減キャロのと放つときすぎだ」  
「そうですね」

苦笑いし、洗面台でコップとエリオの顔を洗い、キャロの待つ部屋へと戻る途中

「エリオ・・・ちょっと待て」

「はい？」

「え〜と・・・あ、あった。これを・・・」

「これは・・・」

綾人が渡したのは黄色の勾玉

「お前の分だ。持ってる」

「はい！」

エリオは笑顔で受け取り、部屋に入ると、ヴィヴィオが丁度起きており、小さいお腹を鳴らしていた

「お腹空いた・・・」

「そうだな。丁度いい時間だし、なんかおやつでも作るか？」

時間は丁度午後三時ほど、地球、日本では所謂「三時のおやつ」の時間である

「おやつ・・・？」

「ああ、おいしいぞ。食べるか？」

「うん！...！」



綾人の“おいしい”の一言に笑顔で頷くヴィヴィオ

「エリオとキャラも食うだろ？」

「はい！！」

綾人の腕前を知っているので二人も笑顔になり、四人で食堂に向かった

「さて・・・何を作るかな・・・」

材料を取りに自室に戻った綾人は、実費で購入した小型冷蔵庫の中を見ながら唸る

「やっぱり、無難にホットケーキかな・・・」

呟きながら材料を取り出し、食堂に戻る

「さて、それじゃあ、パパッと作りますか・・・」

「お兄ちゃん、なにか手伝います！」

「僕も！！」

「ヴィヴィオも！！」

キャラの言葉に手を挙げるエリオとヴィヴィオ

「そうだな・・・なら、皿とか用意してくれ」

綾人の指示に三人で皿やフォークなどを用意していくちびっ子達

綾人は手際よくホットケーキの素を混ぜ、フライパンで焼いていくそのときにフライパンを振ってホットケーキをひっくり返すパフォーマンスに大喜びしたエリオたち

出来る上がる少し前、報告書を書き終え、食堂から漏れる甘いおいに誘われてフラフラとやってきたスバルやティアナの二人も誘ったそのとき、ティアナはあまりにもエプロンの似合う綾人に驚いていた

味はもちろん大好評で、ヴィヴィオも「また食べたい」と笑顔で言っていた

それから四人で部屋に戻り、積み木で遊んだり、絵を描いたりしながら過ごしすっかり日も落ちたころ

「「ただいま〜！」」

「!!!」

部屋に入ってくるなのは達の声に反応し、一目散に走っていくヴィヴィオ

なのはは、そんなヴィヴィオを抱き上げる

「ヴィヴィオ、ただいま。いい子にしてた？」

「うん!~!」

笑顔で答え、なのはに抱きつくヴィヴィオ

「ありがとね？ 三人とも・・・」

抱きつくヴィヴィオの頭を撫でながら声をかけるフェイト

「いえ……」

「ヴィヴィオ、いい子でしたよ？」

「俺達も、結構楽しかったですね」

「そう……」

綾人達の言葉に、一安心のなのは

「それじゃあな……ヴィヴィオ……」

「うん……」

部屋の前で、挨拶している綾人と淋しそうにしているヴィヴィオ

「また明日な？」

そう言って、ヴィヴィオの頭を撫でる

「それじゃあ、なのはさん、フェイトさん。俺はこれで……」

「うん!!」

「また明日……」

二人にも挨拶を済ませ、部屋に帰っていく綾人

【なのはSIDE】

「さ、お風呂に入って、寝ちゃおっか？」

「うん。あれ？ この本は……!?!? な、なのは!!」

なのはの言葉に頷きながら、テーブルの上にある本に気付き手に取り題名を見ると、フェイトは慌てたようになのはを呼ぶ

「どうしたの？・・・え!？」

なのはも本を見て驚いていた

「ぶおつの”・・・ぼっけん”・・・」

それは、綾人がヴィヴィオに読んで聞かせていた武王の絵本だった

「ん〜??？」

そこに、ヴィヴィオがトイレから戻ってくる

「ヴィヴィオ・・・この絵本なんだけど・・・誰のかな？」

「あやとおにいちゃんの・・・ヴィヴィオにくれるって・・・」

「綾人君が!？」

「うん・・・」

綾人が良かったらとヴィヴィオにプレゼントしたものだっ

「そう・・・綾人君が・・・」

ヴィヴィオの答えに考え込むのは

「なのは・・・」

「うん・・・明日、はやてちゃんに報告して・・・綾人君に話を聞

こう・・・」

二人は頷きあい、その日はそのまま眠りについた・・・

## 第十七話 命の価値、“兄”として（後書き）

どうも！！

綾人君の武王談義を楽しそうに聞くヴィヴィオ・・・性格が徐々に変わっていくような気が・・・

今回は、エリオ君との絆を更に深めることになり、そしてエリオ君にも”フラグの素”が渡りました

では次回予告！！

綾人がヴィヴィオ達と過ごしている時、なのはとフェイトははやくと共に聖王教会を訪れた  
そこで語られる、六課の真実・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十八話  
「六課の真実・武王と竜王」

今回は、なのは達の様子をお送りします

しかし、最近スターズの二人が空気化しているような・・・？

**PV100000件突破記念(前書き)**

さあ！ ついに100000件を突破しました！！

皆さん、本当にありがとうございます！！

## PV100000件突破記念

どうも!!

「魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃」のPVがついに100000件を突破しました!!

綾人

「すごいな・・・前の50000件からたった4回の投稿でいったしな・・・」

うん!! 作者的にもびつくりです!!

綾人

「それで、今回は何すんの?・・・俺しかないみたいだけど・・・」

うん・・・今回は重大発表をしたいと思います!!

綾人

「重大発表?」

はい

それでは、初めて言いますよ・・・特殊召喚!!

???

「へぶらっ!!」

綾人

「誰か、落ちてきた・・・」

???

「いつて・・・ん？ なにここ？ そして、どなた？」

綾人

「えっと・・・俺は、天童綾人って言うんだけど・・・君は？」

???

「俺？ 俺は・・・」

「魔法少女リリカルなのはStrikers とある新人の日常」  
及び「リリカル マジカル とあ新らじお」の主人公！ 「ハヤト・  
ロックウエル」君です！！

ハヤト

「ああ！？ 台詞取られた！！？」

綾人

「それで、そのハヤト君が何で此処に？」

実は先日、「とあ新」書いてらっしゃるラモン先生の活動報告にさ  
わりだけがネタで書いてあって、面白そうだからって試しにプロロ  
ーグ作って送ってみたんだ  
そしてら、気に入ってもらえたから、このまま執筆に移ろうと考え  
たわけだよ

ハヤト

「・・・大丈夫なんスか？」



綾人

「ウチ以外にも、一本抱えてるしな・・・」

うん・・・更に更新が遅れるかもしれないけど、それでも、書いたからには完成まで持つて行きたいしね！！

綾人

「無駄に責任感強いな・・・」

もちろん、やるからには全力で！！

ラモン先生にも投稿の許可はいただいてるしね  
・・・いつ投稿かは未定だけど

ハヤト

「え〜・・・」

綾人

「どんな内容だ？」

舞台は「とある新人の日常」でのJS事件から三年後、9歳に成長した『高町ヴィヴィオ』と「とある新」の主人公であるハヤト君との恋物語・・・みたいな感じかな？

作者的には初「なのは」シリーズで恋愛物を書くことになるね・・・

ハヤト

「いやいや・・・これって、俺、犯罪者じゃね？」

そんな事は気にしちゃいけませんよ？

愛があれば、年齢なんて・・・

綾人

「まあ、言いたいことは分かるけどな・・・でも「信念の刃」で、まだ恋愛要素出てきてないのに大丈夫なのか？」

大丈夫だよ

もう一方で何とか書いてるから

あ、あと綾人君にも出てもらうからね？

綾人

「は!？」

その小説での君の役割は結構重要にしておいたからね!!  
何気にクロス作品として連載予定だから!!

綾人

「いいのか？ そんなことして・・・」

大丈夫、先生の許可も貰ってるし  
楽しみにしててね？

綾人

「まあ、それならいいけどさ・・・」

それじゃ、軽く設定だけ書いておきましょう!!

世界設定

世界は「とある新人の日常」のティアナルートを参考にしている、  
JS事件ではハヤトはディレトと死闘を繰り広げている

その際に、ティアナとスバルは告白していない

キャラ設定

天童綾人

陸士225隊所属の陸曹長 20歳

ハヤト、スバル、ティアナとは訓練校で知り合い、三人の良き兄的存在で信頼されている

綾人の訓練校卒業後、しばらく音信不通だったが、ハヤトとディレトの死闘後、1度病院にも見舞いに訪れている

そのときから再び交流を深め、ハヤトとティアナの執務官試験合格の際に祝電も送っている

スバルとティアナの気持ちも知っていて、たまにそれをネタにかうかう

父親は、管理局最強の男で“剣王”の異名をもつ「マーク・グリード」

ハヤトとは「家族に規格外がいる」という共通点で話が合う模様

使用デバイスは「信念の刃」同様、アームドデバイス「バルムンク」

備考：「信念の刃」の主人公

本編では、なのはと互角に戦えるほどの実力を持つ二等陸士だが、

本作では六課に来ずに225隊に配属されていて、階級も陸曹長になっている

ハヤト・ロックウエル

期待の新人執務官 19歳

中途半端に優秀な執務官で、いつも事件を回され「事件と結婚した男」という不名誉なあだ名を付けられる

気さくな性格から子供から男女問わず人気がある

訓練校時代に綾人からクロスレンジの戦い方が出来るように扱かれている

家族には、超ブラコンで“女帝”の異名を持つ「ハヅキ・ロックウエル」がいる

使用デバイスはかつての相棒「ブレイブハート」の意思を受け継いだインテリジェントデバイス「クロスハート」

備考：「とある新人の日常」の主人公

本作同様、凡人主人公

六課での厳しい訓練を受けて尚、その性格をキープし続けているあの意味での天才

こんな感じで

綾人

「俺、陸曹長なんだ・・・しかも、スバル達の先輩・・・か」

ハヤト

「年齢的にも丁度いいっすね」

設定もある程度変わってるしね？

ハヤト

「たとえば？」

目が赤くなったりしないし、瞬動も使えない

綾人

「俺の本来の設定がんな無視かよ!？」

まあ、あくまでこれは「とあ新」の世界だから・・・まあ、一応、  
実力は相変わらずなのはさんばりに強いつて設定だし、ハヤト君よ  
りも強いしね

後、規格外の陸戦魔導師が二人も存在するんだけど・・・

綾人

「父さんと・・・」

ハヤト

「姉ちゃん・・・」

うん

二人の共演もどこかでやってみたいな〜と

綾人

「でも、父さんまだ一度も戦ってないけど？」

その辺は「信念」の方の話が進んでからね・・・基本的に今ある二つを中心でやって、その合間合間にこの作品を投稿していこうかと

ハヤト

「へっ・・・別の作者さんが書く俺か・・・」

なるべく、キャラは崩さないようにしていく予定だから  
一応一話目は書いてみたし、近いうちに投稿はすると思う

では、今回はここまでで！！

綾人

「なんか早いな？」

まあ、別の作品のキャラさんを借りっぱなしも良くないしね

それじゃあ、ハヤト君。今回は突然悪いね？

ハヤト

「いやいや・・・久しぶりに別の世界に来て、なんか新鮮だったっス！！」

そう言ってもらえると助かります

では、お帰りはあちらに・・・

ハヤト

「あ、はいはい……ん？ なにこれ……背負うの？……これ  
ってブースターだよな？……え、なに？ どうすんの……？」

では、ラモン先生のところまで……発射！！

ハヤト

「え？ ああああああ！！！」

綾人

「お……見事な放物線だな……」

無事にたどり着けるといいな……

綾人

「ゲストに対して酷くないか？」

うん……今度、謝るところ……

では、せっかくなんで新連載の予告を！



新暦78年 第一管理世界『ミッドチルダ』

ここに住む一人の少女『高町ヴィヴィオ』にはかつて助けてもらい  
“兄”と慕う一人の青年がいた……

出会いから三年が経ち、彼女は青年への思いに気付く

そんな少女と青年を見守りながら応援するたくさんの優しい人達

そして、ある一人の青年が、彼女と青年の思いを繋ぐ・・・

「魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃」と「魔法少女リリカルなのはStrikers とある新人の日常」とのクロス!!

<魔法少女リリカルなのは 高町ヴィヴィオの憂鬱> 始まり  
ます

~~~~~  
~~~~~

連載に向けて、がんばりたいと思いますので

よろしくお願いします!!

ではまた、次は150000件〜200000件突破でお会いしましょう!!



PV100000件突破記念（後書き）

どうも！！

と言うわけで、新連載を考えています！！

「信念」とは少し違った綾人君をお楽しみに！！

ラモン先生

ハヤト君の扱いが酷くてすいません・・・他作品のキャラを弄るのは初めてなので・・・

無事にたどり着いていると思いますが・・・

執筆は、現在鋭意進行中です！！

第十八話 六課の真実・武王と竜王（前書き）

今回、前回でのなのは達の様子が変わった理由が明らかになります

## 第十八話 六課の真実・武王と竜王

それは、なのは達が聖王教会を訪れたところまでさかのぼる・・・

はやてにつれられ、一つの部屋の前に到着したなのはとフェイト

「どうぞ・・・?」

ノックするはやてを通す中の人物の声

なのは達はそれを聞いた後、部屋に入った

「失礼いたします。高町なのはは一等空尉であります!」

「フェイト・テスタロッサ・ハラオウン執務官です!」

中に入り、敬礼をしながら挨拶するのはとフェイト

「いらつしゃい・・・」

二人に優しく笑いかけながら近づく女性

「はじめまして、聖王教会・教会騎士団騎士『カリム・グラシア』

と申します。どうぞ、こちらへ」

「失礼します」

カリムに通され、一つのテーブルに着くなのは

「クロノ提督、少し、お久しぶりです・・・」

「ああ・・・フェイト執務官・・・」

すでに席に着いていた男性、時空管理局本局・次元航行部隊所属、執務官で六課後見人にしてフェイトの義兄『クロノ・ハラオウン』が答える

「フフ！ お二人とも、そう硬くならないで？ 私達は個人的にも友人だから・・・いつもどおりで平気ですよ？」

「と、騎士カリムが仰せだ。普段と同じで・・・」  
「平気や」

はやてからもそう言われたので、いつもどおりの口調に戻るなのとフェイト

「じゃあ、クロノ君久しぶりー！」

「お兄ちゃん、元気だった？」

「！！・・・それはよせ！お互い、もういい歳だぞ？」

フェイトの「お兄ちゃん」発言に顔を赤くしながら言うクロノ

「兄妹関係に年齢は関係ないよ、クロノ？」

フェイトにそう言われ、俯くクロノ

はやてとカリムは横で笑っていたが、はやてが咳払いと共に話し出す

「さて、昨日の動きについてのまとめと、改めて、機動六課設立の裏表について・・・それから・・・今後の話や・・・」

はやての言葉に全員が居住まいを正す

カーテンが閉められ部屋が暗くなり、なのは達の前にモニターが展開される

「知つての通り六課の後見人は僕と騎士カリム、それから僕とフェイトの母親で上官『リンディ・ハラオウン』だ……」

機動六課設立の説明を始めるクロノ

「それに加えて、非公式ではあるがかの三提督も設立を認め、協力の約束をしてくれている」

三提督のこと聞き、驚いているのはとフェイト

「その理由は……私の能力と関係があります……」

モニタを消し、前に出るカリム

カリムは手に持っていた紙の束の紐を解く

「私の能力……『プロフェーティン・シュリフテン預言者の著書』……」

周りに無数の金色のカードが浮かび上がる

「これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成を行うことができます。二つの月の魔力がうまく揃わないと発動できませんから、ページの作成は年に一度しかできません」

説明の最中に二枚のカードがなのはとフェイトの前に差し出される

「預言の中身も古代ベルカ語で、しかも解釈によって意味が変わることもある難解な文章。世界に起こる事件をランダムに書き出すだけで、解釈ミスも含めれば的中率や実用性は割とよく当たる占い程

度、つまりは、あまり便利な能力ではないんですが」

二人の前のカードに文字が浮かび上がるが、古代ベルカ文字でまったく読めず、顔を見合わせ首を振っている

「聖王教会は勿論、次元航行部隊のトップもこの予言には目を通す。信用するかどうかは別にして、有識者による予想情報の一つとしてな」

「ちなみに、地上部隊はこの予言がお嫌いや。実質のトップが、この手の希少能力とかお嫌いやからな」

クロノとはやてが現状の地上と本局の確執を簡単に説明した。

「レジアス・ゲイズ中将、だね」

なのはが一人の将官の名前を挙げる

「そんな騎士カリムの予言能力に数年前から少しずつ、ある事件が書き出されている」

クロノがそう言うと、カリムは書き出されたという内容を言う

「“古い結晶と無限の欲望が集い交わる地・・・死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る。使者達は踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる”・・・」

「それって・・・」

「まさか・・・」

カリムの予言を聞いたのはとフェイトの表情が変わる

「ロストロギアをきっかけに始まる管理局地上本部の壊滅と、そして、管理局システムの崩壊……」

カリムが予言から導き出される答えを言った

なのはとフェイトも告げられた内容に驚きを隠せない  
そんな中、カリムが口を開く

「情報源が不確定と言うこともありますが、管理局崩壊ということ自体が、現状ではありえない話ですから」

「そもそも、地上本部がテロやクーデターにあったとして、それがきっかけで本局まで崩壊……言うんは考えづらいしな……」

はやても、予言についての考えを述べる

「まあ、本局でも警戒強化はしてるんだがな……」

クロノが腕を組みながら言う  
隣のカリムも眉間に皺をよせる

「問題は、地上本部なんです」

「ゲイズ中將は予言そのものを信用しておらず、特別な対策はとらないそうだ」

「異なる組織同士が協力し合うのは難しい事です」

「協力の申請も内政干渉や強制介入という言葉に言い換えられれば、即座に争いの種になる」

「ただでさえ、ミッド地上本部の武力や発言力の強さは問題視されてるしな」

「だから、表立っての主力投入はできない、と？」

クロノ、カリム、はやての話からそう考えるフェイト

「……すまないな。政治的な話は現場には関係なしとしたいんだが……」

クロノは申し訳なさそうに言う

「裏技気味でも、地上で自由に動ける部隊が必要やった……レリック事件だけでコトが済めばよし、大きな事態に繋がっていく様なら、最前線で事態の推移を見守って……」

「地上本部が本腰を入れ始めるか、本局と教会の主力投入まで、前線で頑張ると？」

「それが、六課の意義や」

なのはの質問にはやては力強く答える

そして、カリムが口を開く

「それと……最近、また新たな予言が出てきたの……」

「ほんまか!？」

思わず立ち上がってしまうはやて

「ええ、つい先日……解釈もほぼ終わっているわ……」

「内容は……?」

クロノが静かに続きを促す

なのは達も見守っている

「死せる王と時を同じくして……破壊の化身を討たんがため、



彼の者は小さき灯火と共に蘇る・・・彼の者は・・・『竜王』」

カリムの新たな予言を聞き、再び黙るなのは達

「竜王・・・聞いたこと無いな・・・」

「ええ、そうでしょうね・・・竜王は・・・聖王家を追い詰めた存在とされ、教会では禁忌の対象になっています・・・」

「禁忌の・・・？」

「はい・・・」

首を傾げるなのは達に説明していくカリム

・ベルカの隣に位置する小さい国の王であり、かつて最強といわれていた『最後のゆりかごの聖王』ですら傷も付けられないほどの実力者

・幾度と無く聖王に立ちはだかり、聖王家、ならびにベル力を壊滅寸前まで追い詰めた災患の王

・聖王だけでなく霸王などの歴戦の王達も彼により甚大な被害を被った

・最期はベルカに存在する全ての王が力を合わせ討ち取った

・一部の人間には『武王』といわれている

そんな風に教会では伝えられていると説明した

「聖王を潰しかけた存在・・・」

「だから、禁忌の対象と」

聖王教会が崇拝している聖王に立ちはだかった存在故の伝承  
教会の一部では“悪の象徴”とも言われている

「地方によつては呼び方も様々ですが、全て共通した人物であると言われています・・・特徴もすべて一貫して『真紅の瞳』を宿していたと」

「真紅の?」

「はい・・・血のように赤く染まった瞳を持っていたといわれています」

「っ!?!」

カリムの説明を聞いたなのは顔色が変わる

「なのは? どうした?」

「う、ううん!?!」

クロノもなのはの変化に気付いたが、直ぐに首を振ってごまかすのは

「あれ?・・・でも『武王』って言葉なら、つい最近どこかで聞いた気が・・・」

「本当か!?!」

フェイトが呟くとそれを聞いたはやてが再び立ち上がる

「どこや!?!」

「えっと・・・何処だったかな・・・本当に、チラッと聞こえただけだったから・・・」

唸りながら考えるフェイト

おそらく、綾人が誰かに武王談義しているのが遠くから聞こえていたのだろう

「なんにしても、武王……いえ、竜王について知っている人が六課にいます……」

「そつみたいだな……」

カリムとクロノが顔を見合わせる

「でも、もう一つ気になるな……この“破壊の化身”って……」  
「こちらについては、まだ何も判っていないの……」

悩むはやてに謝るカリム

「でも、竜王はこの存在を討つために蘇るってことは……」  
「少なくとも、私達の敵って線は薄いんじゃない？」

フェイトとなのはの考えにクロノは首を振る

「いや、完全にそうとも言いきれない……竜王の正体が判明しない以上、警戒は必要だろう……もちろん、“破壊の化身”についても……」

クロノの言葉に全員が頷く

ある程度の話が済んだ後にカリムが切り出す

「勿論、皆さんに任務外のご迷惑はおかけしません」

「ああ、それは大丈夫です」

「部隊員達の配慮は八神二佐からも確約はいただいていますし」

なのはがはやてを見ると、はやては笑って頷いた

それを見てカリムは改めてなのは、はやて、フェイトの顔を見る

「改めて、聖王教会・教会騎士団騎士カリム・グラシアがお願い致します。華々しくもなく、危険も伴う任務ですが、協力をしていただけますか？」

ゆっくりと頭を下げ、頼むカリムに

「非才の身ですが、全力にて」

「承ります」

なのはとフェイトもしっかりと頷き、六課へと戻った

【?????SIDE】

《………!!………ま!!!》

(ん……?)

誰かに呼ばれて目を開ける

目の前には二人の人物がいる

(誰だ……?)

《こんなところで寝ていると、風邪を引きますよ?》

《この後、私との手合わせもあるのですからね?》

顔はよく見えないが、楽しそうに笑っている目の前の二人  
体格からして、一人は男性、もう一人は女性だとわかってきた

《さあ、まいりましょう?》

(あ、ああ……)

女性が手を差し伸べてくる、よく分からないまま自分も手を伸ばす・

【綾人SIDE】

「ん・・・？」

手を伸ばした状態で目を覚ました綾人

「夢・・・か・・・？」

ぼんやりと天井を見つめながら呟く

夢の内容を思い出そうとするが、何も思い出せなかった

「でも、なんか・・・懐かしい感じがしたな・・・」

伸ばしていた手を見つめ、そう呟いた

「まだ、二時か・・・寝よう・・・」

時計を確認し、再び瞼を閉じて眠りについた・・・

そして、二日後・・・

「あ、綾人君・・・」

「なのはさん？ それにフェイトさんにはやてさんも・・・どうか  
しましたか？」

早朝訓練が終わって朝食後、一人で過ごしている綾人を見つけたな

のは達

綾人はいつものように読書をしていた

「うん、ちよつとね・・・何読んでるの？」

なのはが綾人の持っている本を指差しながら聞く  
まさに、先日のエリオ達のように・・・

「これですか？ 『武王』っていう昔に存在した男のことを書いた  
歴史小説ですよ・・・」

持っている本を見せながら説明する綾人

< ちよつぱり・・・ >

< ビンゴ・・・やね・・・ >

綾人の回答に念話で頷くフェイトとはやて  
ヴィヴィオの持っていた絵本は綾人があげた物と聞いたはやて達は、  
詳しく話を聞こうと綾人を探していたのだ

「俺の一番のお気に入りの作品ですよ」

胸を張って言う綾人に少し苦笑いのなのは

「そうなんだ・・・ヴィヴィオにも絵本をあげたんだよね？」

「ええ、えらく気に入ったみたいなので」

「それでね？ その武王のことなんだけど・・・」

話題をさりげなく振ってみると

「武王は古代ベルカ最強の男といわれています．．．それこそ『聖王』や『霸王』にも負けないぐらい強かったって言われていますね．．．」

昨日、カリムから聞かされた内容と酷似している綾人の説明だが

「聖王や霸王も認めるほどの強さと誇りを持っていて、二人からも信頼されていたんですよ」

「え？」

少しだけ、教会で聞いた内容とズレが生じた

「聖王と霸王の二人は、鍛錬を重ね幾度と無く武王に挑み、己も鍛えられていたと．．．」

「でも．．．聖王家を壊滅寸前まで追い詰めた王だって．．．」

「それは無いですよ．．．彼が戦ったのは王本人達だけなんですから」

「でも、そんな頻繁に会えるもんかな？ 一国の王様やのに．．．」

はやては綾人の説明の中の不可解な点を聞いてみる

「いえ？ 彼は国を治めていませんよ？ 『武王』という通り名は、

彼の強さを称えて付けられた称号のようなものですから．．．」

「それじゃあ、彼の結末は．．．？」

次はフェイトが質問する

「彼の最期はどの本にも確かなことは書かれていないんです．．．一説では、異世界に渡ったとか言われていますけど」

少し、淋しそうに答える綾人

「そうか・・・なあ、綾人君？ 話は変わんねんけど・・・『竜王』  
って聞いたことあるか？」

さりげなく聞いてみるはやてだが

「『竜王』？・・・いえ、聞いたこと無いですね・・・それが？」

「ああ、いや・・・ちよつとな・・・」

少し考えた後に答え、首を傾げる綾人はやても少し慌てて話を切り上げる

「そうだ、綾人。この後、ライトニングは現場検証に行くから・・・準備しといてね？」

「はい。了解です」

フエイトがそれだけ伝え、綾人の下から立ち去る

【なのはSIDE】

「なんか・・・聞いてた話と違ってたね・・・」

「うん・・・」

綾人と別れて廊下を歩いているなのは達

「とりあえず、クロノ君には報告しとく・・・」

「うん」



そう言って、なのは達と別れ隊長室へ戻るはやて

「フエイトちゃんは準備いいの？」

「そうだね。エリオ達も呼ばないと・・・」

そう言って、端末を操作しエリオとキャロの二人を呼び出し、現場  
検証へ向かった

## 第十八話 六課の真実・武王と竜王（後書き）

どうも！！

前半部分はアニメ通りの展開にオリジナルを含ませて見ました

教会と綾人君との間にある「武王」の見解の違いは何故なのか？

「武王」と「竜王」の関係は！？

これからの話で明らかになるかも！？

綾人君の夢に出てきていた人物は誰なのか？

・・・おそらく、皆さんお気づきでしょうが・・・

では次回予告！！

なのは達との話の後、綾人達ライトニングは前回の出撃で赴いた現場検証に出かけることに・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十九話

「力の理由、自分に出来ること」

次回、綾人君の過去の話が少しだけ出ます・・・っていうのと、おそらくですが「信念」で一番長い話になるかもしれません・・・

「憂鬱」もお楽しみに！！

第十九話 力の理由、自分に来ること（前書き）

なあ、今回は長いですよー！ お覚悟下さいー！

## 第十九話 力の理由、自分に来ること

なのは達との話を終えた数分後、綾人はフェイト、エリオ、キャロの三人と共に先日の戦闘の現場調査へと向かうことになった

移動中のヘリにて・・・

「そういえば、ヴィヴィオって昼間はどうしてるんですか？」

ふと、そう質問するキャロ

「うん。部屋でお留守番なんだけど、寮母のアイナさんが見てくれるし、ザフィーラがガードについていてくれるから」

何気に子供の扱いがうまいザフィーラ  
ヴィヴィオもすぐに懐いた

「しかし、可能性ってだけでも考えにくいですね・・・地上本部へのテロ行為って」

先日、はやてから前線メンバーへ説明がされた

もちろん、予言関連の部分は隠されて説明され、先ほどの綾人の言葉のように「地上本部へのテロの可能性がある」と言われている

「確かに、管理局施設の魔法防御は鉄壁ですけど・・・ガジェットを使えば・・・」

「管理局法では、質量兵器の保有は禁止されてるしな・・・」

言いながら、少し顔を曇らせる綾人

「質量兵器？」

「まあ、大雑把に言えば『魔力を使わない物質兵器』……でいいのかな？」

少し迷いながら説明を続けるフェイト

「質量物質を飛ばしてぶつけたり、爆発させたり先史時代のミッドや、古代ベルカはそういう兵器がほとんどだったの……」

「聞いたことがあります……1度作ってしまったえば、子供でも使うことができるか……指先一つで、都市や世界を滅ぼしたりとか……」

エリオが前に習ったことを思い出しながら言う

「それで、管理局は設立以来、そういう技術を平和のために根絶して、ロストロギアの規制を150年位前に行ったが、いろんな意味で武力が必要だった……」

「さて、それじゃあどうしたでしょう？」

綾人の言葉の続きをエリオとキャラロに聞くフェイト

二人は考え、そしてエリオが手を挙げて答える

「比較的クリーンで安全な力として、魔法文化が推奨されました！」

エリオの答えにキャラロも頷く

「正解。魔法の力を有効に使って、管理局は今のシステムで各世界の管理を始めた」

そう言つて綾人達の前にモニターが展開される

「各世界が浮かぶ『次元空間』に本局、発祥の地『ミッドチルダ』に地上本部を置いて」

「それが『新暦』の始まり・・・75年前」

フェイトの説明に今度はキャラロが続ける

「そう。で、新暦前後の一番混乱していた時期に管理局を切り盛りして、今の平和のきっかけを作ったのが？」

「『レオーネ・フィルス法務顧問相談役』、『ラルゴ・キール武装隊榮譽元帥』、『ミゼット・クローベル本局総幕議長』の、かの『三提督』」

次に答えるのは綾人

「は」

「なるほど」

エリオとキャラロの二人も頷いている

「と、歴史の勉強は置いといて・・・」

笑顔でジェスチャーするフェイト

「ガジェットが出てくるようなら、レリック事件以外でも六課が出勤になるからね？ってこと。しっかりやろうね？」

「・・・はい！！」「」

フェイトの言葉に頷く三人

「ところで・・・」  
「ん？」

しばらく、エリオ達と今後の話をしていた綾人が唐突に切り出す

「さっきの歴史の話の中で出てきていた『質量兵器』・・・という  
か『兵器』と呼ばれるもの全般についてなんですけど・・・」

「うん」

「俺は、少し違う考え方をしてます」

「違ってます？」

綾人の言葉に首を傾げるフェイト

エリオ達も聞き入る

「禁止している技術や兵器も魔法技術も、言い方の違いだけで大差  
は無いんじゃないかってことです」

綾人の一言に驚くフェイト

「どつという意味ですか？」

いまいちピンとこないキャラ

「なら、エリオにキャラ・・・『爆弾』って聞いて、何を想像する  
？」

突然言われたが、すぐに想像してみる二人

「……『人を殺す道具』って考えたか？」

「……はい……」

「私も……」

ズバリ当てられた二人は小さく答える

「まあ、それも間違いじゃないが、100点って訳でもない」「どうして？」

「爆弾は、単に人を殺す道具ってだけじゃないってことですよ。たとえば、地球には『ダイナマイト』と呼ばれる爆弾があります。これは、昔の地球のとある国の一人の科学者が『工業用』に開発しましたが、同時に戦争の道具としても使用されました」

人の生活に役立つ道具としてと、人の命を奪う道具としての二面を持った開発

「どちらが、最初に来たのかは分かりませんが、これだけは言えます……『兵器も技術も使い方しだいだ』って」

「使い方……」

「そうだ、軍人が使えば『人を殺す物』で、工事現場の作業員が使えば『人の生活を助ける物』になる……物は、まったく同じものでもな？」

口を挟むことなく、綾人の話を聞き入っているフェイト達

「地球にはそういった物がたくさんあります。そうだな……『花火』なんか、わかりやすいですかね？」

「花火って……よくイベントとかで空に打ち上げているやつですよね？」



以前、フェイトやアルフなどと遊園地に行った際に初めて花火を見たキャラ

「ああ、あれも爆弾の一種だな・・・様々な種類の火薬を調合して、空で爆発させる・・・これを人に向けて使えば、もう立派な『兵器』だ」

綾人の言葉に目を見開く三人

「魔法も同じだ。管理局の使っている魔法は人を助けている。しかし、その一方で犯罪者達が人を傷つけたり、町を破壊したりしている・・・」

「それは・・・確かに・・・」

綾人の指摘に頷くフェイト

ミッドチルダでも、極々小さくても魔法を利用した犯罪は多いそれは、技術を手に入れたことで起こるある意味での必然

「技術を手に入れれば、人は使いたくなる・・・どういうことが出来るのか試したくなる・・・だから、エリオ、キャラ・・・」

「は、はい・・・」

不意に、二人に話を振る

「自分達の持っている『力』をしっかりと理解しておけ」

「『力』・・・ですか？」

「そうだ。自分がどういう力を持っているのか、その力でなにが出来るのか・・・いい事も、悪い事も含めて、力の意味を知っておく必要があるんだ」

「力の意味・・・」

綾人の言葉を一つ一つ飲み込んでいく二人  
隣のフェイトも聞き入っている

「人も魔法も万能じゃない。誰かを守っていても、間接的に誰かを傷つけているかもしれない。その認識は忘れるな」

静かに、そしてはつきりと言った綾人

その後、到着までの間、エリオもキャロもフェイトも俯いていた

数分後、先日の事件現場へと到着した

「すごいな・・・これ」

地面に空いた大きな穴を見つめながら呟く綾人

その穴は、レリックを捜索中に遭遇した『ルールー』と呼ばれていた少女の召喚した巨大な虫によって出来た穴である

「お疲れ様です！ フェイトさん！！」

「あ、ギンガ！」

遠くからフェイトに気付いて近付いてくる紫色のロングヘアの女性

「現場検証、お疲れ様」

「はい！」

「なあ、エリオ？ 彼女は？」

「あ、ギンガ・ナカジマさんです」

「スバルさんのお姉さんですよ?」

「あくなるほど・・・言われてみればそっくりだな・・・」

エリオたちに説明され、改めてギンガを見る綾人  
ギンガも綾人に気付き

「えっと、こちらは?」

「ああ、初対面だね。この子もウチの隊の子だよ?」

「初めまして、天童綾人二等陸士であります」

「こちらこそ!陸士108所属、ギンガ・ナカジマ陸曹です!」

互いに敬礼

「もう、歳も同じなんだし、そんなに硬くならなくて良いんじゃないの?」

「ああ、そうですね・・・」

「だったら、俺の事は綾人でいい。そのかわり、ギンガって呼ばせてもらうな?」

「ええ、じゃあ、改めてよろしくね? 綾人?」

「ああ」

簡単な説明の後、現場検証を始めるフェイト達

その際に綾人はエリオやキャロ、そして、ギンガの三人にもその当時の状況を聞き確認をしていた

数時間後、現場検証も一段落しようとしていた時だった

「こら! 入ってきちゃ駄目じゃないか!」

遠くで別の局員が怒鳴っていた

「どうしたのかな？」

「どうやら、子供が入り込んでしまったみたいですね」

フェイトに教えるギンガ

先ほどの局員は子供の襟を掴んで怒っていた

「あれは・・・まさか!!」

「兄さん？」

慌ててその局員達の下へ走る綾人

「ロイ!!」

「え？ おゝ、綾人兄ちゃん!!」

綾人の声に気付き、襟を掴まれながら手を挙げて応える少年

「すみません、俺が見ときますので、放してやってくれませんか？」

「ですが・・・」

「お願いします」

「・・・分かりました・・・」

綾人が頭を下げると、渋々ながら解放する局員

「ふゝ苦しかった」

「ロイ、こんな所で何やってんだ？」

呆れ顔で聞くと、ロイは鼻を擦りながら

「決まってるじゃん！ 冒険だよ冒険！！ このあたりはいろいろと面白いんだぜ？」  
「立ち入り禁止の表記見えなかったのか？」  
「そんなんじゃオレは止められないね！！」  
「はぁ……」

胸を張って宣言するロイにため息を吐く綾人

「綾人？ この子、知り合い？」

フェイト達が綾人の下へとやってくる

「ええ、この近くに住んでる子ですよ」

「兄ちゃん、このお姉さん達誰？」

綾人の服を引っ張りながら聞いてくるロイ

「俺の今いる部隊の分隊長と同僚達だよ」

「ふ〜ん」

「初めまして、フェイト・T・ハラオウンです」

「ギンガ・ナカジマです」

「ロイです！」

フェイトとギンガに挨拶するロイ

「えっと、キャロル・ルシエです」

「エリオ・モンディアルです！ よろしく！」

「うん！ よろしくな！！ キャロちゃん！！」

「え？……うん！」

「む……」

エリオをガン無視でキャロと握手するロイ  
そして、少し不機嫌な顔で二人を見るエリオ

「フエイトさん、俺、ロイを送ってきます。構いませんか？」

「それなら、私達も一緒に行くよ？」

「・・・いえ、仕事中です・・・」

「なら、オフシフトって事で・・・ね？」

「・・・わかりました」

フエイトの言葉に少し考えながら頷く綾人

そして、五人でロイの住んでいる家まで向かった（ギンガはさすがに残って仕事をしている）

「ここがオレの家だぜ!!」

「ここって・・・」

「施設・・・？」

ロイが胸を張って紹介したのは『太陽の家』と呼ばれる施設だった  
この施設は、他の管理世界で起こった戦争による戦災孤児や、災害  
で親、兄弟を亡くした孤児などを預かる施設である

「あ！ ロイ!! どこ行ってたの!？」

「げ!! エリー姉ちゃん!!」

入り口から出てきた15歳くらいの少女がロイを見つけ、怒りなが  
ら近付いてきた

慌てて綾人の後ろに隠れようとするロイ

「もう！　また危ないところに行ってたんでしよう!？」

「え〜と・・・えへへ！　それじゃあね！　兄ちゃん達!！」

「あ！　こちら!！」

駆け出し、施設に入っていくロイ

「まったく・・・あ、綾人さん！　お久しぶりです！」

「ああ、エリー。久しぶり・・・」

そんなロイにため息を吐きながら、そのまま綾人に挨拶する少女

「綾人？　この子は？」

「ああ、この施設で子供達を纏めてる子です。エリー、こちらは今俺のいる部隊の分隊長と同僚達」

フェイト達にそう教え、少女にも自己紹介させる

「あ、初めまして！　『エリス・キャンドル』です！　よろしければ『エリー』と呼んで下さい！」

「フェイト・T・ハラオウンです、よろしくね」

「エリオ・モンドリアルです!！」

「キャロ・ル・ルシエです」

それぞれに自己紹介を済ませる

「綾人さん、よろしければお茶を出しますけど?？」

「ああ、ありがとう」

そう言って、施設の中へ入っていく綾人達

「この『太陽の家』には、約四十人ほどの子供達が暮らしています」  
「四十人!？」

数の多さに驚くエリオ

「ここ以外の施設にもたくさん居るからな……。ここはまだ少ないほうだな」

「そうだね、私の行った事ある施設には、大人も含めて二百人ほどいたから……」

執務官として色々な場所を訪れているフェイトが少し暗い顔で言う

「あれ？」

「どうしたの？ キャロ？」

「うん、なんかあつちのほうに子供達が……」

キャロが窓の外を指差す

見てみると、数人の子供達が何かをしていた

「あれは……」

「この施設で作ってる野菜を収穫してるんですよ」

「野菜を？」

綾人の説明に首を傾げるキャロ

「この施設では、ああやって自分達で野菜を育ててるんだよ」

「それを提案したのは綾人さんですけどね？」

「綾人が？」

エリーが小さく笑いながらそう言うと、フェイトも驚いてしまう



「ええ、この施設は管理局や各所からの援助を受けているんですけど・・・子供達が食べていくには少し足りないです・・・」  
「だから、野菜とかを自分達で育てたら、少しは足しになるんじゃないかな？って思ったんです・・・」

「綾人さんには本当に感謝してます。一人で畑を耕して、育てる野菜の種なんかも用意して、農具を揃えて、私達に手順を教えてください・・・必要な土台を全部用意してくれたんですから・・・」  
「へえ・・・」

エリーは嬉しそうに話す

「ここにつれてこられる子供達は、みんな親兄弟を亡くしてしまって、周りには自分の知らない人達が大勢で、寂しくて、悲しくて、戸惑ってしまうんです」

中には塞ぎ込み、誰とも関わろうとしない子供も居て、綾人やエリーなどで無理やりにも輪に入れようとしていた時もあった

「だから集団生活に溶け込むために、なにが良くなって思っ・・・出した答えが、この畑です」

庭に出る六人

決して広くは無い敷地の四分の三を占めている畑が広がっていた

「すごい・・・」

「この畑を・・・お兄ちゃんが・・・」

「尤も、俺が最初に作ったのは、あそこの部分だけなんだけどな」

綾人が指差すのは、畑の四分の一のトマトときゅうりのスペース

「残りは、ここにいる皆で、少しずつ広げていったんだ」  
「・・・すごいね・・・」

子供達の行動力などに感心しているフェイト

「あ！！ 綾人さんだ！！」

「綾人にい！！」

子供達が綾人に気づき、見る見る集まっていく

「みんな、久しぶりだな・・・元気そうで安心だ」

綾人も、笑顔で子供達に応える

その後、フェイト達と一緒に野菜の収穫を手伝った

【エリーSIDE】

綾人が子供達に囲まれながら作業しているのを少し離れた所で作業しながら見ているフェイトとエリー

エリオとキャラも別の子供達と作業している

「綾人、人気者だね？」

「はい。綾人さんはとても優しいですから・・・」

「エリー？」

表情が暗いことに不思議に思いながら、呼びかけるフェイト

「私・・・最初は綾人さんの事・・・嫌いでした」

「え・・・？」

突然語られる、エリーの内心

（一年前）

エリーのいた世界は、国同士の水面下での争いが絶えず、長い間冷戦状態が続いていた

そしてある日、とうとう互いの間に亀裂が入り戦争が起こった

当時14歳だったエリーは母や近所の人達と一緒に避難していたが、途中で攻撃に遭い、集団からはぐれてしまった

そして、逸れた皆を探そうとしていた矢先に悲鳴と銃撃が聞こえた

声のほうへ向かい、物陰から覗くと、母と知人達の変わり果てた姿があった

子供であるエリーには、信じられる状況ではない

ほとんど放心状態になり、一人で彷徨っているときに、鎮圧任務として来ていた綾人に発見された

綾人は衰弱したエリーを保護し、仲間が居るところまで連れて行った  
その後、エリーは『太陽の家』に預けられたが、完全に塞ぎ込み誰とも話をしなかった

たった一つの感情だけを持って・・・

数日後、任務を終えて帰還した綾人は、自分の保護した女の子の状況が気になり『太陽の家』を訪れ、エリーと再会した  
しかし、エリーは綾人を見た途端、綾人を引つ叩いた

「何で・・・何で、もっと早く来てくれなかったの!？」

「・・・・・・・・」

綾人を睨みつけるエリー  
エリーは、管理局や戦争を引き起こした張本人たちへの怒りを綾人にぶつけた

綾人は黙って俯いている

「あなた達がもっと早く来てくれていれば・・・ママは死ななかった！！　ママを殺したのはあなた達だ！！」

エリーは肩を震わせながら続ける  
目から涙が溢れだす

「・・・ごめん・・・」

綾人にはそれしか言えなかった  
しかし、エリーはその一言に更に怒りを表し、何度も頬を張った

「謝るくらいなら、ママを返して！！　返してよお！！」

綾人の胸倉を掴み、叫ぶエリー

「・・・ごめん・・・」

「！！」

再度の謝罪に綾人を突き飛ばし、台所へ駆けていくエリー  
そして、戻ってきた手には包丁が握られていた

「エリスちゃん！？　何を！？」

施設の管理人も驚く

「ママがいなければ、生きてたつてしょうがないの!! だから・  
ママのところに逝くの!!」

「エリスちゃん!!」

「あああああ!!」

包丁を首元に突き立てようとするが、手が動かない

「え……?」

「……………止める……」

声の主のほうを見ると、先ほどまで黙って自分に殴られていた綾人が包丁の刃を握っていた  
手からは血が流れている

「何をやるの!? 死なせてよ!!」

「止める!!」

必死にもがいて、手を振りほどこうとするエリーに綾人は大声で叱り、エリーの動きも止まる

「そんな事を……お前のママは望んでない……」

「あなたになにが分かるの!? いいから離して!!」

「エリス!!」

「あう!!」

名前を呼びながら、エリーの頬を張る綾人

「自分の子供が死んで……喜ぶ親がいるか!!」

「!!」

綾人の言葉にエリーの動きが止まる

「自分達の育てた子供に・・・愛した子供に・・・“死んで欲しい”なんて・・・思うわけ無いだろ・・・」

「あ・・・」

綾人の目にも涙が浮いていた

「お前が生きてんのは・・・お前の親が“生きて欲しい”って願ったからだ・・・なら、お前は生きなくちゃ駄目だ・・・生きて・・・幸せにならなきゃいけないんだよ!!」

涙目で叫ぶ綾人

「わ・・・たし・・・私・・・」

そっと、エリーを抱きしめる綾人

掴んでいた左手は避け、右手のみだが

「今は・・・俺を憎んでくれていい・・・。それで、お前が生きてくれるなら・・・いくらでも憎め・・・。でも、自分で死のうとだけは・・・しないでくれ・・・」

「うああああ!!」

綾人の言葉に、堰を切ったように泣き出すエリー

綾人は黙って彼女の頭を撫で続けた

それから、エリーは少しずつ心を開いていった

綾人にも普通に接するようになり、『太陽の家』には自分よりも小

さな子供が大勢いることを理解し、自分がみんなの面倒を見ることを買って出、綾人もサポートすることを約束した……

「それから、私以外にもそんな子が居て、でも綾人さんは全員と正面から向き合って話をしてきたんです……」

「そうなんだ……」

エリーの話聞き、改めて綾人を見るフェイト

【綾人SIDE】

「エリー、終わったぞ！」

綾人が子供達と野菜の入った籠をもってエリー達の下に戻ってくる顔や服がドロだらけになっている

「はい！ みんなお疲れ様です！ エリオ君たちも、ありがとうね？」

「いえ！」

「楽しかったです！」

笑顔で答えるエリオとキヤロ

二人も同じように服はドロだらけになっており、もうすっかり他の子供達と仲良くなっていた

それからエリーに中を案内してもらい、色々な部屋を見ていくフェイト達

そのたびに子供達が綾人に気付いて集まってきて、面白がっていた。そして一段落つき、リビングとして使われている部屋でお茶を飲んでいたときに、綾人が口を開く

「ところで、エリー……スレイは……どうしてる?」

「元気にやっていますよ?……あまり話し、してくれないですけど……」

綾人の質問に、少し暗くなるエリー

「スレイって?」

「ここに住んでる子の一人ですよ……その子も俺が、去年エリーとは違う世界での任務で保護した子なんですけど」

「ここに来て、もう半年近くになりますけど……まだ、ちゃんと話したことは無いんです……ロイとは、偶に話をしているそうなんですけど……」

「そうなんだ……」

「あ……」

「ん?……あ、スレイ……」

キヤロがドアの近くにいる誰かに気付き、エリーが確認すると、肩まである翠色の髪の毛の男の子が立っていた

「よ、スレイ、久しぶり。……元気だったか?」

「……」

目を逸らし、綾人の顔を見ようとしなないスレイ

そんなスレイに近付こうとする綾人とエリーだが、スレイそのまま走り去ってしまう



「あ……」

「駄目か……」

その様子を見ているだけだった綾人達

「あれ？ エリー姉ちゃんと綾人兄ちゃん。スレイがこっちに来な  
かった？」

廊下で立ち尽くす二人の後ろからロイが声をかける

「ロイ……うん、向こうに行つたよ？」

「まったくもう……ありがとね！」

「あ、ロイ！」

走っていきこうとするロイを引き止める綾人

「何？」

「スレイのこと……頼むな？」

「あつたり前じゃん！ オレはあいつの“兄ちゃん”なんだからさ  
！！！」

「ああ、そうだな」

胸を張って宣言するロイに安心して小さく笑う綾人

「じゃねー！！！」

改めてスレイの下へと駆けて行くロイ

「今のが……スレイ？」

フエイト達も綾人達の下に来る

「はい、ここに来てからずっとあんな感じなんです・・・決められた当番は真面目にやっているし、喧嘩もしない子なんですけど・・・」

「皆との間に、壁をつくってるみたいで・・・」

「でも、ロイ君とは話をするんですよね？」

「まあ、ロイはここに来た時から“綾人さんみたいな兄ちゃんになる！”って息巻いてますから」

「そうなんだ・・・ロイも綾人が？」

「ええ・・・」

遠い目でロイが去った後を見つめる綾人

ロイもまた、綾人が見つけた子供の一人

（七ヶ月前）

ロイの住んでいた世界で巨大な竜巻が発生し、甚大な被害が出た被災者の救援、現地の調査をしに来ていた綾人達が見たのは床しかない家だった物、吹き飛ばされたり、叩きつけられたりした大量の死体、それらを見た綾人達は、自然の恐ろしさ、それに負けた人の脆さを思い知った

綾人達225隊も数日間滞在し、生存者の確認、要救助者の救助、救援物資の配達などを行った

あちこちの避難所を回り、救援物資を配達していた綾人は、ある避難所で一人明るく振舞い、元気に動き回っている子供を見つけたそれがロイである

彼は竜巻が起こった時は別の場所に居たため、避難することができたが、彼の家族は被災地の真っ只中で被災し、死亡した

綾人は、ロイのことが気になり、何度目かの配達の際の僅かな時間を利用して、ロイを呼んで話を聞くことにした

「ロイ……お前、寂しくないか？」

「なんで？」

「なんでって……その……」

普通の調子で返してくるロイに言葉を詰まらせる綾人

「そりゃ、父ちゃんや母ちゃん達が死んじゃったのは寂しいけどさ……」

少し、俯いてそう呟くロイ

「でも、悲しんでたって母ちゃん達帰ってこないじゃん？ だから……だか……ら……」  
「ロイ……」

段々と言葉尻が聞こえなくなっていく

「オレ……が……しっがりじないど……があぢやんだぢ……もつと……がなじい……から……」  
「ああ、わかったよ」

そう言って、涙と鼻水を流すロイを抱き寄せる綾人

「オレ・・・大丈夫だつて・・・あんじん・・・して・・・ほじい  
がら・・・だから・・・うう・・・」

「わかったから・・・もういいから・・・今日だけは泣いとけ？  
それで、明日から・・・もう一回・・・笑顔で生きる」

「うぐ・・・ぐず・・・!!」

綾人の胸で、声を押し殺し泣いたロイ

親が死んだ

小さな子供が抱えるにはとんでもない重さだった

綾人も幼い頃に母を亡くしている

確かにロイとは違う状況だが、肉親が死んだときの悲しさはよく分  
かっている

それと向き合うことの辛さも

綾人の場合、父もいたし、祖父もいた

そのため、悲しみもある程度は和らいだが、ロイは本当に一人なのだ

一人でその辛さに向き合うのには、どれだけの重さなのか？

綾人には想像もつかなかった・・・

数日後

生存者をミッドへと輸送し、一通りの手続きを終えた後、綾人はロ  
イを連れて『太陽の家』を訪れた

「兄ちゃん、何ここ？」

「ここが、お前が暮らす家になる・・・」

「ここが？」

「ああ、着いて来な？」

綾人に連れられ、エリーを紹介してもらった  
そして、一通り見て回り、自分と同じような境遇の子供達が居ることを知った後で

「なら、オレが皆の“兄ちゃん”になる！」

自分が綾人に救われたように、今度は自分が皆の“綾人”になる決意をした

この当時、ロイは9歳である

その後、綾人に宣言したとおり、ロイは皆の“兄ちゃん”として信頼されている

どんな子も決して仲間はずれにしないし、鼻屑もしない

その結果、他の子供達にはロイは“兄”で、エリーは“姉”、そして綾人は“父”という認識をされている

(あれから、もう七ヶ月か・・・)

「兄さん？」

見つめたまま動かない綾人に声をかけるエリオ

「ああ・・・なんだ？」

「いえ・・・どうかしたんですか？」

「いや・・・。さて、長々と邪魔するのもなんですし・・・そろそろ帰りますか？」

「あ、うん。そうだね・・・」

いつもの調子で言う綾人に頷くフェイト

空も少し赤くなっている

「それじゃあ綾人さん、また来て下さいね？」

「ああ、それじゃあな。皆のこと、よろしく頼むな？」

「もう、来るたびにそう言っんですから……」

「ほんとほんと」

少し呆れるエリーとロイに、後ろでフェイト達も笑っている

「はは……じゃあな」

「はい！」

「またなー！ キャロちゃんー！」

「うんー！」

「むー！」

ロイがキャロに手を振っているのを、再び不機嫌顔で見るエリオ

そんなエリオに首を傾げるキャロとフェイト、そして面白そうに見守る綾人だった

## 第十九話 力の理由、自分に出来ること（後書き）

どうも！！

五月に入って一発目の投稿です！！

そして長い！！

力を持つものに掛かる責任の重さを十歳の子供達に説き、そして、年下の子達をやたらと泣かせる綾人君のお話でした

そして、エリオ君にライバル出現！？

225隊の主な任務は、内戦や災害などによる難民の救助と支援や、要人警護などを請け負います

シリアス展開は書いてて結構辛いですね・・・

ロイ君の過去話はカットしようか悩みました・・・プロットが仕上がった後であの大震災があったので・・・

このやるせない気持ちを、「憂鬱」でのギャグ展開にぶつけたいと思います

では、次回予告を

『太陽の家』から帰った次の日、綾人はスターズの二人と事務仕事に勤しみ、昼食後、スバルにある提案をすることに・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十話

「たまには三人で自主練を」

次回から、しばらくは日常編に入る予定です



**第二十話 たまには三人で自主練を（前書き）**

ようやく二十話ですね

前回と今回は、アニメ本編の14話を二つに分け、別の日としてい  
ます

## 第二十話 たまには三人で自主練を

『太陽の家』から戻った次の日

訓練を終え、スターズの二人と共に事務仕事をしている綾人

フェイトとエリオ、キャロの三人は、別の仕事で出かけていった

「うゝ・・・書類仕事苦手ゝ!!」

「文句言わないの!」

「そうだぞ? お前、一応訓練校主席だろ? ティアナと同位で」

「そうだけども・・・」

なんて会話をしながら仕事を進める綾人達

そんな時、呼び出しの放送がかかる

『ランスター二等陸士、部隊長室までお願いします。繰り返します、

ランスター二等陸士・・・』

「・・・ん?」

互いの顔を見合わせる三人

「なにかしら?・・・ちょっと行ってくるわね?」

「ああ」

「うん!」

そう言って、部隊長室へ向かうティアナ

数分後、はやてと共に本局へと向かうと告げ、引継ぎ作業を簡単に済ませて出て行った

「あれ？ ティアナは？」

オフィスにやってきたのはが、スバルの隣に居るはずのティアナを探して聞く

「八神部隊長と同行だそうです」

「本局行きだそうですよ？」

「そっか」

スバルと綾人の説明に納得するなのは

「なのはさんも、今日はオフィスですか？」

「そうだよ？ 綾人君以外のライトニングは仕事で外だし、副隊長達はオフシフトだし、前線で残ってるのは私とスバルと、綾人君の三人だけだね？」

少し、意地悪く言うのは

「あはは・・・何も起きないことを祈ります・・・」

「後ろに同じ」

苦笑いするスバルと後ろで頷く綾人

その後、三人で事務仕事を続けた

「ほい、こっちは終わりっつと！」

「よしっつと。こっちも終わったっつと！！！」

同時に仕事を終え、伸びをするスバルと綾人  
同時に終わったように思えるが、綾人は自分の分はすでに終えてい  
て、今終わったのはティアナから引き継いだ分の仕事である

「ん？」

そのままなのは視線を移すと、なのは肘を突きながら考えに浸  
っていた

「なのはさん？・・・なのはさん！」

「あつ！！つと・・・ごめん！何？」

綾人に二回呼ばれてようやく反応したなのは

「いや、データのセット終わってますけど？」

「あ、本当だ」

慌ててモニターを閉じる

「駄目だね？ ボーツとしちゃって・・・」

苦笑いするなのは

同時に昼休みの鐘がなる

「あ！ 丁度お昼だ。寮に戻ってヴィヴィオと一緒に食べるんだけ  
ど、二人もどう？」

立ち上がり、スバルと綾人のほうを向きながら誘う

「はい！ 一緒にしますー！」

「俺も行っていいんですか？」

二つ返事で答えるスバルと誘われて首を傾げる綾人

「うん！ そのほうが、ヴィヴィオも喜ぶしね？」

「わかりました。そう言うことなら、ご一緒させてもらいます」

笑顔で了承するのはに着いて行く綾人

女子寮に向かう途中、スバルが切り出す

「でも、ヴィヴィオってこの先どうなるんでしょうか？」

「ちゃんと受け入れてくれる家庭が見つければ、それが一番なんだけど……」

「難しいですよね……やっぱり普通と違うから……」

「そうだね……」

二人の顔も少し、暗くなる

「まったく。自分で言っというて暗くなるなよ」

「あいたっ！」

綾人は呆れた顔でスバルの頭を小突く

「あの子を受け入れてくれる家庭はきつとあるさ。俺達がそんな弱腰じゃ、見つかるものも見つかんないぞ？」

「綾人君……うん！ そうだね！」

綾人の言葉に少しだけ元気になるのは

「確かに、見つかるまで時間が掛かると思っただ・まあ、だから自分は、私が面倒見てけばいいのかな？って。エリオとキャロにとつてのフェイト隊長みたいな『保護責任者』って形にしとこうかと思っただ」

「いいですね！！ ヴィヴィオ、喜びますよ！」

「喜んでくれるかな？」

「喜ぶと思いますよ？ きつと」

そんな会話をしながら寮のなのはの部屋へと向かっていく

なのは・フェイトの部屋

「……………ふえ？」

スバルの説明になのはの服を掴んだまま首を傾げるヴィヴィオ

「ほら。よくわかってない」

「え〜つと……………なんて言えば分かるのかな……………」

スバルが四苦八苦しなから説明しているのを後ろで見守っている寮母のアイナ・トライトンとザフィーラ、そして、綾人の三人そして、スバルは何かを思いついた

「つまり、『しばらくはなのはさんがヴィヴィオのママだよ』ってこと」

「……………ママ……………？」

なのはを見上げそう確認するヴィヴィオ

「……いいよ？ ママでも……」

なのはもにっこりと答える

「ヴィヴィオの本当のママが見つかるまでの間、なのはさんがママの代わり。ヴィヴィオは、それでもいい？」

ヴィヴィオと視線を合わせながらそう聞くのは  
ヴィヴィオはジツとなのはを見つめる

「……ママ」

「はい？ ヴィヴィオ？」

「う……うえーん！！」

突然泣き出し、なのはにしがみつくヴィヴィオに後ろのスバルも驚く

「何で泣くの？」

困ったように笑いながらヴィヴィオの頭を撫でるのは

「きつと、なのはさんの中にある恐ろしいものに気付いモガ！？」

全部を言う前に口を塞がれる綾人

振り向くと、笑顔なのに変なオーラを纏っている寮母さんが居た  
この男の余計な一言は、本当にどうしようもない……

その後、四人で昼食を取り、午後からのオフシフトに入った……

「しかし、仕事が終わると妙に静かだよな・・・」  
「うん」

ロビーでまったりしているスバルと綾人

「お兄ちゃん!!」

「ん？ おっと!!」

呼ばれて振り向いたと同時に飛び掛られた綾人

「ヴィヴィオ。走っちゃ駄目だよ？」

後ろからヴィヴィオを注意するのは

「なのはさん」

「二人とも。こんな所でどうしたの？」

「いえ、このオフをどう過ごすか考えてたんです」  
「そうなんだ・・・」

ヴィヴィオを抱えながらなのはに答える綾人

「あ、そうだ。なのはさん？」

「なに？」

「シュミレータ・・・使いたいですけど？」

「シュミレータを？」

綾人の言葉に首を傾げるなのは

「はい。ちょっと自主トレを軽く」

「あ、それならあたしも！」



スバルも手を挙げる

机に向かっていているよりも、体を動かしたい様子だ

「うん、いいよ」

「「ありがとうございます！」」

「ヴィヴィオも〜!!」

びよんぴよんと飛び跳ねながら言うヴィヴィオ

「まあ、いつか。でも、近くにいるんだよ？」

「うん!!」

<ザフィーラ、よろしくね?>

<承知した>

ヴィヴィオに笑いかけながら、傍にいたザフィーラに念話を送るなのは

訓練シュミレータにて・・・

「綾人。なにをするの?」

「まずは、アップでここから向こうにあるビルの下までダッシュして、ここまで戻る・・・っていつのを、3セット」

綾人の指差す方向を見るなのは達

距離は200メートルほど離れている

「往復で400メートルを3セット・・・」

「準備運動だからな・・・軽いだろ？」  
「うん！ 余裕余裕！！」

綾人の言葉に笑顔で答えるスバル

「なのはさん、スタートの合図お願いします」  
「うん」

綾人とスバルも一列に並び、その横になのが立つ

「よい・・・ドン！！」

手を上げて振り下ろすと、二人は勢いよく走っていった

「わ～！ お兄ちゃん達、早～い！！」

1度見えなくなったが、数秒のうちに並んで戻ってきた

「さすがにスバルも綾人君も体力あるな」

「ああ・・・しかし、綾人は抑えているようだな」

なのはの横でそう呟くザフィーラ

「まあ、これは準備運動だからね？」

「そうだな」

笑いながらザフィーラに答えるなのは

しばらくして、二人が戻ってきた

「ふう！ やっぱ走るのって楽しい〜！！」

走り終えた後、伸びをしながら言うスバル

「綾人！ 次は？」

「それじゃ・・・組み手でもするか」

少し考えて提案する綾人

「組み手？」

「ああ。俺もヘラクレスフォームになれないといけないからな」

「Set up・Hercules Form」

そう言つて、バルムンクを起動し、ヘラクレスフォームにする

「すまないが、付き合ってくれ？」

「うん！ いいよ！！ マツハキャリバー！！」

「All light・Set up」

頷きながら、マツハキャリバーを起動するスバル

「ヴィヴィオ、離れようか？」

「うん」

なのはにつれられて、ビルの上に移動するヴィヴィオ

綾人とスバルは互いに距離をとって向かい合う

スバルはボクシングのファイティングポーズのような構え、対する綾人は左手を腰に据えて握り、右手を前にして構える

「一応ルールな。制限時間は3分間で、魔法はなし・・・当然ウィングロードも無し。いいか？」  
「もちろん!!」

綾人の質問に頷くスバル

そして、なのはがそばに寄る

「それじゃ、審判は私がするね？」

「はい」

「レディ・・・ゴー!!」

二人の組み手スパーリングの開始である

「うおおおお!!」

ローラーで勢いを付け、大きく腕を振りかぶって殴りかかるスバル  
リボルバーナックルが唸りを挙げて回転している

「りゃああああ!!」

「ふん!!」

スバルが腕を振り下ろすとほぼ同時に、綾人がスバルの腹に掌ていを繰り返す

「があ!？」

「!？」

勢いの付いた状態から掌ていをくらい、あまりの衝撃に腹を押さえ

てうづくまるスバル

そして、綾人は自分の手を見つめていた

(なんだ?・・・今の感覚・・・)

不思議に思いながらもスバルに目をやる

「どうした? もう終わりか?」

「ま・・・まだまだ!!!」

落ち着いたのか、スバルは立ち上がり再び構える

「次は、こっちから行くぞ?」

綾人はそう宣言すると、スバルに突っ込む

「ふん!!!」

「くっ!!!」

繰り返された脚を同じく脚で受け止め、いったん距離をとるスバル  
そして、再び綾人に突っ込んでいく

スバルは何度も攻撃を繰り返すが、綾人は難なく捌いていく  
逆に、綾人の攻撃はほぼ全てスバルにヒットしていく

【なのはSIDE】

「すごいな・・・やっぱり」

二人の、というか綾人の動きを見てそう呟くなのは

<綾人君、スバルの動きを正確に読んでる・・・『スバルがどんな行動するのか』を瞬時に判断して、最小限の動きしかしてない・・・>  
>  
<対するスバルは、直線的で単純な行動しかしていない・・・アレでは、簡単に読めるな>  
<うん・・・>

念話で話すのはとザフィーラ  
そしてそのまま、なのははジツと綾人の瞳を見つめ続ける

(まだ・・・黒いね・・・)

以前のカリムとの会談で聞いた『竜王』の特徴・・・『血のように紅い瞳』

それを聞いて、なのはは綾人との最初の模擬戦を思い出した  
最後の一撃の直前に見た綾人の『真紅の瞳』

あれは幻ではないと、カリムとの会談で確信しずっと見続けている。  
・  
・

【綾人SIDE】

「このおおおお!!」

「はあ!!」

ポロポロになりながら突き出されたスバルの拳に自分も拳を突き出す綾人

「うえ!?!」

鈍い音と共に互いの拳がぶつかっている  
リボルバーナックルを拳で受け止めた綾人に、思わず変な声が出る  
スバル

「くう!!」

「っ!!」

互いに引かず、拳をぶつけ続ける  
不意に、綾人が眼を逸らすと

「うわあ!?!」

突然スバルがよろける

体勢を立て直し、前を見ると綾人が少し離れていた

「あ、あれ?」

訳の分かっていないスバル

(あ、そっか・・・瞬動だ・・・)

綾人は埒が明かないと判断し、瞬動で距離をとったのだ

「スバル。もうすぐ時間だ・・・次で終わらせるぞ?」

「お、応!!」

少し驚いたが、頭を切り替えるスバル

「バウムンク」「マツハキヤリバー!!」

☆☆Load cart ridge.☆☆

互いに一発ずつロードし、構える

綾人は魔力を左腕に、スバルはナックルにそれぞれ集中させる

「うおおおおおおお！！！」

先に動いたのはスバル

猛スピードで突っ込んでいく

「はああああああ・・・」

対する綾人は、落ち着き、ただ拳の一点に神経を集中させる

「一撃・・・必倒お！！！」

振りかぶり、突き出そうとした瞬間

「幻竜拳！！！」

足を踏み出し、突き出した綾人の一撃がスバルの腹を捉えた

「があっは！！！」

綾人はそのままスバルを吹き飛ばす

スバルはくの字に体を折りながら後ろのビルに突っ込んでいった

【なのはSIDE】



「っ！？ これって・・・」

綾人が攻撃をする直前、モニタで見ていたなのはが声を挙げる

「やっぱり・・・間違いじゃない!!」

なのはが見つめるモニタ・・・そこに映っていた綾人の瞳は真紅に輝いていた・・・

### 【綾人SIDE】

静かに真紅の瞳でスバルが突っ込んだビルを見つめる綾人

「はっ！？ スバル！ 大丈夫か!？」

吹き飛ばした張本人が何を言うのか

慌ててスバルの下に駆け寄る綾人（瞳は黒に戻っている）

「スバ・・・!」

「きゅ」

スバルは瓦礫の下で目を回して気絶していた・・・

## 第二十話 たまには三人で自主練を（後書き）

どうも

今回はスバルとの組み手の回でした

久しぶりの戦闘描写でしたので、クオリティの低さが目に見えますね・・・

綾人君が徐々にチート化している気がします・・・なんだよ、拳を拳で止めるって・・・

何気に今回は、最近空気化している気がしているスターズの二人の救済回にするつもりでしたが、ティアナがさつさと退場してしまいました・・・

なのはさんがママになるという本編でも見所のあるこのお話ですが綾人君の暴拳は勇敢な寮母さんのおかげで未然に防がれました

さて、今回で久しぶりに綾人君の「真紅の瞳」が登場ですね

「憂鬱」書いてると、この設定忘れそうです・・・気をつけねば

では次回予告

組み手の後、休憩している綾人になのはは意を決して話を聞くことに・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十一話

「瞳の謎」

次回、綾人君の目についてのお話になります！

## 第二十一話 瞳の謎(前書き)

今月二回目の投稿です！

勢いに任せると後が怖いのですが・・・まあ、とりあえずぶじぞー！

## 第二十一話 瞳の謎

訓練シュミレーターの一角にて・・・

「スバルお姉ちゃん、だいじょくぶく？」

綾人との組み手で、気を失ったスバルに風を送りながら声をかける  
ヴィヴィオ

「ふう・・・」

その傍で、座って小休止する綾人

「綾人君。お疲れ様！」

「はい・・・」

なのはの劳いの言葉も短く答えるだけだった  
そして、綾人は自分の手を見つめる

「・・・」

「？ どうしたの？」

「あ・・・いえ、何でもありません」

俯いている綾人を不思議に思いなのはは声をかけるが、直ぐに表情  
を戻して答える綾人

「・・・あの、綾人君？」

「はい？」

なのはは、意を決して綾人に呼びかける

「さっきの・・・組み手するとき・・・」

「お前の瞳が紅くなっていたのだが？」

「「え？」」

なのはが言うより先に質問をするザフィーラ

「アレは・・・なんなのだ？」

「・・・・・・・・」

ザフィーラは真っ直ぐ綾人を見る

綾人も俯く

「・・・ま、ばれないほうがおかしいかな・・・」

肩を竦めながらなるべく明るく言う綾人

「俺の目・・・紅くなってました？」

「うん・・・最初は今と同じ黒だったんだけど・・・」

「スバルに最後の攻撃をし、その後しばらくは紅くなっていたな・・・」

綾人の確認になのはとザフィーラも頷く

「なるほど・・・最初に言っておきますが、俺もこの目のことはあまり詳しくは知りません」

「そうなの？」

綾人の補足に首を傾げるなのは

「ええ。この目の事を知ったのも、225隊の先輩に言われて気付いたんですから」

訓練後、先輩から目のことを指摘され、映像を確認し初めて自分の目が紅くなっていたことを知った綾人

「つまり、紅くなっているときの自覚もないと？」

「はい。自分で紅くすることもできません」

ザフィーラに頷きながら答える綾人

「体とかに、何か影響は？」

「そうですね・・・」

なのはの質問に少し考える綾人

「筋力が少し上昇するのと・・・後、すごく疲れが出ますね・・・」  
「疲れ？」

綾人の口から出た単語に反応するのは

「ええ。体がぐったりする感じですかね・・・たまに眠くなったりします」

「今は大丈夫なのか？」

「そうですね・・・まあ、疲れてはいますけど」

次々と質問に答えていく綾人

なのはは、綾人が紅くなった状況を思い出していた

最初のなのはとの模擬戦、次にシグナムとの模擬戦、両方とも綾人は終了直後に眠っていた

それは、目が発動したことによる反動だったのだ

「それ以外には特に変化は無いですね・・・」

「そうなんだ・・・」

綾人の説明になのはも考える

(綾人君は・・・その目が『竜王』・・・ううん『武王』と関わっているかも知れないことを・・・知らない?)

綾人なら、武王の特徴を知っているはずで、武王と同じだと嬉しそうに話すはずだと思っっているのは

だが、綾人からは一向に武王という言葉が出てこない

聞こうにも、予言の内容を話すわけにもいかないのです、どう聞くか考えていると

「う・・・ううん・・・」

後ろでスバルが目を覚ました

「お。気付いたか？ スバル？」

「綾人・・・？ あ、そっか・・・あたし組み手で・・・」

「ああ・・・悪い・・・やりすぎた」

少しボーっとしながら思い出しているスバルに頭を下げる綾人

「いいよ。あたしもまだまだってことだしね」



そう言うと、スバルは立ち上がる

「さ！ 続きやる！！」

「まだ、休んでたほうがいいんじゃないか？」

「そっだよ、スバル？ 無理しちや駄目だよ？」

綾人に賛同し、スバルに休憩を促すのは

「平気です！ さ、綾人！ 早く早く！！」

「・・・それじゃ、さっきの組み手の反省会でもするか？」

「反省会？」

「ああ、組み手で互いに感じたことを言い合って、改善していこうかと」

「なるほど」

休憩をする意味合いでそう提案する綾人だが、自分に足りないものを補うには丁度いいと判断したスバルも頷き、互いに向かい合う

「先ず俺からな・・・まず、スバルの攻撃は直線的過ぎるな」

「直線的？」

「そっだ。自分がどこに攻撃するのかを相手に察知されやすいんだ。さっきも何処に攻撃してくるか完全に読めたからな」

「だから、全部防がれちゃうのか・・・」

思い出しながらしつかり反省するスバル

「次、スバル」

「あ・・・えつと・・・」

振られて何を言つか考えるスバル  
すると後ろから

「慎重すぎるのか、受けの体勢が多い・・・もっと積極的に攻撃してもいいと思うぞ?」

先ほどの会話など忘れたようにザフィーラが指摘してくる

「そうですね?」

「ああ、お前のポジションは仲間のフォローも大事だが、場合によっては攻める必要もあるからな」

「なるほど・・・」

ザフィーラの言葉に頷く綾人

そのままスバルを見る

「スバル・・・なんで実際に戦ってるお前よりも先に、観戦してたザフィーラさんの方が気づくんだ?」

「あ・・・その・・・」

「お前の反省点その2! 状況判断ができてない!!」

「あう・・・」

高らかにそういわれ、落ち込むスバル

その後も、綾人から続々と反省点を挙げられ、段々と涙目になっていき、最終的にはなのはからストップがかけられた

「うう・・・ぐす・・・」

アレも駄目、これも駄目と散々言われ、すっかり意気消沈してしま

つたスバル

「綾人君……言い過ぎ……」

「すいません……つい、やってしまいました……」

なのはに注意され、反省する綾人

綾人の一番の反省点は「齒に衣着せず言い過ぎ」に決定した

「まあ、スバル？ 綾人君もスバルの事を思っ言ってくれてるんだし……今後は、注意してみようね？」

「ぐす……はい……」

涙ぐみながらなのはに答えるスバル

その後は、再び組み手を始めた

その際には、スバルは相手の動きを見るようにし、綾人の攻撃にも段々と対応できるようになっていた

そのまま、二人は夕暮れまで組み手と反省会を繰り返した……

「それじゃ、最後に柔軟でもするか……」

そう言っスバルと背中合わせに立つ

意図を理解したスバルが肘を曲げると、綾人が後ろから腕を組む

「行くぞ？」

「うん！！」

「ほいよ……！！」

掛け声と共に体を前に倒し、スバルを背中に担ぐように持ち上げる

「うわ〜!!」

スバルもどこか楽しげにしている

「それじゃ、交代な？」

「よ〜っし・・・うりゃ!!」

元に戻り、今度はスバルが綾人を持ち上げる

「ぐぬぬぬ!!」

「お・・・いい感じいい感じ」

思い切り力を入れて持ち上げているスバル  
対照的に、持ち上げられている綾人は余裕な表情をしている

「そんじゃ、次は前屈だ。座りな？」

「うん」

「なのはさん、ヴィヴィオ、後ろから押してください」

「うん!」「は〜い!!」

地面に座り、脚を広げ、腕を前に出す綾人とスバル  
なのははスバルの、ヴィヴィオは綾人の後ろに立つ

「押すよ？ スバル」

「はい!」

「ヴィヴィオ、力いっぱい押せよ?」

「うん!!」

二人が同時に背中を押し、体を倒す

「ふいっ……きつつっ!!」

「ヴィヴィオ、もっと力入れろっ!」

「うっん!!」

ヴィヴィオも一生懸命、綾人の体を押す

横でザフィーラが、完結丁寧に力の入れ方をレクチャーしていて、数分後にはしっぴかりマスターしていた

「それじゃ、今日はお疲れ様!!」

「お疲れ様でした!!」

「でしたっ!!」

なのはに礼をする二人の真似をするヴィヴィオ

「もう、お仕事も無いし、お風呂に入ってゆっくり体を休めてね?」

「はい!!」

【なのはSIDE】

綾人とスバルの自主練の後、ヴィヴィオを寝かせてなのははモニタを見ながら一人で考え事をしていた

「綾人君は……『武王』の特徴までは……知らないのかな……でも、綾人君は『武王』関連の本はたくさん持ってるらしい……知らないはず無いよね……」

休憩中の綾人との話を思い出し、考え込むなのは

なのはが考えた事象は以下の通り

・綾人は『武王』の特徴を本当に知らない

・特徴を知っているが、あえて隠した

・予言に出てきた『武王と呼ばれた竜王』と、綾人の知っている『武王』は別人である

・そもそも、綾人の瞳はなんの関係も無いただの特異体質である  
などなど・・・

「一応、はやてちゃんに報告はしよう・・・」

そう呟き、報告書の作成を始めるなのは

### 【綾人SIDE】

自主練後

スバルと戻ってきたエリオとキャラを誘い、夕食を摂っている綾人  
その際に、なのはがヴィヴィオの“ママ”になったことを教えたら、  
フェイトも二人の後見人になったことを聞いた

「それにしても、なのはさんとフェイトさんがママって・・・」  
「ヴィヴィオ・・・ものすごい無敵な感じ・・・」

エリオとキャラがそう言うと

「あはは！ それなら二人だって、フェイトさんの被保護者で、なのはさんの教え子じゃない」

山盛りのサラダを取り分けながら笑うスバル

「えっと・・・それはそうなんですけど・・・」

「えへへ・・・」

そんなスバルに苦笑いするエリオとキャラ

「そういえば、二人にとってフェイトさんって『お母さん』？『お姉さん』？・・・どっち？」

ふと思いついたスバルがそう質問する

「私は・・・『優しいお姉さん』・・・ですね」

思い出しながら答えるキャラに対し

「僕は・・・どっちだろう？・・・難しいかも」

考えるがうまい表現が出てこないエリオ

「フェイトさんはエリオ君が『子供』なのと『弟』なのと・・・どっちが嬉しいのかな・・・明日聞いてみようか？」

「んぐ！？ ごめんキャラ！ それは止めて！！」

不意に言われたキャラの言葉にパスタを喉に詰まらせながら答えるエリオ

それを見て、スバルとキャラも笑う

そして、ずっと黙っていたこの男が口を開く

「エリオの場合、フェイトさんがどうこう言う前に、キャロ関係で気をつけないといけない相手がいるもんな？」

「え？」

意地悪くニヤリと笑いながらエリオとキャロを見る綾人

「に……兄さん!!」

「へ……そうなの、エリオ？」

「うう……」

スバルも興味を引かれてエリオに聞くが、顔を紅くして縮こまってしまう

「お兄ちゃん。どういうことですか？」

「それは俺の口からは言えないな」

「え〜！ 教えてくださいよ〜!!」

綾人の回答に口を尖らせながら聞くキャロに対して綾人は

「エリオに聞くといい」

「エリオ君？」

矛先を見事に変更させた

「え！？ いや……あの……」

その後

キャロからの質問責めにあうエリオは、うまくお茶を濁してその場



を切り抜けることに成功したのだった・・・

## 第二十一話 瞳の謎（後書き）

どうも！！

綾人君は自分の目が紅くなっていることを、実は知っていたんです  
そして、なのはさんの考えた事象は・・・一つだけ正解があります  
どれかは、みなさんで推理してみてください

では次回予告！

なのはがヴィヴィオのママになって二日・・・  
いつものように仕事をする六課のメンバー・・・  
しかし、その中で一人、フェイトだけが様子が違っていた・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第二十二話  
「ホントのママ」

次回から、サウンドステージ02編に入ります！

どうでもいいのですが、このサイトで02の話ってなかなか見ない  
ですよね・・・

## 第二十二話 ホントのママ(前書き)

今回から、サウンドステージ02編に入ります！

## 第二十二話 ホントのママ

なのは、フェイトの二人がヴィヴィオの“ママ”なった二日後

朝、なのはとフェイトの部屋にて・・・

「じゃあ、ヴィヴィオ？ 行ってくるね？」

「行ってきます」

部屋の入り口で、ヴィヴィオに挨拶をするのはとフェイトだが・・・

「うっ！！」

ヴィヴィオはぐずっってしまったているようだ

「アイナさん。よろしくお願いします！」

「はい、了解！！」

そんなヴィヴィオを尻目に、寮母のアイナに頭を下げるなのは

「ほうらヴィヴィオ？ ママたちに「いつてらっしゃい」「って

「うっ！！」 ママっ！！」

ぐずりながらなのはに抱きつくヴィヴィオ

「あ〜！ も〜、ヴィヴィオ〜？」

「ダメだよ、ヴィヴィオ？ なのはママ、お昼には帰ってくるからね？」

「う〜!!」

フェイトがやんわりと注意するが、ヴィヴィオは尚もぐずる

「あ!・・・っと」

「おはようございます〜・・・す」

「あ・・・スバル、ティアナ・・・」

「おはようございます!!」

「キャラ、エリオ・・・おはよう」

そこへ、綾人以外のフォワード陣がやってくる

「ほうら、ヴィヴィオ?」

「うう・・・」

アイナに諭され、なのはから離れるヴィヴィオ  
なのはは屈んでヴィヴィオと視線を合わせる

「お昼は一緒にお散歩しようね? ママと海を見ながらのんびりお  
昼」

「ホント?」

なのはの言葉に少しだけ明るくなるヴィヴィオ

「ヴィヴィオがいい子で待ってたらね? いい子にしてたら、も  
しかしたら綾人君も来てくれるかもしれないよ?」

何気に綾人の名前を利用するのは

ヴィヴィオは綾人にかなり懐いているので、こう言うと基本的にヴ  
ィヴィオはいい子になるのだ

「えへへ！ いい子で待ってる！！」

笑顔で約束するヴィヴィオ

「うん！ じゃあ行ってきます、ヴィヴィオ」

「行ってきます」

「いってらっしゃい！！」

なのはとフェイトを見送るヴィヴィオ

「ほら、スバルやキャラ達にも「いってらっしゃい」って

「いってらっしゃい！！」

「……はい、行ってきます！」「」「」

アイナに言われてスバル達にも手を振ると、スバル達も手を振り替えして去っていった

「ふう……」

「おつかれ」

給湯室でなにかの作業を終えて一息つくなのはに労いの一言をかけるフェイト

「む……なんで皆待ってるの？ 先に行っていていいのに……」

少し困った表情で皆を見るのは

「あゝ……その……なんていうか……」  
「その……なんかおもしろい……もとい！」

苦笑いのスバルと、発言が綾人みたいになりかけたティアナ  
綾人ならば言い切る……間違いなく

「なにか手伝えるかな？つて」  
「一応待機を……」

素でそう思っているエリオとキャロ

「うう……」

なのはもう少し顔を紅くして俯く

「さ！ 出勤時間だよ？ お仕事お仕事！」

「……はい！」

「はい！」

フェイトが手を叩きながら全員に告げると、フォワード陣となのも  
も答えてオフィスへと向かう

「フェイトさんも、大変ですか？」

途中、不意にそんな質問をするキャロ

「私は別に……ヴィヴィオが本当のママだと思ってるのは、なの  
はの方みたいだから」

「そうなんですか？」

「……フェイトママも好き〜！」つて言っていましたけどね」

そう答えるフェイトに、エリオとスバルが以前一緒に遊んだ際にヴィヴィオが言っていたことを教える

「あはは・・・それは、嬉しいけど・・・」

フェイトも少し笑いながら答える

「ま、ヴィヴィオがあんまりフェイトママのことを「好き好き大好き〜！」だと、どっかのちびっ子二人が嫉妬するかもしれないしね〜?」

「「ええっ!?!」」

ティアナが意地悪くエリオとキャラに言うと、二人も驚きで同時に声を挙げる

「えへへ〜! ちょうどよかったのかな〜?」

スバルも同じようにからかう

(なんか、綾人君みたい・・・)

後ろで聞いてたなのははふと、そう思っていた

「別に、嫉妬なんかしませんよ!」

「子供じゃないんですから・・・」

キャラとエリオが少しむくれながら答える

「いや・・・子供・・・」



「あはは！・・・なんか二人とも、ピシッとしてるね？」  
「どうしちゃったのかしら・・・」

突っ込みが中途半端になったが、二人の様子に驚くスバルとティアナ

「・・・・・・・・」

フェイトは少しだけ暗い顔をしていた

「あの、フェイトさん？」

「どうかしました？」

不思議に思い、フェイトに声をかけるキャロとエリオ

「あ、ごめんごめん。なんでもないよ」

「そうですか・・・」

「？」

少し、ぎこちない笑顔で答えるフェイトに二人も顔を見合わせてしまっ

「それにしても、ヴィヴィオって綾人によく懐いてますよね？」

しばらくした後、ティアナが先ほどのヴィヴィオの様子を思い出しながらなのはに聞く

「うん。綾人君の名前出すだけで笑顔になっちゃって・・・少し、複雑かな？」

なのはも苦笑いしながら答える

「お兄ちゃん。普段から、とつてもやさしいですもんね？」

「うん。僕達も、良くしてもらってます」

エリオとキャロも頷く

「綾人って、子供に甘いところあるよね？」

「綾人本人は、自然に接してるだけだと思っけどね」

会話はすっかり綾人の話にすり替わっていた

「あ、おはようございます！」

オフィスの入り口で、綾人と合流し挨拶をする

「おはよう！ 綾人君！」

「おはよう」

なのはとフェイトも挨拶を返す

「あれ？ フェイトさん、どうかしました？」

「え？」

フェイトの顔を見るなりそう聞いてくる綾人

「どうして？」

「いや、なんかいつもと声の感じが違いましたから」

一言でフェイトの様子に気付いた綾人  
フェイトも一瞬たじろぐが

「そんなことないよ？ ほら、お仕事お仕事！！」

それだけ言っただけでオフィスに入っただけ

「ふむ・・・エリオ、キャラ。何かあったか？」

「いえ・・・」

「得には・・・」

「そうか・・・」

エリオ達に聞き、スバル達にも視線を向けるが、全員首を振っている

「ま、いつか」

綾人も肩を竦めて気にしないことにした

その後、仕事中何度かフェイトをはブーツとしていて、綾人やなのはが声をかけて再起動といった状態になった  
確認するたびに「大丈夫」と言い張ってしまうため、なのはも綾人もなにも言えなかった

そして、昼食の時間になった

「綾人君。悪いんだけど、今日もいいかな？」

「わかりました」

昼食のベルが鳴るとほぼ同時、なのはが綾人に確認を取り、綾人も

頷き返す

なのはのお願いとはズバリ、ヴィヴィオとの昼食である

なのはは綾人の名前を最初に使い始めた頃、昼食時に綾人が来ないと分かる、ヴィヴィオは泣きそうな顔になり、急遽、綾人を呼び出すハメになってしまった

綾人も、ヴィヴィオを泣かせたまま昼食などしたくないので、よっぽどのことが無い限り一緒に昼食を摂ると約束している

「いつもごめんね？」

「いえいえ。俺も、ヴィヴィオと一緒にだと楽しいですし」

そういつてなのはと一緒にオフィスを出て行く綾人  
その様子を見ていたスバル達は

「なんか、綾人ってヴィヴィオのお父さんみたいだね？」

「そうね・・・」

スバルの感想にティアナも頷き、そのまま振り返る

「二人的にはどう？ 綾人を取られた感じ？」

「そ、そんな事無いです！」

「そうですよー！！」

ティアナがからかうようにエリオとキャラロに聞くと、二人は必死に答えていた

「まあまあ。それよりもエリオ、キャラロ？もう直ぐ出るから、行くか？」

「は、はい」「は、はい」

苦笑いしながら二人を連れて行くフェイト  
フェイト達はシャーリーと共に、近隣の捜査部周りと、警備打ち合わせに向かった

【綾人SIDE】

「お。なのはちゃんと綾人君。これからお昼か？」

「あ、はやてちゃん！」

「お疲れさまです」

隊舎の入り口で車に乗り込もうとしているはやてが綾人の手にあるものを見て声をかけてくる

綾人の手には、ヴィヴィオと食べる昼食が入ったバスケットが握られている（もちろん、綾人特製である）

「あ、聖王教会だっけ？」

「そうや。シグナムたちの健康診断と捜査の打ち合わせや」

なのはがはやての予定を思い出しながら確認すると、はやても頷き答える

<例の報告も兼ねてな・・・>

<うん・・・>

綾人にはれないように念話で会話するはやてとなのは

先日の自主練の後、なのはからの報告で“綾人が『竜王』となんら

かの関わりがあるのではないか？”と考え、カリムやに報告をする  
予定のはやて

今回、そのあたりの確認と今後について話に行くのだ

「ほんなら、行ってきます」

「行ってきまゝす!!」

「行ってらっしゃい!!」

「お気をつけて」

直ぐに笑顔になり、車に乗り込み出発するはやて達

なのはと綾人も敬礼で送り出す

「それじゃ、行こっか？」

「はい」

車が見えなくなり、改めてヴィヴィオの待つ部屋へと向かうなのは  
と綾人

なのは・フェイト・ヴィヴィオの部屋にて・・・

「ただいま！ ヴィヴィオ！」

「お邪魔します」

「ママ〜！ お兄ちゃん!!」

入るなり、なのはに飛びついてくるヴィヴィオ

「いい子にしてた？」

「うん!!」

なのはのいつもの質問に満面の笑顔で頷くヴィヴィオ

「えらいぞ〜?」

「えへへ〜!!」

そんなヴィヴィオの頭を撫でる綾人

「それじゃ、お昼食べよっか?」

「はい!」

「はい」

テラスに出て、海の近くのテーブルにて食事をしているなのは達

「あ〜・・・あむ!」

サンドイッチをとてもおいしそうに頬張るヴィヴィオ

「おいしい?」

「うん!!」

「それはなによりだ。作ったかいがある」

なのはに笑顔で答えるヴィヴィオ

綾人も嬉しくなる

「あつと・・・ヴィヴィオ、動くなよ?」

「ん?」

そう言うと、ヴィヴィオの頬に触れる綾人

「付いてたぞ？」

そう言つて人差し指を見せると、サンドイッチに使われていたマヨネーズが付いていて、綾人は何の気なしにそれを舐める

「こぼさないでね？ ヴィヴィオ」

「はい。あ、ママ。あ〜ん」

「ん？ あ〜ん！」

ヴィヴィオが差し出すサンドイッチを口に入れるのは  
そして、お互いに笑い合う

「おいしい？」

「うん！ おいしい」

「えへへ！！」

二人でまた笑いあう

それを見ていた綾人は

（この二人は、こんな些細なことでも笑顔になるよな・・・本当の  
親子みたいだ・・・）

と、思っていた

これなら、口に出してもいいはずなのだが

どうして、この男はいらんことをやたらと口にするのか・・・

「あ、ママ。これなに？」

ヴィヴィオはなのはの傍に置かれていたピンを指差して聞く



「あゝ。給湯室で作った『キャラメルミルク』」

教えながらビンの蓋を開くのは

「はあゝ！甘くていい匂い！」

「でしょ？このサンドイッチ、全部食べてからのお楽しみね？」

「うん！」

昼食後のお楽しみがあると分かると、また食べ始めるヴィヴィオ

「だからって、あんまり急いで食べるんじゃないぞ？喉に詰まらせたら大変だからな？」

「はい！」

やんわり注意する綾人に返事を返し、よく噛んで食べ始めるヴィヴィオ

しばらく食べていると、ヴィヴィオが口を開く

「あのね、ママ〜？」

「ん？」

「なのはママ、ホントのママじゃないけど、ホントのママより大好き！」

「っ！」

「.....」

ヴィヴィオの言葉に目を見開くのはと、少し暗い表情になる綾人なのは小さく笑いヴィヴィオの頭を撫でる

「ありがとう.....ヴィヴィオ.....」

「んふふ〜！」

ヴィヴィオは撫でられて気持ちよさそうにしている  
なのは、そのまま続ける

「でもヴィヴィオ、ホントのママのこと、まだ思い出せなんですよ？……だったら、比べるのおかしくないかな？」

「ん〜……」

なのは言葉を続ける

ヴィヴィオに伝えるように、自分に言い聞かせるように

「ヴィヴィオのホントのママ……きつと、どこかにいるんだし……いつか急に、思い出すかも知れないし……」

「ホントのママ……いるのかな……？」

「……いるよ……きつと……」

俯くヴィヴィオにそう答えるなのは

「なのはママが……ヴィヴィオのホントのママならいいのに……」

「……うん……そうだね……私もそう思う……」

「え？」

なのはも俯いてしまい、ヴィヴィオがなのはを見上げる

「私も……ヴィヴィオとずっと一緒に居たいよ？　でも、私がちやんとお仕事しないと困っちゃう人がいるしね？……スバルにティアナ……エリオにキャロ……フェイトママとか……はやてちゃんとか……綾人君とかね……」

「うん……」

一瞬、綾人に目を向けるヴィヴィオ  
綾人も、何も言わないで小さく笑いかける

「なのはママのお仕事・・・困ってる人を助けるお仕事だから・・・  
ヴィヴィオにも・・・どうしても色々・・・寂しい思いさせちゃう  
んだ・・・」

「うん・・・」

「でも、きつとどこかに居る・・・ヴィヴィオのホントのママなら、  
ずっと一緒に居てくれる・・・ヴィヴィオが寂しいときにも・・・  
泣きたいときにも・・・ね？」

「ヴィヴィオ、泣かないよ！ 寂しくないよ！」

なのはの言葉にそう言い返すヴィヴィオ  
なのはも少し苦笑いする

「ホントかな？」

「ホント〜！」

なるべく明るくからかうのはに、しっかりと答えるヴィヴィオ  
それを確認した綾人は、バスケットの中のサンドイッチを取り出し、  
ヴィヴィオに差し出す

「ほら、ヴィヴィオ？ 最後の一個だぞ？」

「あ〜ん！」

しっかりと噛み、飲み込む

「さ、食べ終わったら？」

「ごちそうさまでした！」

綾人の一言にしっかりと手を合わせるヴィヴィオ

「いただきます」と「ごちそうさま」などの基本的な挨拶はしっかりと教え込んでいる綾人

「はい！ じゃあ、お楽しみの『キャラメルミルク』、いってみようか？」

「わ～！！！」

なのはがビンを持ち上げると、ヴィヴィオの目が光りだす

なのはお手製の『キャラメルミルク』にヴィヴィオは

「お兄ちゃんのホットケーキよりおいしい！！！」

との感想を言い、それを聞いた綾人は

「そうか・・・なら、今度はさらにすごいのを作ってやる！」  
「にははは・・・」

などと、勝手に対抗意識を燃やしていたのだった・・・

## 第二十二話 ホントのママ（後書き）

どうも！！

まずは序盤、なのはさんとヴィヴィオとの昼食でした！

綾人君が着々と父親になりかけていますね・・・

関係ないのですが、サウンドステージでのティアナには、突っ込みどころが多々ある気がしますね

ティアナの台詞のほとんどは、そのまま耳コピしています

では次回予告！

なのはからの報告を受け、はやてはカリムと今後の話し合いをするために聖王教会へと向かった・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十三話

「疑惑、仲間として」

今回は、はやてさんがメインになります！

あと、この作品のPVが150000件を突破し、200000件に近付いております！

突破した際に、こちらでの記念小説の企画を模索中です

一応、現在考えているのは、以前に書き上げた十三話のifものです

内容としては、綾人君がティアナの説得に失敗して原作どおりに話が進んだ場合の話です

もしも、魔王が降臨したとき、綾人君はどうするのか？・・・っという話になっております

記念なのによたらとシリアスな話を考えている自分って・・・

なにか、他にやってほしいという企画があれば感想などで書いてください！検討いたします！

ではでは！！

第二十三話 疑惑、仲間として（前書き）

さあ、今回ははやくさんメインです！

と言っても、ほとんどDのままなのですが・・・

## 第二十三話 疑惑、仲間として

### 聖王教会・庭園

「はぁ・・・やっぱりこのお庭は、落ち着きますね〜」

「ああ・・・」

庭園の空気を吸い込み、大きく深呼吸するシャマルとシグナム

「ここ、聖王教会本部は、どこも古きベルカの情景を残しています。皆さんの故郷にも、こんな風景があったのかもしれないですね？」

「ですかね・・・あんまり昔過ぎて、覚えてないんですが・・・」

先頭をあるくシャツハにヴィータが答える

「私たちは、古いベルカのことにはわかりませんが・・・」

「落ち付くのは確かかね？ 空気もええし！」

「はいです〜！！」

ヴィータと並んで歩くはやととその間を浮遊するリイン

そこに、シャツハに通信が入る

「はい。シャツハです」

『シスター、皆さんの診断のご用意が整いました』

「はい。ありがとうございます」

短く礼を言い、通信を切りはやと達に振り返る

「では、守護騎士のみなさん。診断のご用意が整いましたので」



「「「はい!」「」」

シャツハに答える守護騎士四人

「私も付き添いするです〜!」

その横で、リインが手を挙げる

「別にいいのに」

「んふふ〜! 皆の健康状態〜、しっかり把握しておくのも、『祝福の風』の勤めなのですよ〜!」

えっへんと胸を張るリイン

「うふふ! 頼もしいわ!」

「ま、しっかり把握しておいてくれ?」

笑顔でリインを褒めるシャマルとシグナム

「皆? しっかり見てもらってきてな?」

「はい!」

「行って参ります・・・」

はやてに間延びして答えるヴィータとシャマル、そして一礼して歩いていくシグナム

「騎士はやては、オフィスのほうへ」

「はい!」

はやては、シャツハと共にカリムの待つオフィスへと向かって歩き

出す

「ウチの子達の健康診断、いつもしっかりやっていただいで・・・  
ほんま、おおきにです」

「いえ。守護騎士の皆さんは、古きベルカの『生きた記憶』と言っ  
てもいい、大事な方々ですから・・・」

「はい・・・」

はやての礼にそう答えるシャツハ

「貴重な古代ベルカ式の戦技や魔法の保存にも、ご協力いただいで  
おりますしね？」

シャツハの言葉に、小さく笑うはやて

「それに・・・これは個人的にですが・・・私やカリムは、あなた  
や守護騎士の皆さんが好きですから」

「ありがとうございます！ シスターにはほんま・・・シグナムの  
『決闘趣味』にまで付き合っていたいで」

「いいえ！ とんでもない！！ ご紹介していただいで以来、騎士  
シグナムとは心からの剣友として・・・」

オフィスに向かう間、そんな会話を続けたはやてとシャツハだった。  
・  
・

### 【カリムSIDE】

その一方、カリムのオフィスにはその様子を見守る一人の男性がいた

「はやての騎士達は、相変わらず仲良しでいいね？」  
“あの”はやてが主だもの」

カリムも砕けた喋り方をしているこの男性は、本局査察官の『ヴェ  
ロツサ・アコース』

カリムやクロノ、はやてなどはかなり古い付き合いです

そんなヴェロツサは椅子に腰掛けながら、少し真面目な顔で話し出す

「しかし、カリムやクロノ君の依頼で色々調べるうち、地上部隊で  
のはやての評価も、色々耳に入ってきたんだけど……」

「うん……」

カリムの顔も暗くなる

ヴェロツサは簡単な資料を展開して話を続ける

「十年前の『闇の書事件』と……その『闇の書』の伝承者である  
はやてについて、問題視している人も、やっぱり多いね……シグ  
ナム達が『闇の書』の騎士だって事を知っているものはかなり少な  
いみたいけど……その分、はやてが一人で『闇の書』の過去を  
被っているようにも見える……むしろはやては、進んでそれを選  
んでいるような……」

「『そんな評価も覆して、それでも人を救えるくらいでない』っ  
てはやては強がるけど……やっぱり……ね……」

カリムの言葉に、ヴェロツサも小さく頷く

「大変な仕事を任せている身で、こんなことを言うのは変だけど……  
あの子たちには、できれば笑って欲しい」

「幸せになるのも楽じゃないよ。はやても、別に幸せになるために  
戦ってるんじゃないんだし」

「それはそうだけど・・・」

「ま！ はやては強い子だよ？ 大丈夫！」

「・・・うん」

ヴェロツサの言葉にもどこか煮え切らない様子のカリム

「カリムが心配顔していると、またはやてに心労をかけるよ？」

「あ・・・うん！」

おどけて言うヴェロツサの言葉に、いつもの笑顔に戻るカリム

「じゃあ！ ちょっと話題を変えるわね？」

「うん！」

元気になったカリムに少し嬉しそうなヴェロツサだが

「最近、局の方にあなたの話をよく聞くのね？」

「え？ 僕？」

急に自分の話になり、首を傾げるが、カリムはそのまま話を続ける

「それによると、あなたは相変わらず『仕事の成果は優秀でも、職務態度によるしくない部分が目立つ』って」

「い、いや・・・それは・・・」

「遅刻やサボりも、最近ますます多いつて言うし」

「そ、それは・・・職務上色々・・・ね？」

苦笑いしながら言い訳をしているヴェロツサ

「あんまり過ぎる様だと・・・またシャツハに叱ってもらわないと

いけないわよ？」

「それは勘弁・・・シャツハ・・・怒ると怖いんだから・・・」

過去の出来事を思い出しながら少し震えている

「じゃあ、ちゃんとする？」

「ちゃんとしてるって！・・・時々は・・・」

「もう！ ロツサ！」

「はい・・・」

カリムのお説教に小さくなるヴェロツサ

それとほぼ同時に、はやて達が部屋に入ってくる

「失礼します」

「こんにちは」

「いらつしゃい！ はやて！！」

先ほどまでヴェロツサに向けて怒っていた様子など微塵も感じさせずにはやてと挨拶をするカリム

「ロツサはなんや？ また叱られてるんか？」

「あ・・・私の出番ですか？」

部屋で小さくなっているヴェロツサを見つけ、そう聞くはやてと、頭を抱えながら前に出てくるシャツハ

「失礼な！ シャツハも・・・腕まくりとかしない！」

「おや・・・」

「まったく・・・シャツハはシスターのクセに、直ぐに暴力を振るうんだから」

「“愛の鞭”と言つてください！ あなたが子供のころからずっと、あなたが立派な大人になれるよう教育しているんですよ？」

シャツハは腰に手を当てながら、ヴェロツサに説教を始める

「シスターシャツハの厳しい教育と、カリムの優しい指導を受けて尚、その性格をキープし続けているあたり、ロツサはほんま大物なんやな〜って、よく思うよ？」

「ありがとう！ 尊敬してくれ？」

はやてに胸を張って威張るヴェロツサ

別段、威張れることではない

「うん！ してるしてる！」

「・・・軽いよ・・・」

スルーして答えるはやてに、再び肩をおとすヴェロツサ

「じゃあ、守護騎士達の診断が済むまで、私達は今後の会議ね・・・特に、この間はやてから報告のあった・・・“天童綾人二等陸士”について・・・」

「うん・・・」

「はい」

そう言つて、周りの空気も引き締まる

はやては、綾人の名前を聞き、少しだけ顔が暗くなる

「まず、彼・・・綾人君の簡単なデータはこんな感じだね・・・」

そう言って、自分の調べた資料を展開し、説明を始めるヴェロツサ

「第97管理外世界『地球・極東地区日本・海鳴市』出身で、六歳でミッドへ移住。父親は、管理局で最強と言われ『剣王』の異名を持つ魔導師『マーク・グリード』少将。訓練校を経て十六歳で局入り、マーク少将のいる陸士225隊に配属後、機動六課に異動。魔導師ランクは陸戦Bランク・・・こんな感じだね」

綾人のプロフィールをざつと紹介する

「驚いたわ・・・マーク少将に息子さんがいたなんて」

「カリムは知らなかったんか？」

「ええ・・・マーク少将とは、あまり面識が無いの・・・一方は陸士部隊の部隊長、もう一方は聖王教会騎士・・・接点はほとんど無いから・・・噂程度にしか、知らないのよ」

「僕は、仕事上ある程度は調べていたけどね・・・」

マークが結婚していたことも、綾人がマークの息子であることも、あまり知られていない情報であり、知っているのは、225隊の間と一部上層部・・・そして、機動六課のメンバーぐらいである

「その彼が・・・『竜王』と、何かしらの関わりがあるか？」

「うん・・・前に言った『竜王』の特徴である『血のように紅い瞳』・・・彼は・・・それを持っているようなんよ・・・」

「でも、これを見る限りでは、彼の目は・・・」

「うん・・・せやから、これを見て欲しいんや・・・」

そう言って、はやてはある映像を見せる

それは、なのが記録した綾人とスバルが組み手をしている映像で、最後の綾人の攻撃の場面になる

「これは!？」

カリムも驚く

個人データの綾人の瞳は黒だったのに、モニタに映る綾人の目が真紅に染まっていたのだ

「なのはちゃん、その後に話を聞いたそうや・・・」

綾人自身、自分の目が真紅になることを知っているが、自身で真紅にすることはできない

225隊では周知の事実であること

本人や周りは『特異体質』と思っていることなど、なのはやザフィラに聞いた話をそのまま説明した

「なるほど・・・確かに、普通なら『特異体質』みたいな形で終わる話だろうね・・・」

「でも・・・」

カリムも俯く

そう、普段ならその程度で済む話だが、現状そうは言っていられない予言に出てきていた名称、伝えられている特徴、そして、現在その特徴にがっちりハマる人物が自分達の傍にいる

ましてや、その存在の力は未知数・・・警戒は当然である

「クロノ君には？」

「一応、報告はしといた・・・近いうちに、また会いに行こうと思ってる」

「そう・・・」



部屋が静寂に包まれる・・・

「あのな？ カリム・・・ロツサ・・・」

「ん？」

しばらく黙っていたはやてが二人に話しかける

「ここまで話して、こんなこと言うのは変やけど・・・綾人君のこと・・・信じてくれへんかな？」

「どういうこと？」

「綾人君が仮に『竜王』と関係あるとして・・・『彼』が私等に危害を加えるなんて思われへん・・・私は、彼を・・・綾人君を信じたい・・・」

小さくそう語るはやて

数ヶ月しかたつておらず、しかもそれほど話をする機会も少ないのだが、綾人の他のメンバーやヴィヴィオなどの接し方、相手を疑うことなく真つ直ぐに信じる姿勢などを、ずっと見てきたはやて

尊敬する恩師・マークの息子だからではなく、『天童綾人』個人を、仲間として信じているのだ

同様に、カリムやヴェロツサのことも信じている・・・だからこそ、彼女は綾人の事を話したのだから

「大丈夫だよ。はやて？」

「え？」

「カリムも僕も、そして、クロノ君も、彼をどうこうする気なんてないさ・・・それに・・・」

「それに・・・？」

「はやての人を見る目を・・・僕たちが疑うはず無いだろ？」

ヴェロツサはウィンクしながら教えると、はやても目を見開く  
カリムに視線を向けると、カリムも優しく笑っていた

「もちろんよ。はやての信じた人が、悪い人なはずがないもの。だから、はやてもそのまま彼を信じてあげて？」

「おおきにな・・・カリム・・・ロツサ」

少し泣きそうになりながら、礼を言うはやて

「さて！それじゃ、この話はいったんここまでで・・・次の話に移りましょう！」

手を叩きながら、話題を変えるカリム

その後も三人の話し合いが続いた・・・

数時間後・・・

「そんならな？ カリム、ロツサ！」

「ええ！」

「うん！」

話し合いを終え、シャツハに連れられながら部屋を後にするはやて  
を見送るカリムとヴェロツサ

「はやてにはああ言ったけど・・・やっぱり・・・」

「うん・・・僕も、ユーノ先生とかに協力してもらって、もう少し

調べてみるよ……『竜王』について……」

「ええ……お願いね？」

「了解！」

カリムに答えて部屋を出て行くヴェロツサ

カリムも、はやての信じた綾人の事を信じたい

しかし、立場上、私情でことを進ませるわけにはいかない

綾人が『竜王』との関わりがあるのなら、それに対処することもおそらく必要なだろうし、必要がないのなら、それは杞憂に終わるだけ

そういった意味で、少しでも不安を取り除いておきたいカリムだった……

## 第二十三話 疑惑、仲間として（後書き）

どうも！

と言うわけで、聖王教会サイドをお送りしました！

これ、必要だったのかな・・・？ 少し不安です  
無くても物語的に何の問題も無いような気が・・・

何はともあれ、はやてさんにとっても信頼されている綾人君でした

はやてさんに勾玉が渡るのはいつの日なのか・・・それは作者にも  
わかりません・・・

では、次回予告

ヴィヴィオとの昼食後、皆で遊んでいた綾人はゲームに負け、買出  
しの為にクラナガンに来ていた・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十四話  
「緊急出撃、途惑い」

今回は久しぶりの戦闘回です！

**第二十四話 緊急出撃、途惑い（前書き）**

今月一発目です!!

今回は、久しぶりに戦闘シーンです

## 第二十四話 緊急出撃、途惑い

クラナガン市街地にて・・・

「まったく・・・注文が多すぎだろ!？」

メモを見ながらそう言う綾人

スターズの三人と綾人、そしてヴィヴィオの五人はオフィスフトをトランプでもしながら過ごすことになり、なのはの部屋に集まっていた

そして、負けてしまった綾人は罰ゲームとして、おやつなどの買出しを言い渡され、クラナガンにやってきていた

「スバルの奴・・・アイスばかり大量に頼みやがって!」

メモには、スバルの注文であるアイスの品名が大量に書かれていた

「とりあえず・・・これだけ買えば十分だろ・・・って、もう夕方だよ・・・」

店を出て、ふと空を見ると空が紅くなっていた

「とりあえず、アイス溶ける前にさっさと帰るか・・・」

荷物を収納スペースにしまう

普通アイスなどをバイクに入れておくと大変なことになるのだが、綾人のバイクはこのあたりを改造し、一定時間内なら熱に弱いものを入れても大丈夫な収納スペースを作ったのだ

収納スペースの蓋を閉じ、バイクに跨ったそのときだった

『こちら、機動六課。ロングアーチ01！ 緊急事態です！！』

シャーリーからの緊急通信が入る

『海岸線にガジェットが出現！ ?型十五機、航空?型の二十機！  
! 位置は、第七海岸区画！！』  
「住民区画の近くか・・・」

地図を見ながら考える綾人

『レリック反応は無いんですが・・・』  
『少し、距離があるけど・・・六課よりは私たちのほうが近い。私  
たちが出動する！』

外に出ていたフェイトが言う

「フェイトさん！ こちら綾人！！」  
『綾人？ どうしたの？』

通信をつなげフェイトに呼びかけた綾人

「俺も外にいますので、そちらに向かいます！」  
『うん・・・それなら、現地で合流を！』  
「了解！！」

通信を切り、エンジンをかける

「ルキノ！ 周辺の地図を！」  
『了解！ バルムンクに転送します！』

転送された位置情報を確認しながら現場に急行した

### 【フェイトSIDE】

通信を終え、バリアジャケットを装着したフェイト達  
フェイトは自身で飛行、キャロとエリオはフリードに乗って現場に  
向かっていた

「動きが変です・・・一箇所に向かってない」

「？型と？型の位置関係も変です・・・時々現れる、はぐれガジエ  
ットでしょうか？」

「だといいんだけど・・・」

ガジエットの配置などを見ながら会話するフェイト達

「いた！」

目の前にガジエットの大群が目に入ってくる

「着弾地点の安全確認！ フリード！ ブラストレイ！！」  
「ギューオーーーーー！！！」

キャロの指示と共に、炎を吐き出すフリード  
ガジエットが炎に吞まれ、爆発していく

「5機撃墜！ 残りは僕が・・・ストラーダ！！」



☆Explosion☆

カートリッジをロードし、構えるエリオ

「我が乞うは、城砦の守り。若き槍騎士に、清銀の盾を」！

☆Enchant Defence Gain☆

キャラがブーストで援護をする

「ありがとキャラ！ これで安心して・・・攻撃だけに・・・専念できる！！」

キャラに礼を言い、ガジェットに向かって突撃していったエリオ

「バルディッシュ！ 私たちも！」

☆Yes Sir!☆

フェイトも攻撃を始めようとしたとき

「フェイトさん！ 遅れました！！」

ちょうど、綾人が到着した

「うん！ 綾人はエリオ達の援護を！」

「了解です！！」

返事を返し、すぐにエリオ達の下へと走る綾人

【綾人SIDE】

「エリオ！ キャロ！！」  
「兄さん！」 「お兄ちゃん！！」

二人も綾人に気付く

「大丈夫だな？・・・左は俺がやるから・・・エリオ、右を頼む」  
「はい！」

「キャロ！ フリード！ 援護頼むな？」

「はい！」

「ギューオー！」

合流し、すぐに二人に指示を出し構える綾人

数分後、地上にいるガジェットを全て掃討した

【フェイトSIDE】

『13機目、撃墜！！』

「うん・・・」

答えながら、あたりを警戒するフェイト

「フェイトさん！！」

「キャロ！？ エリオ達についてなくちゃ・・・」

「地上の15機、もう終わりました！ エリオ君達もすぐに・・・」

【綾人SIDE】

地上では、エリオがフリードのいる位置を確認していた

「高度110・・・あそこまでなら飛べるよね？ストラダー！」

「Ja.」

エリオに答えるストラダー

そして、ストラダーを握るもう一つの手

「エリオ・・・少しずれてるな・・・これくらいだ」

「あ、はい！」

軌道を修正し、一緒にストラダーを握り、エリオの体を掴む綾人

「フリードのところまで・・・せーのっ！！」

「Start!!」

ストラダーの噴射を利用し、フリードのところまで飛ぶエリオと綾人

「エリオ！？ 綾人！？ ストラダーでこんな高さまで!？」

近くで見えていたフェイトも驚く

「フリード！ エリオ君とお兄ちゃんを上手くキャッチ！」

「ギョオ!!」

キャラの指示で、着地地点に移動するフリード

「エリオ君！ オーライ!!」

「う、うん！ キャロ!!」

「フリード！ ストップ!!」

ストラーダの噴射を上手く利用し、フリードの背中に降りたエリオと綾人

「うん！ 着地100点!!」

「うん！」

「Danke schön, mein Fräulein.（ありがとうございます、レディ）」

「なかなかスリリングだ・・・」

背中喜び合っているエリオとキャロ、そして、息をついている綾人

「び・・・びっくりした・・・もうそんなことまで出来るようになったの？」

いまだに驚いていたフェイトが聞いてくる

「はい！ この間、なのはさんから実戦での使用許可をもらいました！」

「さすがに、スバルさんのウイングロードほどは自由に動けないですが・・・」

「それでも、だいぶ調整できるようになったんじゃないですかね」

キャロ、エリオ、綾人がそれぞれ答える

「すごいね・・・」

それを聞いたフェイトは小さく感心していた

『残り7機、拡散して逃げていきます！』

「僕等も追います！」

「あつちの4機を追おう。フェイトさんは向こうの3機を！」

「うん。お願い・・・気をつけて！」

「「はい!!」「」

二手に分かれて残りのガジェットに向かうライトニング

その後、直ぐに残りも掃討された・・・

『お疲れさまです、フェイトさん！ 直ぐに捜査部をそちらに向かわせます!!』

「了解！」

その通信の数分後、近隣の陸士部隊が到着し、フェイト達は現場調査の手伝いを行った

「すみませーん！ こちらの確認、お願いしたいんですが!!」

「あ、はい！」

「今行きます!!」

エリオとキャラも率先して手伝いをしている

「これで、いいですかね？」

「え〜・・・はい、結構です！ ありがとうございませす!!」

「いえ・・・では、自分はこれで・・・」

説明を終えて、離れると

「キャラ！ エリオ！ 綾人!!」

フェイトが三人を呼ぶ

「もう出ますか？ こっちは大丈夫です！」

「六課の捜査部の皆さんも、来てくれるそうですし……」

エリオとキャラロがフェイトに近付く

「ごめんね？ 食事……」

「平気です！」

「また今度！」

謝るフェイトに笑顔で答えるエリオとキャラロ

「綾人も……ありがとうね？」

「いいえ……たまたま外に出していただけですから」

そのまま、綾人にも礼を言うと、綾人も笑って答える

「あ、そうだ！ フェイトさん、まだこれから会議とかありますよね？ よかったら、これ……」

キャラロはポケットから、小さな包みを渡す

「キャンディ？……いいよ、キャラロのでしょ？」

「えへへ！ 実は、何個かあって、さっきエリオ君とお兄ちゃんとも分けました！」

「おいしいですよ？」

「疲れたときは、甘いものもいいですね？」

「……ありがとう……エリオ、キャラロ……綾人」

それだけ言うと、自分の車に向かっていくフェイト

「あ……」

「フェイトさん……なんだか……」

「うん……」

「ふむ……」

フェイトの後姿に、なにか考えるエリオとキャロ、そして綾人

「二人とも……俺、バイクで来てるから……二人は六課のへりで帰ってくれるか？」

「あ……はい……」

「わかりました……」

「じゃあな」

それだけ言うと、近くに停めていたバイクに向かっていった綾人

「げっ!？」

バイクに戻った綾人は驚愕した

バイクから白い液体が流れ出していたのだ

「ま、まさか!?!」

慌てて収納スペースを開くと

「やべ……」

中であつたアイスが一つ残らず溶けていた……

## 第二十四話 緊急出撃、途惑い（後書き）

どうも！！

市街地での戦闘をお送りしました〜！

ストラーダでタンDEM・・・無茶過ぎる・・・

最後には、お約束とも言える『時間切れでアイスが溶ける・・・』  
でした！

では、次回予告！！

六顆の隊舎に戻り、夕食を済ませた綾人やスバル達は、隊舎の外で  
涙を流すエリオ達と見かける・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第二十五話  
「家族」

次回、サウンドステージ02編のラスト！



## 第二十五話 家族（前書き）

気がつくと、最終土曜日だった・・・

とりあえず、今回でサウンドステージ02完結です

## 第二十五話 家族

緊急出撃から数時間後・・・

待機命令が解除になり、全員が通常勤務に戻り空もすでに暗くなっていた・・・

「アイス・・・!」

「だから、悪かったって・・・」

「諦めなさいって。緊急だったんだから・・・」

夕食後、外に出てきた綾人、スバル、ティアナの三人  
スバルは、綾人からアイスが溶けてしまったことを聞き、多いに落ち込んだ

「今度作ってやるから・・・元気出せって」

「ホント!？」

「あ、ああ・・・」

綾人の提案に、目を輝かせて聞いてくるスバル  
尻尾があれば大きく振られていることだろう

「絶対ね!!」

「ああ」

とりあえず、スバルが元気になったのでよしとすることにした綾人  
だった

「ん?・・・あれは・・・」

不意に横を向くと、小さい影が二つ見えた

「エリオにキャラ・・・？　こんなところでなにを・・・って!？」

二人の様子に慌てて駆け寄る三人

「あ・・・スバルさん、ティアさん・・・お兄ちゃん

「どうしたの!？・・・エリオまで・・・」

「あ・・・いえ・・・」

「なんでも・・・なんでもないです・・・」

泣いていたようで、顔を擦りながら答えるエリオとキャラ

「そんな顔で、なんでもないこと無いだろ？」

「悩みごと?・・・私らでよかつたら聞くわよ？」

「その・・・フェイトさんの・・・ことなので・・・」

キャラから出てきた言葉に、少しだけ思案顔になるティアナとスバル

「お母さん関係か・・・」

「あゝ・・・私らだとちよつと弱いジャンルね・・・」

「す、すみません・・・」

顔を見合わせる二人にエリオが慌てて謝る

「謝らない!　ほら、涙拭きなさい」

そう言って、二人にハンカチを手渡すティアナ

「あ、すみま……ありがとうございます……」

謝らずにお礼を言ってハンカチを受け取るキャラ

「二人とも、少しいいか？」

「はい……？」

後ろにいた綾人が声をかける

「エリオには前に言ったな？ “話せることなら言ってくれればいい、話せないなら無理に聞く気は無い” って……」

「あ……」

前に、自分の秘密を話したときを思い出したエリオ

「二人が悩んで、答えを出そうとするのはいい。だけど、それでも答えが出ないなら、周りの俺たちを頼って欲しい……確かに、俺達ではいい答えは出せないかもしれないけど、一緒に悩んでやることも出来るからな？」

「でも……」

人に迷惑をかけたくない……そう思っているのを汲み取った綾人は先手を打つ

「言うておくが、それを迷惑に思ったりはしない」

「あ……」

言おうとしたことを言えなくされ、二人も俯いてしまう

「話すだけで、気持ちもだいぶ楽になったりするんだ……な？」

「あの・・・えつと・・・」

エリオとキャラ口は少しずつ話していく・・・自分達が考えていること・・・フェイトに心配をかけないようにがんばっていることと、それに伴う悩みと迷い・・・

綾人、ティアナ、スバルは黙って聞き続けた・・・

「なるほどな・・・」

一通り聞き終えた綾人がそう呟く

「お兄ちゃん？」

「たとえばだけど、フェイトさんが二人のことを嫌いになったとか、そんなことあると思うか？」

「ないと・・・思いますけど・・・」

綾人の質問に、自信無さ気に答えるキャラ口

「そりゃそうだな。ありえない」

そんなキャラ口に綾人ははつきりと宣言する

「でもな？ 二人がフェイトさんに心配かけたくないとか、無理を言いたくないとか、そんな風に考えすぎて、それで二人が無理をしてるんじゃないか、フェイトさんは悲しいんじゃないか？」

「あ・・・」

綾人の言葉に、顔を見合わせるエリオとキャラ口

「無理なんて……してないんですけど……」

「ああ。それも分かる……二人が本当に充実して、訓練とか仕事とかしてるのも知ってるしな？」

エリオの呟きに頷きながら答える綾人

「でもな？ 子供が急にしつかりすると、距離を取られたとか、無理させてるって思うんだよ……多分な？」

「でも……同じ部隊の上司と部下ですし……」

公私の混同は出来ないと思っているエリオとキャロの二人

「ふむ……あのさ……お前達が管理局に入ることか……フ  
イトさん、最初は反対したんじゃないのか？」

「あ……はい……はつきりとは言いませんでしたけど……こ  
う、やんわりとは……」

「それ、こんな風に距離が出来るのが、なんとなく予想できたから  
じゃないのか？」

「「あ……！」」

二人は再び顔を見合わせる

「ま、二人が選んで、フイトさんも許可したんだ……その上で、  
解決しなきゃな……」

「でも、どうするの？」

横で聞いていたスバルが聞いてくる

「そんなの……簡単だろ？」

ニヤリと笑い、二人にあるアドバイスをする綾人

【フェイトSIDE】

「ふう……」

仕事も終わり、六課に戻って来たフェイトは小さくため息を吐いた  
シャーリーにも何度が聞かれたが、どうにかごまかしてやり過ごした

「お疲れ様です。フェイトさん」

女子寮の入口を潜ろうとすると、後ろから声をかけられる

「あ……綾人……」

振り返り、なんとか聞き返すフェイト

「どうしたの？こんな時間に……自主練？」

「まあ、そんなところですね……少し、時間いいですか？」

「あ……うん……いいけど……？」

「それじゃ、少し歩きましょうか……」

そう言って、女子寮とは反対方向に歩き出す綾人とフェイト

「今日は……どうしたんですか？」

「どつって……何が……？」

「まだごまかしますか……まったく」

フェイトの返事を聞いて、わざとらしくため息を吐く綾人

「フェイトさんの様子がおかしいってのは、俺以外のみんなもわかっていますよ？」

「あ……」

「あれで隠そうとするんですから、なんにも言えないですけどね」  
「うう……」

綾人の言葉に、少しだけ小さくなるフェイト

「何があつたのか……話してもらえませんか？……俺じゃ頼りないかもしれないかもしれませんが、誰かに言うだけでも、大分楽になると思いますよ？……エリオとキャラも心配してますし……」

「う……うん……」

フェイトの悩み事はある程度理解しているが、あえて言わずに聞いてみると、フェイトも頷きながら話し始める

「その……エリオとキャラのことなんだけどね？……あの子達は、小さいときに私が引き取って面倒みてきたんだけど……昔から、その……不満とかワガママとか言わない子達だったんだけど……六課に来てから、ますますそういうの言わなくなつて……」  
「戸惑つた……と？」  
「……うん……最近では、“辛い”とか“大変”って表情も見せてくれなくなつちゃつて……」

フェイトの説明を聞いて、その一言で確認する綾人

「私、いろんな本とか、知り合いの人とかに話を聞いたりして、勉



強してるんだけど」

大量の育児書、そして、子育て関連の先輩達のアドバイスを聞きながらエリオとキャラコの成長を見守ってきたフェイト

「子供が必要以上にいい子になっちゃうのって、その子が寂しくて、親に嫌われたくない、優しくして欲しいからだ……って」

「……」

「いい子でいるその裏で、本当は色々無理して、我慢してるんじゃないかな？……って……私も、前の母さん……プレシア母さんのところにいたとき……そんなこともあったから……」

「なるほど……」

綾人は、フェイトの昔の事情を知らないのです、そう答えるしかない

「フェイトさん？」

「ん？」

歩くのを止め、フェイトの方を向く綾人

「エリオもキャラコも、“もう”十歳ですし、“まだ”十歳です……少しくらい無理しても、いろんなことに一生懸命になりたい年齢です。それに、本当に苦しいと感じたら、誰かに頼る年齢でもあるんです……」

「うん……」

「これは、第三者である俺の意見ですが、エリオもキャラコも毎日を本当に楽しく過ごしてます……訓練は確かに厳しくて、書類仕事も難しくて大変だけど、それでも、みんなと一緒に頑張ってる……今の生活は充実してると思いますよ？」

「そう……かな……」

「あの年頃になると、家族から離れて、いろんな事に興味を持つ年頃です……だから……」

一度、言葉をきり、まっすぐにフェイトを見つめる綾人  
フェイトも見つめ返す

「フェイトさんは、今のまま、あの二人を見守るだけでいいと思います……そして、二人が本当に困っているとき、悩んでいるときに、ほんのちよつと背中を押ししたり、道を示したりするだけでいいんだと思います」

フェイトが目を見開く

「少なくとも……俺の“母さん”ってそんな感じでしたしね？」

「あ……」

少しおどけて言う綾人

母親を小さい頃に亡くしている綾人……そして、わずかに残った母親の思い出からそう言っているのだ

「……ありがとう……綾人……」

「いいえ……あとは、どちらかというとフェイトさん自身の問題ですね……その辺はやっぱり……」

「？」

そう言っつて、フェイトにアドバイスをする綾人

【綾人SIDE】

フェイトと離れ、男子寮に向かって歩く綾人

「まったく・・・変なところで似たもの親子だな・・・フェイトさん達は」

そんなことを思いながら、小さく笑う

「さて・・・と・・・ん？」

そのとき、不意に顔をしかめ、頭を押さえる

「気の・・・せいか・・・」

そう言っつて、寮に戻っていった

### 【フェイトSIDE】

綾人との話の後、自分の部屋に向かって歩いているフェイトだが・・・

「「「あ・・・」」」

「フェイトさん・・・」

「エリオ・・・キャロ・・・」

曲がり角で、ばったりエリオ達と鉢合わせしてしまった

「「「あの・・・」」」

そして、何か話そうと三人が同時に口を開いた・・・

なのは・フェイト・ヴィヴィオの部屋にて・・・

「ん？」

扉の開く音に、振り向くのはとヴィヴィオ

「なのは・・・ヴィヴィオ・・・」

「フェイトちゃん・・・」

「フェイトママ？」

入ってきたのはこの部屋のもう一人の住人、フェイトだった

「あれ？ エリオとキャロも一緒？」

「遅くにすみません・・・」

「すみません」

そのフェイトの後ろには、エリオとキャロが頭を下げていた

「あのね？ ちょっとエリオ達とお話したいことがあるから・・・

なのはとヴィヴィオ、先に休んでてくれるかな？」

「うん！ 了解！」

「うん！」

フェイトのお願いに答え、ベッドから起き上がるのはとヴィヴィオ

「三人でお話なら、こっちの部屋使っていていいよ？ ヴィヴィオ、まだ眠くないって言うし」

「眠くないよ」

「あ……でも……」

「なんだか大事なお話みたいだし、待機中ならアレだけど、オフィスフトなんだし……ゆっくりお話したらいいよ」

「あ……うん！」

何も言わずに察してくれる親友の気遣いに嬉しくなり、頷くフェイト

「じゃ、私とヴィヴィオ、今日は向こうの空き部屋使うから……」  
「行ってきま〜す！」

「ごめんね？……ありがとう、なのは……ヴィヴィオ」

「……ありがとうございます！……」

部屋を出ていく二人に謝ると同時に感謝するフェイトと頭を下げているエリオとキャラ

なのは達が出ていったあと、ベッドに座って向かい合うフェイトとエリオとキャラ

「えつとね……エリオ……キャラ……」

「……はい……」

緊張しながら話し出すフェイト

エリオとキャラも緊張してしまっている

「あのね？……二人は、最近本当にしっかりしてくれて……いろんなことを、ちゃんとできるようになってくれて……すごく嬉しい……だけど……二人があんまりいい子すぎて、しっかりしすぎて……」

「あ……あの……」

フェイトの話に割り込むエリオ

「僕達は・・・僕達が心配かけてて・・・」

「それで、フェイトさんに大変な思いとか・・・寂しい思いさせちゃってるって・・・」

「え・・・ち、違うよ！ 心配無さ過ぎて、大変じゃ無さ過ぎて困ってたんだよ・・・」

エリオ達の言葉に首を横に振りながら答えるフェイト

「私がちゃんと出来てなくて・・・だから無理してるんだって・・・」

「無理じゃないです！」

「一生懸命ではありませんけど・・・無理なんかじゃないです！」

フェイトの言葉に首を大きく横に振るエリオとキヤロ

「・・・私・・・二人の保護者でいられてる？・・・ちゃんと優しくできてないの・・・不満じゃない？」

「ふ、不満なんて・・・」

「「あるはずないです！！」」

不安な顔で聞いてくるフェイトに、声を揃えて答える二人

「フェイトさん・・・心配しすぎです・・・」

「私達・・・もう、ヴィヴィオみたいな小さい子供じゃないんですよ？」

「ワガママ言っただけで困らせることしかできなかったあの頃から・・・変わっていきたくって思ってます・・・」

「少しずつでも・・・ちゃんとしていきたいって・・・二人でたくさん話しました・・・」

「あ・・・」

エリオとキャラの告白に・・・ハツとした表情になるフェイト

「でも・・・兄さんに叱られました・・・」

「二人がそうやって考えてることを、ちゃんとフェイトさんに言わないからだ」って・・・」

綾人の言葉をそのままフェイトにつたえるキャラ

「・・・私も・・・綾人に注意された・・・」二人と一緒にいたい、頼って欲しいんだってワガママを・・・ちゃんと伝えられてなからって」

「あの・・・もしかして、兄さんから解決方法とか聞きました？」

エリオが思い出したようにフェイトに聞くと

「・・・二人も、綾人から聞いた？」

「はい・・・」

「」「」「三人で、じっくり話し合（って下さい）（え）」」「」

三人同時に、綾人から言われたことを伝える

「まず、それだけで解決するから」って」

「三人揃って、心配性で気遣いすぎで・・・」

「頑固でワガママで、すぐに周りが見えなくなるんだから・・・」

”つて”

綾人は、三人にまったく同じアドバイスをしていた  
三人の絆・・・家族としての絆を信じていたからこそ、この言葉を  
伝えたのだ

「クッスッ!!」

三人同時に吹き出し、笑い合う

「なんだ・・・同じだったんだ・・・」

「ですね・・・」

目に溜まった涙を拭いながら言うフェイトとエリオ

「じゃあ・・・じっくり話そう?・・・もう、こんなすれ違い方・・・

・しないように・・・」

「はい!」

「お茶とか欲しいね?」

「あ、じゃあ私が・・・」

「僕も・・・」

そう言うて立ち上がるうとするエリオとキャラロだが

「だゝめ!」

フェイトがそれを止める

「二人は待ってて? のはに教わったおいしい『キャラメルミルク』  
・・・私が作ってくるから・・・」



「はい!」

フェイトの言葉に一瞬だけ戸惑ったが、すぐに顔を見合わせ、返事をする二人

フェイトは、それを見て給湯室へ向かった

給湯室にて・・・

二人のために『キャラメルミルク』を作りながら、綾人の言った言葉を思い出しているフェイト

数分前・・・

綾人のフェイトへのアドバイスは、少し付け加えがある

「子供を育てているようで、保護者も子供達に育ててもらってるんです・・・子育ては、子供の成長と共に、保護者も一緒に育って、勉強するものなんだと思います」

「そう・・・だね・・・」

「すれ違いもするし、時には喧嘩したりする・・・それが“家族”なんだって俺は思います」

「家族・・・」

綾人の言葉を刻んでいくフェイト

「だから・・・あの二人とじっくり話し合ってください・・・二人の思い、それを聞いて、フェイトさんの思いも聞いてもらってください?」

「うん・・・」

綾人の言葉に頷く

「あとは……そうだな……話のタネも少し提供しましょうか……」

「え？」

そう言って、ポケットからある物を取り出す綾人

「勾玉……？」

「はい。フェイトさんの分です」

取り出したのは薄い檸檬色の勾玉

「あの二人ももう持ってますし、話のタネにはいいと思います……よかったらどうぞ？」

「うん……ありがとう！」

綾人にお礼を言って、そのまま二人は別れた……

「キャラはうんと甘めで……エリオはミルクたっぷり……と……よし！ 来たー！」

完成した『キャラメルミルク』を持って部屋に戻るフェイトの首には、綾人から貰った勾玉がかけられていた……

こうして、機動六課の小さな家族のすれ違いは幕を閉じたのであった……

## 第二十五話 家族（後書き）

どうも！

フェイトさん一家の小さな事件をお送りしました

絆をとても大事にしている綾人君です

フェイトさんにも無事に勾玉が贈られました

今回がきっかけになって、フェイトさんは綾人君にアプローチを  
始めて、バレンタイン記念の小説に続く感じですね

それでは、次回予告

大きな動きもなく、日々の仕事に追われる六課  
そこに、とある人物が訪れる・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十六話  
「225隊の若き分隊長」

今回はオリジナル

そして新キャラです！

ついに突破しました・・・

皆様ありがとうございました！

といっても、前編はほとんど13話と大差はありません

「説教……？」

「ああ……説教だ」

訝しげに見るティアナを鼻で笑いながら答える綾人

「上官の指示もまともに聞けないバカには、必要だろ？」

「!!!」

ティアナの目が変わる

「昼間、命令を無視して危険な戦い方したのに、その日のうちにまた命令無視か？」

「……あんた達には迷惑はかけないわよ……」

「すでに迷惑だっと思って思わないのか？」

小さく答えるティアナに少し大きな声で返す綾人

「お前一人の行動が、俺達にどんな形で返ってくるのか……わかっ  
つてんのか？」

「それは……わかってるわよ……」

「わかっ  
てないよな？」

ティアナの言葉を即座に否定する

「わかっ  
てんなら、こんなことしない筈だしな」

「わかっ  
てるって言う  
てんでしょ!!!」

綾人の言葉を遮るように叫ぶ

「私は自分が許せないの！ 才能の無い自分が！！ そのせいでスバルを危険にした自分が！！」

「才能を言い訳にするな・・・」

「あんたに分かるの！？ 才能の無い奴の・・・凡人の気持ちか！！」

「・・・」

「凡人の私は、このぐらいやらなきゃ、強くなんてなれないのよ！！」

「少なくとも・・・」

ティアナの叫びをかき消すように喋りだす綾人

「今、力を得ても・・・お前には使いこなせない・・・」

「え・・・？」

「必要以上の力は、お前自身を滅ぼす。断言できる」

「そんなの、やってみなくちゃわからない！」

「俺にも経験がある・・・」

綾人が言うとティアナもハツという表情になる

「昔、お前みたいに強くなりたいてって思って・・・無茶をやって・・・暴走したんだ・・・」

綾人から語られる自身の過去

「今のお前からは、昔の俺と同じものを感じた・・・」

「だから、止めに来た・・・そうなる前に・・・」

少しずつ近づく綾人

「私は・・・間違つてない!!」

近づく綾人を振り払うように走り去るティアナ

「おい！ ティアナ!!」

綾人が呼ぶも振り返ることなく戻っていく

「バカが・・・」

吐き捨てるように呟き、ティアナの去った後を見つめていた

結果、ティアナは綾人の忠告を聞かず、早朝、深夜に一人での訓練を繰り返し、さらにはスバルまで参加していた

その反動か、何時もの訓練でのティアナは他のメンバーとの呼吸が少しずつずれ始めていた

なのはやヴィータ、綾人の注意もその場では返事を返すが直ることは無かった

そして、そんな状態が四日ほど続き、五日目の午前の訓練も終わりに近づいていた・・・

「さーて、じゃあ午前中のまとめ。2011で模擬戦やるよ。先ずはスターズからやるうか？ バリアジャケット、準備して」

「はいー」

なのはの指示に返事を返すスターズ

「ライトニングはあたしと見学だ」

「はい!」「」

綾人達ライトニングは近くのビルに移動する

「ここなら見やすいな」

ビルの屋上から見下ろすと全体を見渡せた

「あ! もう模擬戦始まつちやつてる?」

ドアが開き、訓練着に着替えたフェイトがやってくる

「フェイトさん!」

「私も手伝おうかと思ったんだけど・・・」

そっぴいながらヴィータに近づく

「今はスターズの番」

「本当はスターズの模擬戦も私が引き受けようと思ったんだけどね・・・」

「ああ、なのはもここんところ訓練密度が濃いからな・・・少し休ませねえと」

「なのは、部屋に戻ってからもずっとモニターに向かいっぱなしなんだよ? 訓練メニュー作ったり、ビデオで皆の陣営チェックしたり・・・」



会話しながらなのは見るフェイトとヴィータ

「なのはさん、訓練中も何時も僕達のこと、見てくれるんですね・  
・・」

「ホントに・・・ずっと・・・」

嬉しそうにしているエリオとキャラコを少し笑いながら見ているヴィータだが、綾人は少し違う表情をしていた

「綾人？ どうした？」

「あ、いえ・・・なんでもないです・・・」

ヴィータに答えながらも考え続けていた

（そこまでやってても・・・ティアナには伝わってないんだよな・  
・）

なのはの思い、それはエリオもキャラコもスバルも綾人もなんとなく分かってる

しかし、ティアナにはそれが分からない

なのはが常に皆のことを考えて訓練してることがティアナには『劣等感』が邪魔をして伝わっていないのだと、綾人は考えている

「お！ クロスシフトだな」

ヴィータの言葉に下を見下ろすとティアナがスフィアを形成しなのはに向けて発射した

「ん？ なんかキレがねえな・・・」

「コントロールはいいみたいだけど・・・」  
「あれじゃ牽制にもなりませんね」

射撃の素人の綾人にもわかる弾道  
なのははそれを回避しながら飛ぶ

そして、なのはの目の前にウイングロードが走り、その上をスバル  
が突っ込んできた

なのははティアナのシルエットだと思っていたが

「シルエットじゃない？」

「本物！？」

なのはもスバルが本物であるとわかりシューターを発射するがスバルはシルドを張りながら突撃していきなのはに殴りかかった

しかし、なのはもシルドで受け止め、そのままスバルを弾き飛ばし注意しながらティアナのクロスファイアを避けていく

スバルも着地した後に「ちゃんと防ぐ」と謝っていた

「防ぐって・・・何言ってるんだあいつ・・・」

スバルの言葉を聞いていた綾人が呟く

「そういえば、ティアナは何処いったんだ？」

ヴィータの言葉に近くを探すフェイト達、綾人はなのはの頬にレーザーポイントが当たっているのが見え、その先を捜し当てた

「あそこですね」

綾人の指差す方向には離れたところで砲撃の準備をしているティア

ナの姿があつた

「砲撃！？ ティアナが！？」

フェイトが驚いているとスバルがなのはに再び突撃して行った  
なのはがシューターを放つがスバルはお構い無しに突っ込み、殴り  
かかる

なのははシールドで受け止めるが、スバルも喰らい付く  
そのとき、遠くで狙っていたティアナが消えた

「あつちのティアさんも幻影！？」

「本物は？」

エリオが見渡す

「・・・あそこだ」

静かに指をさす綾人

そこにはティアナがウイングロードを走りなのはの頭上を目指して  
いた

ティアナの砲撃がフェイクだと気付いた綾人は直ぐに本物を探し見  
つけていた

なのはも気付いたはずだがスバルの攻撃を黙って受け止めていた

「一撃必殺！！ はああああ！！！！」

クロスミラージュから魔力刃を作り出し、なのはに攻撃をするティ  
アナ

なのはが何か呟いたと同時に爆煙が広がり見学者達のところまで届く

「なのはが・・・!?!?」

煙が収まり姿が見えてきた

そこにはスバルの攻撃を右手で、ティアナの攻撃を左手で受けとめたのはがいた

【ティアナSIDE】

「・・・おかしいな・・・ふたりとも・・・どうしちゃったのかな・・・?」

顔を伏せながら話し出すのは

「がんばってるのは分かるけど・・・模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ?・・・練習の時だけ聞いているふりで・・・本番でこんな危険な無茶するなら・・・練習の意味・・・無いじゃない・・・」

そう言いながら顔をあげる

ティアナはなのはの指の血を見て絶句する

「ちゃんとさ・・・練習どおりやろうよ・・・ね・・・?」

そのままティアナを見る

「私の言ってること・・・私の訓練・・・そんなに間違ってる・・・?」

ティアナは顔を逸らし、魔力刃を解除し、距離をとり構える

「私は！ もう、誰も傷つきたくないから！！ 亡くしたくないから！！ だから・・・強くなりたいんです！！！」

叫びながら砲撃を準備する

「少し・・・頭冷やそうか・・・？」

そう言つてティアナに指を向けるなのは  
足元に魔方阵が展開しスファイアを展開する

「クロスファイア・・・」

「うわああああ！！ ファントムブレ・・・！！」

「シユート・・・」

ティアナよりも早く発射されるなのはクロスファイア

そのままティアナを飲み込み爆発が起こる

煙が晴れるとティアナが腕を垂らしフラフラの状態で立っていた

「なのはさん！！！」

スバルが止めようとするが、なのははスバルを捕縛し、そのまま第二射を放つ

それはティアナに向かい爆発し、再び爆煙が広がる

「ティアー！！！」

スバルが叫ぶ

誰もが、ティアナが撃墜されたと思つていたときだった

「少し・・・やりすぎじゃないですか・・・？　なのはさん・・・」  
「え・・・？」

煙の中から声が聞こえてくる

それはそこにいないはずの声

やがて煙が晴れ、その声の主が見えてくる

「綾人君・・・？」

そこには観戦していたはずの綾人がいた・・・

どうも！

まずは前編です

とりあえず、短めに抑えますね

では、中編予告！

ティアナの思い、そしてなのはの行動に苛立ちを覚えた綾人  
そして、二人の思いがぶつかり合う・・・

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃 第十三話  
IF 中編 「綾人VSなのは 望んだ力」

中編は正午に更新されます

PV200000件突破記念小説 第十三話IF 中編 綾人VSなのは 望

さて、中編です

綾人君となのはさんの二度目の激突です



ティアナがなのはに思いのたけをぶつけるのを聞いていた綾人達

「あの、バカが・・・」

綾人はそれを聞いた後そう吐いた

その後、なのははティアナに向かってクロスファイアを放った

それはティアナへの制裁だと思った

しかし、なのははスバルにバインドを掛けそのまま第二射のスタンバイに入った

「な！？ やりすぎだろ！？」

さすがの綾人も驚く、一発目の攻撃でティアナはすでに戦闘不能になっっている

そこに向かつての第二射は明らかにオーバーキルである

そう思っ手摺に上り、フェイト達の前から消えた

瞬動を使いティアナの前に立ち、右腕を前に出してなのはの攻撃を受け止めた綾人

衝撃のせいで、少し腕が焦げていた

「あ・・・やと・・・？」

「寝てる・・・バカ・・・」

放心状態で名前を呼ぶティアナに答えるとティアナも意識を手放し、倒れ込んだ

「綾人君……どういつつもりかな……？」

「それは……こっちの台詞ですよ。なのはさん……」

静かに睨んでくるのはを睨み返す綾人

「今は、スターズの模擬戦中だよ？」

「もう模擬戦は終わったでしょ？ 二人とも撃墜されて終わりました……動けない相手にも徹底的に攻撃するのが、なのはさんの教えですか……ふざけてますね」

静かに話す綾人

普段なら口にしない言葉が続く

「あなたのこれは、もう……教導じゃない……ただの『八つ当たり』です」

「八つ当たり……？」

綾人の言葉に表情を更に険しくするのは

「ええ、自分の思い通りに行かないことへの八つ当たりです」

「綾人君も……頭、冷やそうか……？」

これ以上話す気はないというように指をむけ攻撃の準備をするのは

「今度は、俺に八つ当たりですか……子供ですね……」

「……」

綾人の最後の一言についになのはがキレた

問答無用で綾人に攻撃し、砲撃が綾人を飲み込んだかに見えた

「聞く耳も持たずに攻撃とは．．．やっぱり子供ですね．．．」  
「っ!?!?」

突然の声になのはは横を向く

そこにはティアナを抱きかかえた綾人が立っていた

「スバル．．．このバカ連れて離れてる．．．」

「あ．．．う、うん!」

背にティアナを乗せ、スバルはそのままビルに移った  
それを見届けた後、なのはに向きなおす綾人

「綾人君．．．どうして．．．邪魔するのかな．．．?」

「なのはさんが間違ってる．．．って思ったからですよ」

「私が．．．間違ってる?」

「ええ。『人に教える』って言葉の意味をね」

そのままバリアジャケットを展開しバルムンクを構える

「教えてあげますよ．．．俺が．．．」

「くっ!?!」

綾人の変わりようになのはもレイジングハートを構える  
二人の二度目の戦いが始まった．．．

【ティアナSIDE】

「う．．．ん．．．?」

「ティア!?!」

近くのビルで目を覚ましたティアナ

「スバル・・・私達・・・」

「負けちゃったよ・・・」

「そう・・・」

スバルの言葉にうな垂れるティアナ  
それと同時にあることを思い出す

「!? 綾人は!?」

疲れなど感じさせないほど、勢いよく起き上がる

「それが・・・」

スバルは言い難そうに視線を送る  
ティアナはその視線を追うと

「え・・・?」

目を疑う状況が飛び込んできていた

【綾人SIDE】

戦闘開始直後、先手を取ったのは綾人だった

「はあああああ!!」

「く!!!! くつ!!!!」

綾人は開始直後に瞬動でなのはの懐に入り、そのまま攻撃を続けた不意をつかれたなのはは防戦一方だった

一度距離を取ろうとして後ろに下がるが、綾人がそれを許さない弾幕として放たれるシューターも、すべてたたき落として近づき、なのはに切りかかる

そして、綾人は常にカートリッジを三発ロードした状態をキープしている

魔力が少なくなれば即座に三発ロードし、マガジンが空になれば即交換、そして再び三発ロード・・・これを繰り返しているのだ

「教導官は技術的なことを教えるだけじゃない・・・違うことも教えられるはずです!!」

「それは・・・」

「『言わなくてもわかる』とでも?」

なのはの言葉を遮り続ける綾人

「確かに言わなくても伝わることもあるかもしれませんが・・・でも・

・言葉にしなきゃ・・・声に出さなきゃ伝わらないんです!!」

「!!」

綾人の言葉に息を呑むなのは

十年前、自分もかつて戦ったフェイトに似たようなことを言ったそのまま、綾人と距離を開ける

「訓練のメニューを夜遅くまで作っているとフェイトさんが言っていました・・・俺達が強くなるために、しっかりと考えていることも

分かっているつもりです……でも……」

冷やかな目でなのは見つめる

「訓練の内容だけ見ても、分からないこともあるんです。あなたは、俺達を“ちゃんと”見ていない……」

「っ!?!?」

綾人の言葉に目を見開くのは

「ティアナが無理な自主連していることも知らずに、こんな時にだけ注意して……そんなので聞くはずがないんです。自分の指導の意味を、しっかりと伝えればティアナも考えたはずです……それさえ言わないで……」

「……が……の……」

「え?」

綾人の言葉をなのはが遮る

「君に、何が分かるの!?!?」

涙目になりながら、レイジングハートを構えるのは  
しかし、綾人は

「分かりませんよ。何も言わない人の、何を分かかって言っんですか?」

「私は……間違っつてなんか無い!?!?」

「Load cart ridge」

カートリッジを一発ロードし、そのまま砲撃体勢に入るのは

「・・・・・・・・ティアナ!!」

それを見ながら、近くのビルに居るであろうティアナに声をかける  
綾人

ティアナは数メートル離れたビルの上に居た

「よく見とけよ・・・お前の望んだ力が・・・何を生み出すのか・・・」

空になった四本目のマガジンを外し、最後のマガジンをセットする  
しかし、それは普通の黒いマガジンではなく、白いマガジンだった・  
・

Load cartridge

右手の一本を手放し、そのままカートリッジをロードする綾人

その数・・・フルロード六発

「うおおおおお!!!!」

バルムンクから異常な量の魔力が溢れる

あまりの放流にバリアジャケットの上着も吹き飛んでいる

「ああああああ!!!!」

溢れ出した魔力で刀身が伸び、そのまま肩に担ぐ  
そして、瞳が真紅に染まる

「くっ！！ デイバイーン・・・」

強大な魔力に驚きながらも、更に二発ロードして構えるなのは

「Divine Buster」

「バスターー！！！！」

そして、砲撃を綾人に向けて放つ

「はあああああ！！！！」

綾人もほぼ同時に振るい、互いの攻撃がぶつかり合った

「くう！！」

「ぐう！！」

互いに苦悶の表情を浮かべる

数分間拮抗していたが、やがて大爆発を起こした

その衝撃で大量の土煙が上がり、近くにいたスバルとティアナ、遠くで見守っていたフェイト達の下へと届く

【フェイトSIDE】

「なのは！！ 綾人！！」

二人に叫ぶと、土煙が晴れていく

中には、なのはが空中で息を切らしていた

【なのはSIDE】



「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・」

魔力の消費と爆発の影響で、さすがのなのはも限界に達していた  
バリアジャケットも所々破れている

そんな状態でも、視線は一点を見つめている

綾人の立っているであろう場所を

土煙も段々となくなり、綾人の立っている場所も見えてくる

綾人もバリアジャケットのほとんどが吹き飛んでいた

そして、誰もが驚愕する瞬間が来る

「うぐっ!!?」

「え・・・?」

姿が見えたとほぼ同時

綾人の全身に切り傷ができ、そこから大量の血を噴き出して倒れる

「あ・・・やと・・・くん・・・?」

あたりの時間が止まる

なのはも、フェイトも、スバルも、ティアナも、エリオも、キャロ  
も、ヴィータも、何が起こったのか理解するのが遅れた・・・

綾人は自身の噴き出した血溜りの中に倒れており、いまだに血を流  
し続けている

「綾人君!!」

なのははハッと我に返り、綾人の下へと降りて抱き起こす

「綾人君！！　しっかりして！！」

自分に血が付くことも構わずに呼びかけるが返事が無い  
よく見ると顔も段々と青くなっている

「早く医務室に！！」

そう言って、綾人を抱きかかえて医務室に向かうのは達

その後、シャマルによる治療が夜遅くまで行われた・・・

どうも

記念なのに血みどろ・・・何やってんだか・・・

ところどころで無印やA・Sでの言葉とかを出そうかと思っています

バルムンクの白いマガジンについては、近いうちに設定に載せると  
思います

さて、それでは後編の予告です

医務室にて治療を受ける綾人

シヤマルから語られるバルムンクの白いマガジンの秘密・・・

それを聞いたティアナは・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第十三話I

F 後編 「力の代償」

後編は、午後の6時です

さあ、後編です

綾人君の運命は!?

【なのはSIDE】

「綾人君・・・」

なのはは、綾人の治療が行われている医務室の前で、祈るように待っていた

他のメンバーも同様に、治療が終わるのを待っている

「綾人君が、そんな無茶するなんて・・・」

「はい・・・」

話を聞いたはやとシグナムも駆けつけ、一緒に治療が終わるのを待っていた

そして、シャマルが出て来る

「シャマル先生！ 綾人君は・・・」

「大丈夫よ・・・でも、今回は運が良かっただけで、今度同じ事があつたら・・・」

部屋の中のベッドに眠っている綾人を見ながら語るシャマル  
その言葉に、全員が俯く、

「とりあえず、入って？」

シャマルに促され、全員が室内に入る

綾人は全身に包帯が巻かれて眠っていた

「それで、今回のことだけど・・・」

重々しく口を開くシャマル

「まず、出血の原因は、過度のブーストによる反動です。許容範囲以上の魔力を身体中に流した結果、体が圧に耐えられなくなって・・・」

「ブーストの反動・・・」

「それに・・・綾人君の『白いマガジン』だけど・・・シャーリーの話だと、あれは少し特殊みたい・・・」

「特殊？」

シャマルの言葉に首をかしげるはやて

「ええ・・・あのマガジンの中のカートリッジには、通常の倍の魔力が込められていたような・・・」

「倍って・・・」

「とてもじゃないけど、Bランクの魔導師では二発・・・AAAランクの魔導師でも四発が限度の魔力よ・・・そんなものを六発フルロードで使うなんて・・・」

シャマルが差し出したデータを見るはやて達

「さっきも言ったけど、助かったのは、奇跡って言うてもいいくらいよ・・・」

「無茶どころか・・・無謀じゃねえか・・・」

シヤマルの説明に眉間に皺を寄せながら言つヴィータ

そんな中、ティアナは綾人の言葉を思い出していた

“必要以上の力は、お前自身を滅ぼす……”

“昔、お前みたいに強くなりたいてって思って……無茶をやって……暴走したんだ……”

“今のお前からは、昔の俺と同じものを感じた”

“お前の望んだ力が……何を生み出すのか……”

今回のことが、それら全てを証明していた

力にはリスクがつき物であり、それは、時として命に関わる

今ある力をしっかりと使いこなせなければ、それ以上の力はただ自身を滅ぼすだけなのだ

入局当初の綾人もそれを間違え、過度なブーストを試み、その際に、自作である白いマガジンを作つてロードした……

しかし結果は、溢れる魔力を抑えきれずに暴走寸前まで陥つた  
なんとかマークが気絶させることで事なきを得たが、一歩間違えれば綾人は死んでいた

“お前の望む力は何も守れない、むしろ全てを失う”

目を覚ました綾人にマークが告げた言葉

綾人はそれをしっかりと心に刻み、それ以来、無茶をしなくなり白いマガジンも封印した

そして、綾人はティアナと昔の自分とを重ね、なんとか手を打とうとしたのだが

ティアナはそれを聞かず、その結果がああ模擬戦である

「……しの……いだ……」

「ティア……?」

「私の……せいだ……」

スバルは小さな声に気付き、振り向くと自分の相棒が肩を震わせて涙を流していた

「私が……綾人の言葉を聞いてたら……綾人は……」

「ティア……」

泣いているパートナーに声をかけようとするスバルだが

「……別に、ティアナのせいじゃない……」

突然、ベッドから声がし、全員がそこを見る

「あ、綾人君!??」

「どうも……ご心配をおかけしました……」

驚くのは達を尻目に、小さく笑って謝る綾人

「ティアナ……あれは、俺が勝手に無茶した結果だ……お前が



気にすることじゃない・・・」  
「でも!」

綾人の言葉に、反論しようとするティアナだが

「俺も、ちゃんとお前と向き合うべきだった・・・話を聞いてくれるまで、何回でも話すべきだった・・・それを、一回聞かなかったからって・・・諦めた・・・なのはさんのこと・・・怒れないよな・・・」

小さく語る綾人

その後ろでは、なのはも目に涙を溜めていた

「綾人君・・・」

「なのはさん・・・生意気言って・・・すみませんでした・・・」

「そんなこと・・・」

「俺は・・・」

なのはの言葉を遮り、続ける

「俺は、この部隊が大好きです・・・だから、みんなには笑っていて欲しいんです・・・」

眼を瞑り、息を吐き出す

「なのはさんもティアナも・・・女性は笑っているほうが・・・可愛いですしね?」

そう言うと、無理やりに笑う

「まあ、俺の傷は心配しないで下さい。寝てれば直ぐに治りますから……」

「何言ってるの!? しばらくは安静にしてもらいますからね?」

「いや、本当に……」

「い・い・で・す・ね!？」

「……はい」

シヤマルの圧力に押され、黙り込む綾人

その日はそれで解散になり、綾人も医務室で眠りに着いた

そして、次の日……

「おはよ!! ティア!!」

「ええ……」

朝、スバルと挨拶をするティアナ  
まだ少し落ち込んでいる

「ティア……元気だそうよ!! 綾人、笑顔が好きって言ってたじゃん!!」

「うん……」

必死に励まそうとするスバルだが、効果は薄いようだ

「ごめん、スバル……もう少し、時間掛かるかも……」

そんなスバルの必死さが伝わったのか、小さく謝るティアナ

「あ、いいよ。あたしもティアの笑ってる顔、好きだもん!!」  
「あんたは・・・まったく・・・」

そんなスバルの言葉に少しだけ気が楽になったティアナ  
そのまま、朝練に向かおうと寮を出たとき

「おぐつす、二人とも。おはよう」  
「「えっ?」」

不意に聞こえた聞きなれた声  
見ると、そこにはティアナの悩みの原因である綾人が立っていた

「あ、綾人!？」  
「え!？ だつて、昨日のケガは？」  
「ああ、あれな。治った」  
「「治った!？」」

あまりにもしれつと言う綾人に同時に驚くスバルとティアナ

「ほれ。見てみな？」

そう言つてシャツをまくる綾人  
体には傷跡がまったく残つていなかった

「言つたる? “寝れば治る”つて」  
「だからつて・・・早すぎよ・・・」

あまりの回復力にティアナも驚く

「まあ、なんにせよ治ったんだ。気にすんな？」

「いや……でも……」

「い・い・な？」

「……うん」

強引に纏めようとする綾人に押され、渋々ながら頷くティアナ

「それと……ほれ！」

「え……？」

ポケットから、ある物を取り出し、ティアナに渡す綾人

「これって……」

「お前の分の勾玉……持つとけ」

手渡されたのは橙色の勾玉だった

「あ……ありがと……」

「ああ」

そう言っつて、勾玉を握りしめるティアナ

その後、合流したエリオとキャロ、訓練の準備をしていたのはとヴィータ、訓練を手伝いに来たフェイトなども同様に驚いていたが綾人は気にせず訓練に参加……しようとしたのだが

「もう！！ 居なくなっていたから心配したでしょ！？」

「すみません……ほんとすみません……」

医務室から消えた綾人を探し回っていたシャマルに発見され、お説

教を受けていた

「とにかく！ 怪我が治ったからって、訓練参加は認められません！」

「いや……でもですね？」

「絶対にダメです！！！」

「はい……」

シヤマルの言葉に小さくなって答える綾人

結局、その日は訓練を見学して、ティアナやエリオ達にアドバイスを  
する程度に抑えた綾人だった……

どうも!!

という訳で記念小説三部作でした!!

記念でどんだけ暗い話をするんだよ・・・

このあとの展開は、全員でなのはさんの過去を聞いて、なのはさんとティアナが改めて仲直りする・・・というアニメ通りの展開になります

勾玉がなのはさんに渡るのも、このタイミングですね

最後にギャグっぽくしないと気が済まない・・・そんな作者です・・・

綾人君の過去について、いい感じに語れたのではないのでしょうか？  
命に関わるほどの無茶をした綾人君だからこそ力の意味を理解しているつもりです

さて・・・そんなわけで記念小説・・・いかがでしたでしょうか？

感想や指摘、お待ちしています

それでは、また本編で〜!

第二十六話 225隊の若き分隊長（前書き）

今回から、225隊をメインに行きたいと思います

第二十六話 225隊の若き分隊長

【はやてSIDE】

機動六課・部隊長室

「では、こちらが捜査資料になります」

「わざわざありがとうございます。言ってくださればこちらから取りに伺いますのに・・・」

「いえいえ、構いませんよ・・・八神部隊長？」

そう言って、はやてに資料を渡す地上部隊の茶色い制服を着て眼鏡をかけ、銀髪で前髪がわかめのようになっている男

「ところで、よろしければ今度ランチをご一緒させて頂きたいのですが・・・」

「ああ、すみません。何分、仕事が多くて・・・」

男の誘いも即答で返すはやて

「それは残念です。それでしたら、この隊舎を見学させていただいても？」

「ええ、構いませんよ。『トビー・ゴードン』一尉。誰かに案内させますか？」

「結構ですよ。他の方の仕事の邪魔をしない程度に見学させていただきますので」

「そうですね・・・では、“例の件”もよろしく願います」

「はい。お待ちしております」



そのまま、入り口へと向かうトビーは一度振り返り

「それでは、失礼します」

「はい、お疲れ様です……」

はやてにもう一度頭を下げ、部屋を出ていく

トビーの出て行った扉を見つめるはやて

「なんや、225隊にはあんな人もいてんねんな……マーク部  
隊長や綾人君とはえらい違いや……」

そのまま考え込み

「あれで、一等陸尉で一分隊の分隊長やもんな……」

そう小さく呟いた

### 【トビーSIDE】

「ふむ、内装も綺麗で、清潔感にあふれていますね……」

隊舎内を見学しながら感想を言っているトビー

「おや？ あれは……」

前方にいる二人に気づき、近付いていく

「失礼、お嬢さん方？」

「はい？」

「僕はトビー。トビー・ゴードンを言うものです。お名前は？」

「えっと……高町なのですが……」

「フェイト・T・ハラウン……です……」

戸惑いながら自己紹介をするのはとフェイト

「やはり！ いやぁ光栄です！ 本局の若きエースのお二人にこんなところでお会いできるなんて！！」

「は、はぁ……」

「どうも……」

トビーのテンションに若干引いている

「ここで出会ったのも運命！ よろしければ一緒にお茶などがですか？」

「は？」

トビーの言葉に目を丸くする二人

<なのは……これって……>

<うん……ナンパだね……しかも古典的な……>

<ど、どうする？>

<まあ、お茶だけなら大丈夫じゃないかな？>

念話で会話していると

「……なにしてんですか？……トビー先輩？」

「ん？・・・おお、綾人君じゃないですか！！」

後ろから声が聞こえ、トビーが振り向くと呆れた顔をした綾人が立っていた

「久しぶりですね？」

「ええ、先輩もお元気そうで何よりで」

なのはとフェイトをそっちのけで会話を始める二人

「えっと・・・綾人、こちらの方とお知り合い？」

「・・・俺のいた225隊の先輩で分隊長ですよ」

「分・・・隊長・・・？」

綾人の言葉に首をかしげていると、トビーが再び前に一歩出る

「改めまして、陸士225隊第一分隊長・トビー・ゴードン一等陸尉です。以後、お見知りおきを」

「は・・・はい！！」

「よろしく願います！！」

慌てて敬礼を返す二人

「そんなにかしこまらなくても構いませんよ？ 僕は堅苦しいのは苦手なので、もっとフランクに話してください？」

小さく笑いながらウィンクするトビー

「ところで先輩、なんでここに？」

「ああ、ウチの部隊で集めた捜査資料をこちらの部隊長に届けに来

たんですよ。もう資料は渡しましたし・・・この隊舎を見学させてもらっていたんです」

「それで、早速ナンパですか・・・？」

ジト目でトビーを睨む綾人

「何を言っているんですか綾人君！！　美しい女性に声をかけないのは失礼ではないですか！！」

「いや、そんな事力説されても・・・」

トビーの持論に突っ込んでいると後ろの二人は

「う・・・美しい・・・」

「あう・・・」

顔を赤くしていた

「お二人とも、トビー先輩は女性であればすぐに声をかける人で、さっきのもこの人の口説き文句ですよ」

「失礼ですね？　僕は常に本心を言っているというのに・・・」

やれやれという表情で首を振るトビー

「ところでトビー先輩？　良かったら隊舎を案内しますけど・・・」

「それは嬉しいですが・・・仕事はいいんですか？」

「ええ。午後はオフシフトですし、時間もありませんから」

「そうですか・・・では、お願いしますよ。綾人君？」

「了解です」

そう言って、なのは達と別れて歩き出す綾人とトビー

【綾人SIDE】

「いやぁ・・・この部隊には美しい女性が多くて驚きました」

「まあ、綺麗な人は多いですね・・・はやてさんとかなのはさんとかを筆頭に・・・」

「おお・・・ついに綾人君もわかるようになりましたか？ いや、先輩としての手ほどきは、もう必要なさそうですね？」

「いや、そんなもの受けた覚えは・・・あれ？」

トビーの言葉にツッコミを入れようと振り向くと、既にトビーの姿はなかった

「失礼・・・その橙色のツインテールのお嬢さん？」

「は・・・はい？」

突然声をかけられ、驚きながら振り向くティアナ

「お名前は？」

「えっと・・・ティアナ・ランスター・・・です・・・えっと」

「おっと、失礼・・・僕の名前はトビーと言います。ここでお会いしたのも何かの運命・・・一緒にお茶など・・・」

「おいこら。その分隊長」

お約束のナンパをしているトビーの後ろから、少しドスの聞いた声をかける綾人

「おやおや・・・見つかってしまいましたか・・・」

「バレないと思えるその感覚が理解できませんよ」

「あの・・・綾人・・・この人は？」

突然始まった二人の漫才を見ながら、ティアナが綾人に質問する

「あ？ ああ・・・俺の前にいた225隊の分隊長・・・一応は「綾人君？ 『一応』は余計ですよ？」

ため息を吐きながら紹介する綾人に律儀にツツコミを入れるトビー

「改めまして、トビー・ゴードン一等陸尉と申します。よろしくお願ひしますね？ ランスターさん？」

「は・・・はい！ よろしくお願ひします!!」

階級を聞いて慌てて姿勢を正して敬礼をするティアナ

「おやおや・・・この部隊の方は、結構硬いですね・・・」

「いや、これが普通なんですよけど・・・」

先ほどと同じ光景を目の当たりにしたトビーはため息を吐く

「ティアナ。とりあえず、普段通りの喋り方でいいぞ？ なのはさん達と話す時みたいに」

「あ・・・うん」

綾人に教えられて、少しだけ肩の力を抜くティアナ

「それで、その分隊長さんがどうして六課に？」  
「仕事ですよ。時間が出来たので、この隊舎を見学させてもらっています」

「俺は、その案内兼見張り・・・」

「見張り？」

綾人の一言に首を傾げるティアナ

「ああ。さつきみたいに、女性を見かけてはナンパするからな・・・

」

「ああ・・・なるほど・・・」

何となく納得してしまうティアナ

「それって、あんな風に？」

「は？」

ティアナが指を差す方向を見ると、トビーが再び声をかけていた

「可憐なお嬢さん。僕はトビーと言います。あなたのお名前は？」

「は・・・はあ・・・えっと・・・キャ・・・キャロル・ルシエ・・・です・・・」

びつくりしながらも自己紹介をするキャロ

「あの人は・・・それじゃあな！」

「あ・・・うん・・・」

ため息を吐きながらトビーのもとに向かう綾人

「キャロ？」

「あ・・・エリオ君」

「おや？」

キャラが見知らぬ男性と話しているのを見かけたエリオが声をかける

「この方は？」

「えっと……トビーさん……って言うんだって」

「トビー・ゴードンと言います……はじめまして、小さなナイト君？」

エリオにも自己紹介をするトビー

「キャラ！……ってエリオも一緒だったか……」

「あ……お兄ちゃん」

かけてくる綾人を見つけて少しだけホツとしているキャラ

「悪いな……ウチの分隊長が迷惑かけて……」

「何を言っているんですか？ 僕は自己紹介していただけですよ？」

「エリオとキャラまで巻き込まないでください」

肩を竦めるトビーに注意する綾人

「あの……分隊長って？」

「ああ。俺の前にいた225隊の分隊長だよ」

「よろしくお願いします」

二人にお辞儀をするトビー

「……よ……よろしくお願いします……！！」

なのは達やティアナと全く同じ反応の二人

そして、二人にも同様の注意をする綾人



「そうですか・・・綾人君と同じ部隊ですか・・・」  
「ええ。ついでに弟分と妹分でもあります」

二人と別れ廊下を歩く綾人とトビー

その際に、二人について簡単に説明した

「しかし・・・いくら本人達の意味とはいえ・・・歯痒いですね」  
説明を聞いたあと、そうつぶやくトビー

「人手が足りないという理由で、あんなに小さな子供にまで戦わせなければならぬなど・・・我々大人の責任です・・・」  
「そうですね・・・」

綾人も頷く

「綾人君・・・あの二人のことをしっかりと守ってあげてください？」

「当然です・・・大事な弟と妹です・・・必ず・・・」

真剣な顔をして綾人に話しかけるトビーに、綾人もしっかりと頷く

「む？ 綾人ではないか・・・こんなところで何をしている？」  
「あ・・・シグナム副隊長・・・」

不意に後ろから声がかかけられ、振り向く綾人とトビー

「おおー！」

シグナムを見た途端、目を見開くトビー

「な、なんだ？」

トビーの反応に少し驚きながら首を傾げるシグナム

「ああ、これは失礼を・・・陸士225隊第一分隊隊長・トビー・ゴードン一等陸尉と申します」

「む。シグナム二等空尉です」

自分よりも上官であるとわかると、シグナムも敬礼をする  
綾人に関しては

「またか・・・さっきはあんなに格好いいこと言ったのに・・・」

と、ため息をついていた

「ここでお会いできたのも何かの運命・・・よろしければこれから一緒に食事など・・・」

「申し訳ないが、私にも仕事があるので・・・」

「そうですね・・・それは残念です」

少し落ち込むトビー

「・・・225隊と仰いましたね？」

「ええ」

「ならば、私と一度手合わせしていただきたい」

突拍子もなくそんなことを言ってくるシグナム  
トビーも綾人も首をかしげている

「綾人と同じ部隊の方で、さらに分隊長であるなら、相当な実力を  
持っているはずですが？」

「はぁ・・・まあ、自分で言うのもなんですが、それなりには自信  
はありますが・・・」

トビーの一言にシグナムの目が怪しく光る

「では、是非とも」

「構いませんが・・・一つ条件をだしてもよろしいですか？」

「なにか？」

「私が勝てば、食事を一緒に願えますか？」

「・・・構いません」

トビーの提案に頷くシグナム

「先輩、いいんですか？」

「ええ。断る理由はなくなりました」

にやりと笑って綾人に答えるトビー

「では、行きましようか・・・」

「ええ」

シグナムに付いていくトビー

「・・・一応、なのはさんに言っておこう」

綾人はなのはに訓練場を使用することを伝えて自分も向かっていった

六課訓練場・仮想シミュレータ 地形設定：森

「……で……なんでみんな居るんですか？」

振り向きながら聞いてくる綾人に苦笑いを返す面々

ちなみに来ているのは綾人の他にはスバル、ティアナ、エリオ、キヤロ、なのは、フェイト、ヴィータと、なのはに付いてきたヴィヴィオと護衛のザフィーラ、デバイスのデータチェックも兼ねたシャリーりの10人

「まあ、225隊の話はあたしも聞いちゃいるが、実力はよくわかんねーからな。シグナムが興味を持つのも頷ける」

「あとは、みんなにも見学して、勉強して欲しいしね？」

ヴィータとなのはがそう答える

「うーん……先輩の戦闘ってあんまり参考にはならないかもですよ？」

「そうなの？」

腕を組んで答える綾人にフェイトが首を傾げる

「ええ……と言うか、225隊の人の戦闘スタイルって独特ですから、人に教えられることって少ないんです。基本的な訓練はみんなでするけど、あとは個人練習が多いですね」

似たような戦闘スタイルなら、たまに模擬戦も行われる  
多方面で任務を行なっている225隊では、チームとしての行動は  
そのチームの各リーダーの定めた最終目標があり、各自の判断で目  
標達成に行動するのだ

新人は、最初は先輩と行動を共にしながら仕事を覚え、半年位で独  
自の判断での行動を求められる

などの説明をする綾人

「ところで、トビー一尉って強いんですか？」

「ああ。かなり強い……」

エリオの質問に答える綾人

その言葉に、全員がトビーに注目する

【トビーSIDE】

「おやおや……随分とギャラリーが集まりましたね……しかも  
美人ばかり……」

「まあ、新人達にもいい勉強になると思いますが？」

「そうですね？……だといいますが」

シグナムの言葉にそう答えるトビー

「僕達の戦いで学ぶことは、かなり少ないと思いますよ？」

「どつという意味ですか？」

「・・・勝負は・・・“一瞬”で終わりますから」

首を傾げるシグナムにそう答えるトビー

その言葉を聞いて、シグナムに火がついた

「ほほう・・・ならば、証明していただく・・・その実力を！」

そう言ってレヴァンティンを構えるシグナム

「ええ。では行きましようか・・・『セルシウス』？」

☆Set☆

右手の腕に付けられたトビーのデバイス『セルシウス』がトビーの  
声に反応して起動する

白を基調にしたローブ状のバリアジャケットを羽織るトビー

手にはこれまた白を基調にした細剣レイピアが握られている

「いつでもどうぞぞ？」

下段に構え、シグナムにそういうトビー

対するシグナムはまっすぐに構える

（なんとという気迫だ・・・隙を感じぬとは・・・）

トビーからあふれる気迫に、少しだけ押されているシグナム

悠々とした態度とは裏腹に、かなりの実力を感じさせるトビーの才

ーラ

だが、ここで引いては騎士としての恥・・・  
そう思ったシグナムは、一撃に全てを込めることにした

「はああああ!!」

刀身に炎を纏わせて一気に距離を詰めていくシグナム  
しかし、トビーは微動だにしない

【綾人SIDE】

「動かない!?!」

「あんなに近づかれているのに!?!」

シグナムがほとんど眼前に迫っている状況でも動かないトビーに、  
なのはとティアナの二人も驚く

「カウンターにしても、もう遅いぞ!」

「いいえ・・・もう決まっています」

ヴィータの言葉に、そう答える綾人

「どういうことですか?」

キャラが綾人に振り向いて聞いてくる

「見てればわかるよ」

キャラはよくわからないままもう一度見ると

シグナムの足元から鎖が飛び出していた・・・

【トビーSIDE】

「はあああああ！..!」

トビーの眼前まで肉薄し、レヴァンティンを大きく振り上げるシグナム

それと同時に、トビーが指を鳴らす

「紫電・・・いつせ・・・!?!」

降り下ろそうとした瞬間に身体が固まる  
腕を見てみると、鎖が巻きついていた

「これは・・・設置型のバインド!? それに・・・これは・・・  
「気づきましたか?・・・僕の能力・・・」

鎖から感じるものに気づいたシグナムにそう聞くトビー

「これは・・・変換資質・・・?」

「正解です。僕の変換資質は・・・『氷結』です」

シグナムに巻きついている鎖から感じられたのは“冷氣”



「それに・・・それだけではありませんよ？」  
「なにを・・・なっ!？」

トビーに聞き返す前にシグナムの顔が変わる

鎖の冷気が広がり、巻かれていた腕がみるみるうちに氷に覆われていき、徐々に身体全体を包んでいく

「ただ拘束するだけでは意味がありませんからね・・・」  
「くっ!！」

レヴァンティンの炎の威力を上げるシグナムだが

「その程度の炎では・・・溶けませんよ？」

トビーの氷は、炎を纏うレヴァンティンさえも包んでしまい、とうとうシグナムの頭も覆い始めてきた

「アブソリュート絶対零度”・・・」

そして、シグナムの全身が氷に覆われた・・・

それから、数分後・・・

「シグナム副隊長、大丈夫なんですか？」  
「・・・ああ・・・大丈夫だ・・・」

訓練場の外に出て、フリードの炎で焚き火を起こし、身体を温めているシグナム

「今が8月でよかったですね？」  
「ふっ……そうだな……」

綾人の言葉に小さく笑うシグナム

「しかし、トビー一尉って強いんですね？」  
「普段は結構軽いんだけどな？ 模擬戦とか戦いの時はあんな感じだ」

シグナムを介抱しながら話す綾人達  
そこに、トビーが近づいてくる

「シグナム二尉？ 大丈夫ですか？」  
「ええ。ご心配なく」  
「そうですか……では、例の約束……お待ちしています」  
「……はい……」

約束の確認をして、頷き綾人達に振り返る

「それでは、綾人君、それに皆さん、僕はこれで失礼しますね？」  
「あれ？ もう帰るんですか？」  
「ええ。そろそろ戻らないと、部隊長に怒られますので……それでは、また……」

それだけ言うと訓練場を出て六顆を後にするトビー

「不思議な人ですね？」  
「キヤロ？ あれは“変”って言っていていいんだぞ？」

キャラにそんなことを言う綾人

相変わらず、気がしれた相手へは例え上官であっても容赦が無いのがこの男

【トビーSIDE】

「ふむ・・・なかなかいい部隊ですね・・・綾人君も充実しているようですよ・・・」

敷地を出て、六課に振り返るトビー

「これは・・・明日が楽しみですね・・・」

そう呟き、225隊に向かって帰っていくトビーだった・・・

## 第二十六話 225隊の若き分隊長（後書き）

どうも！

というわけで、新キャラのトビーさんでした！

キャラのイメージは、「ファンタシースターポータブル2 インフィニティ」の「ヒューガ・ライト」さんですね

CVもそのまま石田彰さんです

「ここで出会えたのも運命・・・」云々は彼の口癖のようなものですね

225隊の人がどれだけ強いかを表すために、原作キャラを瞬殺してみました

では、こんなところで次回予告

ミッドに拠点を置く地上本部・・・

その一室に、二人の男が向かい合っていた・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十七話

「守護者と剣王」

次回、ついにあの人が・・・！！

## 第二十七話 守護者と剣王（前書き）

今回は、綾人君のお父さん、マークさんをメインに行きます！

## 第二十七話 守護者と剣王

地上本部のとある一室

そこ備えてあるソファーには、角刈りでヒゲを生やし、地上本部の青い制服を着た中年の男性と、後ろにはねた銀髪で目付きの鋭い陸士部隊の茶色い制服を着た男性局員が向かい合って座っていた

「どうぞ」

「ああ。すまんな・・・ゲイズ三佐・・・」

「いえ・・・」

銀髪の男性局員に茶を出す女性局員

そして、その女性局員はそのまま退室する

「・・・随分と大きくなったものだ・・・以前会ったときには、まだまだ子供だったというのに・・・」

「そんな話をするために・・・わざわざここに来たのか・・・？・・・マーク」

女性局員を見ながら感想を言う銀髪の局員を睨みながらそう聞く角刈りの男性局員

「ふっ・・・そういうな・・・久しぶりに会えたのだから・・・レジアス」

小さく笑いながら、向かいに座る相手に視線を戻す銀髪の局員・・・

陸士225隊・部隊長『マーク・グリード』少将は対面に座る男性

局員・・・

地上本部・首都防衛隊代表『レジアス・ゲイズ』中将にそう言った・

「ワシとて暇ではないのだが？」

「それは、俺もだ・・・仕事の話もあるが、それ以外の話をして問題はないだろうか？ 俺とお前の仲なのだから・・・」

レジアスにも少し軽いノリで返すマーク

この辺は綾人にも遺伝しているのかもしれない

「ならば、先に仕事の話しよう・・・近々行われる“公開意見陳述会”での、225隊の警備の配置が決定したので、目を通して欲しい」

「うむ・・・」

「それと、今回は機動六課にも協力をしてもらうことになっている」「なんだと!？」

六課の名前が出た途端に声を荒らげるレジアス

「この間、市街地に現れた機械人形がまた現れないとも限らん・・・あれに対処できるのは、今のところウチか六課ぐらいだから・・・」

「だからといって、あんな犯罪者の部隊になど!..!」

「レジアス・・・」

「ぬ!？」

マークの語気にレジアスも黙る

「お前が、希少能力レアスキルもちにあまりいい印象を持っていないのは知っている……だが、八神は俺の教え子だ……その教え子の侮辱は、例えお前であつても許すことはできんぞ？」  
「くっ……」

鋭くレジアスを睨むマーク  
顔を歪めながらソファーに座り直すレジアス

「ともあれ、基本的に中心となつて警備するのはウチの部隊だ……六課には、サポートを任せる予定だ」  
「……分かつた……」

マークの言葉に、渋々と言つた風に頷くレジアス

「それと……もう一つ……機動六課から来た報告なのだが……」  
「む？」  
「『ゲイル・トーティス』……という名を覚えているな？ レジアス……」  
「!?!」

マークから聞かされた名前にレジアスの顔が変わる

「ゲイル・トーティスだと!?!」  
「ああ……十一年前にお前や“彼”の部隊と共に追つた連続殺人犯だ……」

しずかに話を続けるマーク



「そのゲイルが・・・最近、息子を襲撃したそうだ・・・負傷もしたけどどうにか退けたらしいがな」

「なっ・・・ぶ、無事なのか・・・？ あのゲイルに襲撃されたというのに・・・」

「ああ・・・厳密には、見逃されたらしいがな・・・」

「だが・・・信じられん・・・奴は・・・十一年前に・・・」

「ああ・・・死んだはずだ・・・“俺の”手で・・・な・・・」

互いに沈黙する

「ウチからの報告は以上だ・・・」

「うむ・・・」

モニタを閉じて一息吐くマーク  
そこに

「失礼します・・・」

さきほどの女性局員、『オーリス・ゲイズ』三佐が入ってくる

「なんの用だ？」

「そろそろ、会議の時間です。準備をお願いします」

「わかった・・・」

そう言うと、マークに視線を戻すレジアス

「では、俺もこれで失礼するでしょう・・・さきほどの件・・・こちらでももう一度調べておく・・・それではなく？」

「うむ・・・」

そう言ってマークも立ち上がる

「どうぞ」

「ああ」

オーリスに連れられ、部屋の入口に向かうマーク  
そして、一度振り返り

「レジアス・・・時間ができたら、また一緒に飲みたいものだな・・・」

「」

「ふん・・・」

「ではな・・・友よ・・・」

それだけ言うと部屋を出ていくマーク

部屋を出て、近くにあるエレベーターに乗り込んだマークとオーリス

「最近のレジアスはどうだ？」

「・・・どうぞ・・・と言いますと?」

突然の質問に、聞き返してしまうオーリス

「レジアスには、黒い噂もあるからな・・・何かと大変なのだろう?」

「問題はありません・・・」

「・・・」

「・・・」

静寂が辺を包む・・・

「ゲイズ三佐？」

「なんでしよう？」

「誰も見ていないのだ・・・昔のように『マークおじさん』と呼んでくれて構わないのだが？」

「あ・・・いえ！！ そんな・・・」

突然のマークの言葉に、慌て出すオーリス

「まあ、お前の性格では難しいだろう・・・だが、もう少し肩の力を抜いてくれて構わん」

「・・・はい」

少しだけ、表情が変わったオーリス

「そういえば、最近六課に査察を行なったそうだな？」

「はい・・・」

「その時に、綾人には会ったか？」

「遠目には」

「そうか・・・」

「随分と大きくなりましたね？」

「ああ・・・立派になったものだ・・・」

ほんの少しだけ、オーリスの表情が柔くなった

「あれから、もう十年経つのですね・・・」

「そうだな・・・」

オーリスが外を眺めながらそういう

綾人とオーリスが初めて出会ったのは十年前・・・  
マークに連れられてミッドにやってきた数ヶ月後だった・・・

オーリスは、綾人の遊び相手をしたりして弟のように可愛がってきた  
しかし、自分が管理局に入った頃に疎遠になってしまっていたのだ

「もう、彼も私を覚えていないでしょうね・・・」

「さあな・・・あいつは、記憶力はかなりいい・・・案外、覚えて  
いるかもしれないが？」

からかうようなマークの言葉

だが、それもオーリスには少しだけ嬉しく感じた・・・

エントランスにでるマークとオーリス

「オーリス・・・お前も、時間がある時にでも、家に来るといい・・・」

「そうですね・・・その時は、よろしくお願いします」

「ああ・・・ではな？」

軽く挨拶を交わして分かれる二人

入口を出たあと。通信を入れるマーク

「トビー・・・こちらマークだ」

『お疲れ様です。部隊長』

トビーがモニタの向こうで敬礼をしている

「ああ。六課のフォワードチームは、もう来ているのか？」

『いえ……来る途中で例の機械人形が出現したとかで、緊急出動したそうです』

「そうか……」

トビーからの報告を歩きながら聞くマーク

『ウチの部隊の警邏隊も、数人援護に向かいましたが……』

「あの人形の相手なら、問題はなかるう……そのために訓練しているのだからな」

『ええ。部隊長ならそう言うと思っていました……』

モニタの向こうでトビーも苦笑いしている

「場所はどこだ？」

『サードアベニュー・E37地下道です』

「ふむ……トビー？」

『はい？』

「帰りが遅くなる」

『……了解！』

マークの一言に、小さく笑って通信を切るトビー

「さて……では、行くのでしょうか……『オーデイン』……」

マークの胸にかけられている黒いペンダントが光る……

【綾人SIDE】

「よし！ 全機撃墜！！」

「こつちも終わりだ！」

ガジェットの破壊を確認し、合流するフォワード陣

「いやはや・・・すげえな・・・あいつ等・・・」

「ほんとほんと・・・綾人も、さらにレベルアップしてるし・・・」

応援に来ていた225隊の警邏隊も驚いている

『？型改の反応、新規に出現！ フォワードチームはG12へ！』

「「「「「了解！！」」」」」

シャーリーの指示に返事を返す五人

「それじゃ、先輩！ こつちはお願いします！！」

「ああ！ 気を付けてな？」

敬礼しながら走り去る綾人達

「それにしても・・・225隊の人ってすごいね〜！」

「確かに・・・AMFの中でもあんなに戦えるんだもんね・・・」

「まあ、生半可な訓練はしてないしな・・・」

先程の戦闘を思い出しているスバルとティアナに答える綾人

「そんな人達と一緒に訓練することになってたんですね・・・」  
「・・・大丈夫ですかね？」

エリオとキャラコが少し不安げに話す

実はこの日、機動六課の前線メンバーは、綾人の古巣でもある陸士225隊に出頭研修の予定だったのだが、その途中でガジェットが出現したため、緊急出撃になったのだ

「なのはさんの訓練よりましかかな？」

「でも、225の部隊長つて、なのはさんの先生だったんだし・・・  
もしかしたら・・・」

「どうなんですか？ お兄ちゃん・・・」

「・・・どっこいどっこいかもな・・・」

スバルとティアナ、キャラコの三人が綾人に聞いてくるので答える綾人

「ガジェットの反応・・・近いです！」

「おしゃべりはここまでだな・・・」

そう言うと、戦闘態勢に映る綾人達

そして、すぐに他足歩行型のガジェット？型が見えてきた

「アルケミック・チェーン！！」

すかさず召喚魔法で拘束するキャラコ

「よし！ 捕まえた！！」

「！ 待て！！」

確認し、近づこうとするが  
強い衝撃が？型に響いた

「何？」

「後ろからなにか・・・」

？型はガタガタと震えながら煙を挙げる

「スバル！ キャロ！ シールド！！」

綾人が叫ぶと同時に爆発する？型

【?????SIDE】

「えげつねーなあ・・・ちょっとやりすぎだぞ？・・・」

「えっへっへえっへっへ！！」

爆発の様子を見ていた青い全身タイツのようなスーツをまとった少女が二人・・・

「ま、それでも・・・連中が五人セットなら、簡単に防いじゃうでしよ～ねえ～」

マゼンダ色の髪を後ろでまとめている、No.11『ウエンディ』  
が笑いながらそう言うと、モニタの先で爆風を防いだフォワードの  
姿が現れる



「甘く見たなウエンディ…… “五人” じゃないぞ…… “三人” で防いだんだ」

「ふえ？」

もう一つのモニターで見ているもう一人が声をかける

青のショートヘア、No.6 『セイン』

「ホレ。爆発直後にもうこっちの位置を特定、高速型の中盤ガード二人がこっちに突っ込んで来てる……ご丁寧に飛竜とオレンジ頭の誘導操作弾まで引き連れてるよ」

セインが映像を見せると、そこにはエリオと綾人がまっすぐに今いる場所に向かっていた

「ま、ちょっと遊んで満足したろ？ 残りは、後ろのに任せて……」

「“後ろの” ……というのは……」

「「え？」」

自身の能力“IS”インヒューレント・スキルを起動しながらウエンディ声をかけるセインだが、それは、後ろの声に遮られてしまう

不思議に思って振り向く二人

そこには……

「「いつらのことか？」」

バラバラになったガジェットのそばに大きめの槍のようなデバイス

を持った男が立っていた・・・

## 第二十七話 守護者と剣王（後書き）

どうも！

という訳で、マークさんとレジアスさんの意外な関係を出しました  
オリスさんってこんな性格でいいのかな？

では、次回予告を・・・

セイン、ウエンディの前に現れた、一人の男・・・

前門の男、後門の六課に二人はどうするのか・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十八話  
「父と息子」

なぜだか予告のメインがナンバーズに・・・？

## 第二十八話 父と息子（前書き）

さてさて、今月一発目です

それなりに長いかもです

それと、前回言いそびれましたが、前回と今回は、漫画版 *St r i k e r s* の *E p i s o d e - 1 1* を参考にしています

## 第二十八話 父と息子

「な・・・なんだよあんた!？」

「いつのまに!？」

驚いて構えるセインとウエンディ

「順に答えよう・・・まず、俺の名はマーク・グリード。ここに来たのは、つい先ほどだ・・・」

律儀に答えるマーク

「お前たちが、八神からの報告にあつた“戦闘機人”か・・・?」

ゆっくりと二人に近づく

「セイン・・・マーク・グリードって・・・」

「管理局最強の男だ・・・まずいな・・・」

小声で話すセインとウエンディ

「どうするっスか?」

「そりゃ・・・」

「む?」

何かを考え、実行するセイン

「こつするっきゃないだろ!!--」

そう叫びガジェットを向かわせる

「ほう……」

セインの判断に感心している様子のマークの眼前にガジェットが迫る

「『IS：ディープダイバー』!!」

同時にセインはウエンディを抱えて床に潜っていく

「もろいな……む？」

ガジェットをいとも簡単に破壊するマークだが、二人は既に消えていた

「逃したか……ん？」

轟音が響き、振り向くマーク  
すると、オレンジ色のスフィアと白い飛竜、そして、二人の人間が  
猛スピードで現れた

「あ……あれ？」

「綾人か？」

角を曲がったところに、見知った顔を見つけて呆気にとられる綾人

「と……父さん!？」

「ええ!？」

綾人の一言にエリオも驚く

『綾人、どうしたの?』

ティアナが通信を繋げてくる

「あ……悪い……目標は確認できない。逃げられたみたいだ……」

『了解。それじゃ、合流しましょう』

「あ、ああ……」

それだけ言うと、通信を終えるティアナ

「ふむ……では、合流するでしょう……そこで、詳しく話す」

「あ、はい……」

マークが歩き出すと、綾人とエリオも付いていく

「あ、綾人……!!」

「エリオ君!」

「お疲れさ……って!?!」

やってくる綾人とエリオに手を振るスバルとキャロティアナも声をかけようとするが、もう一人に驚く

「機動六課のフォワードチームだな? 陸士225隊部隊長・マーク・グリード少将だ」

「……は、はい!!」「……」

自己紹介するマークに女性陣三人も慌てて敬礼する

「今回はご苦勞だった……すまないが、別命が有るまで警戒を続けてくれ？」

「りよ、了解です!!」

マークの指示に、上擦った声で答えるティアナ

『こちら、スターズ1。ティアナ？ 聞こえる？』

「あ、なのはさん……」

そこに、なのはから連絡が入る

『少し前に、トビー一尉から連絡があつて、225隊の部隊長がそっちに向かったそうだから、指示にしたがつてね？』

「あ……」

なのはからのちよつと遅い連絡に、ティアナはチラッとマークを見る

「……緊急事態だ……連絡の遅れは仕方があるまい……」

苦笑いしながら言うマーク

「もうすでに合流しているぞ？……高町」

『え……？』

ティアナを横に移動させてモニタの前に立つ

『ま、マーク先生!?!』



「久しぶりな？ 元気そうだなによりだ」  
『はいっ！』

マークとの再会に、素直に喜んでるなのは

「ちょうどいい。先ほど俺が遭遇したのが、そちらから報告のあったものと一致するか、確認を頼む」

『あ、はい！！』

マークは、デバイスからデータを送信する

『少し、待っていただけますか？』

「ああ。こちらも警戒に戻る、分かったら連絡を頼む」

『はい！！』

マークに返事を返し、通信を終えるのは

「さて、それではこの一帯周辺の警戒・・・よろしく頼む」

「「「「「了解！！」」」」」

マークの指示に敬礼しながら答え、フォワード陣はそれぞれ担当区域を決めて別れた・・・

【セインSIDE】

「ふう〜・・・ここまでくれば大丈夫だろ・・・」

「た、助かったっス〜・・・」

地下道から遠く離れたビルのそばに出てくるセインとウエンディ

「クア姉〜こちらセイン〜」

『はい、どうしたのかしら〜?』

セインが通信をつなぐと、メガネをかけたNo.4『クアット口』  
が答える

「ごめん、借りてきたガジェットみんな破壊されちゃった・・・」

『あら〜? 護衛用も破壊されちゃったの? 直接接触はダメっ

て言っただでしょ〜?』

「それが・・・」

クアット口に地下道での出来事を説明するセイン

「っというわけ・・・」

『あらま〜・・・それは大変だったわね〜・・・ま、二人が無事で  
よかったわ』

「うん」

『それじゃ・・・すぐに帰って、そのことをみんなにも教えてあげ  
てね〜?』

「わかったよ」

「了解っス〜」

そう言っつて通信を終えるセイン

「しかし・・・こんなの見て、みんな信じるかね〜・・・」

「どんなのっスか?」

「こんなの」

そう言つて、逃げる直前に記録したマークの映像を見せるサイン  
そこには、向かっているガジェットがマークのそばまで行ったと同  
時に四散している映像だった・・・

【綾人SIDE】

しばらくの間、警戒任務を続けていた六課フォワードチーム

「ふむ・・・綾人！」

「はい？」

マークが綾人に声をかける

「新手も来る気配がない・・・もう警戒を解除しても構わん」

「了解！・・・って、それはウチのリーダーに言ってもらえませ  
ん？」

「む・・・ああ、そうだな・・・ついな」

綾人が苦笑いしながら言うと、マークもそう答える

「では・・・ランスター二士にそう伝えてくれ」

「はは・・・了解です」

それだけ聞くと、ティアナ達と合流する綾人

「あ、綾人！」

「あれ？ ギンガ・・・どうしてここに？」

そこには、ギンガがスバル達と話していた

「うん。近くで調査任務に当たってて、報告を聞いて来たんだけどね？」

「そうか・・・あ、そうだティアナ」

「なに？」

先程のマークからの伝言を伝える

「それと、さつき簡単な食事を用意したから、食ってくれってさ」「やった〜！」

食事のことを聞いて大喜びのスバルだが・・・

数分後

「さて・・・三人とも・・・なにか言うことは？」

「「すみませんでした・・・」」

正座したスバル、エリオ、ギンガを静かに見下ろす綾人

四人の間には、積み上げられた弁当箱があつた

「まったく・・・他の人のまで食うか？ 普通・・・」

この三人は、用意された食事を見事に全部平らげたのだ  
他の隊員の分を含めて全部・・・

「だって……たくさんあったから……」  
「全部食べていいものだと思います……」  
「つい……」

呆れる綾人にそう言い訳する三人だが  
それを聞いた綾人は、久しぶりにキレた

「全部が俺達の分な訳があるか……!!」  
「あだだだだだ!!」  
「ごめんなさ……い!!」  
「痛い痛い!!」

スバル、ギンガのこめかみに必殺“ウメボシ”を繰り出す綾人  
間に挟まれたエリオにもしつかりとダメージを通して

「お……い! 綾……ってどうした!??」

声を掛けに来た225隊の一人が驚く

「ああ……イルム先輩……それが……」

簡単に事情を説明する綾人

「なるほどね……」

説明を聞いて、件の三人を見るイルム

三人は目を逸らしている

「まあ・・・食っちゃまったもんはしょうがねえしな・・・あんまり気にすんな?」

「でも・・・みんなの分が・・・」

「大丈夫だって! 一食抜いたぐらいじゃ倒れねえのは、お前も知ってんだろ?」

綾人に笑いながら答えるイルム

「ところで、俺に何か?」

「ああ・・・忘れるところだった・・・グレン!!」

「あ、はい!!」

イルムに呼ばれ、急いでかけてくる一人の隊員

「こいつは、今年からウチに入隊した新人のグレンだ」

「は、初めまして! 天童先輩のことは、伺っています!!」

頭を思い切り下げるグレン

「そっか・・・よろしくな?」

「は、はい!!」

互いに挨拶を交わす

「挨拶は済んだな?」

「あ、部隊長・・・」

マークが寄ってくる

「とりあえず、今日のところはもう戻ってくれていい。今日は」

「労だったな」

「「「「はい！」「」「」」

敬礼を返す五人

「今日予定していた、合同訓練だが・・・明日、改めて行うことになる・・・今日はゆっくり休み、明日に備えること・・・俺からは以上だ」

「「「「はい！　ありがとうございました！！」「」「」」

マークにそう答え、六課の隊舎に帰投する綾人達だった・・・

## 第二十八話 父と息子（後書き）

どうも！

というわけで、マークさんが本格的に登場し始めました

実力をぼかしながら見せるのは難しいですね・・・

さて、マークさんのイメージですが・・・

見た目は、スパロボの『親分』こと『ゼンガー・ゾンボルト』さんをイメージしています

性格は、ゼンガーさんが少しだけ、本当に少しだけ丸くなった感じをイメージしてます

あとは、綾人君と同じように信頼している仲間、部下、家族、友を無条件に信頼します

CVはもちろん、ゼンガー親分と同じ小野健一さん！

さて、マークさんの宣伝はこんなところで・・・次回予告！！

緊急出撃の翌日、ティアナ達は綾人に連れられ、225隊の隊舎を訪れる・・・

魔法少女リリカルなのはStrikers 信念の刃 第二十九話

『陸士225隊』



今回は、オリキャラが大量登場！！・・・まあ、細かい設定は無いんですけどね！！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8576p/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS 信念の刃

2011年10月4日20時35分発行